帯屋町遺跡

高知市文化財調査報告書　第41集

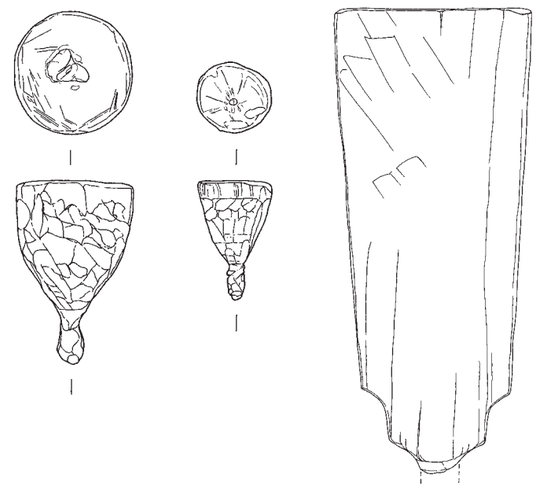
二〇一七・三

高知市教育委員会

高知市文化財調査報告書第41集

帯屋町遺跡

－高知県自治会館新庁舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－



2017. 3

高知市教育委員会

高知市文化財調査報告書第41集

帯 屋 町 遺 跡

－高知県自治会館新庁舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2017. 3

高知市教育委員会

Ⅰ区完掘状況（南より）

近世前期の溝 SD3（西より）

肥前産灰釉小皿（444）

志野焼鉢（450）

漆器椀（498）

漆器椀（501）

子供用下駄（607）

下駄（611）

羽子板（577）

独楽（582・584）

梅鉢文軒丸瓦（303）

梅鉢文軒桟瓦（928）

尾戸焼碗蓋（213）

尾戸焼水指（915）

泥面子（左から　802・800・805・807・811・808・813・814・827・825・819・820）

序

帯屋町遺跡は、城下の東に居住した有力商人・帯屋勘助の名に由来した町なかに位置します。江戸時代には「御城」の南門や藩主の「御殿」を西にひかえた要所であり、筆頭家老・深尾家や譜代家老・五藤家の郭中屋敷が古絵図に描かれています。

現在の帯屋町は、商店街が賑わい、様々な文化施設のオープンが間近となり、高知市観光の拠点として今後も発展が期待されています。

この度、高知城の南に接する当地での開発が計画されたことから、埋蔵文化財の発掘調査が実施されました。その結果、中世集落や近世の侍屋敷に伴う多くの遺構や遺物に加え、深尾家の家紋瓦も出土し、貴重な成果を得ることができました。また近代の遺構からは、「板垣」「相原」などを刻名し、岐阜遭難事件を引いたとみられる玩具の泥面子が採取され、明治の世相の一端も垣間見ることができました。

この報告書が、高知市の歴史を理解する上で何らかの役割を果たし、また地域文化の解明への一助ともなれば幸いです。最後になりましたが、調査にご協力いただいた関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成29年３月

高知市教育委員会

例　　言

1．本書は、高知市教育委員会が平成26年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．調査対象地は、高知市本町４丁目１番35号に所在する。

3．調査期間と調査面積は次の通りである。資料整理、報告書作成は平成27年度から28年度にかけて行った。

　　試掘調査　平成26年10月１日～10月31日　調査面積132.39㎡

　　発掘調査　平成27年３月４日～３月28日　調査面積326.03㎡

4．調査体制は以下の通りである。

　　調査主体　高知市教育委員会

　　調査事務　同　民権・文化財課主任　村岡愛紀

　　調査担当　同　民権・文化財課指導主事　浜田恵子

　　同　民権・文化財課主事　永田由香

5．本書の編集は浜田が行い、執筆は下記の様に分担した。遺物写真は梶原が撮影した。

　Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ章２節（遺物）・Ⅴ章１・３節（浜田）、Ⅲ・Ⅳ章１・２節（遺構）・Ⅴ章２節（永田）

6．調査にあたっては、高知県市町村総合事務組合、竹中工務店、村越工業、高知県教育委員会文化財課をはじめとする関係諸機関の方々の協力を得た。

7．遺物の資料調査については、池田研（土佐市教育委員会）、吉成承三・池澤俊幸（高知県文化財団埋蔵文化財センター）はじめ諸氏のご教示を賜った。（敬称略）

8．発掘作業、整理作業においては下記の方々の協力を得た。

　［発掘作業］　岡﨑速男　尾崎角美　樫尾洋子　佐竹寛　武内順一　武内昌子　谷内孝子

　　西村道明　橋村康之　弘田誠一　松吉弘明　村松広海

　［測量補助］　片岡和美　田上浩　山﨑佳代子

　［整理作業］　樫尾洋子　片岡和美　島村加奈　和田エリ

9．掲載している平面図の方位は国土座標を基準としている。巻末の報告書抄録における経緯度については世界測地系の数値を使用している。

10．遺構の略号は、掘立柱建物跡：SB、ピット列：SA、土坑：SK、溝：SD、柱穴及び小型の穴：P、性格不明遺構：SXとした。

11．出土遺物は通し番号とし、挿図、写真図版とも同一番号を使用した。遺物は高知市教育委員会が保管した。注記の略号は「14-OB」である。

12．本書で使用する土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帳」による。

本文目次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境
　１．地理的環境 …… 2
　２．歴史的環境 …… 2
第Ⅲ章　調査の方法 …… 9
第Ⅳ章　調査の成果 …… 11
　第１節　基本層序 …… 11
　第２節　遺構と遺物 …… 18
　１．古代・中世の遺構と遺物 …… 18
　　(1) 土坑 …… 18
　　(2) 井戸 …… 24
　　(3) 溝・溝状遺構 …… 26
　　(4) ピット …… 27
　　(5) 性格不明遺構 …… 27
　　(6) 包含層出土遺物・その他の遺物 …… 28
　２．近世の遺構と遺物 …… 30
　　(1) 掘立柱建物跡・ピット列 …… 30
　　(2) 土坑 …… 33
　　(3) 井戸 …… 56
　　(4) 溝 …… 58
　　(5) ピット …… 89
　　(6) 性格不明遺構 …… 92
　　(7) 包含層出土遺物・その他の遺物 …… 93
　３．近代の遺構と遺物 …… 96
　　(1) 土坑 …… 97
　　(2) 溝 …… 117
　　(3) 性格不明遺構 …… 117

第Ⅴ章　考察 …… 159
　第１節　絵図・文献にみる近世の帯屋町筋と帯屋町遺跡 …… 159
　第２節　帯屋町遺跡検出遺構の性格と変遷 …… 174
　第３節　帯屋町遺跡出土遺物の様相 …… 179

挿図目次

Fig.1　帯屋町遺跡調査区位置図 …… 1
Fig.2　寛文己酉高知絵図（抜粋）…… 7
Fig.3　帯屋町遺跡及び周辺の遺跡 …… 8
Fig.4　調査区風景 …… 9
Fig.5　調査区位置図及び試掘坑配置図 …… 10
Fig.6～8　基本層序（1）～（3）…… 13～15
Fig.9　TP1～5セクション図 …… 16
Fig.10　TP6～9セクション図 …… 17
Fig.11　検出遺構全体図 …… 19～20
Fig.12　SK15・27・29平面図・セクション図 …… 21
Fig.13　SK15・27出土遺物実測図 …… 22
Fig.14　SK29出土遺物実測図 …… 22
Fig.15　SK31・33平面図・セクション図・エレベーション図 …… 23
Fig.16　SE2・3平面図・セクション図 …… 24
Fig.17　SE2・3出土遺物実測図 …… 25
Fig.18　SD4・7平面図・セクション図 …… 26
Fig.19　SX10・P87平面図・セクション図・エレベーション図 …… 27
Fig.20　SX10・SR2出土遺物実測図 …… 28
Fig.21　Ⅲ・Ⅲ′・Ⅳ層出土遺物実測図 …… 29
Fig.22　Ⅴ・Ⅳ～Ⅴ層・SK14・16・21・37・P94・118・Ⅲ層遺物集中１出土遺物実測図 …… 30
Fig.23　SB1平面図・エレベーション図・SB1・2・SA1ピット計測表 …… 31
Fig.24　SB2平面図・セクション図・エレベーション図・SB1・2出土遺物実測図 …… 32
Fig.25　SA1平面図・セクション図・エレベーション図 …… 33
Fig.26　SK1～5平面図・セクション図 …… 34
Fig.27　SK1出土遺物実測図 …… 35
Fig.28　SK2・3出土遺物実測図 …… 36
Fig.29　SK4出土遺物実測図 …… 38
Fig.30～33　SK5出土遺物実測図（1）～（4）…… 40～43
Fig.34　SK7平面図・セクション図 …… 44
Fig.35～39　SK7出土遺物実測図（1）～（5）…… 45～49
Fig.40　SK9・10平面図・セクション図 …… 50
Fig.41　SK11・17平面図・セクション図 …… 51
Fig.42　SK12・13・16平面図・セクション図 …… 52
Fig.43　SK14・37平面図・セクション図 …… 53
Fig.44　SK9・11～14出土遺物実測図 …… 54
Fig.45　SK16・17・37出土遺物実測図 …… 55
Fig.46　SE1平面図・セクション図 …… 56
Fig.47・48　SE1出土遺物実測図（1）・（2）…… 57～58
Fig.49　SD1平面図・セクション図 …… 59

Fig.50　SD1出土遺物実測図…… 60
Fig.51　SD2平面図・セクション図 …… 61
Fig.52　SD2出土遺物実測図…… 62
Fig.53　SD3平面図・遺物出土状況図・石列検出状況図・断面図 …… 64
Fig.54　SD3セクション図 …… 65
Fig.55　SD3石列墨書実測図（南より）…… 66
Fig.56～75　SD3出土遺物実測図（1）～（20）…… 67～87
Fig.76　SD5・P8～10・20・25・31・34・45・93平面図・セクション図・エレベーション図 …… 88
Fig.77　P11・79・83・84・90・94・95・104・116・117平面図・セクション図・エレベーション図 …… 90
Fig.78　SD5・P20出土遺物実測図 …… 91
Fig.79　SX5・6出土遺物実測図 …… 92
Fig.80　Ⅲ層遺物集中1・Ⅱ～Ⅲ層出土遺物実測図 …… 93
Fig.81　Ⅱ・Ⅲ・Ⅲ′・Ⅳ層出土遺物実測図 …… 94
Fig.82　Ⅰ～Ⅲ・Ⅰ層・撹乱層出土遺物実測図…… 95
Fig.83　SK6平面図・セクション図 …… 96
Fig.84～92　SK6出土遺物実測図（1）～（9）…… 98～107
Fig.93　SK18・19平面図・セクション図 …… 108
Fig.94　SK18出土遺物実測図 …… 108
Fig.95　SK21～24平面図・セクション図・エレベーション図…… 109
Fig.96　SK19・20・23・24出土遺物実測図 …… 110
Fig.97～100　SK21出土遺物実測図（1）～（4）…… 111～114
Fig.101　SK38・39平面図・セクション図・出土遺物実測図 …… 115
Fig.102　SD6平面図・セクション図・出土遺物実測図 …… 116
Fig.103　SX1・13平面図・セクション図 …… 118
Fig.104・105　SX1出土遺物実測図（1）・（2）…… 119～120
Fig.106　SX13出土遺物・SD2混入遺物実測図 …… 121
Fig.107　絵図にみる帯屋町遺跡の変遷（1）…… 170
Fig.108　絵図にみる帯屋町遺跡の変遷（2）…… 171
Fig.109　絵図にみる帯屋町遺跡の変遷（3）…… 172
Fig.110　絵図にみる帯屋町遺跡の変遷（4）…… 173
Fig.111　帯屋町遺跡調査区の推定位置 …… 173
Fig.112　帯屋町遺跡検出遺構の変遷（1）…… 177
Fig.113　帯屋町遺跡検出遺構の変遷（2）…… 178

表目次

Tab. 1　遺構一覧表（SK・SE）…… 122
Tab. 2　遺構一覧表（SD）…… 122
Tab. 3　ピット一覧表…… 123
Tab. 4～33　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）…… 124～153
Tab. 34　遺物観察表（石製品・金属製品・ガラス製品・古銭）…… 153
Tab. 35～37　遺物観察表（木製品）…… 154～156
Tab. 38・39　遺物観察表（瓦）…… 157～158
Tab. 40　絵図・史料にみる帯屋町筋居住者の変遷…… 169

写真図版目次

巻頭図版１　Ⅰ区完掘状況、近世前期の溝SD3
巻頭図版２　SK5～7・SX1出土遺物
巻頭図版３　SD3出土遺物
PL. 1　調査区遠景、Ⅰ区完掘状況
PL. 2　Ⅲ区完掘状況、TP5～9完掘状況
PL. 3　Ⅱ区南壁、Ⅲ区西壁
PL. 4　SD1セクション、SD1完掘状況
PL. 5　SD2セクション、SD3
PL. 6　SD3セクション、SD3石列墨書
PL. 7　SE1礫出土状況、SE2井筒半截状況
PL. 8　SE3完掘状況、SK6セクション
PL. 9　SK12セクション、SK12・13完掘状況
PL. 10　SK18木炭出土状況、SK29セクション
PL. 11　SA1完掘状況、Ⅰ区ピット群
PL. 12　調査前風景、TP4西壁セクション、SK3セクション、SK6・SX1完掘状況、SK13セクション、14セクション、SD3石列
PL. 13　SA1－P3柱痕セクション、P31柱痕セクション、P90柱根出土状況、SK2遺物出土状況、SK9遺物出土状況、SK18木炭・銅板出土状況、SK27遺物出土状況
PL. 14　SD3遺物出土状況
PL. 15　SK27・29・SE2・3・SX10出土遺物
PL. 16　SX10・Ⅲ層・Ⅳ層・Ⅳ層遺物集中・SK4出土遺物
PL. 17　SK5出土遺物
PL. 18　SK5・7・11出土遺物
PL. 19　SK12・SE1・SD1～3出土遺物
PL. 20　SD3出土遺物
PL. 21　SD3出土遺物
PL. 22　SD3・SX5・Ⅱ～Ⅲ層出土遺物
PL. 23　Ⅲ′層・Ⅰ～Ⅲ層・Ⅰ層・撹乱・SK6出土遺物
PL. 24　SK6出土遺物
PL. 25　SK6・19・21・SX1出土遺物
PL. 26　SX1・SD3出土遺物
PL. 27　SD3出土遺物
PL. 28　作業風景・現地説明会風景

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

高知市の中心市街にある帯屋町遺跡は、近世の郭中にあり帯屋町筋に面している。近世の帯屋町は、藩主一族や家老の屋敷、藩の会所、上級武士の屋敷等が並ぶ町筋であったことが絵図や史料から知られるが、これまで発掘調査は行われておらず、遺跡の実態については不明な所が多かった。それまでに確認されたものとしては、高知市帯屋町１丁目296番地の商店の地下から出土した古墳時代の須恵器があり、この出土地点が帯屋町遺跡の指定範囲とされていた。

平成26年、高知市本町４丁目1-35番地での高知県自治会館新庁舎建設工事が計画され、それに伴う開発の届け出が高知市教育委員会を経由して、高知県教育委員会に対し提出された。当地点は郭中参考地内にあり、近世遺跡の広がりが予想されたことから、これに先立って、埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を高知市教育委員会が実施した。この調査では各試掘坑から中世から近代の遺構と遺物が検出され、これによって本地点が帯屋町遺跡の範囲に含まれることとなった。

これらの結果を受けて、地権者である高知県市町村総合事務組合、高知県教育委員会と高知市が協議を行い、建設予定地において高知市教育委員会が発掘調査を実施することとなった。本調査は平成27年３月４日から３月28日にかけて実施した。

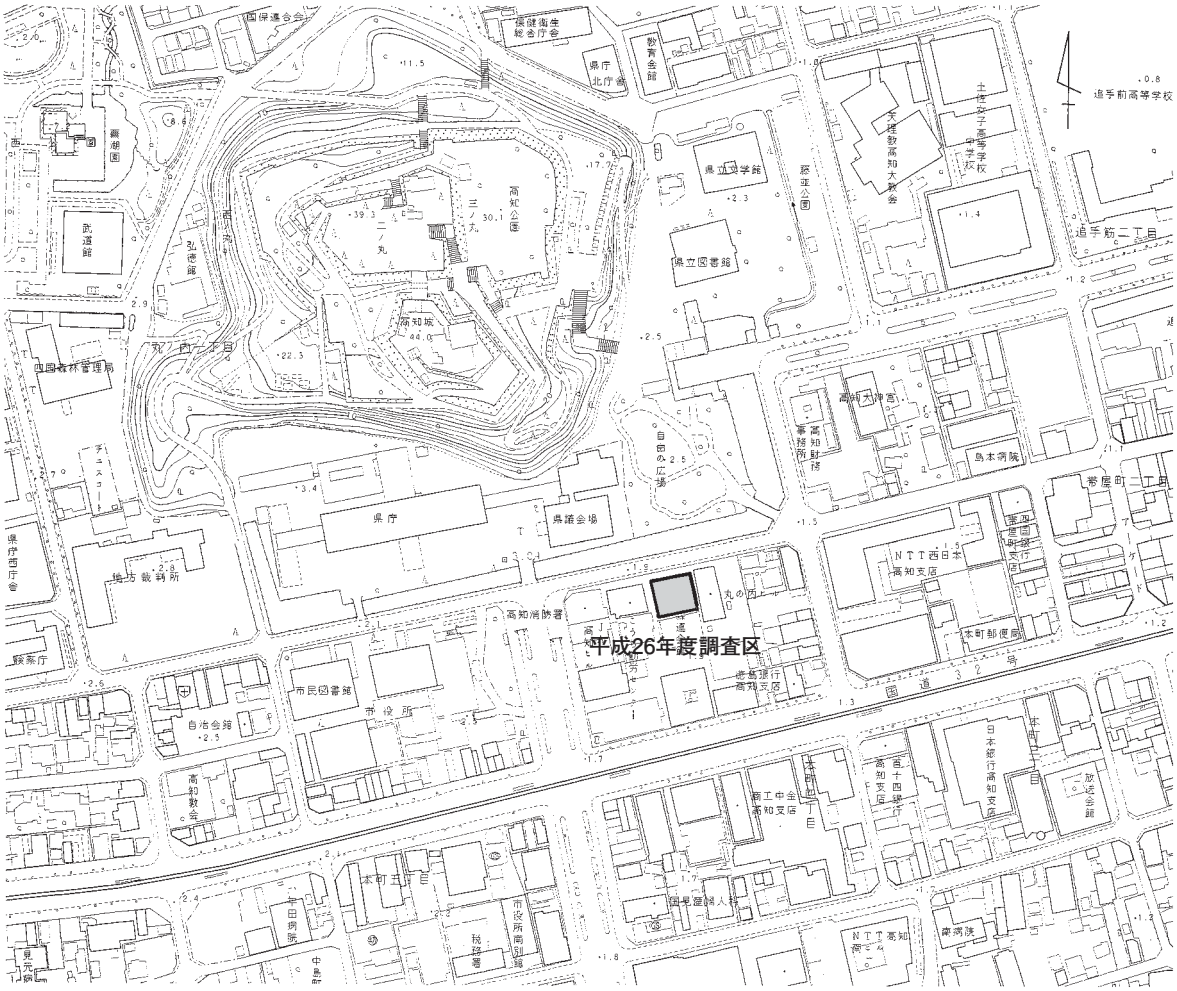


Fig.1　帯屋町遺跡調査区位置図

第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境

１．地理的環境

高知市は土佐湾に面し、東部には高知平野、市域の西部から北部には東西に山地が連なっている。河川は、市の西北部から鏡川が東流して浦戸湾に注ぎ、南国市北部と香美市西部域からは国分川が西流して、江ノ口川、舟入川と共に浦戸湾に注いでいる。現平野部のほとんどは古くは内海であったが、その後鏡川などによる堆積や隆起、干拓による埋め立てなどによって、近世以降ほぼ現在の状態になったものである。

帯屋町遺跡が立地する高知市の中心市街地は、北部は標高400～600mの東西に連なる山地、南方を300m級の帯状の山地、西方をなだらかな丘陵によって囲まれた平野部にあり、周囲には大高坂山、小高坂山、能茶山、比島山、葛島山などの小分離丘陵が存在している。しかし、かつては鏡川によって形成された三角州上に広がる低湿地であったため、平野部の土地は総体的に低く、集中豪雨、台風、津波による水害が繰り返される地域でもあった。一方で、平野部に内陸深く入り込む浦戸湾は自然の良港となり、近世には浦戸湾に注ぐ鏡川、江ノ口川の水運によって、交通至便の立地環境を得ることとなった。

帯屋町遺跡は小分離丘陵である大高坂山の南にあり、その山裾から延びる微高地の先端付近に立地している。大高坂山の北を流れる江ノ口川は、現代の河川改修によって現在は東へ直線的に流れるが、かつては川筋が南側に大きく迂回し、山のすぐ北西側まで迫っていたことが近世の絵図から知ることができる。

２．歴史的環境

周辺の遺跡

縄文時代の遺跡としては、高知市北部の丘陵に位置する福井遺跡、宇津野遺跡で縄文時代の遺物が検出されている。また、長浜チドノ遺跡から縄文前期の羽島下層式土器、正蓮寺不動堂前遺跡からは縄文中期初頭の舟元Ⅰ式土器や石錘、縄文後期～晩期の条痕文土器や磨研土器、高知市西部の柳田遺跡からは縄文後期～晩期の土器が出土している。

弥生時代には、福井遺跡、高知学園裏遺跡、初月遺跡、北秦泉寺遺跡など、丘陵沿いを中心に遺跡が増加する他、柳田遺跡では弥生前期の大篠式土器などが出土している。弥生時代中期から後期にかけては、山地・丘陵部に立地するかろーと口遺跡、朝倉城山遺跡、高天原弥生遺跡などがある。注目されるものとして、県下最古の中広形銅矛２本が池地区の長崎より、県下唯一の有柄式石剣と片刃石斧が北秦泉寺遺跡より出土している。また、大高坂山の北西側に立地する尾戸遺跡においても、弥生前期の太型蛤刃石斧の出土が確認されている。

古墳時代では、北部山麓に吉弘古墳、愛宕不動堂前古墳、宇津野１号墳、２号墳等の後期古墳が点在する秦泉寺古墳群が存在し、高知市西部から南部にかけての丘陵部には、７世紀前半の横穴式石室をもつ朝倉古墳や、塚ノ原古墳群が存在する。平野部においては、中島町遺跡や西秦泉寺遺跡などの遺跡が確認されている。

古代では、白鳳～奈良時代の瓦が出土する秦泉寺廃寺跡、東久万池田遺跡、西秦泉寺遺跡、吉弘遺跡、松葉谷遺跡、高知学園裏遺跡等がある。記録の上では高知市中心部の北西側に高坂郷が成立し、以後中世にかけて、南側の低湿地へと開拓が進んでいったものと推察される。

中世には、大高坂城跡、福井中城跡、万々城跡、安楽寺山城跡など、多くの山城が丘陵部に立地するようになる。大高坂城跡は南北朝期に土佐の南朝方として活躍した大高坂氏の居城であり、大高坂氏が暦応２～３年（1339～1340）に北朝方の攻撃を受け敗退した[註1]後は、天正16年（1588）に長宗我部元親が岡豊城から大高坂山に移り、その後同氏が浦戸へ移る天正19年（1591）までの間、長宗我部氏の居城となった。高知城三ノ丸跡の平成16年度発掘調査では、現存する東石垣の背面で長宗我部の時代に遡る天正期の石垣が検出され、桐文軒丸瓦も出土している。

近世の遺跡は、高知城跡、高知城伝下屋敷跡、弘人屋敷跡、金子橋遺跡、西弘小路遺跡、帯屋町遺跡、本町遺跡、尾戸遺跡などが確認されている。高知城は享保12年に焼失するが再建され、現在、国の重要文化財に指定されている。平成5年度の御台所屋敷跡の発掘調査では、ピット、礎石、溝、石垣などの遺構が検出されている。城下町では、藩関連の屋敷跡である高知城伝下屋敷跡、上級～中級武士の屋敷跡である弘人屋敷跡、金子橋遺跡、西弘小路遺跡などの調査が行われ、近世城下町の様相が次第に明らかになってきている。近世の窯跡には、尾戸窯跡と能茶山窯跡がある。尾戸窯は高知城の北西に位置する尾戸の地に、承応２年（1653）に開かれた藩の陶器窯で、茶陶を中心として優れた製品が作り出された。しかし文政３年（1820）には、城下の西方にある能茶山に能茶山窯磁器窯と陶器窯が開かれ、文政５年（1822）に尾戸窯も能茶山に移転することとなった。

開成館跡は慶応２年（1866）に土佐藩が創立した勧業貨殖および技術教育の統括機関であり、慶応３年に山内容堂と英公使の通訳官アーネスト・サトウとの会見がなされた。明治初期には外客接待の場として「寅賓館（いんひんかん）」と改まり、明治４年（1871）に、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、杉孫三郎と板垣退助、福岡孝弟による、会談が行われている。

大高坂山周辺の遺跡 – 古代・中世

追手筋遺跡の近隣にある大高坂山とその周辺の地域は、古代の高坂郷に属していた。高坂郷の名称は、10世紀初めの『和名類聚鈔（わみょうるいじゅうしょう）』に見えており、そこには「土佐郡　五郷　土佐・高坂・鴨部・朝倉・神戸」とある。こうした記述から、律令制下における高坂郷の開発は、平安時代にはすでに進められていたと考えられる。高知城跡平成18年度調査[註2]では、大高坂山北側の微高地で古代の遺物包含層と土坑群を検出し、８～９世紀の遺物が出土している。東部では、弘人屋敷跡平成23・24年度調査[註3]によって古代の土坑群や区画溝などが検出され、大高坂山から東に延びる微高地の南縁付近が11～12世紀には居住に適した立地環境にあり、開発が進められていたことが明らかにされた。

南北朝時代には、土佐の在地領主らが二派に分かれて争い、大高坂を主戦場に度々合戦が行なわれたとされる。『佐伯文書』によると、在地の有力地頭とみられる大高坂氏が城を構え、「大手」「一城戸」「西大手」「西之城戸」などがあったとされている。

中世の遺跡は、弘人屋敷跡平成23・24年度調査で15～16世紀前半の水路や区画溝、土坑、埋葬遺構などが多数検出されており、この時期の活発な土地利用の様子が窺える。

中世末には、長宗我部元親が天正16年（1588）に居城を岡豊城から大高坂に移し、城下町の設営を開始した。『長宗我部地検帳』によると当地には「弓場ヤシキ」「大テンスノ下」「御土居」などの語もみられ、一定の築城がなされていたことが推察される。しかし城下町建設は不調に終わり、２年余りで浦戸城への再移転となる。

高知城と近世城下町の形成

関ヶ原合戦後、土佐国を与えられた山内一豊は、慶長６年（1601）に長宗我部氏の居城であった浦戸城に入城した。その後、国内統治の要衝の地として大高坂山を城地に選び、慶長６年９月に築城を開始した。慶長８年（1603）には、本丸の建物と二ノ丸石垣までが竣工し、慶長16年（1611）に三ノ丸が完成して高知城の竣工に至った。築城当初、城山の名称は「河中山」とされたが、城下がたびたびの水害に悩まされたためその名を忌んで、慶長15年（1610）に「高智山」と改めた。

正保年間（1644～1648）の「正保城絵図」(註4)、及び慶安５年（1652）の「慶安五年高知郭中絵図」(註5)によると、城の南側と西の搦手門付近には下屋敷があり、南東及び北東には侍屋敷が置かれていた。また、寛文９年（1669）頃の城下の様子を表わした「寛文己酉高知絵図」(註6)（Fig.2）では、城の南東に「御馬場」、東北には江ノ口川に接して「御作事場」「御米蔵」「御武具蔵」等の藩の施設がみえている。

これらを囲んで、城の東・西・南に内堀が巡らされ、北は江ノ口川（当時の大川）が堀としての役割を果たした。城門は東西南北の4棟が設けられ、東を追手とし、西を搦手とした。

築城に並行して、城下町の造営も進められた。南の鏡川と北の江ノ口川を天然の外堀とし、東側と西側は新たに堀を設けて外堀とした。これらの外堀に囲まれる区域が郭中とされ、上級・中級武士の居住区となった。さらに郭中を挟んで、西には上町、東には下町を配した。上町は主に足軽、武家奉公人など下士の者を住まわせ、下町には武士の生活を賄うための町人の居住地区が設けられた。上町、下町と郭中との境界は、東は廿代橋より南に堀詰を経て鏡川に至る線、西は江ノ口川より南に金子橋、築屋敷に至る線がこれにあたり、郭中との境には外堀とともに、土堤を築いて両者を区画している。

近世の帯屋町

近世の帯屋町は、高知城の南側を東西に延びる筋に面しており、西部に御城の南御門や藩主の御殿をひかえた町筋である。帯屋町の町名は藩政時代初期、町の東方に大商人帯屋勘助が住んでいたことに由来するとされているが、その後、町屋はなくなり、筆頭家老の深尾家（佐川）、譜代の家老五藤家（安芸）の郭中屋敷、会所（藩庁）、医学館などが並んでいた。

江戸時代前期の町並みを記録した『侍町小割帳』(註7)によると、東西筋の名称は「御屋敷筋」となっており、城の南門の正面付近に「山内長門」の屋敷、通りを挟んで東に家老「深尾主水」、その東に「後藤市左衛門 後藤外記」の屋敷があったことが記されている。また、寛文９年（1669）頃の絵図である「寛文己酉高知絵図」には、東西の筋に沿って侍屋敷が並ぶ様子が描かれており、城南門の正面付近に家老「山内織部」屋敷、通りを挟んで東に家老「深尾帯刀」、東隣に「森尾市左衛門」その東に「五藤内蔵介」の屋敷がみえている。

これらのうち本調査区が該当する一画は、深尾家屋敷の北東部にあたる。また以降の絵図におい

ても、本地点は近世を通じて深尾家の屋敷となっている。

近代

明治初年の廃藩置県を経て、明治６年（1873）に高知城の建物の一部は解体され、公園となった。城の南門正面付近に所在した山内家の「東屋敷」と「西屋敷」は、明治25年（1892）に高知市が「東屋敷」を買い取り、その後「西屋敷」を得て双方の建物が市役所の庁舎として引き継がれ、大正９年（1920）に改築されている。

当調査区の敷地は、慶応年間（1865～1868）の絵図[註8]まで深尾家の屋敷を認めることができるが、以降の動きについては絵図、史料からつかむことができない。しかし、調査区では明治10年代頃（明治15年以降）に、多量の瓦片や生活用具の一括廃棄が行われており、この時期、屋敷地内で建物の解体を伴う大きな変化があったことが暗示されている。

［註］

１）『土佐國蠹簡集拾遺』

２）『史跡 高知城跡－北曲輪地区埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会2011年

３）『弘人屋敷跡－新資料館整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県・高知県文化財団埋蔵文化財センター 2014年

４）「正保城絵図」国立公文書館所蔵

５）「慶安五年高知郭中絵図」高知市立市民図書館所蔵

６）「寛文己酉高知絵図」高知市立市民図書館所蔵

７）『土佐国史料集成　土佐國群書類従　第八巻』高知県立図書館2006年

８）「慶応初年廓中高知街図」高知市立市民図書館所蔵

［参考文献］

横川末吉「第一編 古代・中世」『高知市史 上巻』高知市1958年

平尾道雄「第二編 近世」『高知市史 上巻』高知市1958年

『高知市戦災復興史』高知市1969年

『稿本 高知市史 現代編』高知市史編さん委員会・高知市1985年

『高知城下町読本－改訂版－』土佐史談会・高知市教育委員会2004年

『描かれた高知市－高知市史絵図地図編』高知市史編さん委員会絵図地図部会・高知市2012年

『百四十一年の歩み－高知市立追手前小学校閉校記念誌』高知市立追手前小学校「創立141年の歩み・閉校記念」事業実行委員会2013年

『史跡高知城跡1－高知市立動物園跡地の史跡整備化に伴う御台所屋敷跡発掘調査報告書』高知県教育委員会1994年

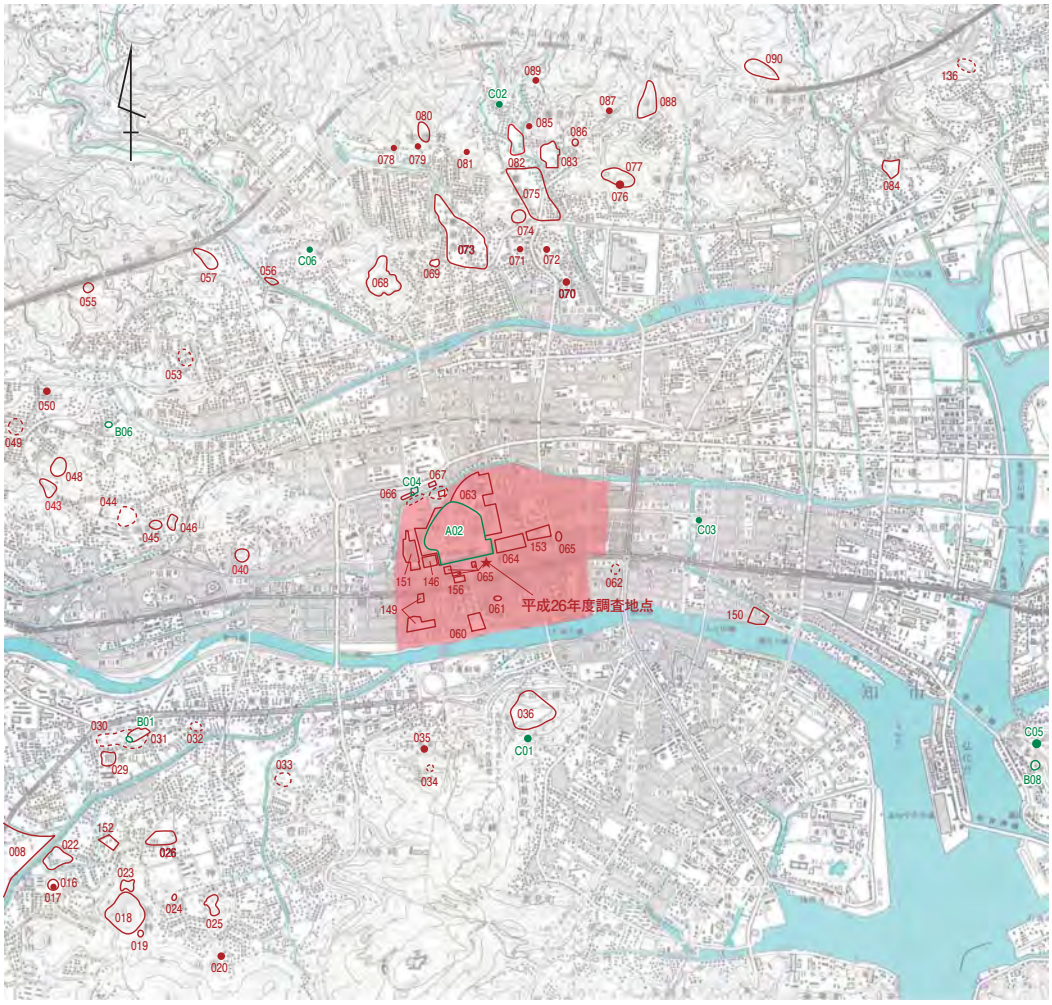
『高知城跡－伝御台所屋敷跡史跡整備に伴う発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995年

『高知城三ノ丸跡－石垣整備事業に伴う試掘確認調査概要報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001年

『史跡高知城跡－三ノ丸石垣整備事業に伴う発掘調査報告書』高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター 2010年

『高知城伝下屋敷跡－高知地家簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002年
『史跡高知城跡－本丸石垣整備事業報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004年
『史跡高知城跡－丸ノ内緑地試掘確認調査報告書』高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター 2006年
『尾戸窯跡－共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会2007年
『開成館』高知市教育委員会2007年
『金子橋遺跡－第六小学校屋内体育館及びプール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会2008年
『西弘小路遺跡－総合あんしんセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会2010年
『史跡高知城跡－北曲輪地区埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会2011年
『西弘小路遺跡－高知法務総合庁舎新営埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター 2012年
『史跡高知城跡 高知城跡－内堀跡西側地区埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会2013年
『弘人屋敷跡－新資料館整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県・高知県文化財団埋蔵文化財センター 2014年

Fig.2　寛文己酉高知絵図（抜粋）　（高知市立市民図書館 所蔵）



郭中参考地

0　1km
（S＝1/40,000）

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
065	帯屋町遺跡	古墳・中世・近世	053	嘉武保宇城跡	中世	085	日の岡古墳	古墳
008	柳田遺跡	縄文～古墳	055	福井遺跡	縄文～中世	086	北秦泉寺遺跡	弥生
016	舟岡山遺跡	弥生	056	初月遺跡	弥生	087	淋谷古墳	古墳
017	舟岡山古墳	古墳	057	万々城跡	中世	088	秦泉寺城跡	中世
018	神田南城跡	中世	060	南御屋敷跡	近世	089	秦泉寺仁井田神社裏古墳	古墳
019	ケジカ端遺跡	弥生	061	中島町遺跡	古墳	090	薊野城跡	中世
020	高座古墳	古墳	062	国沢城跡	中世	136	一宮別城跡	中世
022	鷺泊橋付近遺跡	弥生～中世	063	高知城跡・大高坂城跡	中世・近世	146	高知城伝下屋敷跡	古墳～近世
023	シルタニ遺跡	弥生・古代	064	弘人屋敷跡	近世	149	金子橋遺跡	近世
024	高神遺跡	古墳・古代	066	尾戸遺跡	近世	150	開成館跡	近世～近代
025	神田遺跡	弥生～中世	067	尾戸窯跡	近世	151	西弘小路遺跡	近世
026	神田ムク入道遺跡	弥生～中世	068	安楽寺山城跡	中世	152	御手洗遺跡	弥生・中世・近世
029	鴨部遺跡	縄文・弥生・古代	069	東久万池田遺跡	古代～中世	153	追手筋遺跡	近世
030	神田旧城跡	中世	070	愛宕不動堂前古墳	古墳	156	本町遺跡	中世・近世
031	能茶山窯跡	近世	071	秦小学校校庭古墳	古墳	国指定史跡		
032	石立城跡	中世	072	愛宕神社裏古墳	古墳	A02	高知城跡	近世
033	久寿崎ノ丸遺跡	弥生～中世	073	西秦泉寺遺跡	古墳	高知県指定史跡		
034	小石木町遺跡	弥生	074	秦泉寺別城跡	中世	B01	能茶山窯跡	近世
035	小石木山古墳	古墳	075	秦泉寺廃寺跡	古代	B06	鹿持雅澄邸跡	近世
036	潮江城跡	中世	076	土居の前古墳	古墳	B08	吸江庵跡	中世～
040	井口城跡	中世	077	前里城跡	中世	高知市指定史跡		
043	高知学園裏遺跡	弥生～古代	078	宇津野２号墳	古墳	C01	野中兼山墓	近世
044	福井西城跡	中世	079	宇津野１号墳	古墳	C02	吉弘古墳	古墳
045	福井中城跡	中世	080	宇津野遺跡	縄文	C03	桜井跡	近世
046	福井元尾城跡	中世	081	秦泉寺新屋敷古墳	古墳	C04	寺田寅彦邸跡	明治
048	かろーと口遺跡	弥生	082	吉弘遺跡	古代	C05	伊達兵部宗勝墓	近世
049	福井別城跡	中世	083	松葉谷遺跡	古代～中世	C06	桑名古庵墓	近世
050	福井古墳	古墳	084	薊野遺跡	古代			

※No.は高知市遺跡地図による。

Fig.3　帯屋町遺跡及び周辺の遺跡

第Ⅲ章　調査の方法

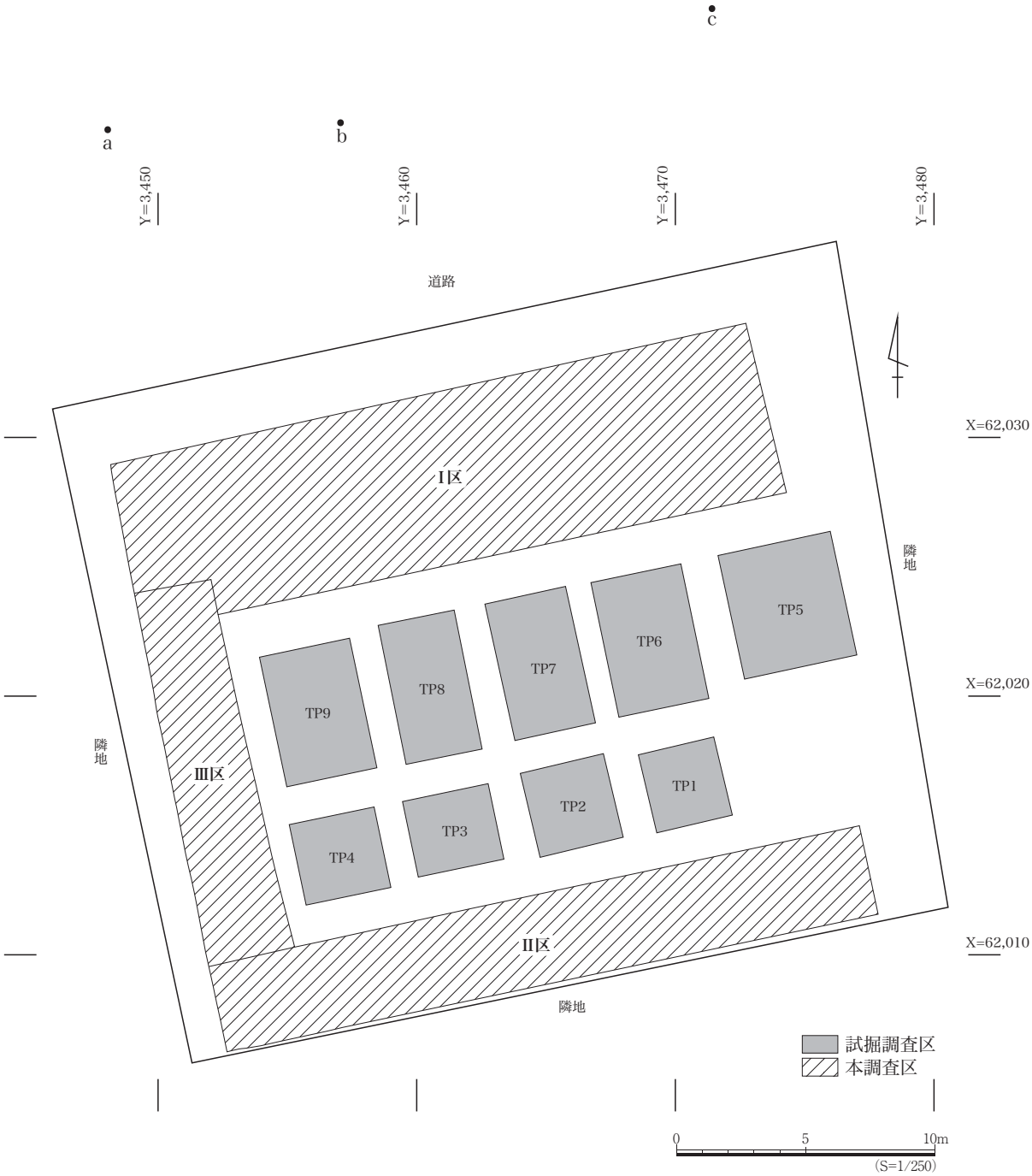
調査は、表土と近現代の遺物包含層については重機を用いて掘削し、遺構検出及び遺構掘削は人力で行った。また、近世以前の遺物包含層についても、遺物量が少ない場合には人力と併行して、重機を用いながら掘削を行った。さらに適宜トレンチ調査を行い、遺構検出面以下の土層の堆積状況を確認した。

試掘調査は、既存建物解体後、調査対象地中央部の地下に残る建物基礎枠の内側に９箇所の試掘坑を設定し、TP1から順に調査を行った。各試掘坑の規模はTP1が3.0×3.0m、TP2が3.3×3.3m、TP3が試掘坑3.4×3.0m、TP4が3.3×3.2m、TP5が4.8×4.4m、TP6が5.3×3.7m、TP7が5.3×3.2m、TP8が5.4×3.0m、TP9が5.1×3.5mである。

本調査は、調査区を3箇所に分け、調査地北部をⅠ区、南部をⅡ区、西部をⅢ区とした。調査はⅡ区から開始し、Ⅱ区の調査終了後、Ⅰ区、Ⅲ区の順に調査を行った。

測量については、『史跡高知城跡丸ノ内緑地試掘確認調査報告書』（高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第96集2006年）の基準点№3，№3-1をもとに、調査地縁辺部に世界測地系公共座標に基づく３箇所の基準点（a・b・c）を設定した。これをもとに調査区内に、4×4mの方眼区画を設定し、南北方向に算用数字、東西方向にアルファベットを付し、北西角の交差点をグリッド名称として測量を行った。平面実測及び土層断面図については、20分の１を基本に適時任意の縮尺を用いた。本書に図示した方位は座標北（G.N.）を指す。水準については、高知市丸ノ内１丁目２番20の一等水準点（標高3.2593m）より、同基準点に導いた。

Fig.4　調査区風景



測点	X座標	Y座標
a	62,041.897	3,045.053
b	62,042.166	3,057.054
c	62,046.578	3,071.416

Fig.5　調査区位置図及び試掘坑配置図

第Ⅳ章　調査の成果

第１節　基本層序（Fig.6 ～ 8）

調査地の現地表面の水準は、2.0 ～ 2.1mを測る。試掘調査においては、既存建物の基礎内という各々が分断された調査区であり、大型の遺構や基礎の撹乱によって多くが削平されていたため、隣り合う調査区でも同一層あるいは同時期の堆積層であるかの判断が困難な層もあった。各々の調査区内では可能な限り堆積状況確認のための土層を残し、TP1 ～ 4の南壁断面、TP4及びTP9の西壁断面、さらに、TP5 ～ 9では調査区中央部の東西方向の断面にて確認した。本調査においては、調査区北部であるⅠ区と南部であるⅡ区では、Ⅲ～Ⅳ層の堆積状況が異なった様相を呈し、Ⅰ区北壁とⅡ区南壁に加え、Ⅲ区西壁断面で南北の堆積状況も確認した。基本層序は、堆積地層を大きく５つに区分し、Ⅰ層～Ⅴ層とした。また、各層の細分は枝番を付けて記した。各地層の概要は以下のとおりである。

Ⅰ層は近現代層である。灰黄褐色砂混じりシルトを主体として、他に黒褐色、褐色シルトなどの堆積に細分できる。橙色土粒、炭化物、礫を含み、部分的に橙色・明赤褐色シルトブロックを含む。

Ⅱ・Ⅱ′層は近世後期～近代初頭を主体とした遺物を含む整地層である。

Ⅱ層：円礫を多く含み、炭化物、橙色・黄色土粒を含む暗褐色シルトである。Ⅱ・Ⅲ区、試掘坑のいくつかの調査区では、Ⅰ層及び近代遺構などによって削平を受けているとみられ、残存しない。

Ⅱ′層：礫、炭化物、橙色土粒を含むにぶい黄褐色シルトを主体として、灰黄褐色シルトなどに細分される。TP8では砂礫の堆積がみられる。試掘調査区内において部分的に堆積を確認した。

Ⅲ・Ⅲ′層は近世前期を主体とした遺物を含む整地層である。

Ⅲ層：炭化物、礫、橙色・黄色土粒を含むにぶい黄褐色～褐灰色シルトからなる。上位の削平の影響が少ない地点で残存する。

Ⅲ′層：主ににぶい黄褐色～灰黄褐色を呈するシルトからなる。礫、炭化物を含み、橙色・黄色土粒を部分的に含む。Ⅳ-1層の上位に堆積する。調査地西部であるⅢ区中央部では橙色・黄色土粒、炭化物を多く含むシルト層で、黒褐色を呈する。近世前期のある時期の生活面と考えられる。調査地北部であるⅠ区においては、中央～南部でⅠ層が厚く堆積しており、当該層が堆積していたとみられる標高においては、機械で掘削したため、出土遺物の収拾はできなかった。北壁断面による堆積層の特徴及び前後の層の関係からⅢ′層とした。礫を多く含む褐灰色シルトからなる。分布が確認できていないⅡ区ではⅠ層及び近代遺構により削平されているとみられる。近世前期の遺構はこの層の前後で確認されている。

Ⅳ層は中世を主体として近世初頭までの遺物を含む堆積層である。

Ⅳ-1層：中世の遺物のほか、近世初頭の遺物も出土しており、中世～近世初頭に形成された層であるとみられる。試掘坑の位置する調査地中央部においては、にぶい黄褐色シルトを主体とし、礫、炭化物を少量含む。調査地北西部では、炭化物を少量含む灰黄褐色シルトからなり、一部上部が土壌化し、暗褐色を呈する。また、北東部では、Ⅳ-2層及びⅢ′-3層が同程度の標高で確認されており、

Ⅳ-1層の堆積は見られない。調査地南端部では、水成層とみられる灰色粘土質シルトが厚く堆積する。

Ⅳ-2層：中世に形成されたとみられる層で、主ににぶい黄褐色～にぶい黄橙色を呈するシルトからなる。調査地中央南部では粘土質となる。Ⅰ区東部では、下部で砂を含み、にぶい黄橙色～黄褐色に明瞭に変色する。酸化鉄の集積によるものとみられ、水田土壌の床土の可能性がある。また、調査地南西部のTP4でも同様に下部でにぶい黄橙色に変色する堆積がみられた。その他の地点では、黄色土をブロック状に含む堆積を確認した。調査地中央部では、この段階の遺構を確認している。

Ⅳ-3層：中世の包含層であり、粗砂、角礫・円礫を少量含む黒褐色砂質シルトからなる。上部でマンガン粒の集積が顕著に認められる。また、部分的に鉄分が沈着する。西部を除くⅠ区全域及び、TP7・9で堆積を確認した。下位のⅤ層を母材とした土壌化層である。Ⅴ層上面では、Ⅳ-3層を掘削して構築されたとみられる15世紀までの遺構を確認している。TP7・9においては、堆積は見られるが、Ⅰ区に比較して層厚が薄くなり遺物の出土も減少する。調査地中央東部にあたるTP5においては、下位のⅤ層中の洪水堆積層とみられる砂礫層の高まりが分布し、その直上ではⅣ-3層の堆積は確認できなかった。また、Ⅲ区SD3より南側においては、Ⅴ層が南に向かって低く傾斜し、その上面はⅣ-1・2層のシルト～粘土質シルトが厚く堆積するのみであり、ここでもⅣ-3層の堆積は見られなかった。

Ⅴ層は砂層と砂礫層からなる河川堆積層であり、当遺跡における基盤層である。

Ⅴ-1層：灰黄褐色～褐灰色シルト質～シルト混じり砂

Ⅴ-2層：灰黄褐色～にぶい黄褐色粗砂

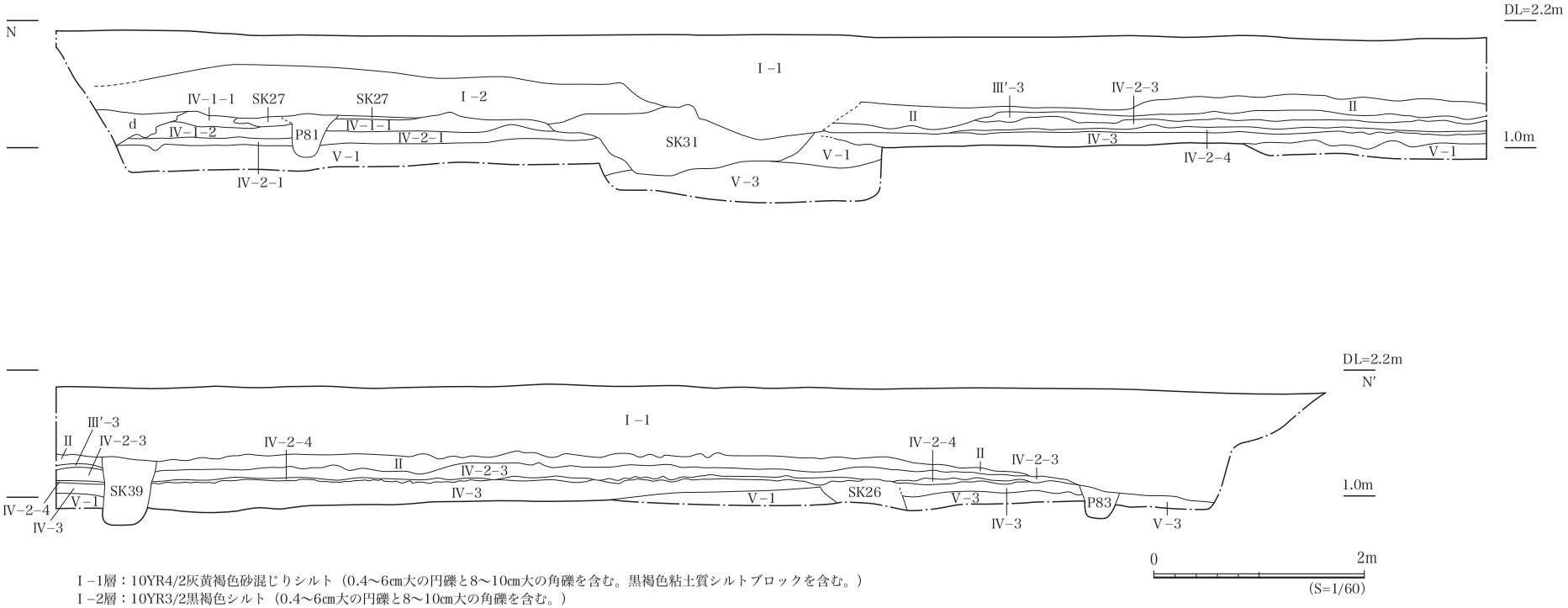
Ⅴ-3層：灰黄褐色～にぶい黄褐色砂礫

Ⅴ-4層：灰黄褐色～にぶい黄褐色粗砂

Ⅴ-5層：褐灰色～暗灰色砂礫

Ⅴ層からも遺物が少量出土している。時期の判別ができるものには古代の遺物があり、9世紀のものが1点出土している。Ⅴ-2層以前は粗砂と砂礫が互層状をなし、河川の洪水の影響を受けていたとみられるが、Ⅴ-2層以後は、比較的安定したシルトの混じるⅤ-1層が堆積し、調査地中央部～北部では土壌化が進んだとみられる。砂礫層であるⅤ-3層が、最も高い標高で確認されるのは調査地北東部で、標高1.0mを測る。また、基盤層の微地形が最も低くなるのは、標高0.8mとなる調査地西部中央付近である。

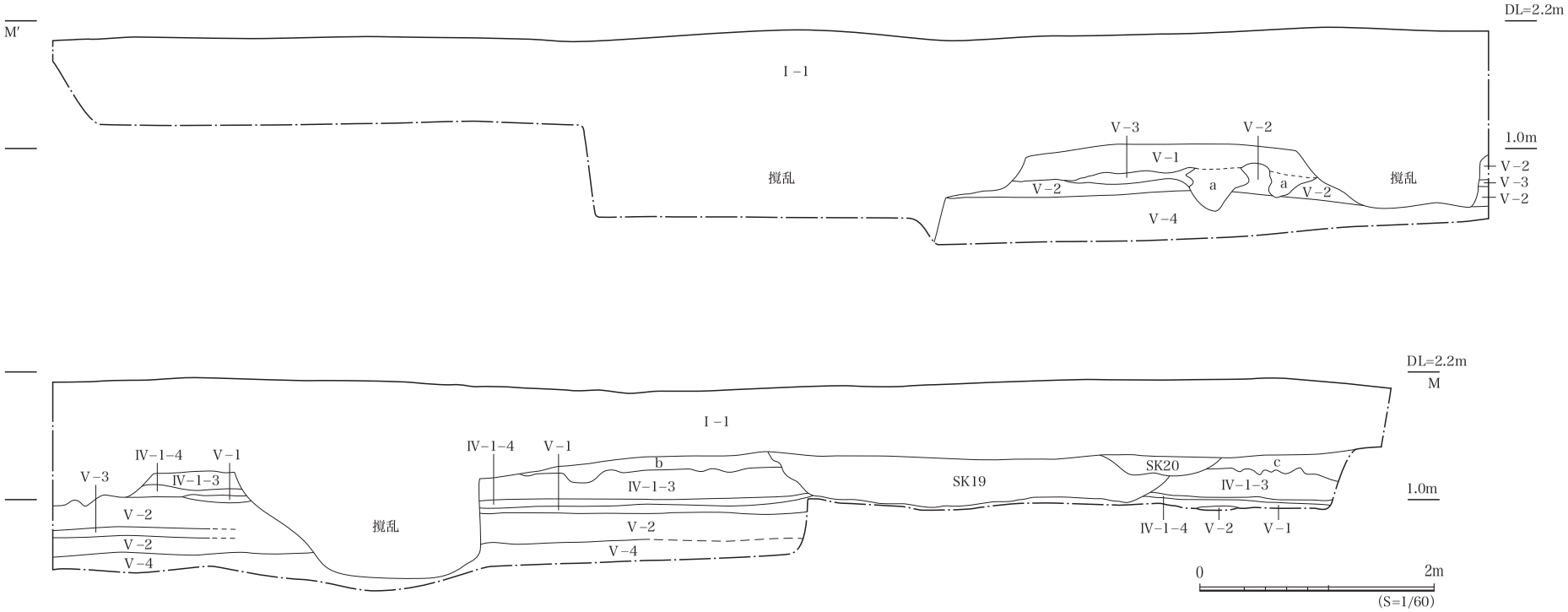
調査区北壁



Ⅰ−1層：10YR4/2灰黄褐色砂混じりシルト（0.4〜6㎝大の円礫と8〜10㎝大の角礫を含む。黒褐色粘土質シルトブロックを含む。）
Ⅰ−2層：10YR3/2黒褐色シルト（0.4〜6㎝大の円礫と8〜10㎝大の角礫を含む。）
Ⅱ層：10YR3/3暗褐色シルト（0.2〜0.8㎝大の角礫・円礫と1〜3㎝大の円礫を多く含む。橙色・黄色土粒を多く含む。マンガン粒を含む。土器片、炭化物を多く含む。）
Ⅲ′−3層：10YR4/1褐灰色シルト（粗砂、0.2〜0.8㎝大の角礫・円礫を多く含む。炭化物を少量含む。）
Ⅳ−1−1層：10YR3/3暗褐色シルト（マンガン粒を含む。）
Ⅳ−1−2層：10YR5/2灰黄褐色シルト（炭化物を少量含む。）
Ⅳ−2−1層：10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト（粗砂、黄色土ブロックを含む。炭化物を少量含む。）
Ⅳ−2−3層：10YR5/1褐灰色シルト（粗砂、0.2〜0.8㎝大の角礫・円礫を多く含む。炭化物を少量含む。東部では7.5YR5/1褐灰色を呈する。）
Ⅳ−2−4層：10YR5/3にぶい黄褐色シルト〜砂（鉄分沈着。）
Ⅳ−3層：10YR3/2黒褐色砂質シルト（粗砂、0.2㎝大の角礫・円礫を少量含む。上部にマンガン粒を含み、鉄分が沈着する。）
Ⅴ−1層：10YR3/2黒褐色シルト混じり砂（粗砂、0.2〜1㎝大の角礫・円礫を多く含む。）
Ⅴ−3層：10YR4/3にぶい黄褐色砂礫
d：10YR4/2灰黄褐色シルト

Fig.6　基本層序(1)

調査区南壁



Ⅰ−1層：10YR4/2灰黄褐色砂混じりシルト（0.4〜6㎝大の円礫と8〜10㎝大の角礫を含む。黒褐色粘土質シルトブロックを含む。）
Ⅳ−1−3層：7.5Y4/1灰色粘土質シルト（礫を含む。）
Ⅳ−1−4層：5Y5/2灰オリーブ色粘土質シルト（粗砂を少量含む。）
Ⅴ−1層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト混じり砂（粗砂を含む。0.2〜0.4㎝大と1〜1.5㎝大の円礫を少量含む。）
Ⅴ−2層：10YR4/3にぶい黄褐色粗砂（粗砂を含む。0.2〜0.4㎝大と1〜1.5㎝大の円礫を少量含む。）
Ⅴ−3層：10YR4/3にぶい黄褐色砂礫（粗砂、1〜4㎝大の円礫を多く含む。）
Ⅴ−4層：10YR4/3にぶい黄褐色粗砂〜砂礫（下部、砂粒・礫径大きい。）
a：5Y4/1灰色砂混じりシルト
b：5Y4/1灰色砂質シルト
c：10YR4/1褐灰色粗砂混じり粘土質シルト〜シルト

Fig.7　基本層序(2)

調査区西壁

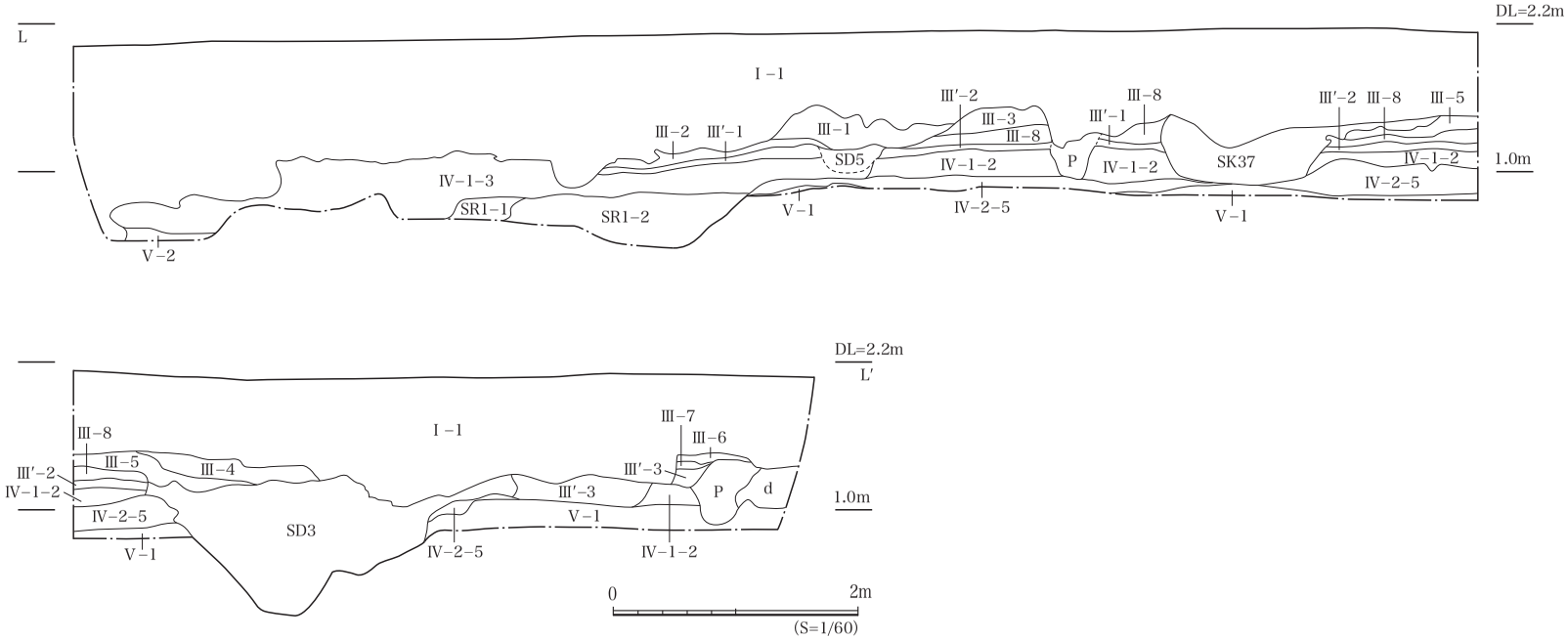
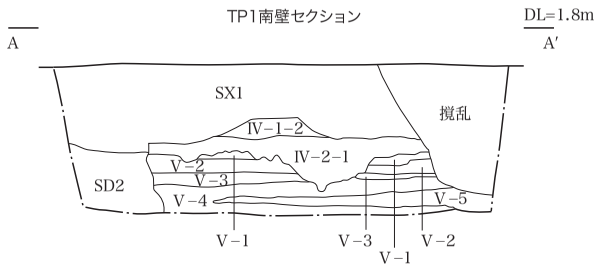


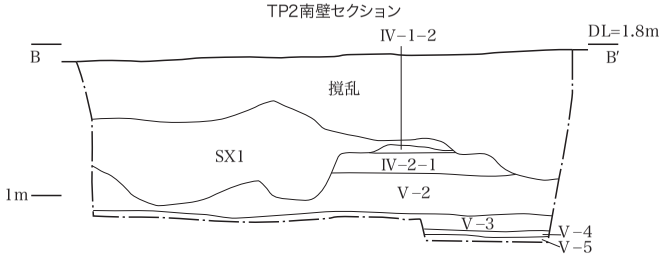
Fig.8　基本層序(3)

Ⅰ−1層：10YR4/2灰黄褐色砂混じりシルト（0.4〜6㎝大の円礫と8〜10㎝大の角礫を含む。黒褐色粘土質シルトブロックを含む。）
Ⅲ−1層：10YR4/1褐灰色シルト（0.4〜1㎝大の角礫・円礫を部分的に多く含む。）
Ⅲ−2層：5Y5/1灰色砂混じりシルト（0.2㎝大の角礫・円礫を少量含む。1〜2㎝大の円礫をごくわずかに含む。）
Ⅲ−3層：2.5Y5/2暗灰黄色シルト（0.2㎝大の角礫と1〜2㎝大の角礫・円礫を少量含む。最下部に礫がラミナ状に堆積する。）
Ⅲ−4層：10YR4/1褐灰色砂混じりシルト
Ⅲ−5層：10YR5/1褐灰色シルト（橙色土粒、炭化物を少量含む。）
Ⅲ−6層：10YR5/1褐灰色シルト（橙色土粒、炭化物を少量含む。）
Ⅲ−7層：5Y5/1灰色シルト（0.4〜1㎝大の角礫・円礫を少量含む。）
Ⅲ−8層：2.5Y5/2暗灰黄色シルト（0.2㎝大の角礫と1〜2㎝大の角礫・円礫を少量含む。）
Ⅲ′−1層：5Y4/1灰色砂質シルト（粗砂、1〜4㎝大の円礫を少量含む。）
Ⅲ′−2層：2.5Y3/2黒褐色シルト（0.2〜0.4㎝大の角礫・円礫を多く含む。橙色・黄色土粒、炭化物を多く含む。）
Ⅲ′−3層：10YR4/1褐灰色シルト（0.2〜1㎝大の角礫と1〜3㎝大の円礫を多く含む。炭化物を少量含む。）
Ⅳ−1−2層：10YR5/2灰黄褐色シルト（炭化物を少量含む。）
Ⅳ−1−3層：5Y4/1灰色粘土質シルト（0.2〜0.6㎝大の角礫・円礫を多く、1〜2㎝大の円礫を少量含む。）
Ⅳ−2−5層：7.5Y4/1灰色粘土質シルト
Ⅴ−1層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト混じり砂（粗砂を含む。0.2〜0.4㎝大と1〜1.5㎝大の円礫を少量含む。）
Ⅴ−2層：5Y5/1灰色砂（粗砂を含む。）
SR1−1：2.5Y5/1黄灰色粗砂
SR1−2：2.5Y5/1黄灰色粘土
d：10YR4/2灰黄褐色シルト

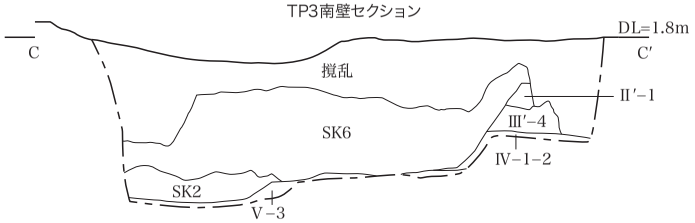
Fig.9 TP1～5 セクション図



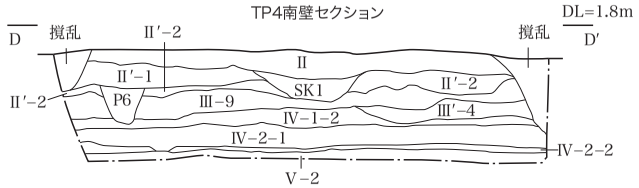
Ⅳ−1−2 層：10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（0.5～1 ㎝大の円礫を少量含む。）
Ⅳ−2−1 層：10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト（0.3～0.5 ㎝大の角礫・円礫を少量含む。）
Ⅴ−1 層：10YR5/2 灰黄褐色シルト質砂（粗砂を含む。）
Ⅴ−2 層：10YR5/2 灰黄褐色粗砂（0.3～0.5 ㎝大の円礫を多く含む。）
Ⅴ−3 層：10YR5/2 灰黄褐色砂礫（粗砂・0.5～1 ㎝大の円礫を多く含む。）
Ⅴ−4 層：10YR5/2 灰黄褐色粗砂（0.3～0.5 ㎝大の円礫を多く含む。）
Ⅴ−5 層：10YR4/1 褐灰色砂礫（粗砂・0.5～2 ㎝大の円礫を多く含む。）



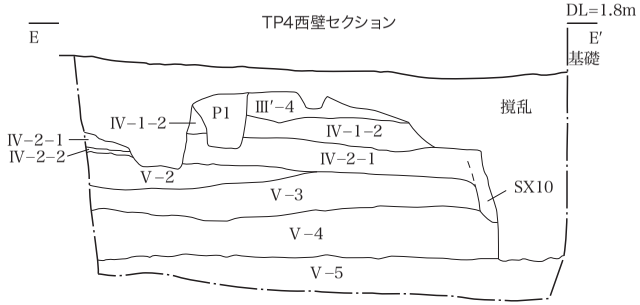
Ⅳ−1−2 層：10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト（0.3～0.5 ㎝大の円礫を少量含む。）
Ⅳ−2−1 層：10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（0.3～0.5 ㎝大の円礫を少量含む。）
Ⅴ−2 層：10YR5/2 灰黄褐色粗砂（0.3～0.5 ㎝大の円礫を少量含む。）
Ⅴ−3 層：10YR5/1 褐灰色砂礫（粗砂・0.5～1 ㎝大の円礫を多く含む。）
Ⅴ−4 層：10YR5/1 褐灰色砂（0.3～0.5 ㎝大の円礫を少量含む。）
Ⅴ−5 層：10YR5/1 褐灰色砂礫（粗砂・0.5～1 ㎝大の円礫を多く含む。）



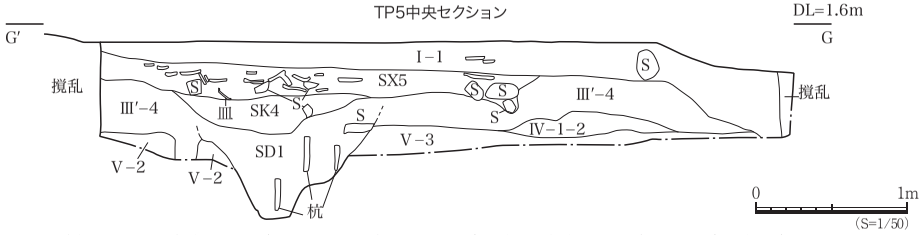
Ⅱ′−1 層：10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（0.3～1 ㎝大の角礫・円礫を多く含む。）
Ⅲ′−4 層：10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（0.3～1 ㎝大の角礫・円礫を多く含む。）
Ⅳ−1−2 層：10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
Ⅴ−3 層：10YR5/1 褐灰色砂礫（粗砂・0.5～1 ㎝大の円礫を多く含む。）



Ⅱ層：10YR3/3 暗褐色シルト（0.4～1 ㎝大の円礫を多く含む。橙色土粒・炭化物を少量含む。）
Ⅱ′−1 層：10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（1 ㎝前後の円礫を少量含む。橙色土粒・炭化物を少量含む。）
Ⅱ′−2 層：10YR4/2 灰黄褐色シルト（粗砂を少量含む。）
Ⅲ−9 層：10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（0.4～3 ㎝大の円礫を多く含む。）
Ⅲ′−4 層：10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（0.3～1 ㎝大の円礫、0.3 ㎝大の角礫を少量含む。炭化物を少量含む。）
Ⅳ−1−2 層：10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト（0.3～0.5 ㎝大の円礫を少量含む。炭化物を少量含む。）
Ⅳ−2−1 層：10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト（粗砂を含む。0.3～1 ㎝大の円礫を少量含む。）
Ⅳ−2−2 層：10YR6/4 にぶい黄橙色粘土質シルト
Ⅴ−2 層：10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂



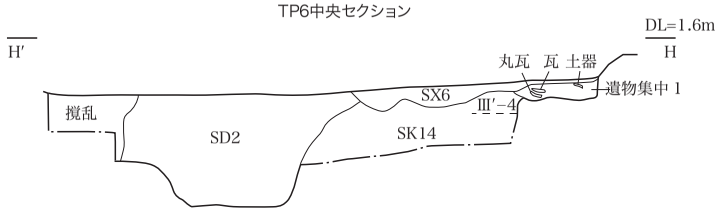
Ⅲ′−4 層：10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（0.3～1 ㎝大の円礫、0.3 ㎝大の角礫を少量含む。炭化物を少量含む。）
Ⅳ−1−2 層：10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト（0.3～0.5 ㎝大の円礫を少量含む。炭化物を少量含む。）
Ⅳ−2−1 層：10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト（粗砂を含む。0.3～1 ㎝大の円礫を少量含む。）
Ⅳ−2−2 層：10YR6/4 にぶい黄橙色粘土質シルト
Ⅴ−2 層：10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂
Ⅴ−3 層：10YR5/2 灰黄褐色砂礫（粗砂・0.5～1 ㎝大の円礫を多く含む。）
Ⅴ−4 層：10YR4/4 褐色（上部）、N4/ 灰色（下部）砂
Ⅴ−5 層：N3/ 暗灰色砂礫



Ⅰ−1 層：7.5YR4/3 褐色シルト（0.5～2 ㎝大の角礫・円礫を多く含む。橙色シルトブロックを多く含む。）
Ⅲ′−4 層：10YR5/2 灰黄褐色シルト（0.3～0.5 ㎝大の角礫、0.5～1 ㎝大の円礫を多く含む。炭化物を少量含む。）
Ⅳ−1−2 層：10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（0.3～0.5 ㎝大の角礫・円礫を含む。炭化物を少量含む。）
Ⅴ−2 層：10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂
Ⅴ−3 層：10YR5/2 灰黄褐色砂礫（粗砂・0.5～2 ㎝大の円礫を多く含む。）

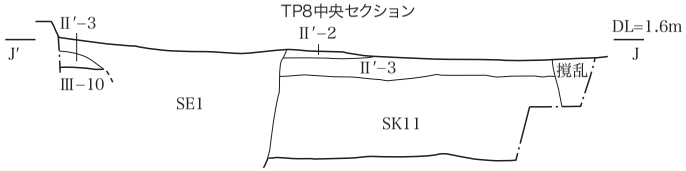
Fig.10　TP6～9 セクション図

TP6中央セクション



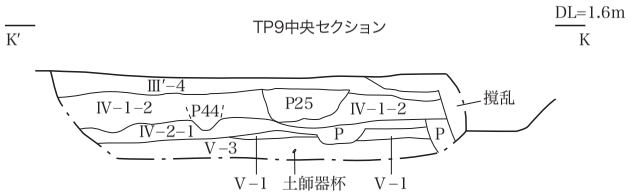
Ⅲ′-4 層：10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（0.5～1 ㎝大の円礫を少量含む。）
SX6：10YR5/4 にぶい褐色シルト（0.5～2 ㎝大の角礫・円礫を多く含む。炭化物を多く含む。）
遺物集中1：10YR5/3 にぶい黄褐色シルト(0.5～4㎝大の円礫を多く含む。炭化物を多く含む。)

TP8中央セクション



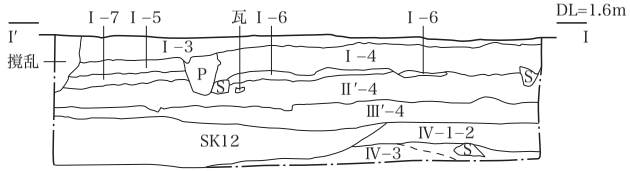
Ⅱ′-2 層：10YR4/2 灰黄褐色シルト（0.3～0.5 ㎝大の角礫、0.5～1 ㎝大の円礫を多く含む。）
Ⅱ′-3 層：10YR4/2 灰黄褐色砂礫（粗砂・シルトを含む。0.5～2 ㎝大の円礫を多く含む。）
Ⅲ-10層：10YR5/3にぶい黄褐色シルト（0.3～0.5㎝大の角礫，0.5～1㎝大の円礫を含む。）

TP9中央セクション



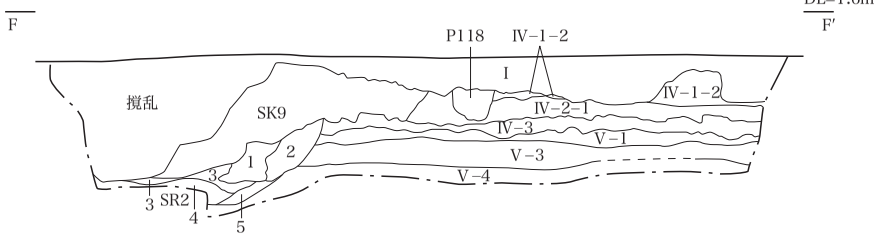
Ⅲ′-4 層：10YR5/2 灰黄褐色シルト（0.3～0.5 ㎝大の角礫、0.5～1 ㎝大の円礫を多く含む。炭化物を少量含む。）
Ⅳ-1-2 層：10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（0.2～2 ㎝大の角礫・円礫を少量含む。）
Ⅳ-2-1 層：10YR6/3 にぶい黄橙色シルト（0.3～0.5 ㎝大の角礫・円礫を少量含む。）
V-1 層：10YR4/2 褐灰色シルト混じり粗砂（0.2～1 ㎝大の角礫を多く含む。0.2～3 ㎝大の円礫を多く含む。）
V-3層：10YR4/1褐灰色砂礫（粗砂、0.2～1㎝大の角礫・円礫を含む。）

TP7中央セクション



I-3 層：7.5YR3/2 黒褐色シルト（0.3～1 ㎝大の角礫を多く含む。1～3 ㎝大の円礫を多く含む。炭化物を多く含む。）
I-4 層：10YR3/2 黒褐色シルト（0.2～1 ㎝大の角礫を多く含む。3～10 ㎝大の円礫を多く含む。炭化物を多く含む。）
I-5 層：10YR3/2 黒褐色シルト（0.2～1 ㎝大の角礫を多く含む。1～5 ㎝大の円礫を少量含む。明赤褐色シルトブロックを多く含む。炭化物を少量含む。）
I-6 層：5YR5/6 明赤褐色シルト（0.2～0.5 ㎝大の角礫を多く含む。）
I-7 層：7.5YR3/2 黒褐色シルト（1～2 ㎝大の円礫を密に含む。3 ㎝大の円礫を少量含む。）
Ⅱ′-4 層：10YR4/2 灰黄褐色シルト（0.2～0.4 ㎝大の角礫を少量含む。0.5～1 ㎝大の角礫・円礫を多く含む。3～4 ㎝大の円礫を少量含む。瓦片を含む。炭化物を少量含む。部分的に炭化物をラミナ状に含む。）
Ⅲ′-4 層：10YR4/2 灰黄褐色シルト（0.5～1 ㎝大の角礫を少量含む。0.5～1 ㎝大の円礫を多く含む。2～4 ㎝大の円礫を少量含む。黄色・橙色土粒を少量含む。炭化物を多く含む。）
Ⅳ-1-2 層：7.5YR4/2 灰褐色シルト（0.3～1 ㎝大の角礫を少量含む。2～3 ㎝大の円礫を少量含む。橙色土粒を少量含む。炭化物を少量含む。）
Ⅳ-3 層：10YR4/1 褐灰色砂質シルト（粗砂。0.2～1 ㎝大の角礫を多く含む。1～3 ㎝大の円礫を少量含む。炭化物を少量含む。）
P：10YR3/2 黒褐色シルト（0.2～1 ㎝大の角礫・円礫を多く含む。炭化物を多く含む。）

TP9西壁セクション



Ⅳ-1-2 層：10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（0.2～2 ㎝大の角礫・円礫を少量含む。）
Ⅳ-2-1 層：10YR5/3 にぶい黄褐色砂混じりシルト（0.2～1 ㎝大の角礫・円礫を少量含む。）
Ⅳ-3 層：10YR4/3 にぶい黄褐色砂混じりシルト（粗砂。0.2～0.5 ㎝大の角礫・円礫少量含む。上部にマンガン沈着。）
V-1 層：10YR4/2 褐灰色シルト混じり粗砂（0.2～1 ㎝大の角礫を多く含む。0.2～3 ㎝大の円礫を多く含む。）
V-3 層：10YR4/1 褐灰色砂礫（粗砂。0.2～1 ㎝大の角礫・円礫を含む。）
V-4 層：2.5Y4/1 黄灰色砂（粗砂を多く含む。）
SR2
1 層：10YR4/3 にぶい黄褐色シルト混じり粗砂（0.2～1 ㎝大の角礫・円礫を多く含む。）
2 層：10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粗砂（0.2～1 ㎝大の角礫・円礫を少量含む。）
3 層：10YR4/1 褐灰色粘土質シルト（粗砂、0.2 ㎝大の角礫・円礫を少量含む。炭化物を少量含む。）
4 層：N6/ 灰色粘土質シルト
5 層：2.5Y4/1 黄灰色シルト質粗砂（0.2～1 ㎝大の角礫・円礫を少量含む。）

0　1m
(S=1/50)

第２節　遺構と遺物

今回の調査では、中世～近代の遺構を検出し、掘立柱建物２棟、ピット列１条、土坑30基、井戸３基、溝・溝状遺構７条、ピット95基、性格不明遺構３基を検出した。このほか、平面での検出には至っていないが、調査区断面などで落ち込み状の堆積状況が確認でき、遺物の収拾が可能であった堆積層については、遺構番号を付し、実測遺物を掲載した。（SK20、P118、SR2、SX5・6、遺物集中１）

TP1 ～ 9では、近現代層を機械によって取り除いた、標高1.6 ～ 1.4mで明治時代～近世後期の遺構を検出し、Ⅳ層中の標高1.2 ～ 1.0mで近世～中世の遺構を検出した。TP4でⅤ-2層上面の標高約0.8mで中世の遺構を確認したのが最下であり、トレンチ調査を除いて、Ⅴ層上面までは調査を行わなかった。Ⅰ区南部ではⅠ層が厚く堆積し、標高1.1 ～ 0.9mのⅠ層下面でⅤ-1 ～ 3層を検出し、近代～中世の遺構を検出した。Ⅰ区北部の中央～東部においては、近世～中世の包含層が残存するものの、遺物の出土が少なく、一部、Ⅳ-3層で近代の遺構を検出した他は、遺構の確認ができなかったため、南部と同じ標高で検出されるⅤ-1 ～ 3層上面まで掘り下げ、近世～中世の遺構を検出した。Ⅰ区西部では、Ⅰ層下面の標高1.2 ～ 1.3mのⅣ-1層上位で一部の遺構を検出したが、以下は、遺物は散見されるものの遺構は確認できなかった。東部と同じくⅤ-1層上面まで掘り下げ、調査を終了した。調査地南部であるⅡ区は、西部ではⅠ層下面で検出したⅣ-1層で近代の遺構を検出し、以下、Ⅴ-1層上面まで調査を行ったが、遺構は確認できなかった。東部ではⅠ層が厚く堆積しており、Ⅰ層下面の標高1.0m付近でⅤ-1層を検出した。中央部でも同一面まで調査を行ったが解体前の既存建物構築の際の撹乱が広範囲に及んでおり、また、撹乱が及んでいない箇所についても遺構は検出されなかった。Ⅲ区では、Ⅳ-1層上面の標高1.1 ～ 1.0mで近代～中世の遺構を検出し、それ以下はトレンチ調査のみ行った。各時期の遺構の詳細については、以下のとおりである。出土遺物が皆無あるいは少なく、時期が断定できないものについても埋土など他の状況から推定しうる時期で掲載した。検出遺構については、検出位置、規模、年代等の一覧（Tab.1 ～ 3）を章末に示した。なお、遺構の深さについては検出面からの深さを基本とし、調査区壁面などの断面観察から確認できるものについては最大の深さを示した。

１．古代・中世の遺構と遺物

調査地北部を中心に、中世とみられる土坑５基、井戸２基、溝・溝状遺構２条、ピット35基、性格不明遺構１基を検出した。これら中世の遺構としたもののうち、土坑２基（SK27・31）、溝状遺構１条（SD7）についてはⅣ-1層検出の遺構であり、近世に該当する可能性がある。同時期頃とみられるピットについては便宜上、後掲の近世の項目で示した。

（1）土坑

SK15（Fig.12・13）

TP6、Ⅳ-2層で検出した。西部はSD2に切られ、北部と東部は調査区外に広がるため、全体の規模、形態は不明であり、東西方向の溝である可能性もある。検出規模は南北残存長0.76m、東西残存長

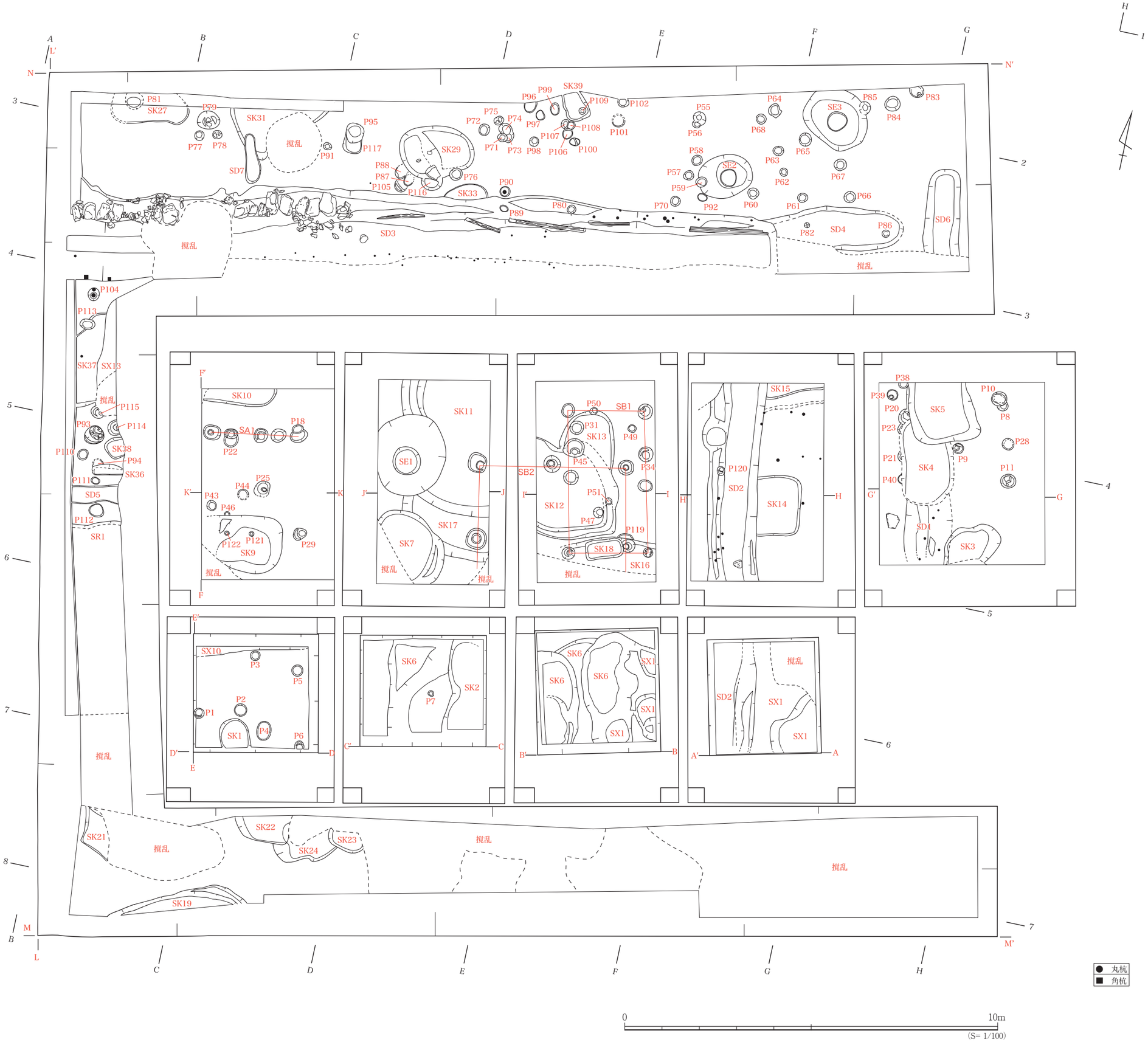


Fig.11　検出遺構全体図

1.52m、深さ28cmを測る。埋土はにぶい黄橙色シルトである。

出土遺物は、白磁碗の口縁部１点と体部、土師質土器杯又は皿の口縁部１点と体部である。図示したものは土師質土器杯又は皿（18）、白磁碗（19）である。19は中国産の白磁碗で、12世紀～ 13世紀初頭。灰黄色を帯びる透明の釉を施す。

SK27（Fig.12・13）

Ⅰ区A2グリッド、Ⅳ-1層で検出した浅い落ち込み状の土坑である。北部が調査区外に広がるため全体の規模、形態は不明である。東西長2.11m、南北確認長0.46m、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。P81に切られる。

出土遺物は、土師質土器杯の口縁部７点と底部２点、小皿の口縁部11点と底部９点、杯又は皿の口縁部15点と底部20点、瓦器椀の口縁部１点、瓦質土器鍋の口縁部１点と脚部１点、及び土師質土器細片、瓦器椀の体部、瓦質土器鍋の体部、瓦片である。

図示したものは１～ 17である。１～４は土師質土器杯、７～ 10は小皿、５・６は杯又は皿、11は椀である。１・３・４は外面に多段の強いロクロ目を残す。12は古代の杯又は椀で、口縁部内面に段をもつ。13は和泉型の瓦器椀で、内底に暗文を認める。14は瓦質土器又は瓦器の椀で、内底に直線方向と円圏状の暗文を施す。16・17は瓦質土器の鍋。16は鍋の体部で、鍔を貼付する。17は脚部で、接合部で剥離している。15は土師質土器又は瓦質土器の鍋で、鍔を貼付している。

SK27からは13世紀末～ 14世紀の遺物が出土している。

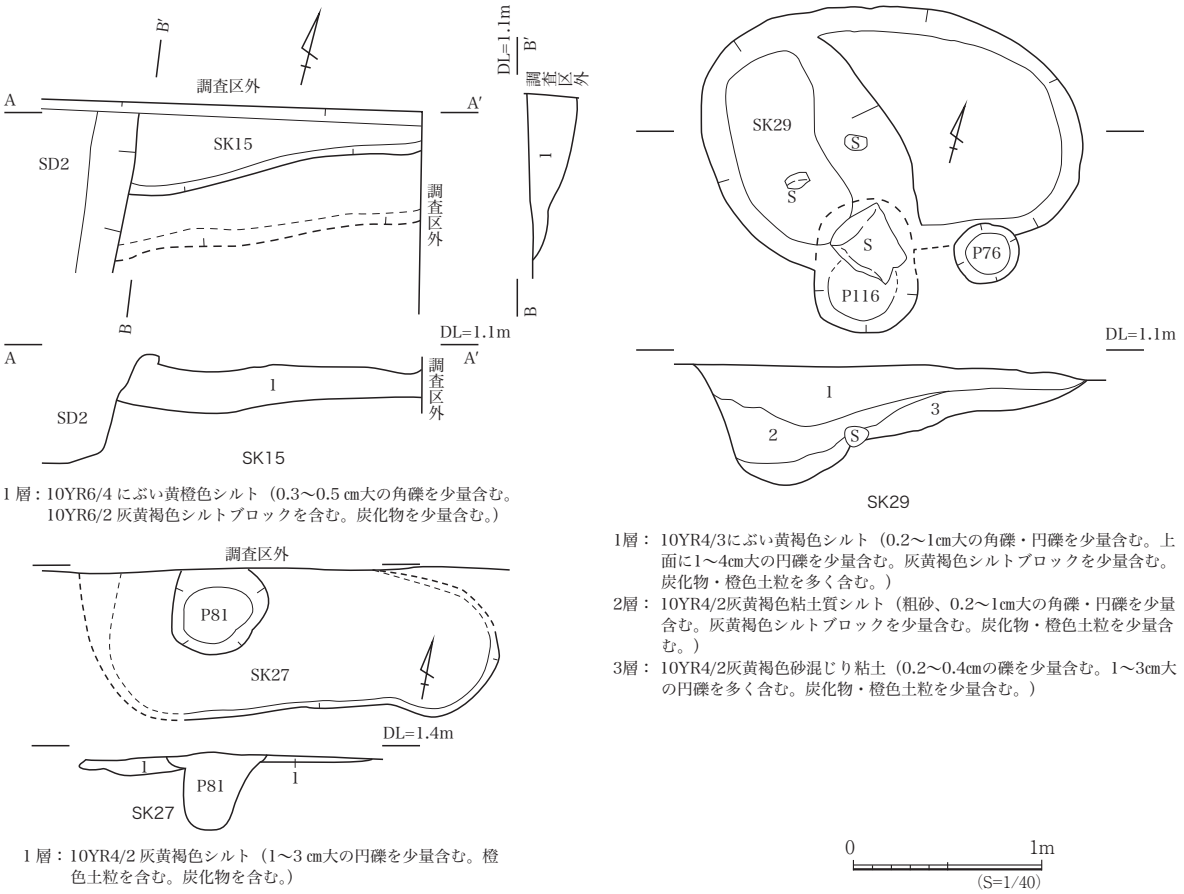


Fig.12　SK15・27・29 平面図・セクション図

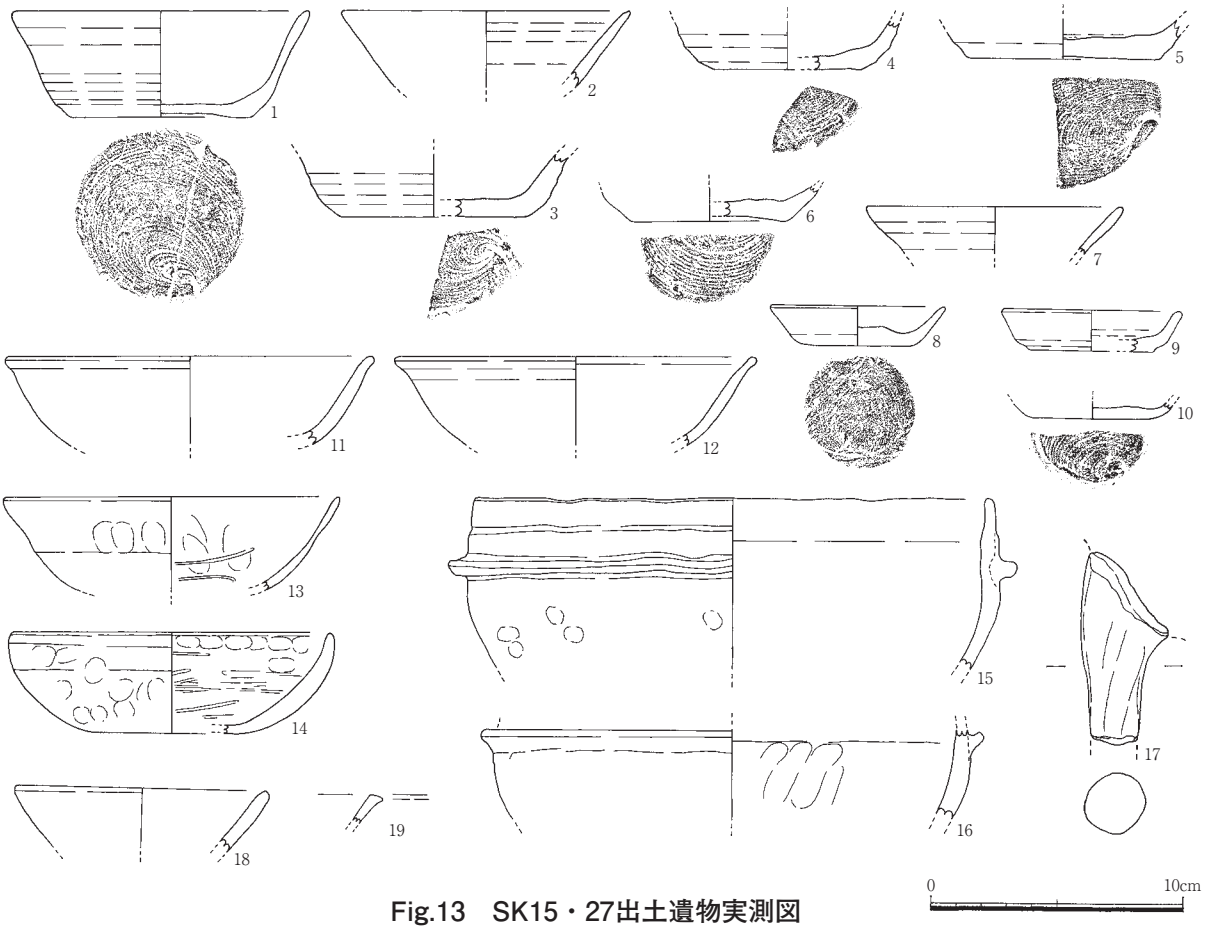


Fig.13　SK15・27出土遺物実測図
（SK15：18・19、SK27：1～17）

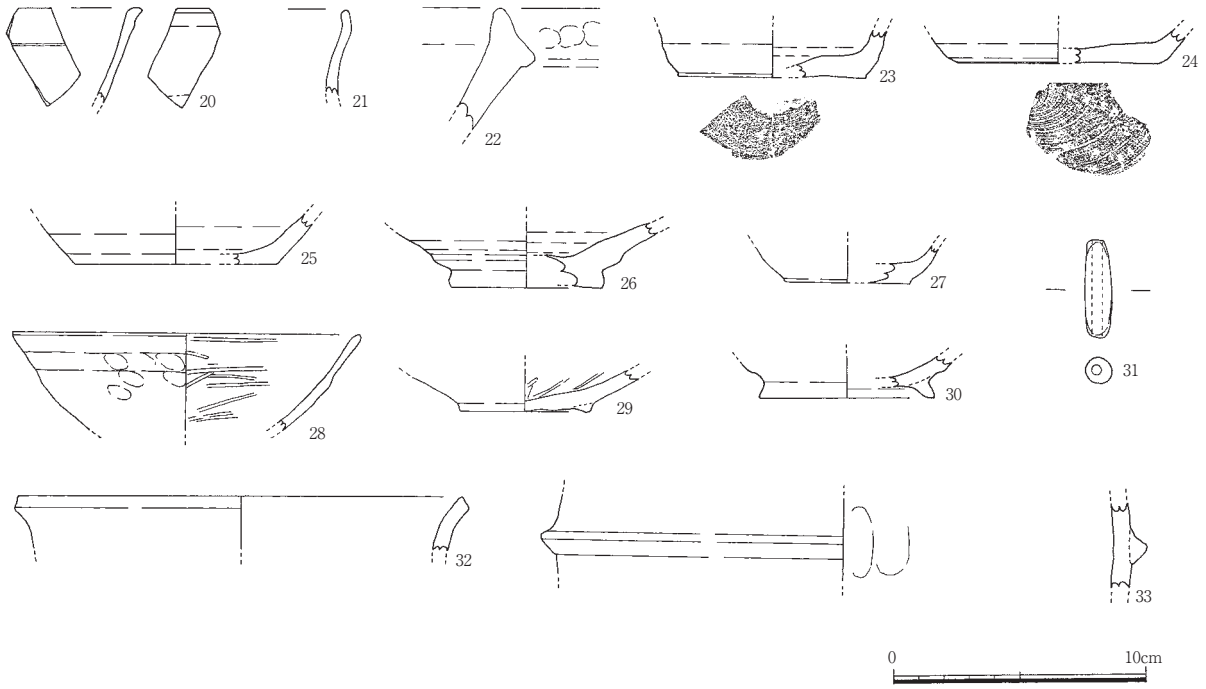


Fig.14　SK29出土遺物実測図

SK29（Fig.12・14）

Ⅰ区C2グリッド、Ⅴ-1層で検出した。形態は楕円形で、長径2.01m、短径1.29m、深さ64cmを測る。埋土は、上部がにぶい黄褐色シルト、下部は灰黄褐色粘土が主体で砂を含む。P87・88を切り、P76・116に切られる。

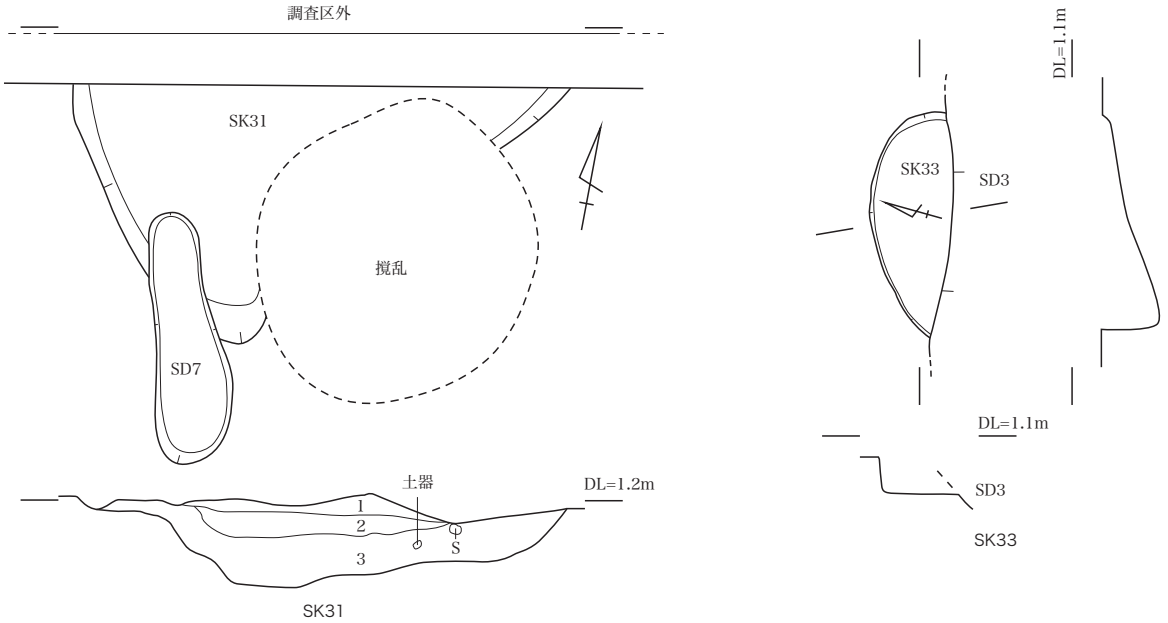
出土遺物は、土師質土器杯の底部３点、杯又は皿の口縁部10点と底部10点、椀の底部１点、瓦器椀の口縁部１点と底部１点、陶器碗の口縁部１点、擂鉢の口縁部１点、瓦質土器鍋の口縁部２点、土錘１点、及び土師質土器細片、瓦器椀の体部、瓦質土器鍋の体部である。

図示したものは20 ～ 33である。20は中国産の白磁碗で、12世紀。内面にヘラ描きによる沈線を巡らせ、灰黄色を帯びる透明の釉を施す。21は瀬戸の鉄釉碗の体部か。褐色を帯びる半透明の釉を施す。22は備前の擂鉢又は捏鉢。焼締めで、内外面に自然釉が掛かる。23・24・26は土師質土器杯、25・27は杯又は皿である。30は椀で、輪高台を貼付する。28・29は瓦器椀。29は内底に平行状の暗文を施し、外面下半の炭素吸着は認められない。28は内面に円圏状の暗文を施し、外面への炭素吸着は認められない。32・33は瓦質土器鍋。33は鍋の体部で、断面三角形の鍔を貼付し上下に回転ナデを施す。31は土錘である。

SK29からは12世紀～ 15世紀前半の遺物が出土している。

SK31（Fig.15）

Ⅰ区B2グリッド、Ⅳ-1層で検出した。北部が調査区外に広がるため、全体の規模、形態は不明である。東西長2.74m、南北確認長1.70m、深さ60cmを測る。埋土は灰黄褐色砂混じりシルトである。遺構の切り合い関係ではSD7に切られる。



1層： 10YR5/2灰黄褐色砂混じりシルト
2層： 10YR4/2灰黄褐色砂混じりシルト
3層： 10YR4/2灰黄褐色砂混じりシルト（1～2cm大の円礫を少量含む。4～8cm大の円礫を少量含む。）

Fig.15　SK31・33 平面図・セクション図・エレベーション図

出土遺物は、土師質土器小皿の口縁部１点と底部１点、及び杯又は皿の体部、瓦片である。

SK33（Fig.15）

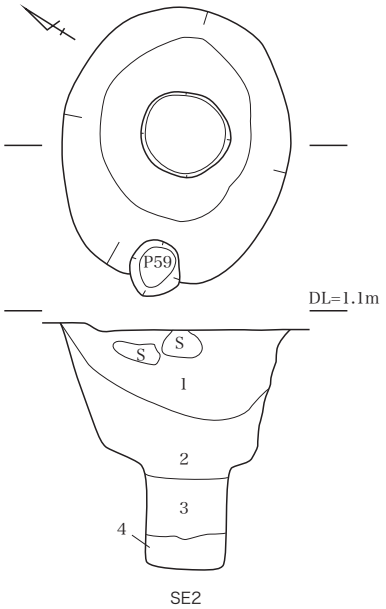
Ⅰ区C ～ D2グリッド、Ⅴ-1層で検出した。南部をSD3に切られるため、全体の規模、形態は不明である。東西残存長1.16m、南北残存長0.42m、深さ31cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトである。

出土遺物は土師質土器小皿の底部１点と細片である。

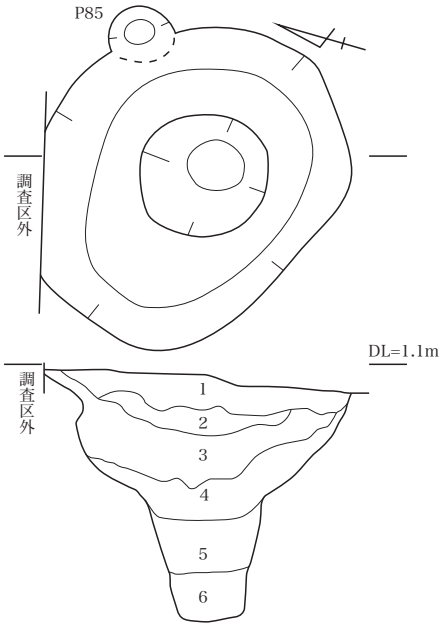
(2) 井戸

SE2（Fig.16・17）

Ⅰ区E2グリッド、Ⅴ-1層で検出した。掘方上部の平面形態は楕円形であり、長径1.45m、短径1.22m、検出面から井戸底までの深さ132cmを測る。検出時には土坑として調査を進めていたが、底で、下部の砂礫層を掘り込む円形のプランと僅かに残存する木質の井筒の痕跡を確認したため、井戸と判断し調査を継続した。掘方は、断面逆台形状で、井筒部分が径52cm、深さ50cmである。埋土は上部の堀方では、灰黄褐色～黒褐色を呈する砂混じり～砂質シルト、井筒内が黒褐色砂混じりシルト質粘土、最下層は暗褐色シルト混じり粗砂である。埋土最下層の粗砂は湿り気がある。井戸底は砂



1層：10YR4/2 灰黄褐色砂混じりシルト（0.2～0.4 ㎝大の角礫、1～2 ㎝大の円礫を少量含む。20～25 ㎝の石灰岩を少量含む。にぶい黄褐色シルトブロックを含む。橙色土粒・炭化物を少量含む。）
2層：10YR3/2 黒褐色砂質シルト（0.2～0.4 ㎝大の角礫を多く含む。1～3 ㎝大の円礫を少量含む。橙色土粒・炭化物を少量含む。）
3層：10YR3/2 黒褐色砂混じりシルト質粘土（粗砂を多く含む。1～2 ㎝大の円礫を少量含む。）
4層：10YR3/3 暗褐色シルト混じり粗砂（1～2 ㎝大の円礫を多く含む。）



1層：10YR4/2灰黄褐色砂質シルト（0.2～1.5㎝大の角礫・円礫を多く含む。3～4㎝大の円礫を少量含む。にぶい黄褐色シルトブロックを含む。赤褐色～橙色土粒・炭化物を少量含む。）
2層：10YR4/3にぶい黄褐色砂混じりシルト（0.2～1.5㎝大の角礫・円礫を少量含む。3～4㎝大の円礫を少量含む。灰黄褐色シルトブロックを少量含む。赤褐色～橙色土粒・炭化物を少量含む。）
3層：10YR4/2灰黄褐色砂質シルト（0.2～1.5㎝大の角礫・円礫を多く含む。3～4㎝大の円礫を少量含む。にぶい黄褐色シルトブロックを含む。赤褐色～橙色土粒・炭化物を少量含む。）
4層：10YR4/2灰黄褐色シルト混じり細砂～粗砂（0.2～1.5㎝大の角礫・円礫を多く含む。灰色シルトブロックを少量含む。炭化物を少量含む。）
5層：10YR3/2黒褐色粘土
6層：10YR暗褐色シルト混じり粗砂

Fig.16　SE2・3 平面図・セクション図

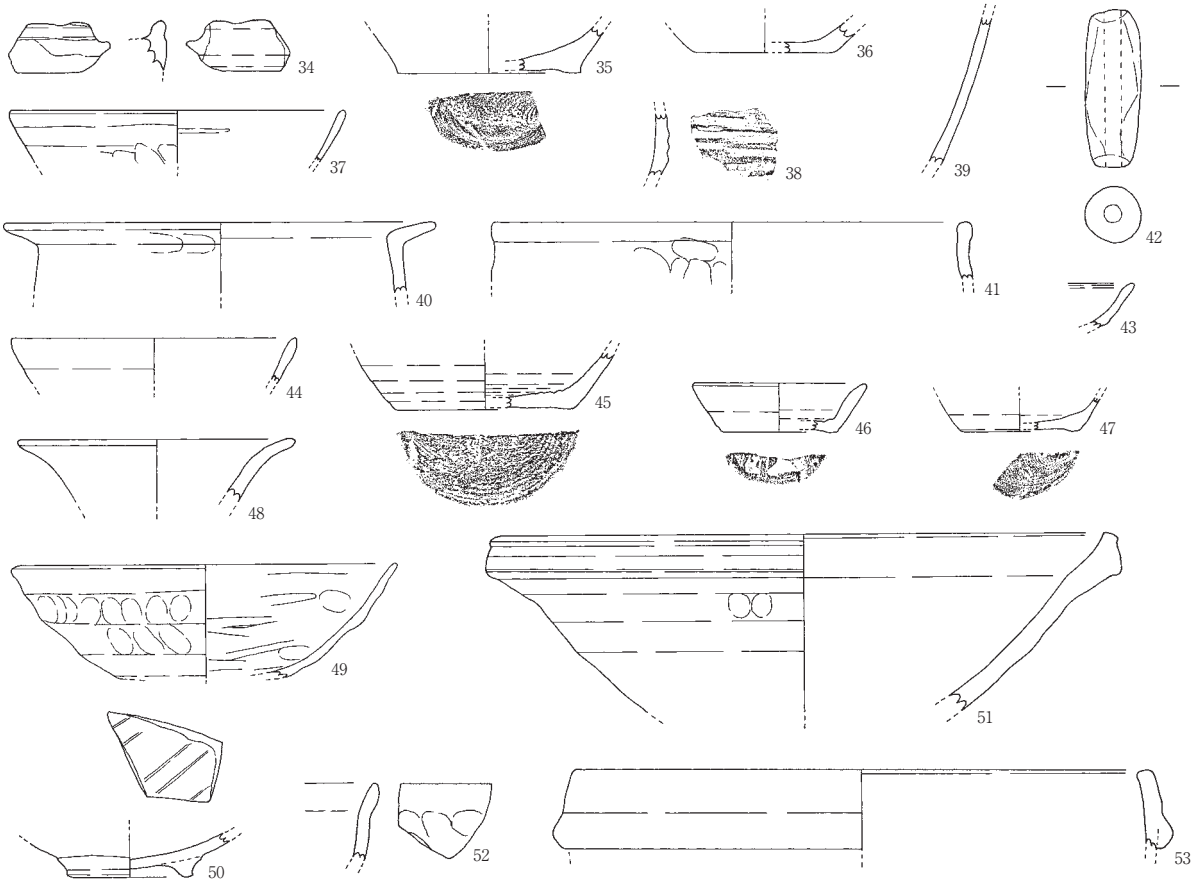


Fig.17　SE2・3出土遺物実測図
（SE2：34～42、SE3：43～53）

礫層直下の砂層で確認し、標高－0.35mであった。調査時には湧水はみられなかった。

出土遺物は、土師質土器杯又は皿の口縁部５点と底部８点、陶器擂鉢の口縁部１点、瓦器椀の口縁部２点、瓦質土器鍋の口縁部１点、土錘１点、及び、土師質土器細片、瓦器椀の体部、白磁碗の体部、青磁碗又は皿の体部、土師質土器鍋の体部、瓦質土器鍋の体部である。

図示したものは34 ～ 42である。34は備前焼の擂鉢である。35は土師質土器杯又は皿、36は小皿である。37は和泉型の瓦器椀で、内外面に炭素吸着を認める。38は土師質土器鍋で、外面に平行状のタタキ目を施す。39は鍋か。内外面ナデで、外底に焦げを認める。40は土師質土器で、器種不明。41は瓦質土器の鍋。42は土錘である。

SE2からは12 ～ 15世紀の遺物が出土している。

SE3（Fig.16・17）

Ⅰ区F1 ～ 2グリッド、Ⅴ-1層で検出した。北部が調査区外に広がるため最大径は不明であるが、楕円形を呈すると思われる。検出規模は、東西径1.78m、南北確認径1.45m、検出面から井戸底までの深さ132㎝を測る。SE2と同じく検出時には土坑として調査を進めていたが、底で丸く、木質の井筒痕跡を確認したため、井戸と判断し、井筒部分の調査を進めた。堀方断面は漏斗状を呈し、下部がすぼまる。埋土は、上部の堀方では灰黄褐色～にぶい黄褐色を呈する砂混じり～砂質シル

トで下部に粗砂が堆積する。井筒内は上層が黒褐色粘土、下層は暗褐色シルト混じり粗砂であり、SE2と埋土の特徴が類似している。SE2と同じく埋土最下層の粗砂は湿り気がある。井戸底は砂礫層直下の砂層で確認し、標高-0.31mであった。調査時には湧水はみられなかった。

出土遺物は、土師質土器杯の口縁部１点と底部１点、小皿の口縁部８点と底部３点、杯又は皿の口縁部９点と底部８点、瓦器椀の口縁部１点と底部１点、須恵器鉢の口縁部１点と皿又は鉢の口縁部１点、土師質土器鍋の口縁部１点、瓦質土器鍋の口縁部２点、及び土師質土器細片、瓦器細片、土師質土器鍋体部、瓦質土器鍋体部である。

図示したものは43 ～ 53である。43は陶器の皿。44・45は土師質土器杯又は皿、46・47は小皿である。48は器種不明で、内外面回転ナデ。49・50は和泉型の瓦器椀で、49は内面と外面上半に炭素吸着を認める。50は内底に直線方向の暗文を認める。51は東播系須恵器の鉢で、13世紀。52は土師質土器鍋、53は瓦質土器の鍋である。

SE3からは13世紀末～ 15世紀前半の遺物が出土している。

(3) 溝・溝状遺構

SD4（Fig.18）

Ⅰ区F2グリッド、Ⅴ-1層で検出したⅣ-2層段階の東西方向の溝である。軸方向はN-77°-Eである。残存長3.39m、幅1.15m、深さ70cmを測る。埋土は上層が灰黄褐色シルトに黄灰色シルトブロックを含み、下層が灰黄褐色粗砂に、黄灰色・灰黄褐色シルトブロックを含む。下層の堆積は、水成堆積とみられる。切り合い関係ではSD3、P82・86に切られる。出土遺物は確認できていない。

SD7（Fig.18）

Ⅰ区B2 ～ 3グリッド、Ⅳ-1層で検出した南北方向の溝状遺構である。軸方向は、N-16°-Wである。

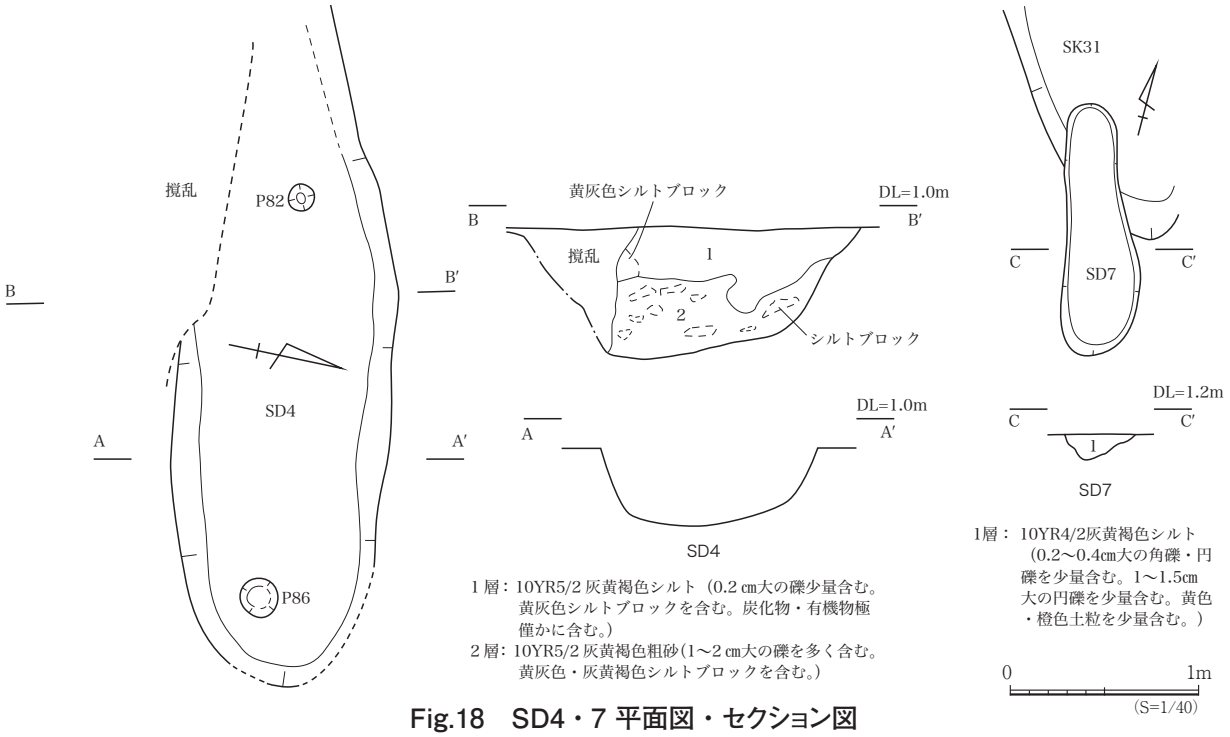


Fig.18　SD4・7 平面図・セクション図

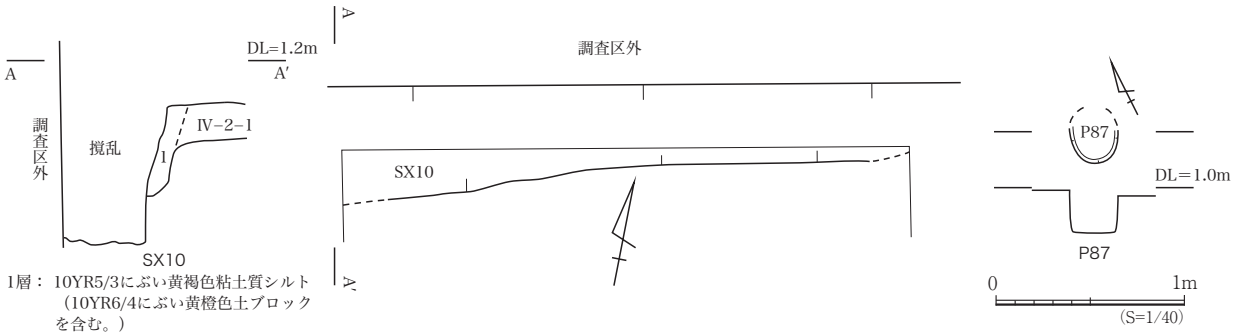


Fig.19　SX10・P87 平面図・セクション図・エレベーション図

検出長1.34m、幅0.4mで、深さ13cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色シルトである。SK31を切る。

出土遺物は土師質土器杯又は皿の底部１点と細片である。

(4) ピット

調査区内からは中世及び中世と考えられるピットを35基検出した。検出位置から建物を復元できるピットは確認できていない。このうち、遺構の切り合いから確実に中世と言えるピットは３基（P87・88・105）である。また、柱痕跡の確認されたピットは１基（P87）であり、以下に示した。これらのピットの多くはⅣ-3層段階の可能性が高いものとして抽出したものである。切り合い関係ではSK29に切られるピットと、SE2を切るピットが存在する。また、検出層位や埋土の特徴、出土遺物などから近世初頭まで下る可能性のあるものについては、後掲の2.近世（5）に示した。

P87（Fig.19）

Ⅰ区C2グリッド、Ⅴ-1層で検出した。径21㎝、深さ21㎝、柱痕径６cmを測る。埋土は掘方が灰黄褐色シルト、柱痕が黒褐色シルトである。SK29に切られる。出土遺物は土師質土器杯又は皿の体部４点である。

(5) 性格不明遺構

SX10（Fig.19・20）

TP4、Ⅴ層上面で検出した。検出規模は南北残存長0.26m、東西残存長2.98m、深さ28cmを測る。調査区外に広がるため、全体の規模及び形態は不明であるが、東西に直線的に延びることから東西方向の溝とも考えられる。埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトに、にぶい明黄褐色土ブロックを含む。Ⅳ-2層と遺構埋土は似ており、遺構の境界は不明瞭であったため、下位での検出となった。

出土遺物は土師質土器杯又は皿の体部、瓦器椀、土師質土器鍋、瓦質土器鍋、瓦質土器火鉢、である。図示したものは54 ～ 56である。56は和泉型の瓦器椀で、内外面の炭素吸着は剥離している。55は瓦質土器鍋で、14世紀～ 15世紀前半。54は瓦質土器の火鉢で、体部前方に窓をもつ。外面上位に２条の突帯を貼付し、その間に陰刻による雷文帯を巡らせている。

SX10からは14世紀～ 15世紀前半の遺物が出土している。

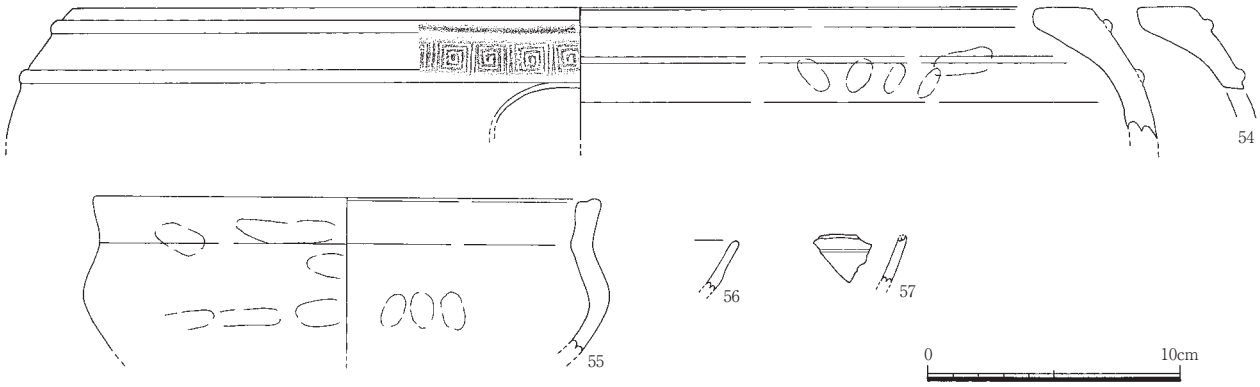


Fig.20　SX10・SR2出土遺物実測図
（SX10：54～56、SR2：57）

SR2（Fig.10・20）

TP9西壁トレンチで確認した。自然流路又は水路の一部とみられる。断面にて北肩部分を確認したもので、平面の検出には至っていない。ただし、SK9の下面でもSR2の埋土とみられる粘土質シルト堆積を全面で確認し、P29の下面ではSR2の肩部の続きを確認しており、さらに東に続くものとみられる。埋土は上層肩部に粗砂、下層に粘土質シルトが堆積する。南部のTP4で検出したSX10は同一遺構の対岸部分である可能性が考えられる。また、Ⅲ区西壁トレンチでも南部に落ち込む粗砂と粘土の堆積を確認し、SR1とした。肩部の検出位置も近く、SR2と同一、又は接続する可能性も考えられる。

図示したものは57である。57は中国龍泉窯系の青磁碗で、内面上位に沈線をもち、灰オリーブ色の半透明の釉を施す。

(6) 包含層出土遺物・その他の遺物

Ⅳ層出土遺物（Fig.21・22）

中世の遺物包含層にあたるⅣ層から、古代・中世の遺物が出土している。

図示したものはⅣ層出土の青磁碗（63・64・66～68）、青磁皿（65）、陶器碗（69・70）、陶器小皿（71）、須恵器又は陶器の壺又は甕（72）、瓦器椀（74）、瓦器椀又は皿（73）、土師質土器杯（75～77・79～86・89）、杯又は皿（78・87・88）、小皿（91～94）、皿（99）、土師質土器鍋（100）、瓦質土器鍋（101～103）、土錘（105・106）、古代の土師器甕（107・108）、器種不明（90）、及び、Ⅳ層の遺物集中から出土した土師質土器杯（95・96）、杯又は皿（97・98）、瓦質土器鍋（104）である。

Ⅴ層出土遺物（Fig.22）

Ⅴ層からは、古代及び古代又は中世の遺物が出土している。

図示したものはⅤ層出土の土師質土器杯（109・111）、小皿（112）、皿（110）、杯又は皿（113）、須恵器又は陶器の甕（114）である。この他Ⅳ～Ⅴ層から須恵器鉢（115）が出土している。

Ⅲ・Ⅲ′層出土遺物（Fig.21）

近世の整地層にあたるⅢ・Ⅲ′層からも中世の遺物が出土している。

図示したものはⅢ層出土の青磁碗（59）、青磁皿（60）、陶器擂鉢（62）、Ⅲ′層出土の青花皿（58）、白磁皿（61）である。

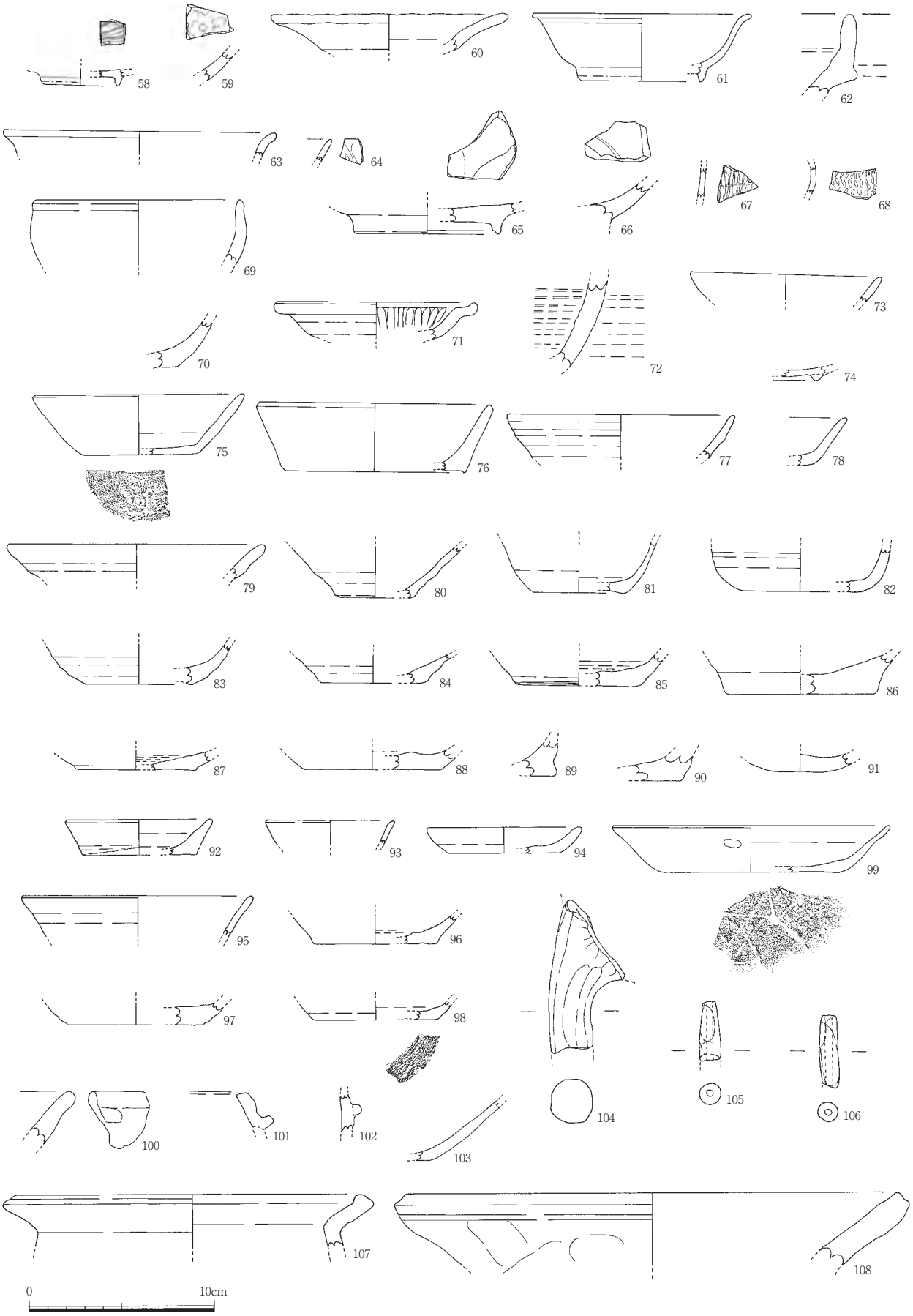


Fig.21　Ⅲ・Ⅲ′・Ⅳ層出土遺物実測図

（Ⅲ層：59・60・62、Ⅲ′層：58・61、Ⅲ～Ⅳ層：89、Ⅳ層：63～88・90～94・99～103・105～108
Ⅳ層遺物集中：95 ～ 98・104）

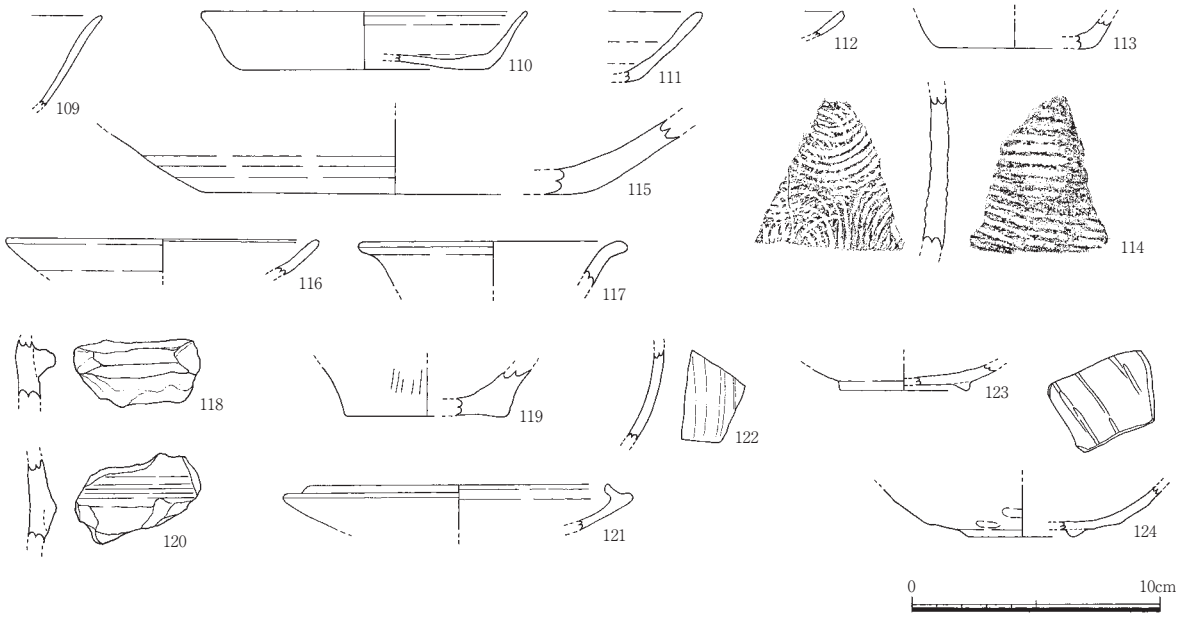


Fig.22　Ⅴ・Ⅳ～Ⅴ層・SK14・16・21・37・P94・118・Ⅲ層遺物集中１出土遺物実測図
（Ⅴ層：109～114、Ⅳ～Ⅴ層：115、SK14：117～119、SK16：120、SK21：121、
SK37：122、P94：124、P118：123、Ⅲ層遺物集中１：116）

近世～近代遺構出土の遺物（Fig.22）

近世・近代の遺構内や遺物集中、中世末～近世初頭の遺構内からも古代・中世の遺物が出土している。図示したものはⅢ層遺物集中1出土の瓦器椀（116）、中世又は近世のSK14出土の青磁皿（117）・土師質土器底部（119）、瓦質土器釜（118）、SK16出土の瓦質土器鍋（120）、SK37出土の青磁碗（122）、P118出土の土師質土器椀（123）、P94出土の瓦器椀（124）、近代のSK21出土の須恵器杯（121）である。

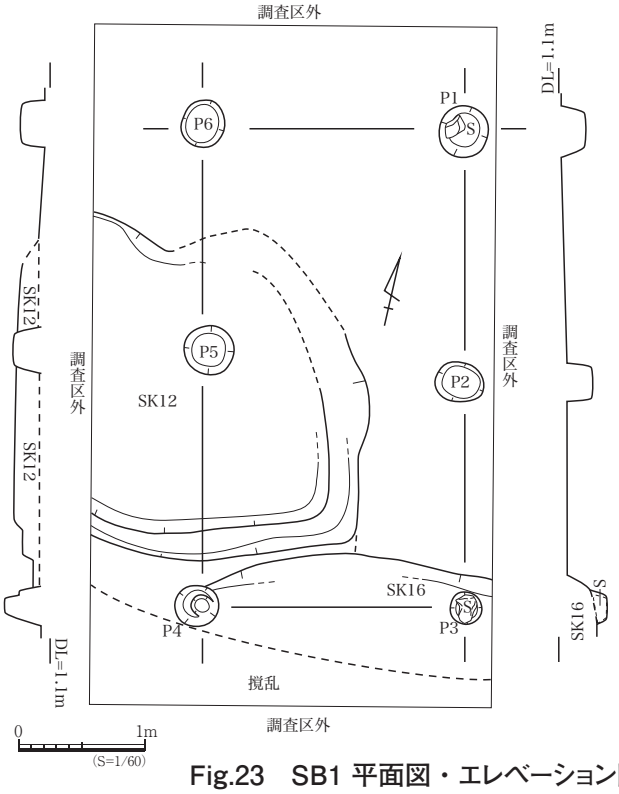
２．近世の遺構と遺物

調査区内からは、近世とみられる掘立柱建物２棟、ピット列１条、土坑15基、井戸１基、溝４条、ピット59基、性格不明遺構２基を検出した。このうち、土坑１基（SK14）は出土層位、埋土の特徴及び出土遺物から、中世に該当する可能性がある。調査地中央部～西部を中心に各時期の遺構を確認した。

(1) 掘立柱建物跡・ピット列

SB1（Fig.23・24）

TP7において近世の遺構埋土中やⅣ-1層で検出した南北棟の建物である。軸方向はN-13°-Wであり、梁間１間（2.08m）、桁行２間（3.84m）、桁行の各柱間が1.78 ～ 2.06mを測る。各ピットの検出規模は、径22 ～ 41㎝、深さ８～ 29㎝を測る。このうち、P1では床面で長辺20cm大の石を検出し、P2の埋土中からは10cm大の円礫が３個出土した。P3では床面で長辺20cmの礎石状の石を検出した。また、P4では径17㎝の柱痕とみられる落ち込みを確認した。埋土は、P1・2・6は灰黄褐色シルト、P3は灰黄褐色粘土質シルト、P4はにぶい黄褐色シルトに灰黄褐色シルトブロックを含む。P5は灰黄褐色シルトに橙色土粒を含む。切り合い関係では、P4はSK16を切り、P5はSK12を切る。P3はSK16の床面で検出したが、切り合いは不明である。



遺構名	軸方向	ピット番号	径(cm)	深さ(cm)	柱痕・特徴
SB1	N-13°-W	P1	41	20	なし
		P2	35	20	なし
		P3	22	8	なし
		P4	35	29	柱痕(径17cm)
		P5	38	21	なし
		P6	34	20	なし
SB2	N-12°-W	P1	43	20	柱痕(径16cm)
		P2	40	23	柱痕(径13cm)
		P3	40	35	柱痕(径16cm)
		P4	30	14	柱痕(径15cm)
		P5	40	50	柱痕(径19cm)
SA1	N-81°-E	P1	40×42	15	柱痕(径18cm)
		P2	30	28	柱痕(径15cm)
		P3	33×35	12	柱痕(径18cm)
		P4	33×36	40	柱痕(径15cm)
		P5	44	15	なし

Fig.23　SB1 平面図・エレベーション図・SB1・2・SA1 ピット計測表

遺物は、P1から中国景徳鎮窯系青花皿の口縁部１点、P2から中国龍泉窯系青磁碗の体部１点、瓦質土器鍋の口縁部１点、土師質土器小皿の口縁部１点と体部、土師質土器鍋又は甕の体部、P4から染付碗の底部１点と瓦片２点、同柱痕から土師質土器細片と木片、P5から京都系の灰釉碗の体部、土師質土器小皿の底部１点、瓦片３点、P6から土師質土器小皿の底部１点と体部が出土している。

図示したものはP2出土の瓦質土器鍋（126）で、13世紀末～ 14世紀の製品である。

SB1は17世紀後半～ 18世紀に比定される。

SB2（Fig.24）

TP7からTP8にかけて近世の遺構埋土中やⅣ-1層で検出した南北棟とみられる建物である。軸方向はN-12°-Wである。南へ続くとみられるが、現代基礎撹乱や近代の大型廃棄土坑エリアにあたり、南側部分は検出できなかった。梁間２間（4.00m）、桁行１間（2.08m）を検出し、梁間の柱間は1.94mと2.06mを測る。柱穴の検出規模は、径30 ～ 43cm、深さ14 ～ 50cmを測る。全てのピットで柱痕跡が確認でき、柱痕径は13 ～ 19cmを測る。柱穴埋土は、P1は、掘方がにぶい黄褐色シルト、柱痕が灰褐色土である。P2は、掘方が暗灰黄色シルトに褐灰色～にぶい黄褐色シルトのブロックを含む。柱痕が灰黄褐色土である。P3は、掘方が灰黄褐色シルトに明赤褐色土ブロックを多く含む。柱痕は暗灰黄色シルトに上部が灰黄褐色～黒褐色を呈する。P4は、灰黄褐色粘土質シルトである。P5は暗褐色シルトに赤褐色ブロックを多く含む。P4の上面では、埋土が橙色～黄色シルトブロックを多く含む灰黄褐色砂質シルトであるP119を検出しており、埋土の特徴が異なっていたため、別遺構として調査を行ったが、検出位置から、P4の上層部分であった可能性が高い。切り合い関係

ではP1がSK11を切り、P2がSK12を切る。P4はP119と同一遺構であるとすれば、SK16を切る。P5はSK17を切る。

遺物は、P1から土師質土器小皿の口縁部１点と体部、瓦片３点、同柱痕から土師質土器杯又は皿の体部１点、P2から土師質土器細片と同柱痕から木片、P3の柱痕から土師質土器杯又は皿の体部１点と柱根とみられる木片、P4から土師質土器杯又は皿の体部１点、瓦片４点と炭、P5の柱痕から土師質土器細片２点と柱根とみられる木片が出土している。

図示したものはP2出土の土師質土器杯又は小皿（125）である。

SB2は18世紀後半～ 19世紀に比定される。

SA1（Fig.25）

TP9、Ⅳ-1層で検出した東西方向に軸をもつ柱穴列である。各柱間が0.47 ～ 0.79mを測り、軸方向はN-81°-Eである。各ピットの検出規模は、径30 ～ 44cm、深さ12 ～ 40cmを測る。P1 ～ 4で

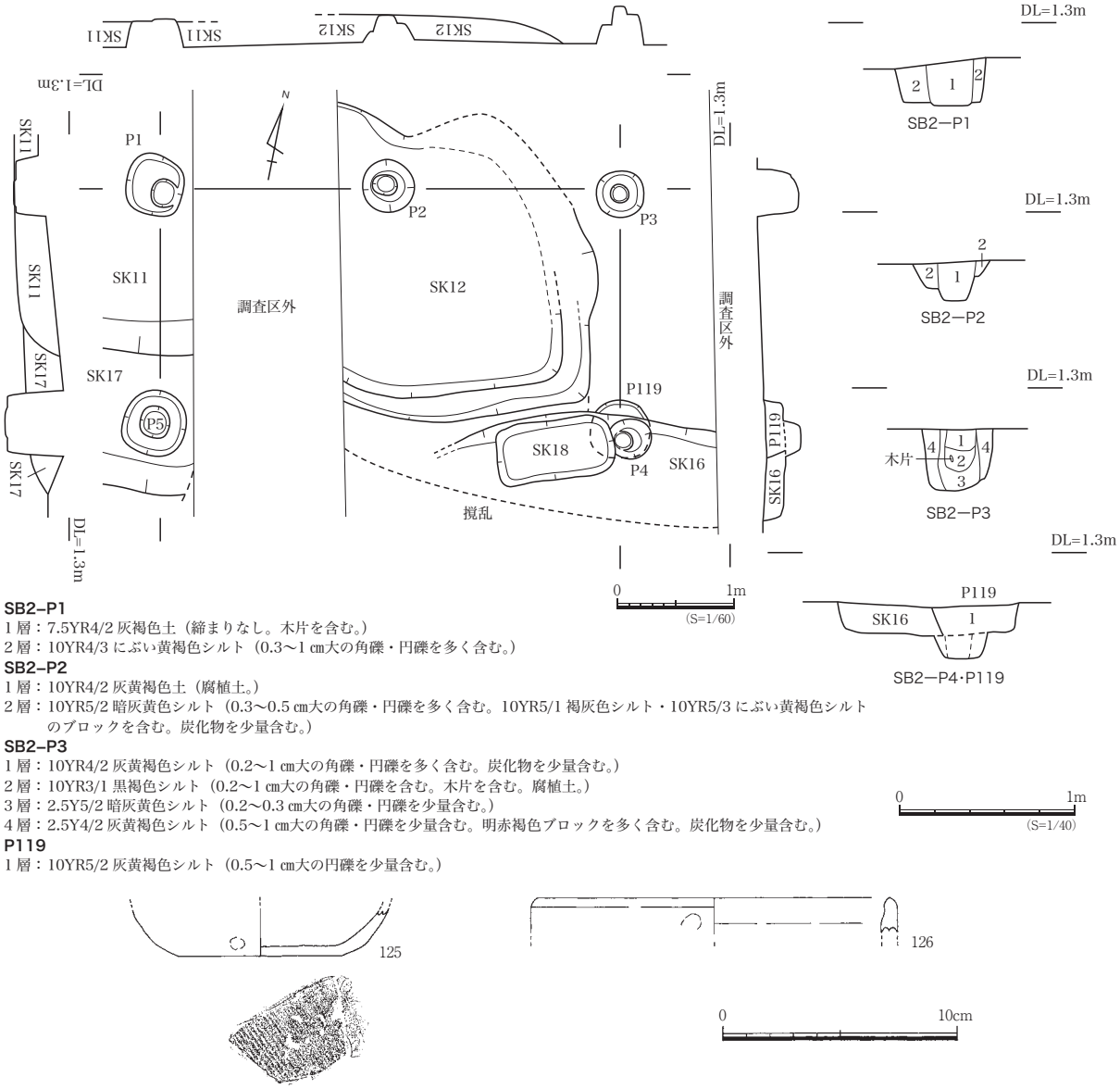


Fig.24　SB2 平面図・セクション図・エレベーション図・SB1・2 出土遺物実測図

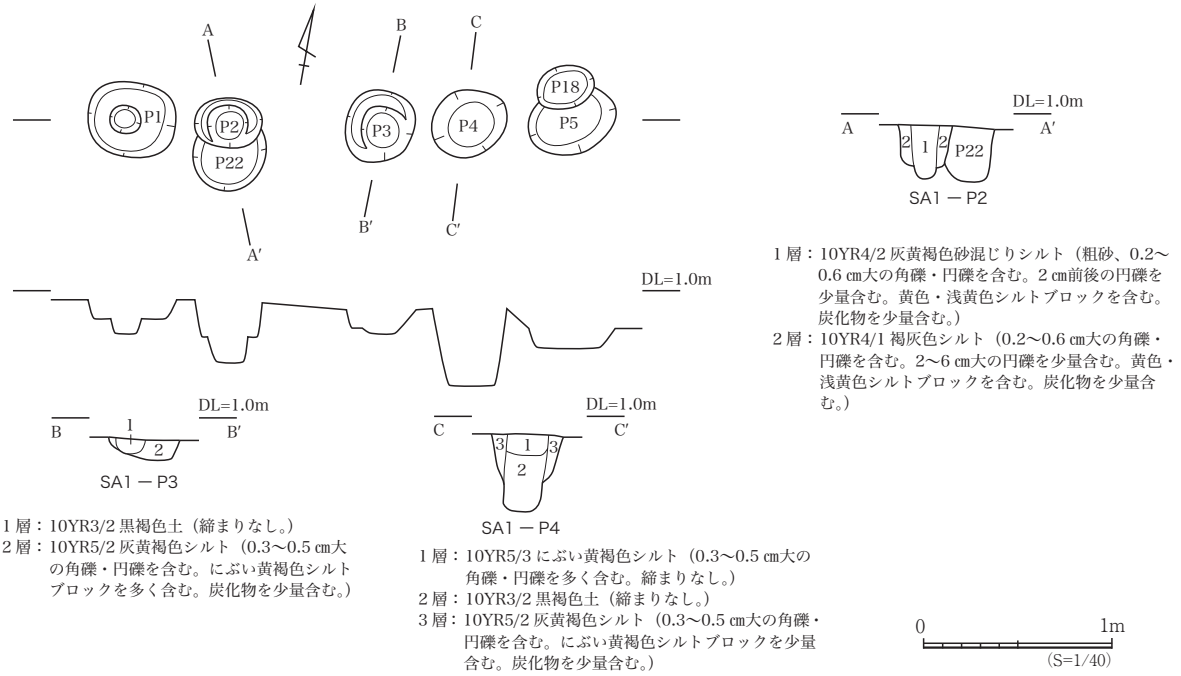


Fig.25　SA1 平面図・セクション図・エレベーション図

は柱痕跡が確認された。柱痕径は15 〜 18㎝である。柱痕埋土はP1が灰黄褐色粘土、P2が灰黄褐色砂混じりシルト、P3・4は黒褐色土である。掘方埋土はP1・3・4が灰黄褐色シルトににぶい黄褐色シルトブロックを含む。P2が褐灰色シルトに黄色・浅黄色シルトブロックを含む。また、P5の埋土は灰黄褐色シルトに明黄褐色シルトブロックを含む。切り合い関係では、P2はP22を切り、P5はP18に切られる。柵列あるいは、北側に延びる建物の一部と考えられる。建物であるとすれば、SB1やSB2の柱間距離を考慮すると、３時期の建物が重複しているとみられる。

遺物は、P1から瓦器椀の体部１点、土師質土器杯又は皿の体部１点、土師質土器鍋の体部１点、P2から土師質土器小皿の口縁部１点と体部細片、P3から土師質土器杯又は皿の体部１点、P4から瓦器椀の体部１点、須恵器の体部２点、P5から瓦片１点が出土している。P5出土の瓦は厚さ2.7㎝程の厚手の平瓦である。

Ⅲ′層との前後関係は不明であり、埋土の特徴からSB1又はSB2と同時期頃と推定される。

(2) 土坑

SK1（Fig.26・27）

TP4、Ⅱ′層上面で検出した。南北残存長0.78m、東西長0.79m、深さ16cmを測る。南側が調査区外に広がるため、規模、形態は不明である。埋土は灰黄褐色砂混じりシルトで、陶器、瓦片を多数含む。SK7とは出土遺物の接合関係があり、同時期に機能したことが推定される。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付又は白磁の瓶１点・水滴１点、磁器色絵段重１点、陶器擂鉢１点・土瓶１点・甕１点、軟質施釉陶器の中碗１点、土師質土器焜炉１点・竈１点、及び瓦片多数である。図示したものは127 〜 130である。127・128は陶器。128は擂鉢で、高台を貼付す

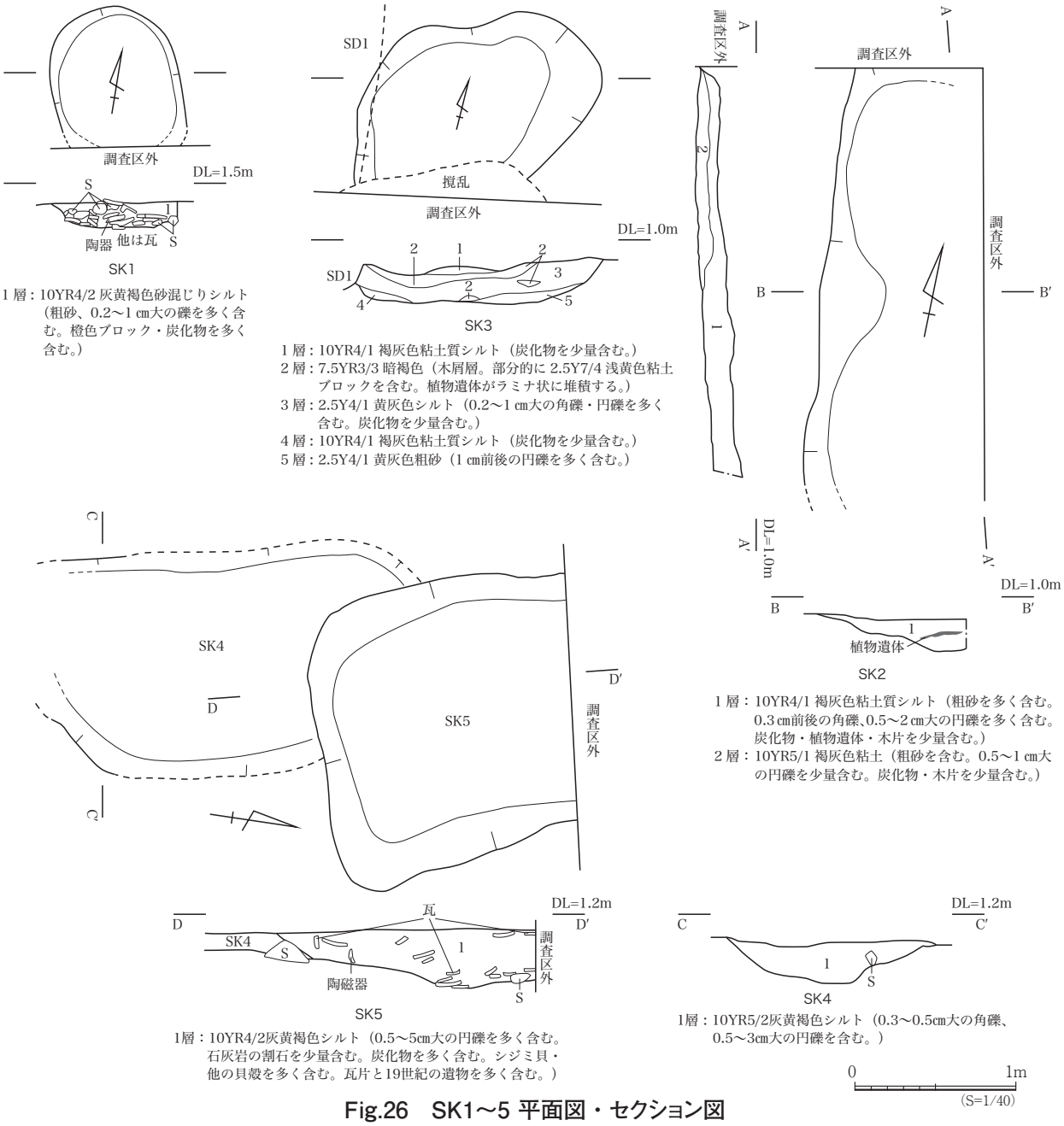


Fig.26　SK1～5 平面図・セクション図

る。127は能茶山窯産の鉄釉甕である。129・130は瓦。130は軒桟瓦の丸瓦部で連珠三巴文。129は軒桟瓦又は軒平瓦で、中心飾りは花文である。このうち129は平瓦部の上面に「アキ」銘印をもち、安芸（高知県安芸市）の製品である。

SK1は19世紀中葉に比定される。

SK2（Fig.26・28）

TP2・3のSK6下面で検出した。TP3においては、SK6の埋土最下層として掘削した後、断面観察において、埋土の特徴から判断したものであり、平面形の検出や、遺物の収拾はできていない。上面をSK6に切られ、北部と南部が調査区外に広がるため、規模、形態は不明である。南北残存長2.41m、東西長3.14m、検出面からの深さ22cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルト～粘土であり、木片や植

物遺体を含む。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付小皿１点、青花小碗１点、陶器中皿１点、土師質土器小皿３点・杯又は皿１点・焼塩壺１点、及び瓦片である。

図示したものは131 ～ 135である。131は中国景徳鎮窯系の青花小碗で、17世紀前葉～中葉。外面に草花文を描く。132は肥前産の二彩手の皿又は鉢で、内面に白化粧と緑釉の流し掛けを施す。133は土師質土器小皿、134は中皿である。135は焼塩壺である。

SK2は17 ～ 18世紀に比定される。

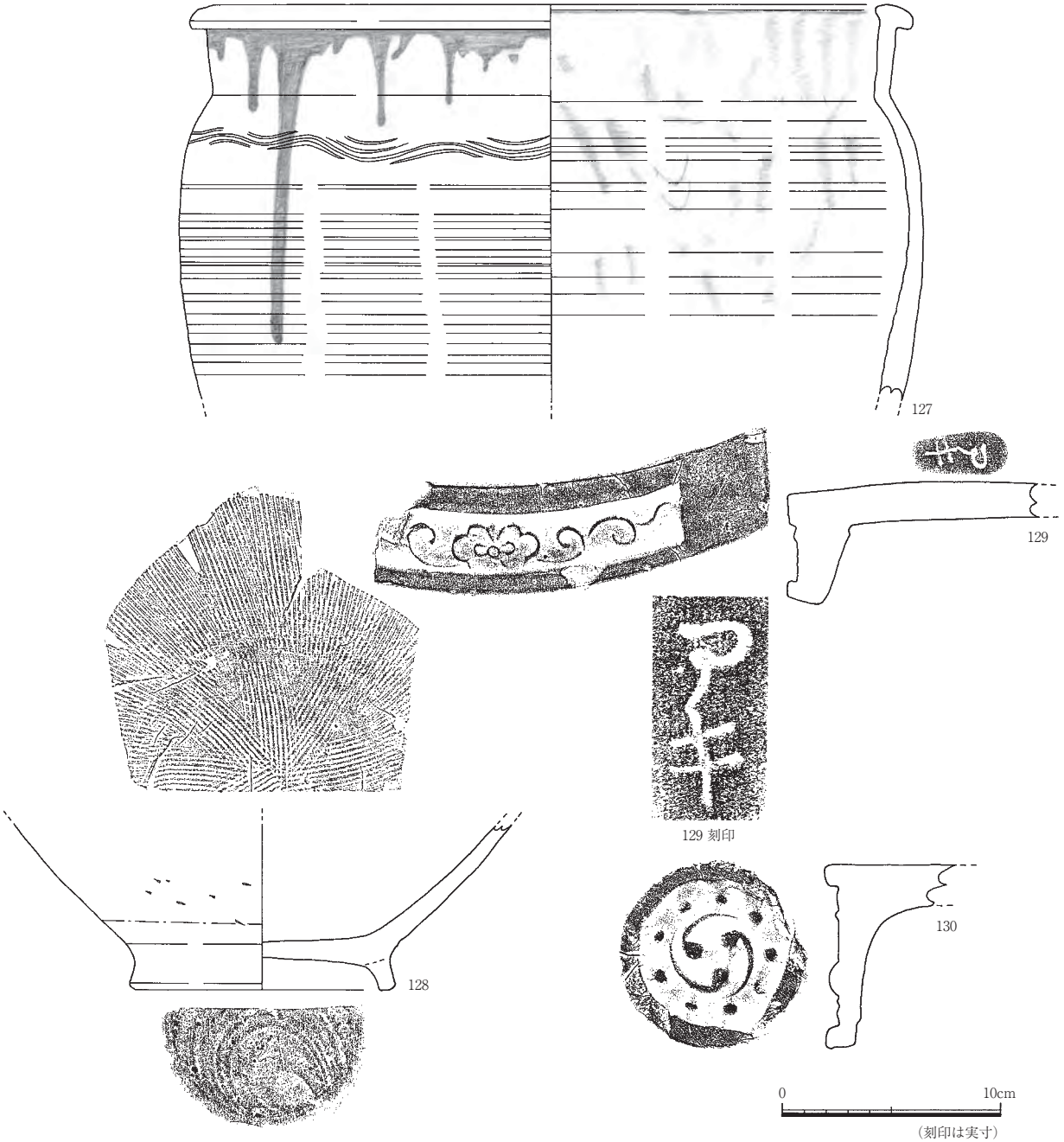


Fig.27　SK1出土遺物実測図

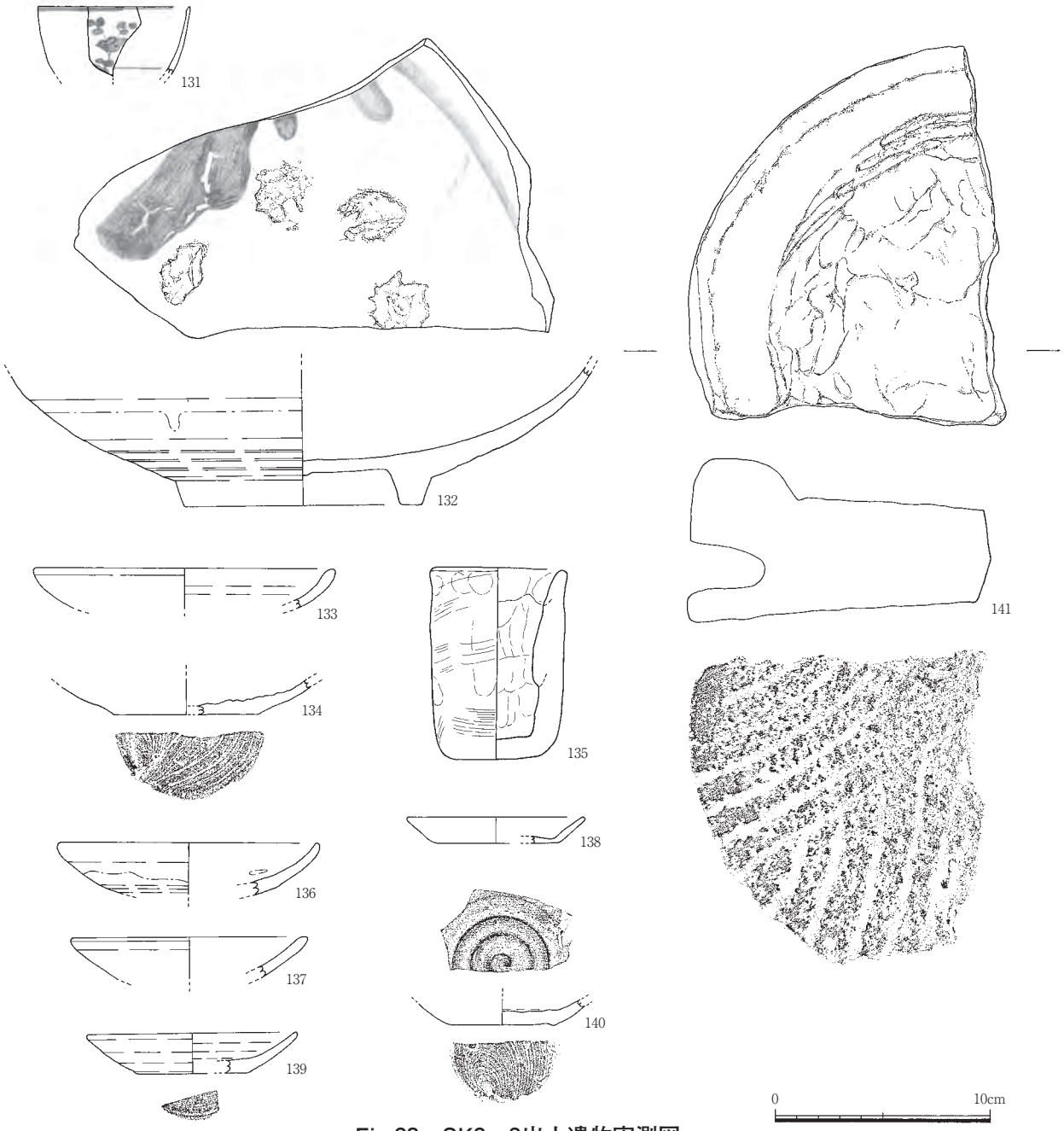


Fig.28　SK2・3出土遺物実測図
（SK2：131～135、SK3：136～141）

SK3（Fig.26・28）

TP5、Ⅳ-1層で検出した。西部をSD1に切られ、南部が調査区外に広がるため、規模、形態は不明である。南北残存長1.02m、東西長1.54m、深さ26cmを測る。埋土は、褐灰色～黄灰色を呈する粘土質シルト～シルトで、埋土中に植物遺体がラミナ状に堆積し、滞水状態で埋没したとみられる。最下層は黄灰色粗砂であり、下面のⅤ-3層との境界は不明瞭であった。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、陶器小皿２点・中皿１点、土師質土器小皿９点、及び石臼１点である。図示したものは136 ～ 141である。136は肥前産の唐津系灰釉陶器小皿で、にぶい黄橙色を帯びる半透明の釉を施す。137 ～ 140は土師質土器小皿で、138 ～ 140は外底に回転糸切り痕

を残す。141は石臼の上臼で、側面に方形の孔を穿つ。

SK3は17世紀に比定される。

SK4（Fig.26・29）

TP5、SX5下面で検出した。調査時は調査区中央部に土層観察のためのセクションを残し、南北を周囲の堆積とともに掘り下げたため、最下部の落ち込み状の平面形と断面観察から土坑として形態を復元した。北部はSK5に切られるが、南部については、さらに南側に広がっていた可能性もある。検出規模は、南北残存長2.30m、東西長1.32m、深さ25cmを測る。埋土は礫を含む灰黄褐色シルトである。切り合い関係ではSD1、P20・21・23・40を切る。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗２点・五寸皿１点、陶器中碗１点・小皿６点・中皿２点・鉢か１点・擂鉢１点、土師質土器小皿３点、瓦質土器火鉢１点、煙管吸口１点である。

図示したものは142 ～ 161である。142 ～ 145は染付で、何れも肥前産。142・143は初期伊万里の中碗で、143は外面に面取りを施し、寿字文を描く。144は丸形の小杯である。145は小皿で、外面に縦筋を入れ、内面は区画間に花文、円圏と菊花を描く。146は青磁皿。明オリーブ灰色を帯びる透明の釉を施し、見込みを蛇ノ目釉剥ぎする。内面に鉄絵を描く。147は中国景徳鎮窯系の青花皿で、16世紀末～ 17世紀初頭。内面に植物を描き、高台内に放射状の鉋痕が残る。

148 ～ 154は陶器。151は肥前産の中碗で、外面に白土による蛍手の文様、内面に打刷毛目を施す。150は肥前内野山窯の銅緑釉小皿で、内底を蛇ノ目釉剥ぎする。152は唐津系陶器の小皿で、鉄釉を施し、内底に砂目が残る。148・149は唐津系灰釉陶器の小皿である。154は備前の焼締めの皿又は鉢、153は堺・明石系の擂鉢である。

155・156は土師質土器小皿で、156は外底に回転糸切り痕が残る。157は瓦質土器で、火鉢か。外面に2条の粘土帯を貼付してユビオサエで波状に変形させ、粘土帯間に波状文を巡らせている。

158 ～ 161は瓦。158は連珠三巴文軒丸瓦。159は軒桟瓦の丸瓦部で連珠三巴文。161は軒平瓦又は軒桟瓦で、中心飾りは丁字文である。160は桟瓦又は平瓦である。このうち161は「アカ」、160は「山南」とみられる銘印をもつ。

SK4は17世紀後半～ 18世紀前半に比定される。

SK5（Fig.26・30 ～ 33）

TP5、SX5下面で検出し、SX5の下層部分と考えられる。北部が調査区外に広がるため、規模、形態は不明である。上層部分は遺物集中の堆積SX5として取上げ、周囲をⅢ′層まで掘り下げた段階で平面形を検出した。調査区中央部の断面でSX5の埋土が東西長2.9mで確認されるため、本来はさらに調査区南部にも広がっていたものと思われる。検出規模は、南北残存長1.63m、東西長1.76m、深さ38cmを測る。埋土は円礫、炭化物を多く含み、石灰岩の割石を少量含む灰黄褐色シルトである。また、埋土に瓦片、貝類を多く含む。切り合い関係ではSK4、SD1、P20・38を切る。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗19点・小碗８点・小杯２点・中皿３点・小皿又は五寸皿10点・鉢１点・碗蓋３点・瓶５点・蓋物１点・蓋物蓋３点・仏飯器１点、青磁染付中碗３点・碗蓋１点、陶胎染付中碗４点、白磁小杯２点・小皿又は五寸皿１点・鉢１点・紅皿９点、鉄釉磁器蓋物蓋１点、青花皿又は鉢１点、陶器中碗27点・小碗８点・小杯４点・小皿４点・碗又は皿４

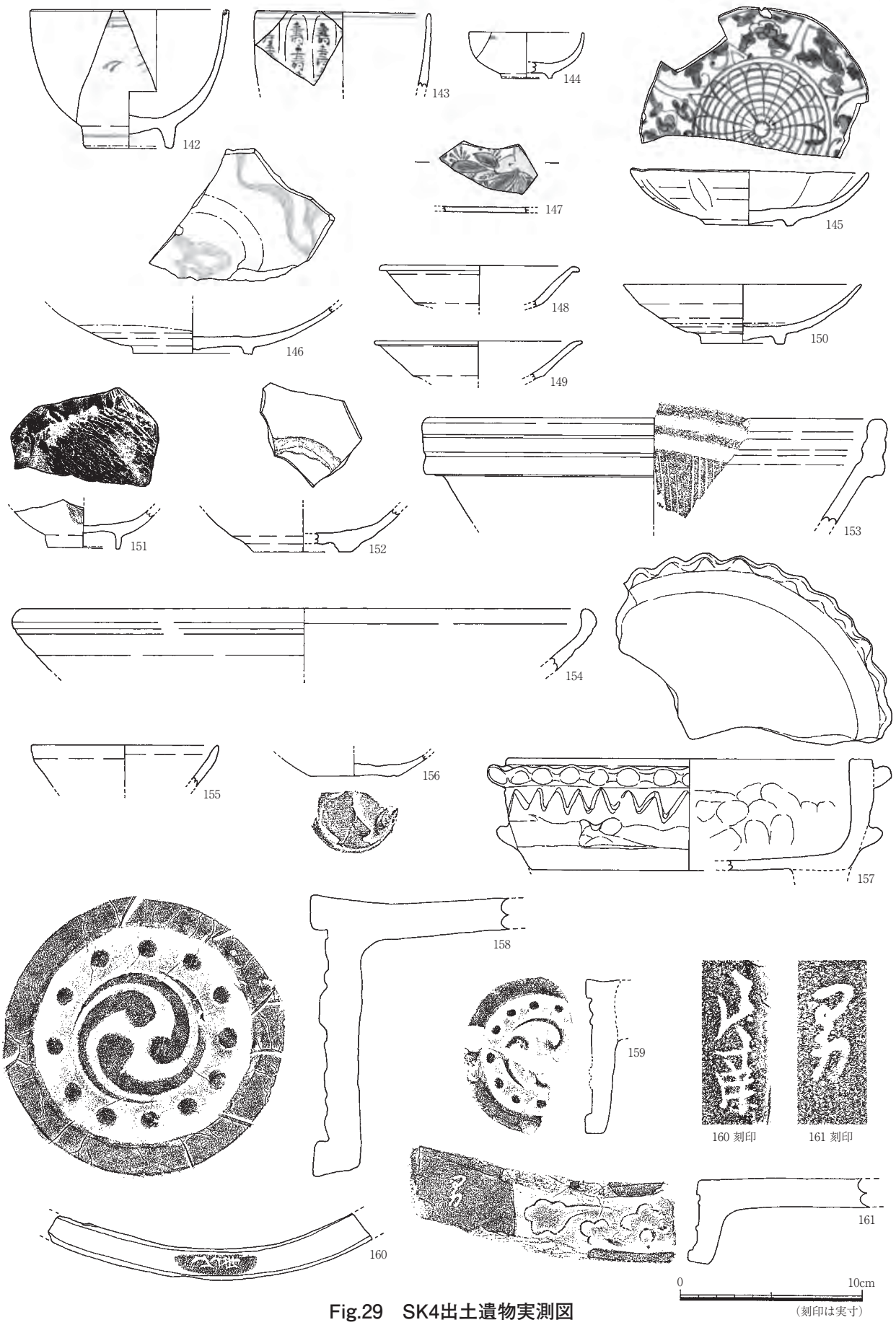


Fig.29　SK4出土遺物実測図

点・鉢１点・中碗蓋１点・擂鉢２点・捏鉢１点・鍋５点・鍋蓋２点・土瓶４点・急須１点・土瓶蓋２点・瓶４点・水注１点・甕３点・蓋物蓋２点・蓋１点・火鉢１点・灯明受皿７点・火入れ１点・不明１点、土師質土器中皿６点・小皿29点・白土器小皿１点・焜炉７点、瓦質土器火鉢１点、煙管１点、鉄釘17点、貝殻（アワビ・ハマグリ・シジミ・ハイガイ）、棒状のガラス製品、瓦片である。

図示したものは162 ～ 239である。162 ～ 165・168 ～ 194は磁器、166・167は陶胎染付で、166・167が瀬戸・美濃産、185が中国産、その他は肥前産又は肥前系である。162 ～ 165・168・171 ～ 184・187・190 ～ 192・194は染付。162 ～ 165・168は中碗である。162 ～ 165は広東形中碗で、162・164は草花文、163は竹文、165は岩・草・植物を描く。168は腰張形中碗で稲束を描く。171 ～ 174は小碗。171は半筒形で、172 ～ 174は丸形である。175・176は丸形小杯である。179・180は中皿。179は内面に型打成形による陽刻文を施し、山水文を描く。180は内面周縁に型打成形による陽刻文様を巡らし、山水文を描く。182は五寸皿で、蛇ノ目凹形高台をもつ。181・183・184は小皿。181・183は丸形小皿で、181は内面に竹文とコンニャク印判による五弁花文、高台内に圏線と渦「福」を描く。183は内面に墨弾きによる波文を描く。184は輪花形の小皿である。177・178は碗蓋。191・192は小瓶。190は蓋物、187は蓋物の蓋である。194は仏飯器である。169・170は青磁染付。169は丸形中碗で、外面に青磁釉を施し、内面に手描きによる五弁花文を描く。170は杉形中碗で、外面に青磁釉を施し、内面に四方襷と手描きによる五弁花文、高台内に角枠内渦「福」を描く。166・167は陶胎染付の広東形中碗である。186・193は白磁。186は端反形の鉢。193は菊花形の紅皿で、外面に型による菊弁を施す。188・189は鉄釉の磁器で、蓋物の蓋。天井部に型作りによる菊花形の白色の浮文を貼付し、外面に暗赤褐色の釉、内面と浮文に透明釉を施す。185は中国景徳鎮窯系の芙蓉手の青花皿で、16世紀末～ 17世紀初頭の製品である。

195 ～ 229は陶器。195 ～ 206は尾戸窯の灰釉中碗である。何れも高台無釉で197 ～ 199・203・205は高台内に渦状の鉋痕を残す。206は灰釉端反形中碗で、口縁部内外面にオリーブ黒色の釉を施す。207は信楽産の灰釉端反形小碗で、口縁部に緑釉を施す。208は灰釉小碗。209は京都系の灰釉丸形小杯である。210は灰釉丸形小皿で、見込みを蛇ノ目釉剥ぎする。内面に略化した鉄絵を描く。211は瀬戸の灰釉小皿で16世紀。口縁部は折縁状でオリーブ黄色を帯びる透明の釉を施す。212は備前の皿。213は尾戸窯の灰釉碗蓋で、ロクロ成形の後笠部を輪花形に変形させ、上部の数箇所をユビオサエして窪ませている。内外面に鉄絵を描く。214・215は備前の擂鉢。216は灰釉の鍋で、灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施す。217は急須又は土瓶で、受部は輪花形に変形させる。218は灰釉土瓶である。219は算盤玉形の灰釉土瓶で、体部上位に数条の凹線を巡らす。灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施している。220は備前の焼締めの小瓶。体部を窪ませ布袋の浮文を貼付する。221は鉄釉の水注で、黒褐色の釉を施す。褐灰色の胎土をもち在地産の可能性をもつ。222は水注か。把手を貼付し、暗赤褐色の釉を施す。223は備前の壺。焼締めで、外面に自然釉が掛かる。224は丹羽の甕で、外面ににぶい赤褐色、内面に暗灰黄色の釉を施す。225は京都・信楽系の灰釉蓋物蓋である。226は京都系の灯明受皿で、灰釉を施し、内面に菊花形の浮文を貼付する。227・228は備前の灯明受皿。焼締めで、受部の数箇所にアーチ状の抉りをもつ。229は半筒形の火入れで、外面と内面上半に白化粧土と灰釉、口縁部に緑釉を施す。外底に「錦光山」銘をもつ。

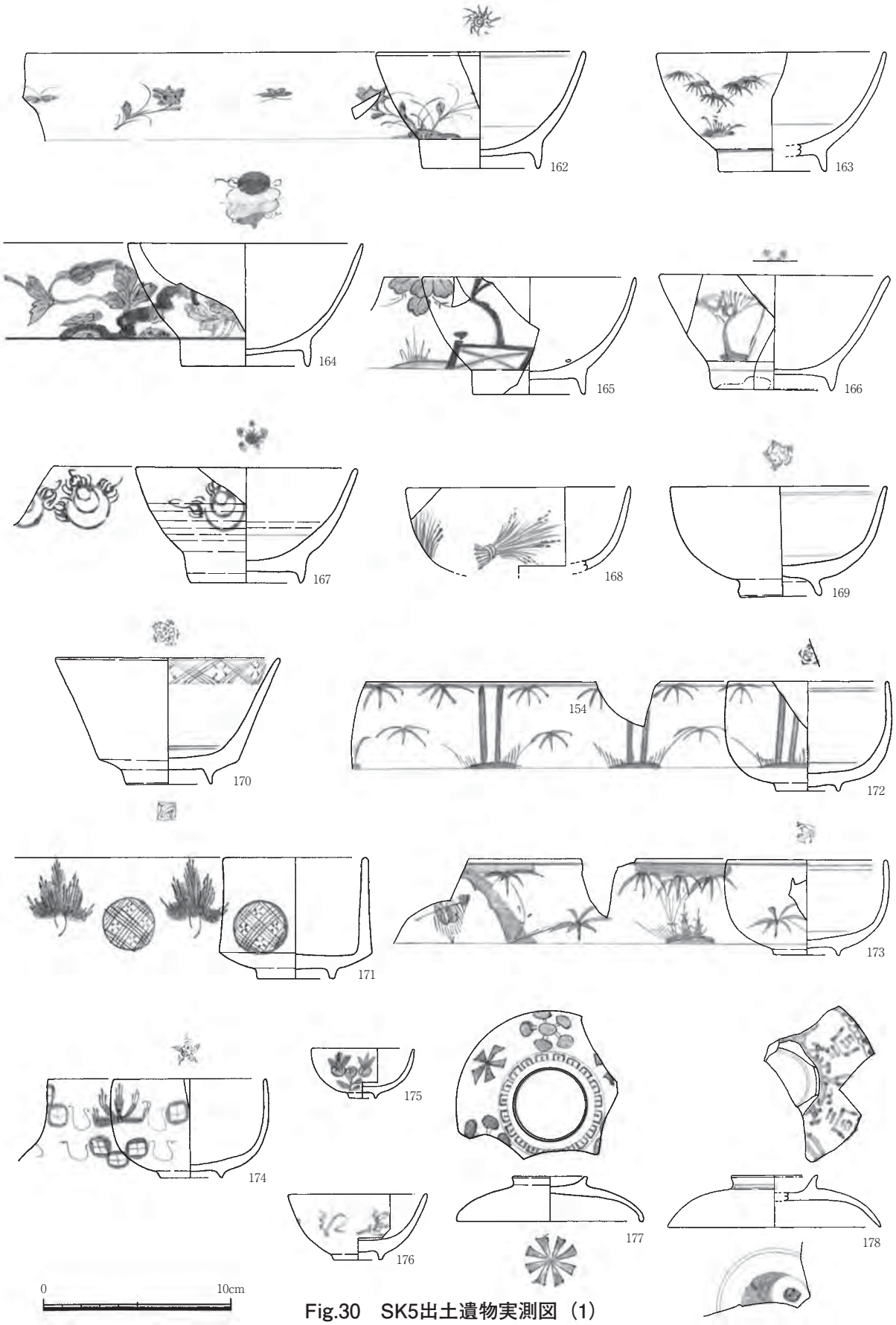


Fig.30　SK5出土遺物実測図（1）

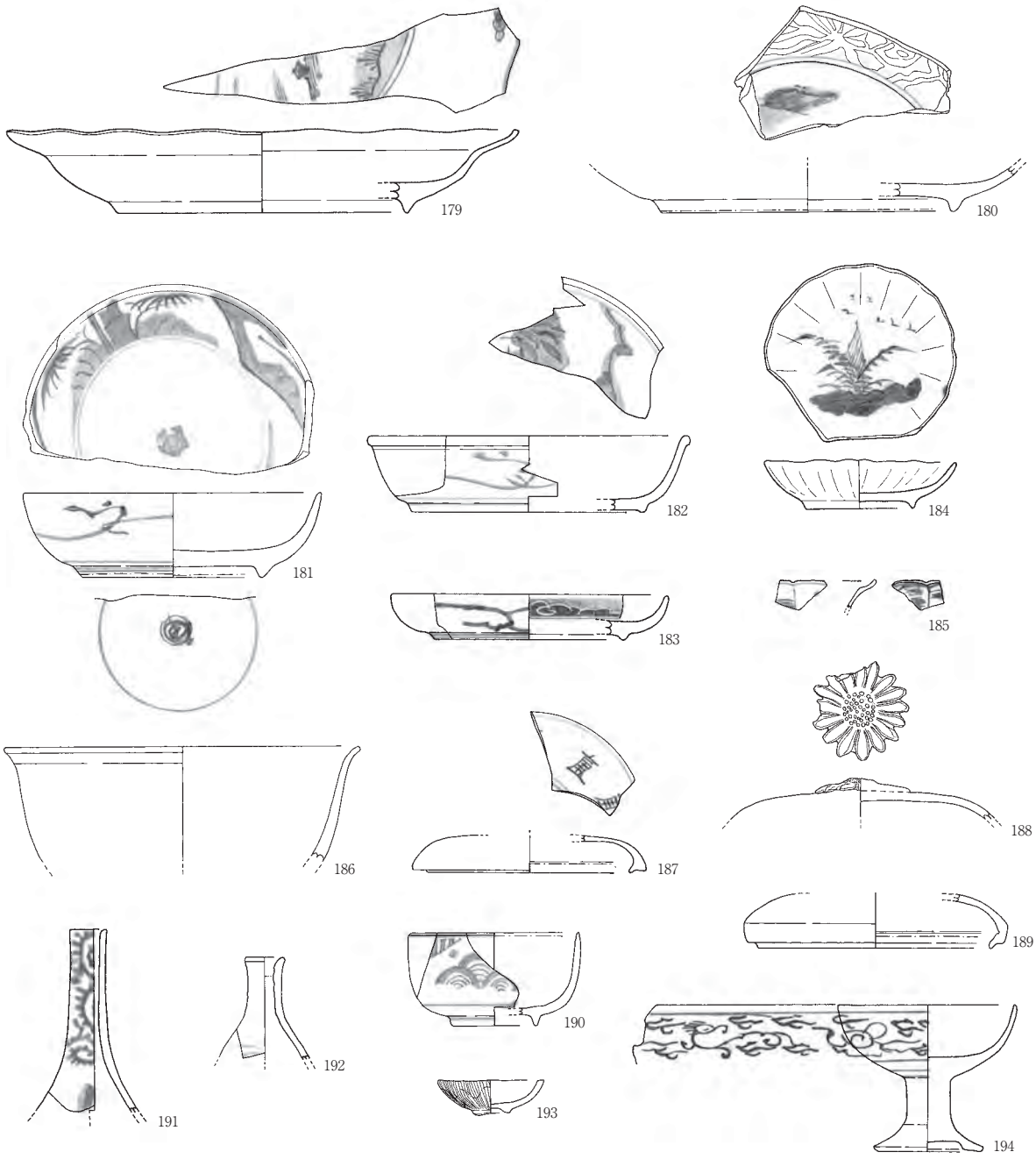


Fig.31　SK5出土遺物実測図（2）

0　10cm

230 ～ 237は土師質土器。233 ～ 235は小皿である。 234・235は口径７～ 10cm前後で、外底に回転糸切り痕を残す。ともに口縁部にタール状の灯芯油痕を認める。233は尾戸窯の土師質土器小皿で、口径12 ～ 13cm。橙色系の胎土をもつ。外面下半と外底に回転ケズリを施す。230 ～ 232は尾戸窯の中皿で、内底や外面に焦げが認められ、焙烙として使用したものとみられる。236・237は焜炉。237は関西産の丸形焜炉で、口縁部から切り込むアーチ状の窓をもつ。内面上位に手捏ねによる突起を貼付する。236は関西産の筒形焜炉で、外面に赤彩を施す。238は銅製品で、煙管の吸口。239は棒状のガラス製品で、簪か。断面四角形で先端を尖らせている。

SK5は19世紀前半に比定される。

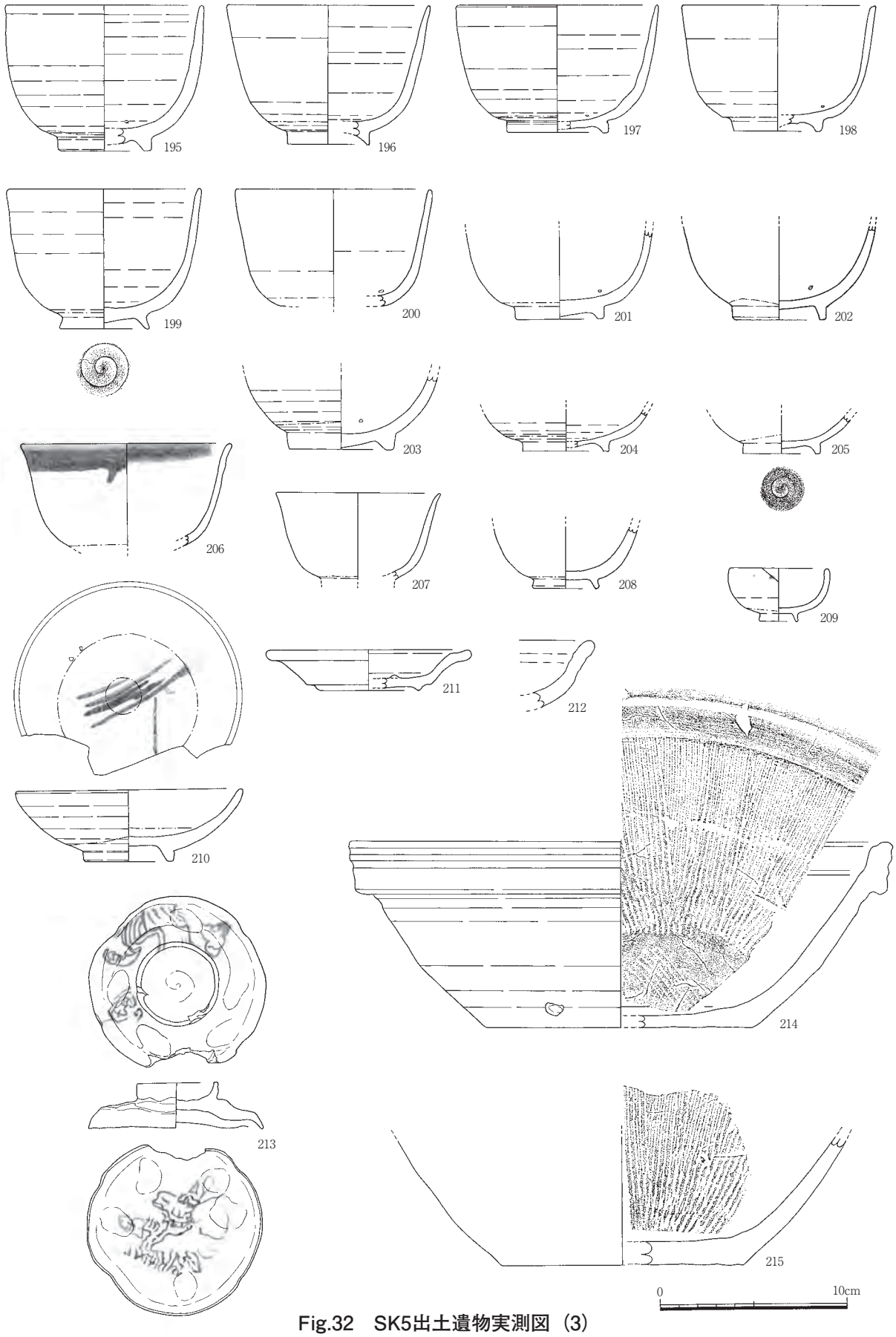


Fig.32　SK5出土遺物実測図（3）

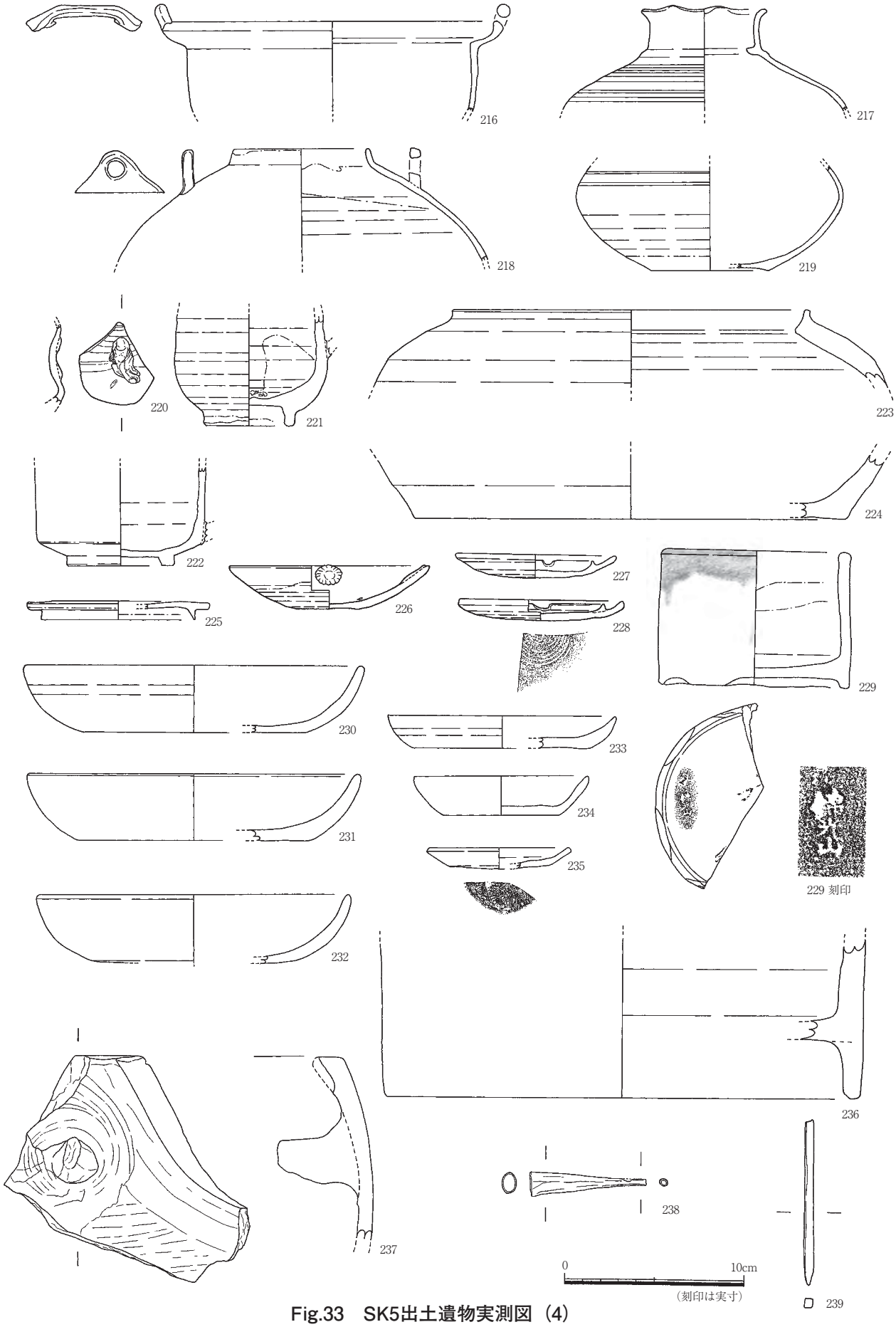


Fig.33　SK5出土遺物実測図（4）

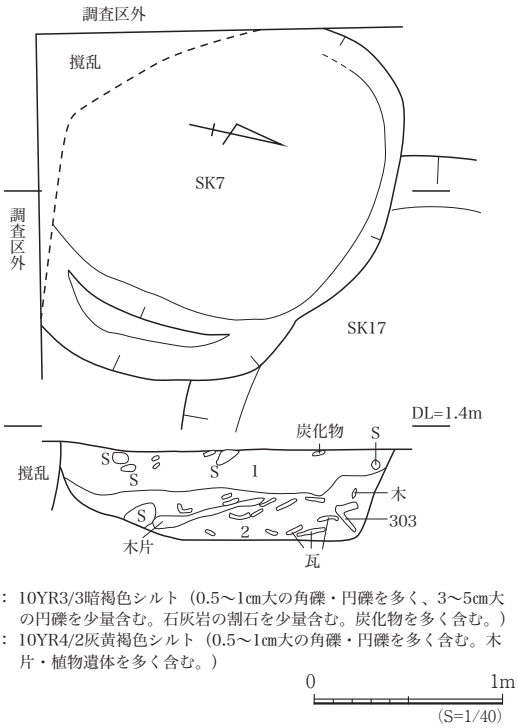


Fig.34　SK7 平面図・セクション図

SK7（Fig.34 ～ 39）

TP8、Ⅱ′層で検出した。西部が撹乱に接し、南部が調査区外に広がるため、規模、形態は不明である。南北残存長1.76m、東西残存長2.06m、深さ48cmを測る。埋土は暗褐色～灰黄褐色シルトである。SK17を切る。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗15点・小碗４点・小杯６点・小皿又は五寸皿12点・鉢３点・碗蓋３点・蓋物６点・瓶４点・水滴１点・ミニチュア１点、白磁小杯４点・小皿又は五寸皿３点・紅皿１点、磁器色絵小碗１点・瓶１点、陶器中碗２点・小碗１点・小杯１点・小皿３点・皿３点・捏鉢１点・擂鉢５点・鍋６点・鍋蓋10点・土瓶６点・土瓶又は急須蓋10点・燗徳利１点・瓶４点・水注１点・甕２点・蓋物２点・蓋１点・灯明受皿14点・餌猪口１点、土師質土器小皿６点・白土器小皿４点・釜１点・焜炉９点・人形２点、瓦質土器釜１点・焜炉９点、施釉土器ミニチュア１点、窯道具１点、銅製品匙１点・煙管１点・把手１点・板状製品１点、鉄釘12点、石製品棒状製品１点、貝殻、骨片、及び瓦片多数である。

図示したものは240 ～ 312である。240 ～ 262は磁器で、250が瀬戸・美濃産、252が能茶山窯産、258・259が能茶山窯の可能性をもつもの、その他は肥前産又は肥前系である。240 ～ 246・248・249・252 ～ 262は染付。259は大碗又は蓋物で、透明釉は貫入が入る。240 ～ 242は端反形中碗である。243は筒丸形小碗で、水に紅葉を描く。244は筒形小碗で、外面に山水文、口縁部内面に雷文帯を描く。245は端反形小碗で、丸文を描く。246は丸形小杯で、笹文を描く。248は小皿で、口縁部輪花形。蛇ノ目凹形高台をもつ。口錆で、内面に草花文を描く。249は丸形小皿で、岩に植物か。252 ～ 254は鉢。252・253は八角形の鉢で、252は高台内に角枠内「茶」銘をもち、能茶山窯の製品にあたる。254は端反形の鉢で、外面は山水文か。255は碗蓋で、外面に麻の葉文、内面に雷文帯と略化した松竹梅円形文を描く。256 ～ 258・260は蓋物。261・262は小瓶で、261は外面に梅花文と笹文を描く。262は若松文を描くものか。250・251は白磁。250は瀬戸・美濃産の端反形小皿で、内面に印刻による文様を施す。251は型打成形による菊花形の小皿で、蛇ノ目凹形高台をもつ。

263 ～ 293は陶器。267は京都系の灰釉丸形小杯。263・264は能茶山窯の鉄釉端反形小皿で、見込みを蛇ノ目釉剥ぎし白土を施す。265は尾戸窯の灰釉変形形皿で、内面に呉須と鉄錆による文様を描く。266も尾戸窯の灰釉変形形皿。型作りによる脚を貼付し、灰白色を帯びる透明の釉を施す。268は焼締めの鉢で、口縁端部凹状。丹羽又は信楽の製品か。269は能茶山窯産の鉄釉片口。暗褐色の釉を施し、口縁端部は釉剥ぎの後白土を施す。270は能茶山窯の鉄釉の捏鉢である。271は堺・明石系の擂鉢である。272は灰釉蓋で、外面に鉄絵で馬の目を描く。273・274は鍋の蓋で、外面に飛

Fig.35　SK7出土遺物実測図（1）

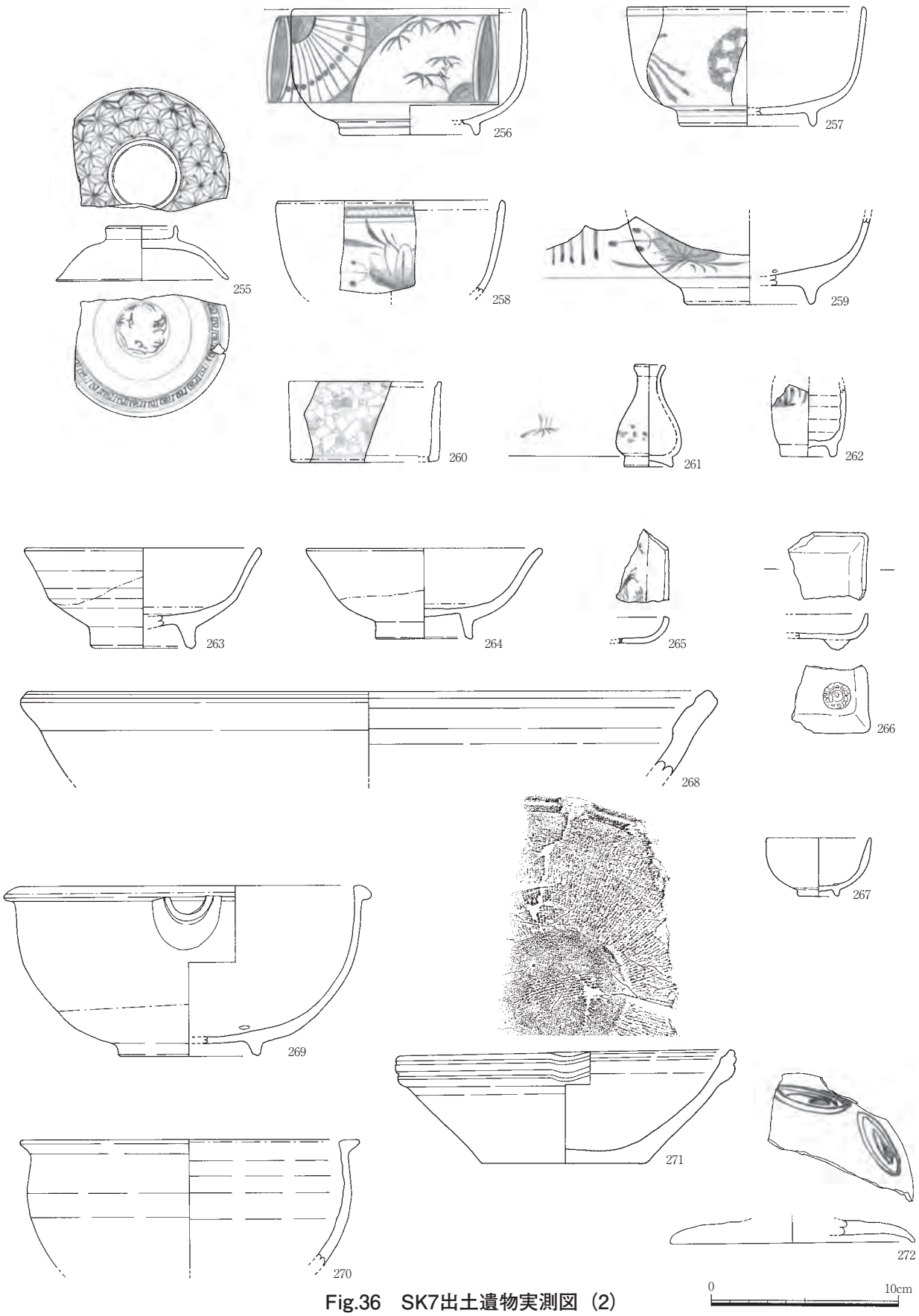


Fig.36　SK7出土遺物実測図（2）

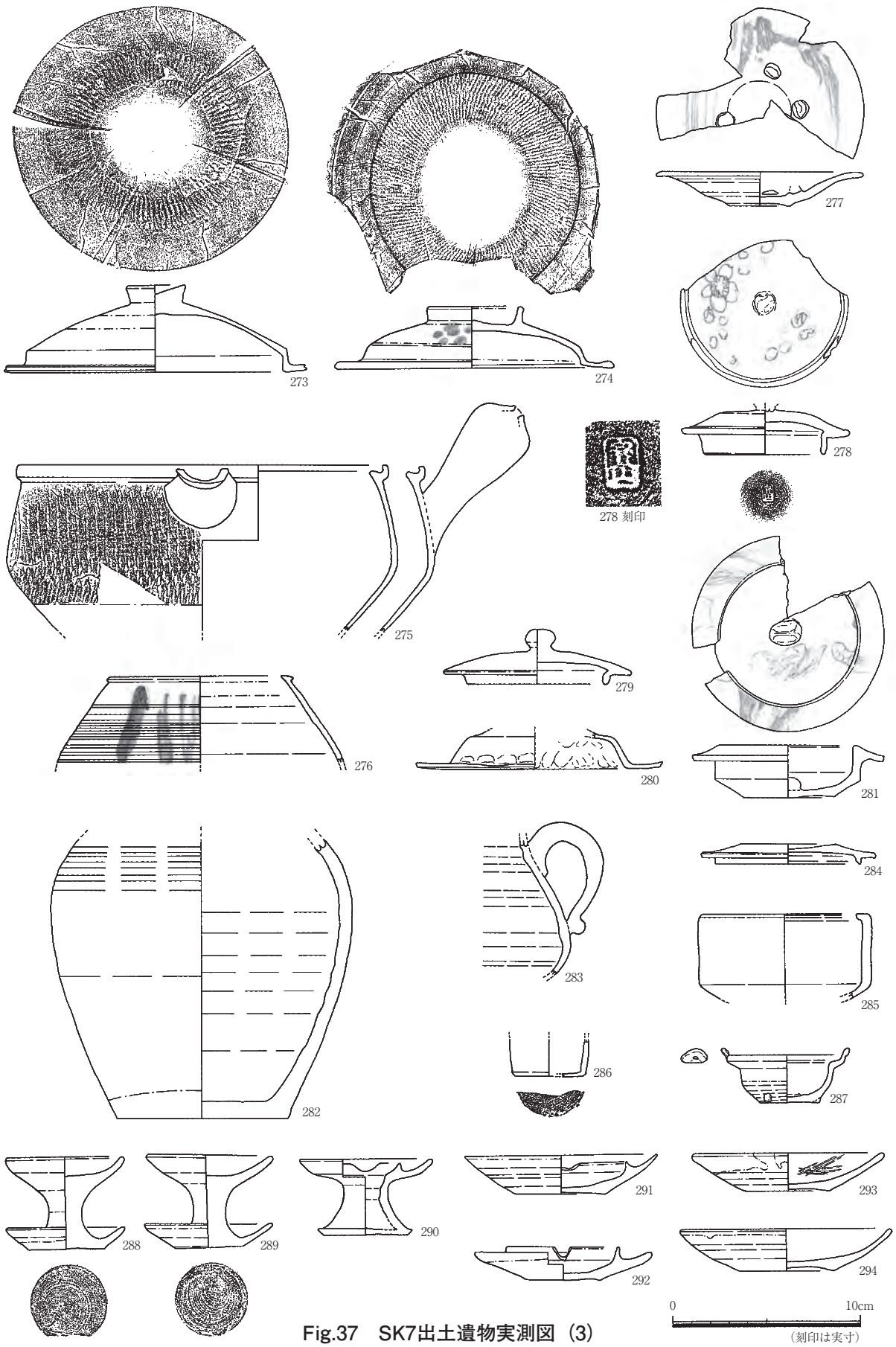


Fig.37　SK7出土遺物実測図（3）

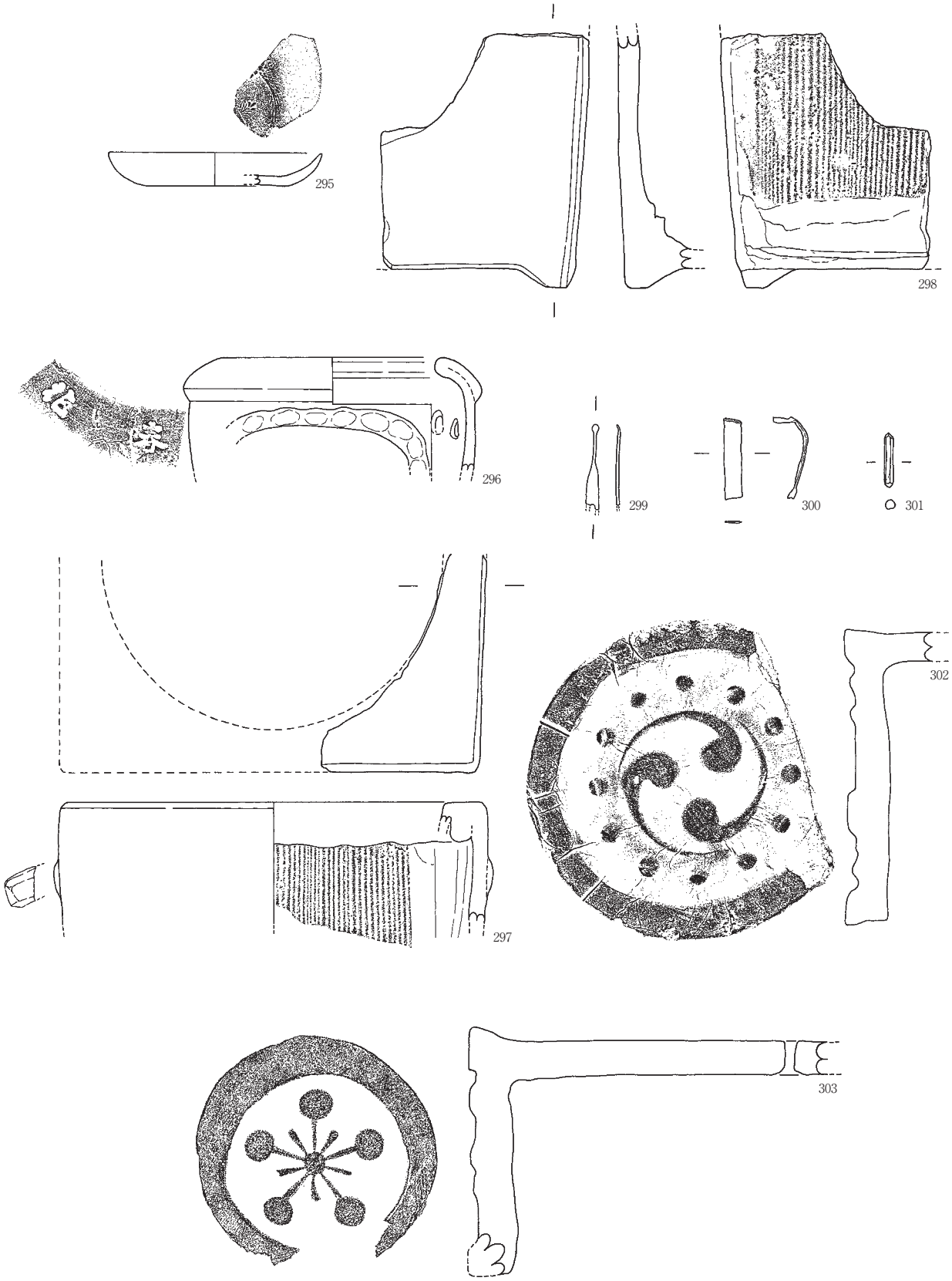


Fig.38　SK7出土遺物実測図（4）

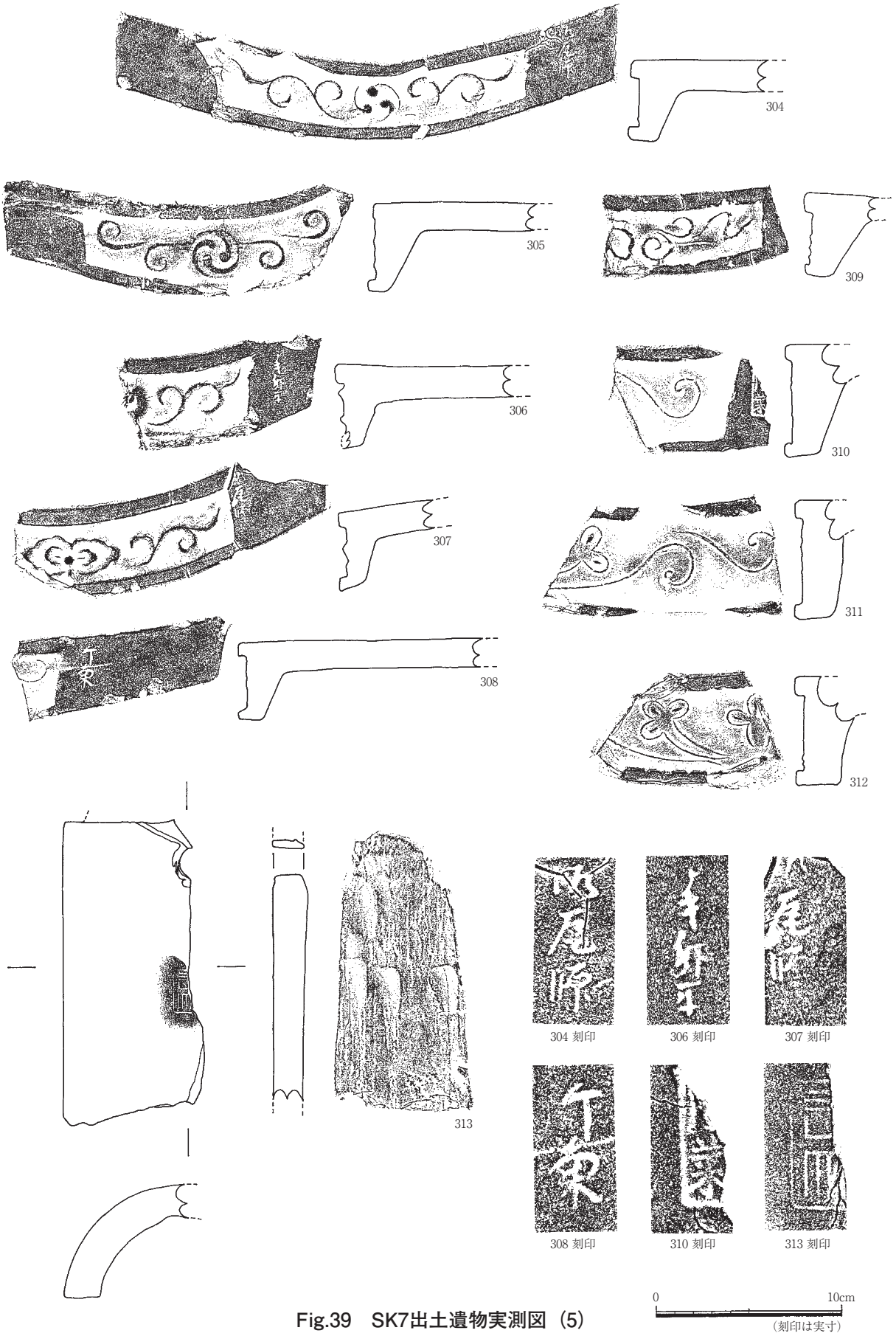


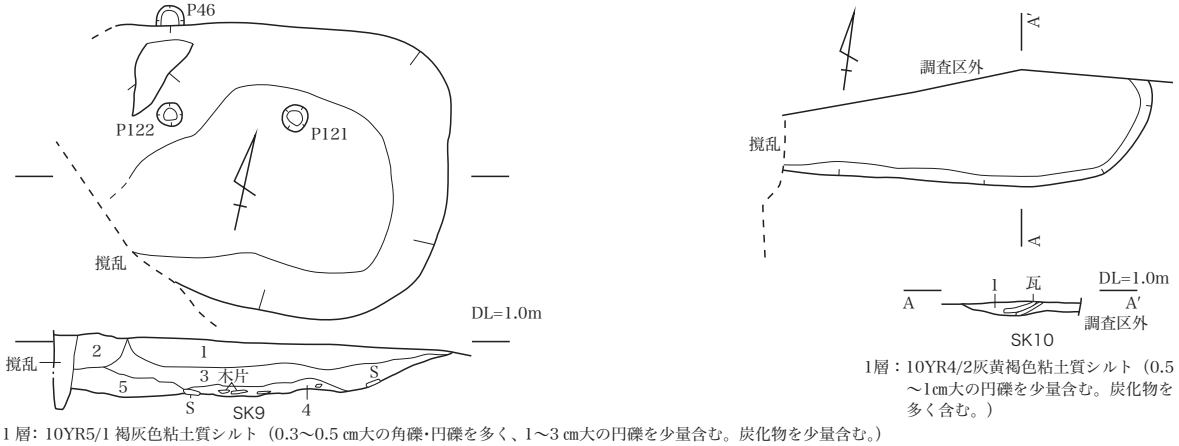
Fig.39　SK7出土遺物実測図（5）

鉋を輪状に巡らせ、鉄釉を部分的に刷毛塗りする。274は外面に白土による梅花を描く。275は鉄釉の行平で、外面に飛鉋を巡らせる。276は灰釉土瓶で、外面上半に多段の凹線を巡らせる。277は灰釉蓋で、部分的に白土を刷毛塗りする。278は京都産の灰釉土瓶蓋。外面に鉄絵と白土による梅花文を施す。内面に角枠内「寶山」銘印をもつ。279は能茶山窯産の鉄釉土瓶蓋である。280は焼締めの蓋で、内外面にユビオサエ、笠部の下面に布目痕が残る。281は灰釉土瓶蓋。282は能茶山窯の鉄釉瓶である。283は鉄釉の水注。284は京都・信楽系の灰釉蓋物蓋で、灰白色を帯びる透明の釉を施す。285は半筒形の灰釉蓋物で、尾戸窯又は京都系。286は灰釉の餌猪口である。287はミニチュアの鍋で、にぶい赤褐色の釉を施す。288 ～ 294は灯明受皿。288・289は台付きの鉄釉灯明受皿で、能茶山窯産。ともに外底に回転糸切り痕を残す。290は立鼓形の灰釉灯明受皿である。291は京都・信楽系の灰釉灯明受皿である。292 ～ 294は灰釉の灯明受皿で、293は内面に櫛目を施す。

295 ～ 298は土師質土器。295は尾戸窯の白土器小皿で、内面に型による松竹梅鶴亀文を施す。296 ～ 298は焜炉。296は京都系の筒形の焜炉で、灰白色の胎土をもつ。上位に窓を設け、窓の周囲に粘土帯を貼付してユビオサエする。外面に印刻による「春」「花」の文字を認める。297・298は箱形の焜炉で、297は扇形の把手を貼付する。299・300は銅製品。299は簪。300は板状製品である。301は石製品。301は滑石製の用途不明の棒状製品で、両先端を尖らせる。

302 ～ 313は瓦で、302・303は軒丸瓦、307は軒桟瓦、304は軒平瓦、305・306・308 ～ 312は軒桟瓦又は軒平瓦、313は丸瓦である。302は連珠三巴文の軒丸瓦である。303は梅鉢文の軒丸瓦で、深尾家の家紋瓦とみられる。304 ～ 306は中心飾りが三巴文、311・312は丁字文、309は蔦文である。307の中心飾りは双葉か。このうち、306は「アキ卯平」、304・307は「御瓦師」銘印をもち安芸（高知県安芸市）産、310は角枠内「片兼」、308は「片兼」とみられる銘印をもち片地（高知県香美市土佐山田町片地）の製品である。また、313は角枠内「三□□」銘印をもつ。

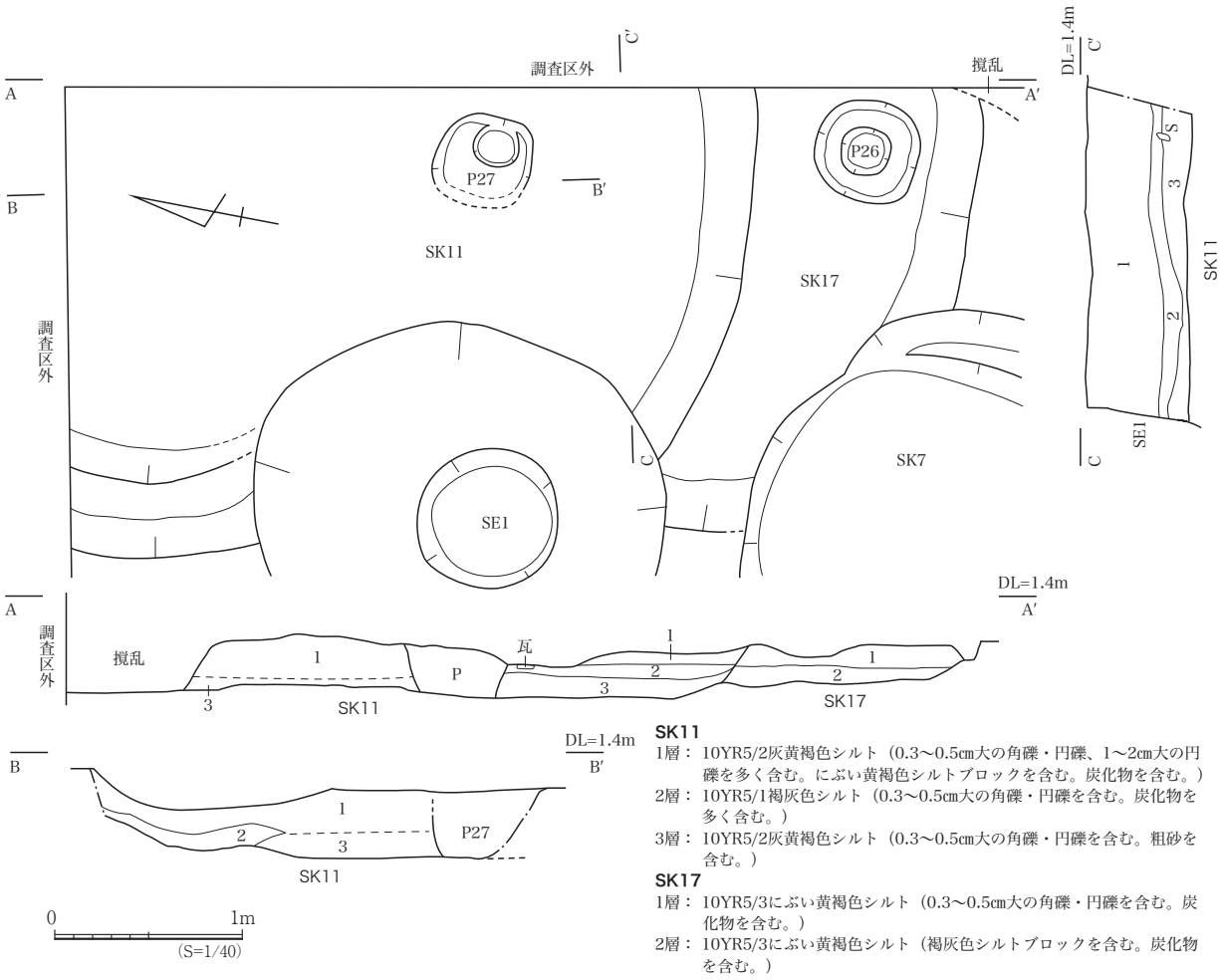
SK7は19世紀中葉に比定される。



1層：10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト（0.5～1cm大の円礫を少量含む。炭化物を多く含む。）

1 層：10YR5/1 褐灰色粘土質シルト（0.3～0.5 cm大の角礫・円礫を多く、1～3 cm大の円礫を少量含む。炭化物を少量含む。）
2 層：10YR4/2 灰黄褐色砂混じりシルト（粗砂を多く含む。0.2～0.4 cm大の角礫・円礫、10 cm前後の角礫を含む。橙色・黄褐色風化礫ブロックを多く含む。）
3 層：10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト（0.2～0.6 cm大の円礫、2～4 cm大の円礫を多く含む。橙色・黄褐色の風化した円礫を多く含む。）
4 層：10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト（粗砂、0.2～1 cm大の角礫・円礫を少量含む。中央底部に木片集中。）
5 層：10YR5/3 褐灰色砂混じり粘土質シルト（粗砂、0.2～1 cm大の角礫・円礫を少量含む。）

Fig.40　SK9・10 平面図・セクション図



SK11
1層：10YR5/2灰黄褐色シルト（0.3～0.5㎝大の角礫・円礫、1～2㎝大の円礫を多く含む。にぶい黄褐色シルトブロックを含む。炭化物を含む。）
2層：10YR5/1褐灰色シルト（0.3～0.5㎝大の角礫・円礫を含む。炭化物を多く含む。）
3層：10YR5/2灰黄褐色シルト（0.3～0.5㎝大の角礫・円礫を含む。粗砂を含む。）

SK17
1層：10YR5/3にぶい黄褐色シルト（0.3～0.5㎝大の角礫・円礫を含む。炭化物を含む。）
2層：10YR5/3にぶい黄褐色シルト（褐灰色シルトブロックを含む。炭化物を含む。）

Fig.41　SK11・17平面図・セクション図

SK9（Fig.40・44）

TP9、Ⅳ-1層で検出した。西部が調査区外に広がるため、規模、形態は不明である。南北長1.52m、東西残存長1.78m、深さ33cmを測る。埋土は、褐灰色～灰黄褐色を呈し、粘土質シルトが主体で、砂、礫、木片を含む。また、上部に橙色、黄色土ブロックを密に含む層が堆積する。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付器種不明１点、陶器小皿２点、土師質土器小皿８点である。この他、青磁の体部と焼締めの甕の体部、漆椀の体部、瓦片が出土している。

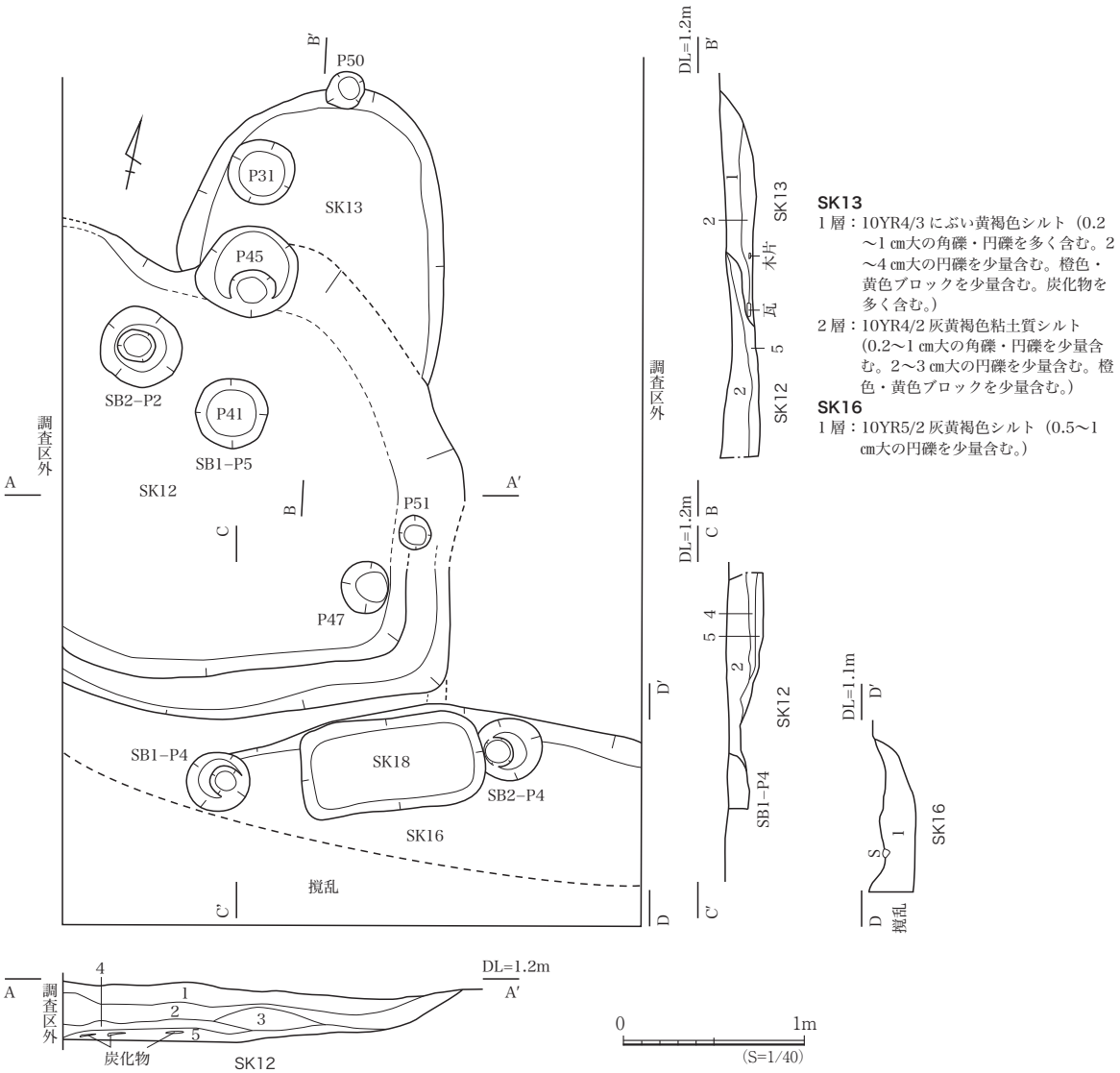
図示したものは314 ～ 319である。314・315は唐津系灰釉陶器の小皿で、314は内底に砂目痕が残る。316は甕で、外面にタタキ目が残る。外面無釉で、内面に灰釉を施す。317 ～ 319は土師質土器小皿で、317は外底ナデ、318は外底に回転糸切り痕と直線方向の圧痕を残す。

SK9は17世紀前半に比定される。

SK10（Fig.40）

TP9、Ⅳ-1層で検出した。北部と西部が調査区外に広がるため、規模、形態は不明である。南北残存長0.61m、東西残存長1.94m、深さ８cmを測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトである。

出土遺物は、土師質土器細片１点と瓦片である。



1層：10YR4/2灰黄褐色シルト（0.5～1㎝大の角礫・円礫を多く含む。橙色・黄色ブロックを少量含む。炭化物を多く含む。）
2層：10YR4/2灰黄褐色シルト（0.2～1㎝大の角礫・円礫を多く含む。橙色・黄色ブロックを少量含む。炭化物を多く含む。）
3層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト（5㎝前後の円礫を少量含む。橙色・黄色ブロックを多く含む。炭化物を少量含む。）
4層：10YR4/1褐灰色粘土質シルト（0.5～1㎝大の角礫・円礫を少量含む。橙色・黄色ブロックを少量含む。炭化物を少量含む。）
5層：7.5YR4/1褐灰色粘土質シルト（0.2～1㎝大の角礫・円礫を少量含む。2～3㎝大の円礫を少量含む。橙色・黄色ブロックを少量含む。炭化物が層状に分布する。炭化物を多く含む。）

Fig.42　SK12・13・16 平面図・セクション図

SK11（Fig.41・44）

TP8、Ⅰ層下面で検出した。北部と東部が調査区外に広がるため、規模、形態は不明である。南北残存長3.66m、東西残存長2.48m、深さ56cmを測る。埋土は礫、炭化物を含む灰黄褐色～褐灰色シルトである。また、埋土下部で長辺50cm大の礫が出土した。SK17を切り、SE1 、SB2-P1に切られる。出土遺物は口縁部及び底部点数にして、青磁染付碗１点、陶器土瓶蓋１点・壺１点、土師質土器小皿15点、及び古銭１点である。図示したものは、320である。320は備前の焼締めの壺で、肩部に紐状の耳を貼付する。外面に自然釉がかかる。

SK11は18世紀後半～19世紀に比定される。

SK12（Fig.42・44）

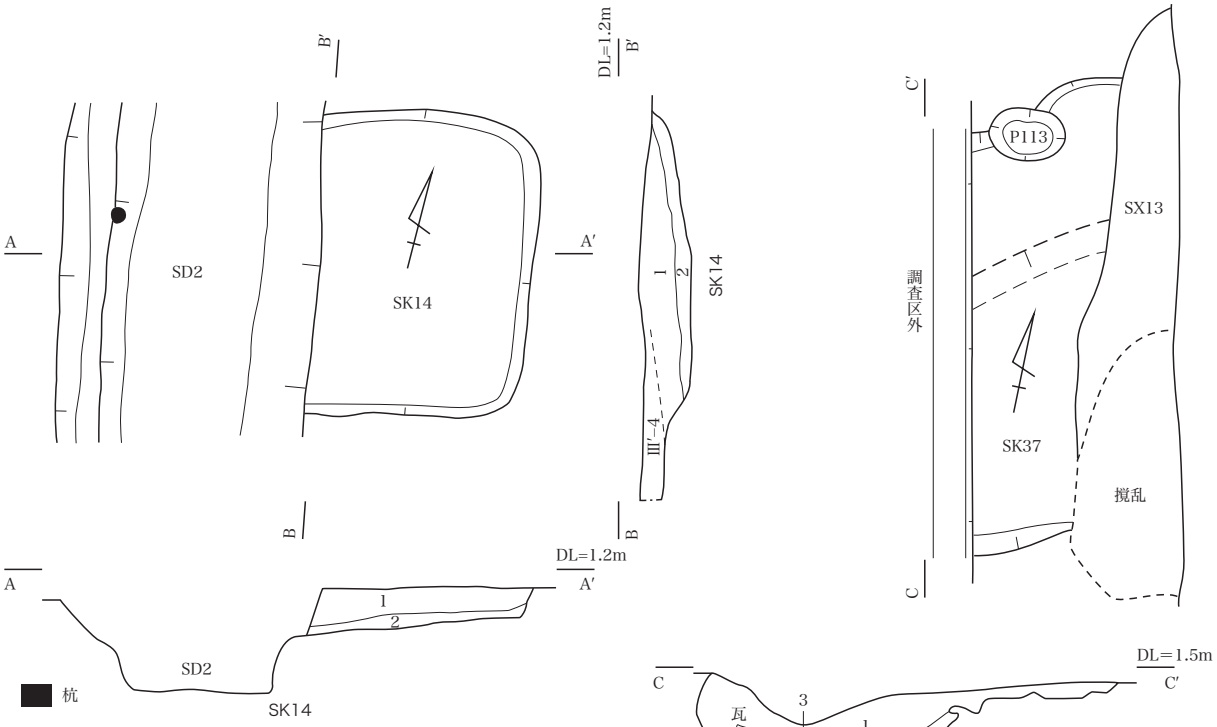
TP7、Ⅳ-1層上面で検出した。西部が調査区外に広がるため、規模、形態は不明である。南北残存長2.56m、東西残存長2.20m、深さ34cmを図る。埋土は灰黄褐色、にぶい黄褐色、褐灰色を呈するシルト～粘土質シルトであり、下層では炭化物がラミナ状に堆積する。切り合い関係ではSK13を切り、SB1-P4･5、SB2-P2、P45に切られる。出土遺物は口縁部及び底部点数にして、陶器碗１点・小皿１点、土師質土器杯１点・小皿３点、及び土錘１点、瓦片５点である。この他、土師質土器細片、中世の土師質土器鍋の体部、鎬蓮弁文を施した中国龍泉窯系の青磁碗の体部も出土している。また、下層からは鉄滓が出土している。

図示したものは、321 ～ 324である。321は絵唐津の小皿で、内面に鉄絵を描く。322は土師質土器杯、323は土師質土器小皿。324は土錘である。

Ⅲ′層との前後関係及び出土遺物からみて、SK12は17世紀前半に比定される。

SK13（Fig.42・44）

TP7、Ⅳ-1層上面で検出した。南西部をSK12に切られるため、規模、形態は不明である。南北残存長1.64m、東西残存長1.48m、深さ20cmを測る。埋土はにぶい黄褐色～灰黄褐色を呈するシル



1層： 10YR5/1褐灰色シルト（0.3～0.5㎝大の角礫、0.5～1㎝大の円礫を多く含む。炭化物を少量含む。）
2層： 10YR5/1褐灰色シルト（0.3～0.5㎝大の角礫、0.5～1㎝大の円礫を多く含む。10YR6/4にぶい黄橙色シルトブロックを含む。炭化物を少量含む。）

1層：10YR4/2 灰黄褐色シルト混じり砂（0.2～0.8 ㎝大の角礫・円礫、2～10 ㎝大の円礫を多く含む。橙色土粒・炭化物を多く含む。）
2層：2.5Y4/1 黄灰色シルト（0.2～0.4 ㎝大の角礫・円礫を少量含む。炭化物を少量含む。）
3層：2.5Y4/1 黄灰色砂混じりシルト（0.2～0.4 ㎝大の角礫・円礫を少量含む。下部植物遺体がラミナ状に堆積する。）
4層：2.5Y4/1 黄灰色粘土
5層：2.5Y3/1 黒褐色粘土
6層：2.5Y3/2 黒褐色シルト質砂（0.2 ㎝大の角礫・円礫を少量含む。）

Fig.43　SK14・37 平面図・セクション図

ト～粘土質シルトであり、橙色、黄色ブロックを少量含み、円礫を含む。他に、P31・45に切られる。出土遺物は口縁部及び底部点数にして、土師質土器杯又は小皿５点であり、他に志野焼の体部片、瓦片、土師質土器細片が出土している。また、埋土中からは焼土塊が少量出土している。

図示したものは、325 ～ 327である。325は志野焼の鉢又は向付で、灰白色の半透明の釉を施す。326は土師質土器杯。327は杯又は皿である。

Ⅲ′層・SK12との前後関係及び出土遺物からみて、SK13は17世紀前半に比定される。

SK14（Fig.22・43・44）

TP6、Ⅳ-2層で検出した。西部をSD2に切られるため、規模、形態は不明である。南北長1.60m、東西残存長1.16m、深さ25cmを測る。埋土は褐灰色シルトである。

出土遺物は白磁碗の体部１点、青磁皿の口縁部１点、土師質土器杯の底部１点・杯又は皿の体部24点、陶器壺又は甕の体部３点、瓦質土器鍋の体部１点、瓦片２点である。図示したものは、117 ～ 119・328である。328は連珠三巴文軒丸瓦で、瓦当面は粗い。この他、中世の中国龍泉窯系の青磁皿（117）、瓦質土器の羽釜（118）、土師質土器の底部片（119）を別項にて図示している。

SK14からは16世紀の遺物が出土している。

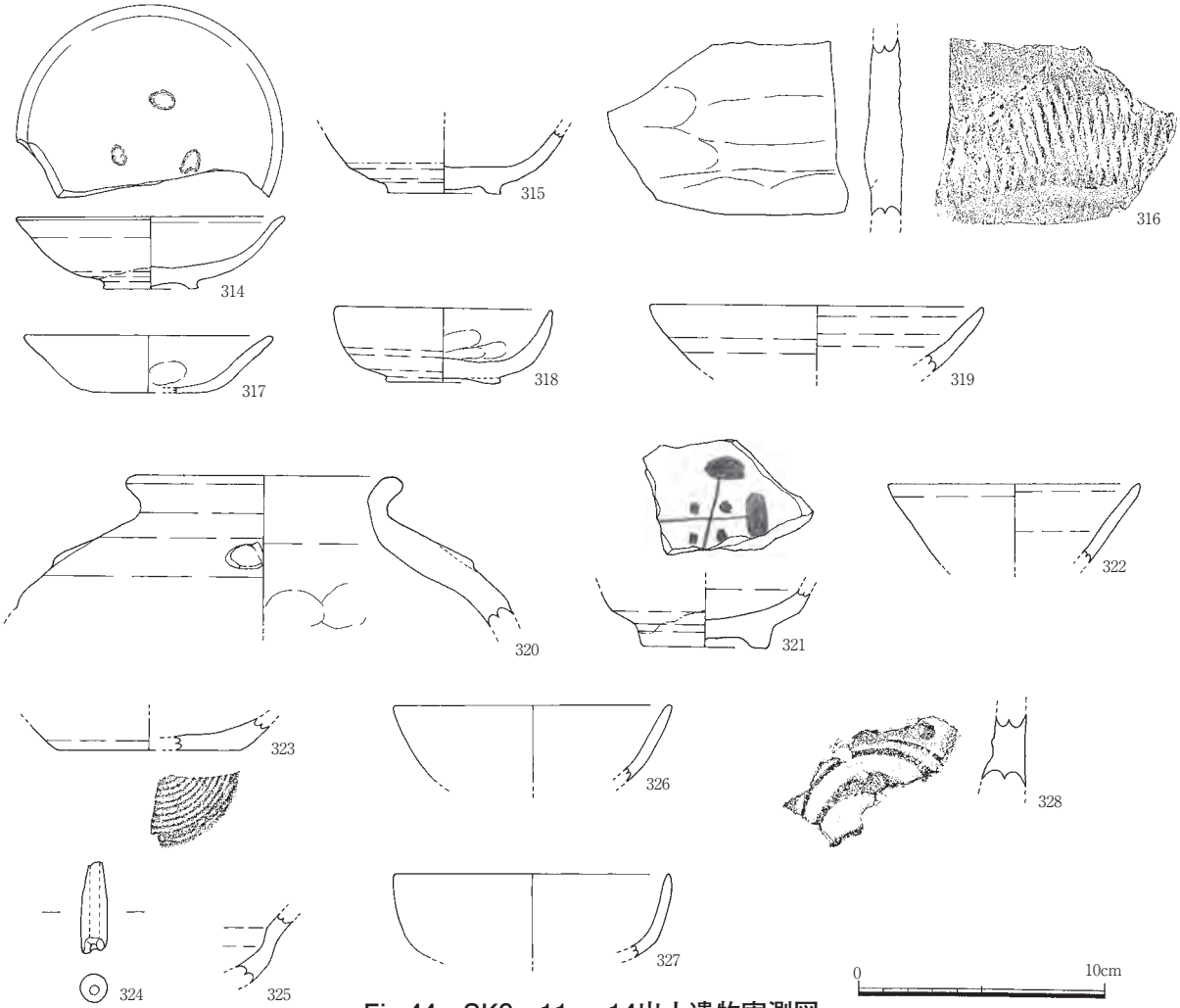
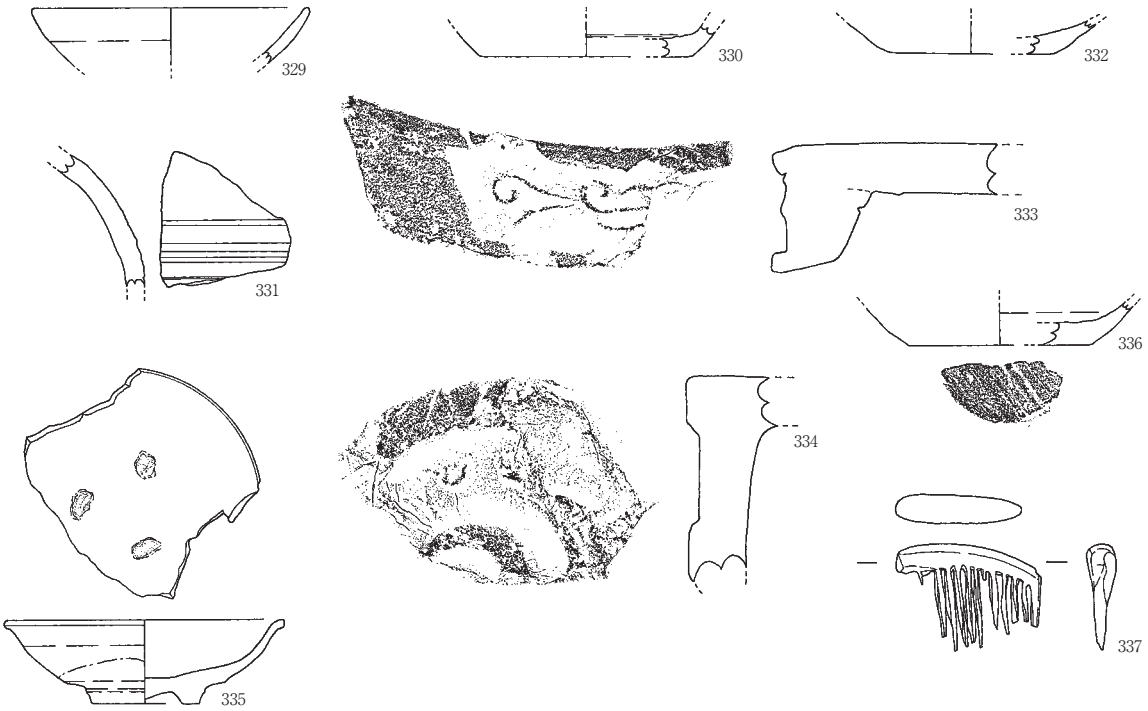


Fig.44　SK9・11 ～ 14出土遺物実測図
（SK9：314～319、SK11：320、SK12：321～324、SK13：325～327、SK14：328）



0　10cm

Fig.45　SK16・17・37出土遺物実測図
（SK16：332～334、SK17：329～331、SK37：335～337）

SK16（Fig.22・42・45）

TP7、Ⅳ-1層で検出した。南部、東部が調査区外に広がるため、規模、形態は不明である。南北残存長0.88m、東西残存長2.25m、深さ24cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。SK18、SB1-P4、P118に切られる。また、床面でSB1-P3を検出したが、SB2-P4とともに、切り合いは不明である。

出土遺物は陶器甕の体部１点・壺又は瓶の体部１点、土師質土器杯又は皿の口縁部１点と体部３点、中世の瓦質土器鍋の体部１点、瓦片９点である。このうち、瓦片は表面が荒いものが多く、被熱し変色したものも含まれる。

図示したものは120・332 ～ 334である。332は土師質土器小皿。334は連珠三巴文軒丸瓦で、瓦当面は荒い。333は軒平瓦か。中心飾りは不明であるが、外側に唐草文を配し、瓦当面には粗砂が付着する。この他、中世の瓦質土器鍋（120）を別項にて図示している。

Ⅲ′層との前後関係及び出土遺物からみて、SK16は17世紀に比定される。

SK17（Fig.41・45）

TP8、Ⅰ層下面で検出した。北部をSE1、SK11に、南西部をSK7に切られ、東部が調査区外に広がるため、規模、形態は不明である。南北残存長1.16m、東西残存長2.42m、深さ22cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトに炭化物、礫を含む。他に、SB2-P5に切られる。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、青磁皿１点、陶器碗１点・小皿１点・鉢１点、土師質土器小皿８点で、他に、鉄釉瓶の体部、土師質土器体部、瓦片が出土している。

図示したものは329 ～ 331である。329は唐津系灰釉陶器の小皿で、黄褐色を帯びる半透明の釉を施す。331は焼締めの壺又は甕の体部である。330は土師質土器小皿である。

SK17は17世紀に比定される。

SK37（Fig.22・43・45）

Ⅲ区A4グリッド、Ⅳ-1層で検出した。東部をSX13に切られ、西部が調査区外に広がるため、規模、形態は不明である。南北長0.84m、東西残存長2.59m、深さ56cmを測る。埋土は上層が灰黄褐色シルト混じり砂、下部に黄灰色シルト～砂混じりシルトが堆積する。ラミナ状に堆積する植物遺体を挟んで、最下層は黄灰色～黒褐色粘土と砂が堆積する。最下部は滞水状態であったことが窺える。西壁断面の堆積状況から、SD3が埋没した後に構築された遺構であることを確認した。他に、P113に切られる。

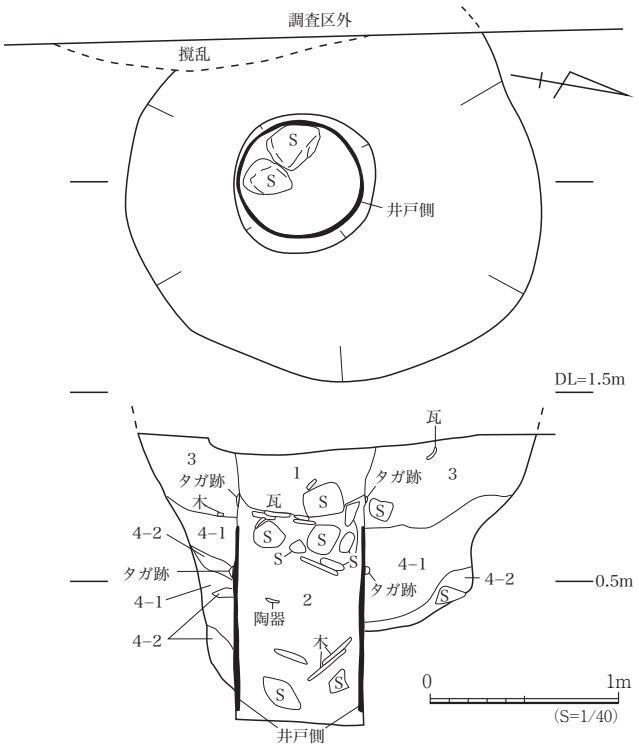
出土遺物は土師質土器杯又は皿の底部１点と細片、瓦片である。

図示したものは122・335 ～ 337である。335は唐津系灰釉陶器の小皿で、内底に砂目痕が残る。336は土師質土器の杯又は小皿か。337は木製品で、櫛である。この他、中世の中国龍泉窯系青磁碗（122）を別項にて図示している。

(3) 井戸

SE1（Fig.46 ～ 48）

TP8、Ⅱ′層で検出した。掘方は西側が調査区外に広がるため、最大径は不明であるが、円形を呈すると思われる。検出規模は、掘方径が2.18m、井戸側径0.68m、検出面から井戸底までの深さ154cmを測る。遺構の平面形は標高1.3mまで掘り下げた際に検出したが、土層堆積状況確認のために残した断面から、最上面は標高1.6mまで立ち上がることを確認した。井戸側内埋土は灰黄褐色シルトに10 ～ 20cm大の石灰岩・砂岩などの砕石を含む。掘り方埋土はシルトと砂礫が互層状に堆積する。井戸側は上部が朽ちているが、縦板を数枚円形に組み合わせたもので、タガの痕跡を２条確認した。井戸周囲の標高0.6m以下は、砂礫層であるⅤ層が堆積しており、井戸底はⅤ層中の標高－0.25mで確認した。調査時において湧水はみられなかった。SK11・17を切る。



1 層：10YR4/2 灰黄褐色シルト（0.5～1 ㎝大の角礫・円礫、3～4 ㎝大の円礫を多く含む。炭化物を少量含む。）
2 層：10YR4/2 灰黄褐色シルト（粗砂を含む。0.5～1 ㎝大の角礫・円礫、3～5 ㎝大の円礫を多く含む。10～20 ㎝大の角礫を少量含む。）
3 層：10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（0.5～1 ㎝大の角礫・円礫を多く、2～4 ㎝大の円礫を少量含む。炭化物を含む。）
4-1 層：10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫（粗砂、0.5～1 ㎝大の円礫を多く含む。褐灰色シルトブロックを含む。）
4-2 層：N5/ 灰色シルト（粗砂を含む。）

Fig.46　SE1 平面図・セクション図

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗２点・小碗２点・大皿１点・小皿２点・猪口１点・蓋物２点、青磁染付中碗１点、白磁鉢１点、青磁皿１点、

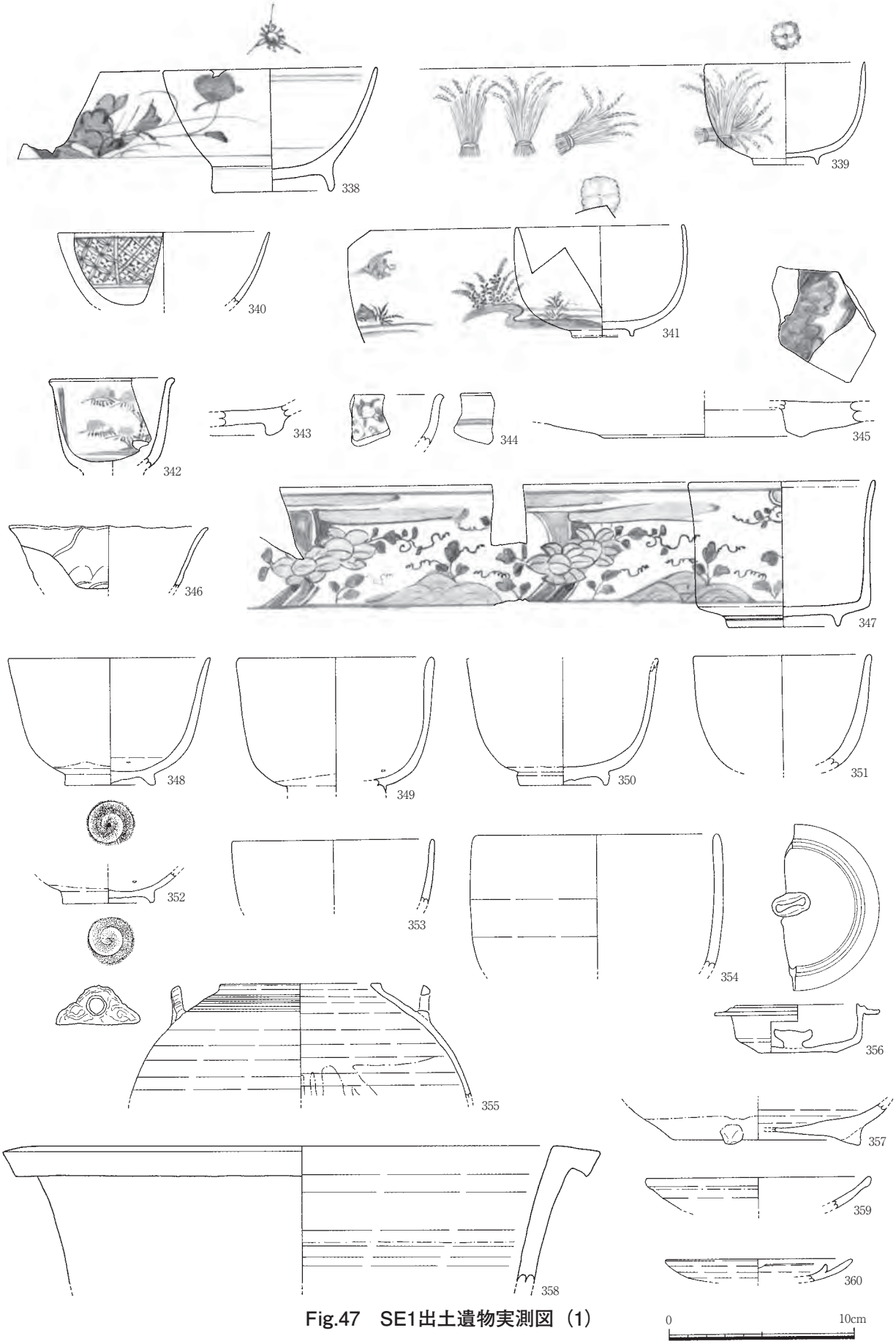


Fig.47　SE1出土遺物実測図（1）

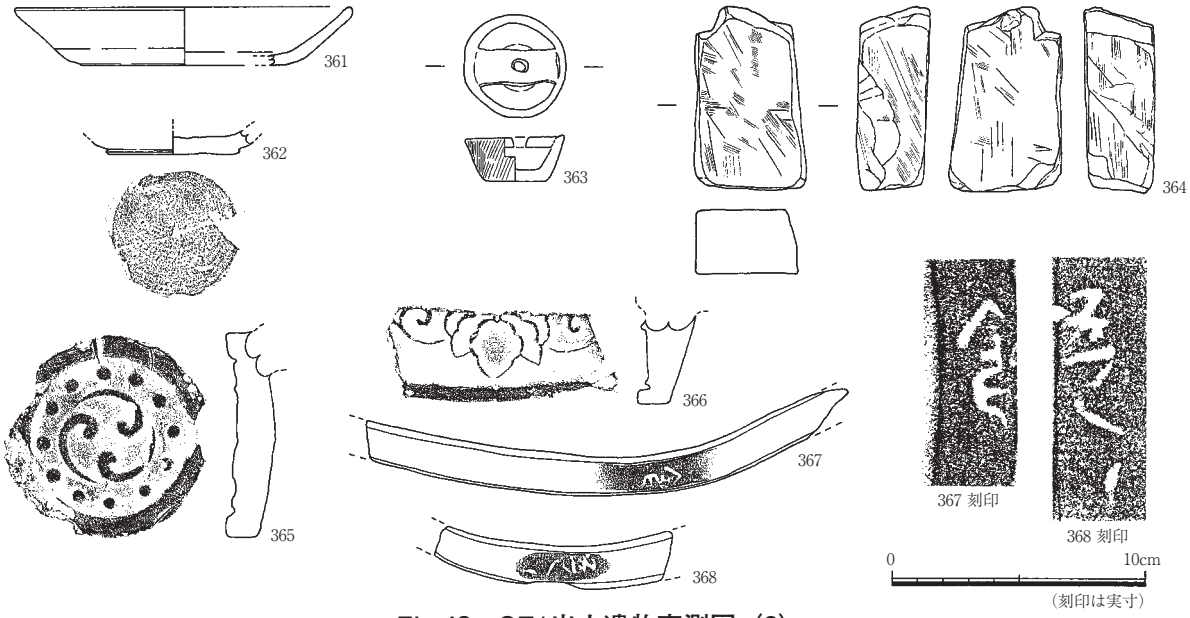


Fig.48　SE1出土遺物実測図（2）

陶器中碗７点・小碗１点・鍋２点・土瓶１点・土瓶蓋１点・火鉢又は水鉢１点・灯明受皿２点、土師質土器小皿４点・杯又は皿１点、施釉土器ひょうそく１点、及び瓦片である。

図示したものは338 ～ 368である。このうち344・346・359・362が堀方埋土にあたる３・４層、その他は井筒の埋め戻し土にあたる１・２層からの出土である。

338 ～ 347は磁器で、338が能茶山窯又は肥前系、その他は肥前産又は肥前系である。338 ～ 342・344・345・347は染付。338は広東形中碗。340は丸形中碗。339は丸形小碗で、稲束を描く。341は丸形小碗で土坡と植物、鳥を描く。342は端反形小碗。345は中皿で、山水文を描くものか。344は端反形皿。347は半筒形の蓋物で草花文を描く。343は青磁の中皿である。346は白磁の鉢で、内面に型による陽刻文様を施す。

348 ～ 360は陶器。348 ～ 354は尾戸窯の灰釉中碗で、348・350・352は高台内に渦状の鉋痕を残す。355は鉄釉の土瓶で、体部上位に2条の凹線と櫛目を巡らせる。356は鉄釉の土瓶蓋で、暗褐色の釉を施す。357は鉄釉鍋。358は瀬戸・美濃産の水鉢又は植木鉢で、浅黄色を帯びる透明の釉を施す。359は京都・信楽系の灰釉灯明受皿である。360は備前の灯明受皿で、内面に錆釉を施す。

361 ～ 363は土師質土器。361・362は小皿。363はひょうそくである。364は石製品で、砥石。

365 ～ 368は瓦。365は軒桟瓦の丸瓦部で連珠三巴文。366は軒桟瓦又は軒平瓦で、中心飾りは蔦文又は桐文である。367は桟瓦、368は桟瓦又は平瓦で、ともに刻印をもつ。

SE1は19世紀前半～中葉に比定される。

（4）溝

SD1（Fig.49・50）

TP5、Ⅴ-2 ～ 3層で検出した南北方向の溝である。軸方向はN-8°-Wである。北部及び南部が調査区外に広がるため、規模は不明である。ただし、北側の調査区であるⅠ区で確認されなかったこ

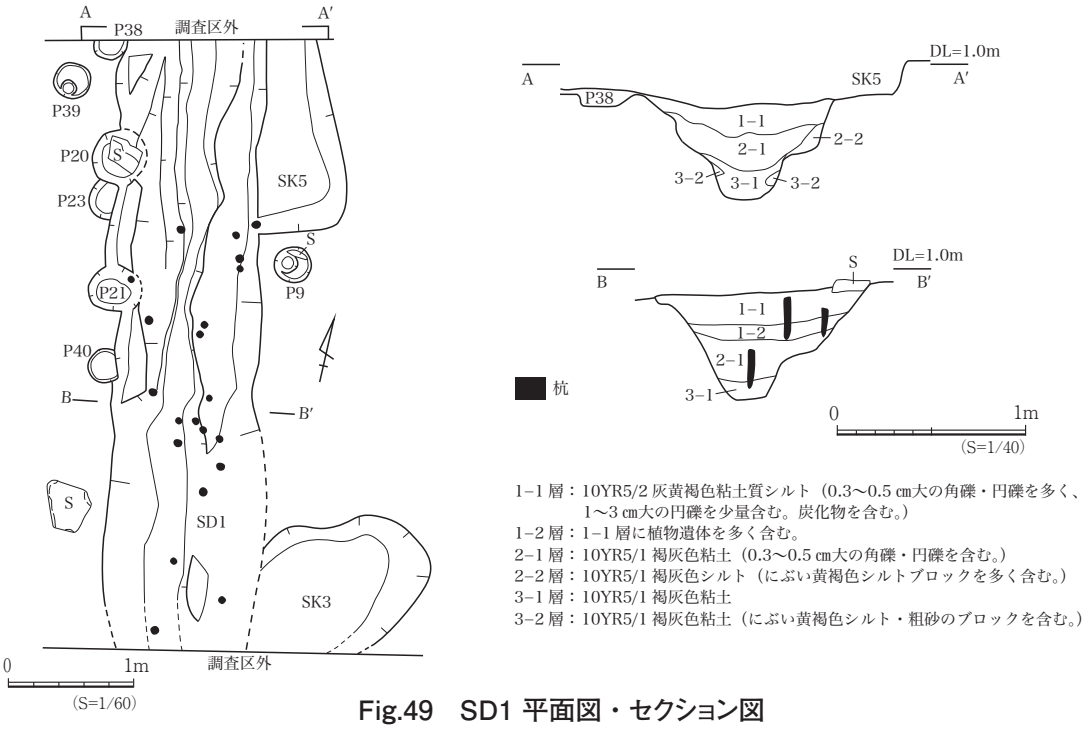


Fig.49　SD1 平面図・セクション図

とから北端に近い地点まで検出しているとみられる。検出規模は、残存長4.85m、幅1.14m、検出面からの深さ58cmを測る。検出面はⅤ層であるが、断面では、肩部の立ち上がりがⅢ′層中まで立ち上がることを確認したが、Ⅲ′層上面の遺構であるかは不明である。断面形状は東肩部に段を持つ台形を呈する。上層部分を削平されているため、本来の埋土の上層部分は、確認できなかった。検出面上部である１層は灰黄褐色粘土質シルトが堆積し、炭化物、植物遺体を含む。下層である２〜３層は褐灰色粘土が主体で、最下部３層は礫を含まない。下部は滞水状態で埋積している。床面の標高は0.30mと南北で高低差はない。切り合い関係ではSK4・5、P20・21に切られる。また、埋土中で21本の木杭を検出した。木杭は断面円形で径４〜５cmを測り、SD1の中央部及び肩部で検出された。木杭の多くは床面に対して垂直に打ち込まれた状態で検出され、溝の埋土中位〜下部である２〜３層で底が収まるものが多かったが、中には、杭の下端部が溝の肩部あるいは底から更に深く打ち込まれた状態で残存しているものもあった。多くの杭は、溝が構築された当初ではなく、溝内部が一定埋積した後に打ち込まれたものとみられるが、木杭の上下端部に多少の腐食や折れも認められるため、各々の木杭の打ち込まれた時期を判別するのは困難であった。ただ、溝が完全に埋積した後に打ち込まれたと判断できる杭はなかった。検出した木杭の分布状況に規則性は認められない。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、青花大皿１点・皿又は鉢１点、陶器中碗１点・小皿４点、土師質土器杯４点・小皿６点・杯又は皿４点である。この他、染付細片、肥前産刷毛目二彩手の中皿の体部、景徳鎮窯系青花碗又は皿の体部、土師質土器細片が出土している。

図示したものは369 〜 384である。369・370は青花。369は中国景徳鎮窯系の鉢又は皿で、内面に草花その他の文様を描く。370は中国漳州窯系の大皿で、外面に不明文様、内面に植物と花卉を描く。白化粧の後透明釉を施し、透明釉は粗い貫入が入る。呉須は暗青灰色に発色している。371 〜 374は陶器。371 〜 374は唐津系灰釉陶器の丸形小皿で、374は内底に砂目痕を残す。376 〜 384は土師質

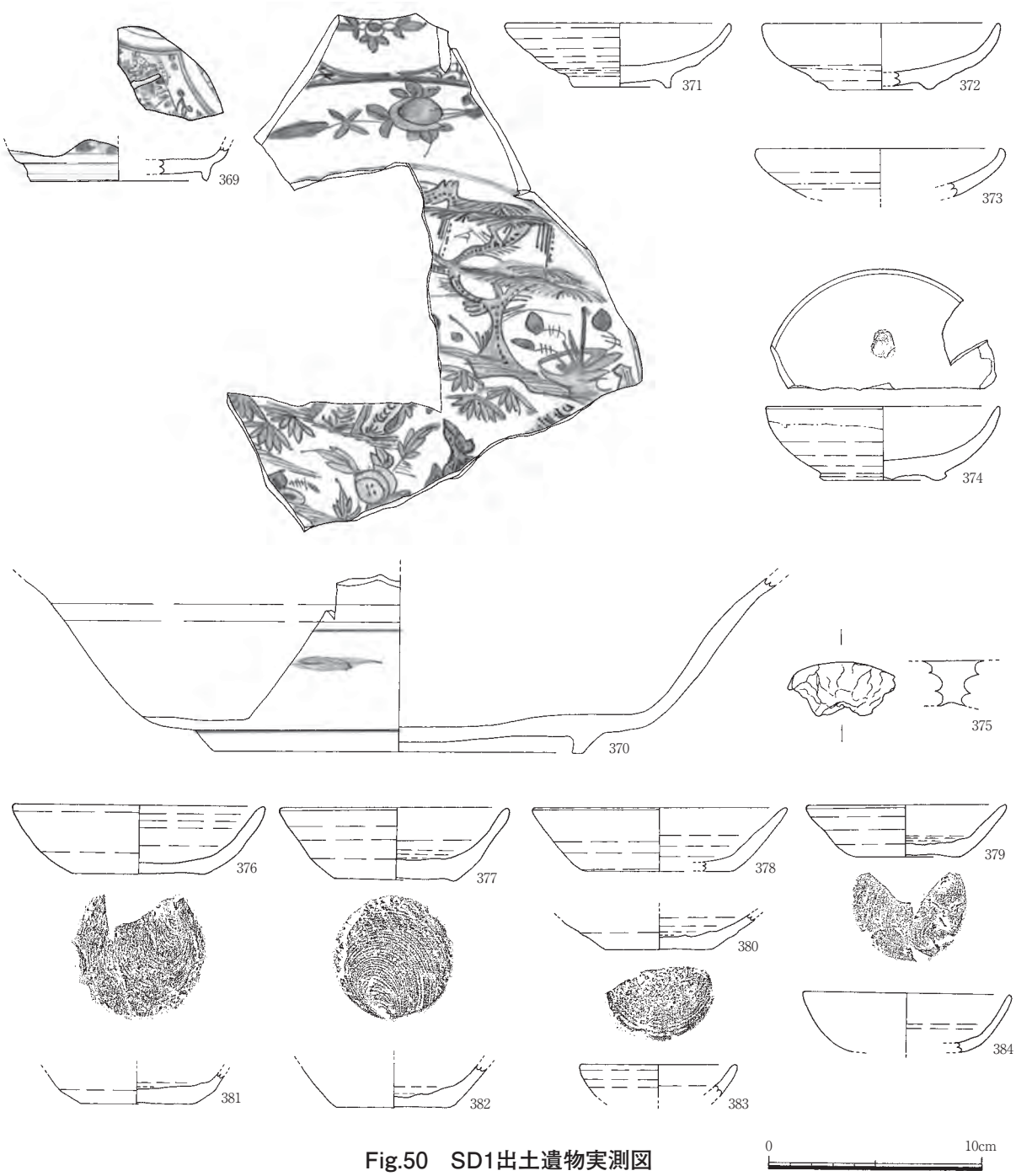


Fig.50　SD1出土遺物実測図

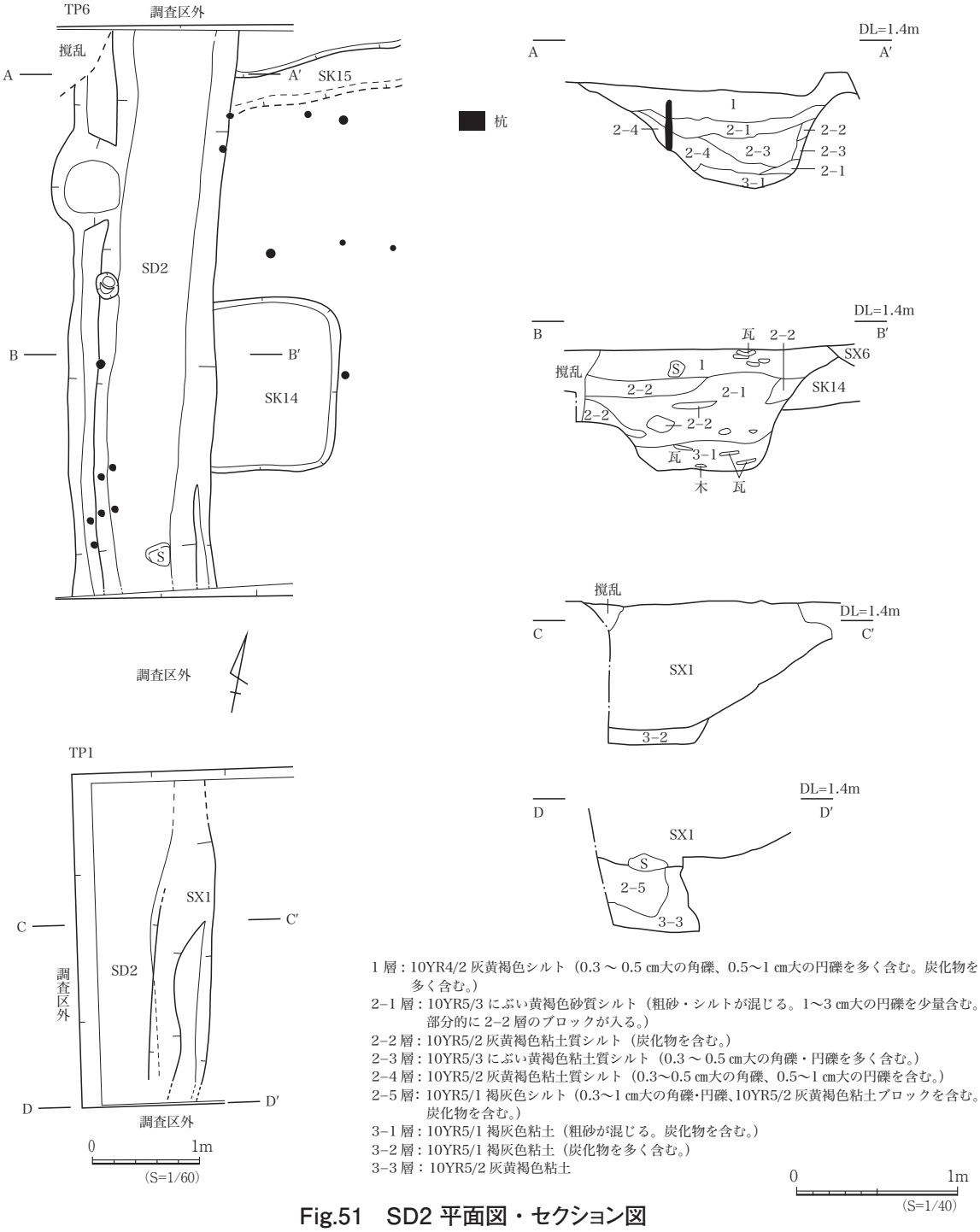
土器。376 ～ 378は杯、379・383・384は小皿、380 ～ 382は杯又は皿である。375は鞴の羽口である。

SD1は17世紀前半～中葉に比定される。

SD2（Fig.51・52）

TP6、Ⅲ′層とTP1-SX1下面で検出した南北方向の溝である。TP1においてはSD2の埋土最下層部分の堆積を確認した。軸方向はN-9°-Wである。TP1では当初、SX1の埋土最下層として調査を行ったが、完掘後の土層観察時、断面形状や土質から別遺構であると判断し、遺構の平面形と埋土の特徴からSD2であると判断した。北部及び南部は調査区外であり、規模は不明であるが、北部については、延長部分が、Ⅰ区-SD3の東端付近にあたり、それより北側には延びていない。検出規

模は、残存長9.97m、幅1.46m、検出面からの深さ76cmを測り、断面形は西肩部に緩やかなテラス状の段をもつ台形を呈する。埋土は、主に灰黄褐色を呈し、最上層の１層がシルト、中層である２層は砂質シルトで中央部では厚く堆積し、粘土質シルトブロックを含む。北部では中層下部に粘土質シルトが堆積する。最下層である３層は礫を含まない褐灰色～灰黄褐色粘土である。下部は滞水状態で埋積している。床面の標高は南端で0.58m、北端で0.50mと若干の高低差があり、北に向かって低くなる。切り合い関係ではSK14・15を切る。



1 層：10YR4/2 灰黄褐色シルト（0.3 ～ 0.5 ㎝大の角礫、0.5～1 ㎝大の円礫を多く含む。炭化物を多く含む。）
2-1 層：10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト（粗砂・シルトが混じる。1～3 ㎝大の円礫を少量含む。部分的に 2-2 層のブロックが入る。）
2-2 層：10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト（炭化物を含む。）
2-3 層：10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト（0.3 ～ 0.5 ㎝大の角礫・円礫を多く含む。）
2-4 層：10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト（0.3～0.5 ㎝大の角礫、0.5～1 ㎝大の円礫を含む。）
2-5 層：10YR5/1 褐灰色シルト（0.3～1 ㎝大の角礫・円礫、10YR5/2 灰黄褐色粘土ブロックを含む。炭化物を含む。）
3-1 層：10YR5/1 褐灰色粘土（粗砂が混じる。炭化物を含む。）
3-2 層：10YR5/1 褐灰色粘土（炭化物を多く含む。）
3-3 層：10YR5/2 灰黄褐色粘土

Fig.51　SD2 平面図・セクション図

また、TP6-SD2の西肩部において木杭を８本検出した。TP5のSD1内で検出した木杭と同様、検出時の木杭は断面円形で直径４～５cmを測る。SD1と同様、溝が機能していた初期ではないものの、最上部である１層が埋没するより以前に打ち込まれたようである。このほかSD2の東側、SK15の南側のⅣ層において、９本の杭跡を検出した。まばらではあるが、東西方向に並列する。時期は明らかでないが、検出層位から、SD2に先行する可能性がある。

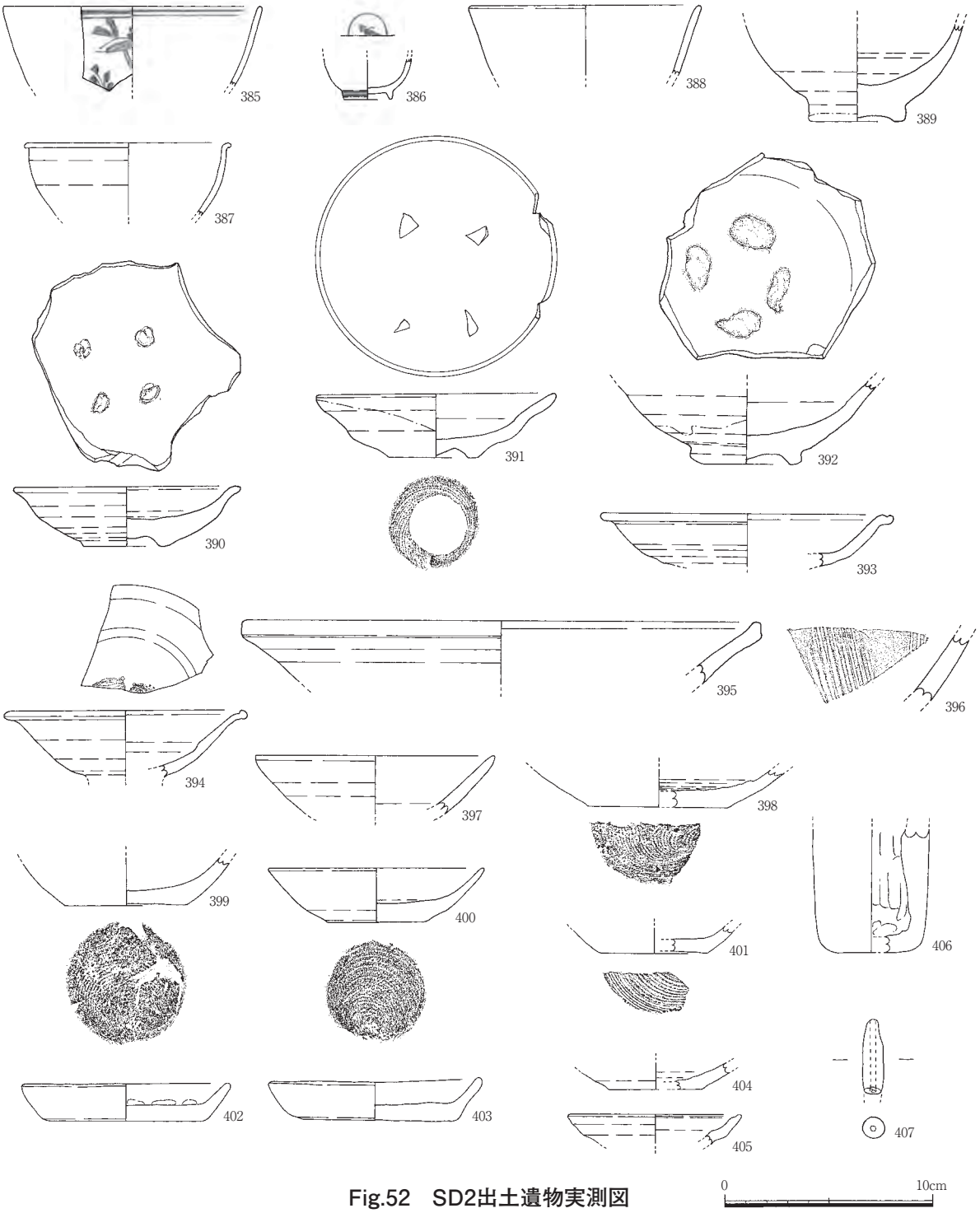


Fig.52　SD2出土遺物実測図

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、青花碗１点・小杯１点、陶器中碗３点・中皿３点・小皿６点、土師質土器杯４点・小皿13点・杯又は皿30点・焼塩壺１点・土錘１点である。この他、染付碗の体部、陶器碗の体部、青花の体部、丸瓦、平瓦、貝殻（カキ・ハイガイ）が出土している。

図示したものは385 ～ 407である。385・386は青花。385は中国景徳鎮窯系の丸形中碗で、17世紀前葉～中葉。外面に植物と鳥を描き、口縁端部の釉が虫食い状に剥がれる。386は中国景徳鎮窯系の小杯である。387 ～ 396は陶器。387は端反形の灰釉中碗。薄手で、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。388・389は唐津系灰釉陶器の中碗。390 ～ 394は唐津系灰釉陶器の小皿で、390・391は内底に胎土目、392・394は砂目痕を残す。395は唐津系灰釉陶器の中皿、396は備前の擂鉢である。397 ～ 407は土師質土器。397・399は杯、400・402 ～ 405は小皿、398・401は杯又は皿である。406は焼塩壺で、外面にナデ、内面にヨコナデを施す。407は土錘である。

SD2は17世紀前葉～中葉に位置付けられる。

SD3（Fig.53 ～ 75）

Ⅰ区A ～ E3、D ～ E2グリッド、Ⅴ-1層で検出した東西方向の溝である。西側が調査区外に広がるため、規模は不明であるが、残存長19.05mを測り、最も残存する西壁断面で幅2.94m、深さ114cmを測る。軸方向はN-79°-Eである。断面形状は台形を呈し、北肩部にテラス状の段を持つ。床面の標高は東端で0.20m、西端で0.16mとあまり高低差はない。SD2の北端の床面は0.50mであり、比較すると、30cm程SD3が低くなる。埋土の多くは黄灰色を呈する。最下層である埋土５層にはベース土となるⅤ層の砂を含む。下層部の４層及び上層下部の２層には粘土を主体とした堆積がみられ、滞水状態で埋積したとみられる。これらの間の３層には砂、礫、粘土ブロックを含むシルトが堆積する。また、最上層埋土１層は褐灰色～黒褐色を呈し、炭化物、木片を多く含む砂質シルトである。

SD3の埋土中及び肩部で34本の木杭を検出した。東半北肩部では、直径が８～ 10cmの、比較的大きな径の柱状の木杭を、一定の間隔で溝の軸方向に沿って検出した。杭は肩部からかなり深くまで打ち込まれていたため、底は未検出である。さらにこの木杭の上面付近では、溝の軸方向に沿って列をなすような形で細長い５枚の板材を検出した。柱状の木杭の上面の高さは、板材検出面より若干低い傾向にあるものの、あまり差がなく、柱状の木杭と併せて、塀などの構造物を支える胴木として用いられた可能性も考えられる。板材は、長さ0.98 ～ 2.10 m、幅10 ～ 14cm、厚さ３～５cmを測り、一部、丸太材の側面や断面を平らに加工しているものもある。板材と柱状の木杭は、最上層埋土１層の上面、または上層部で検出し、溝が埋没した後に築かれたと考えられる。板材の上面付近は近現代の造成の影響を受けているとみられるが、板材がほぼ同じ軸で並んで検出されていることや、板材の下面では近現代層が確認されなかったことから、板材については、後世の影響を大きくは受けていないものと思われる。一方、他の木杭は、西部南肩に斜めに打ち込まれた２本の角材を除き、多くは中央部南肩寄りの埋土中で検出しており、床面に対してほぼ垂直に打ち込まれていた。これらの木杭は、SD1及びSD2内の杭群同様、断面円形で直径４～５cmを測る。断面観察から、溝の開削初期からのものではないが、最上部１層の埋没以前に打ち込まれたようである。

また、SD3の西半北肩部、標高0.95m前後で、溝の軸方向に沿った石列を検出した。石は40 ～ 70cm大の石灰岩、チャートを中心とした石材が使用されていた。石列は溝の内側が面をなすよう

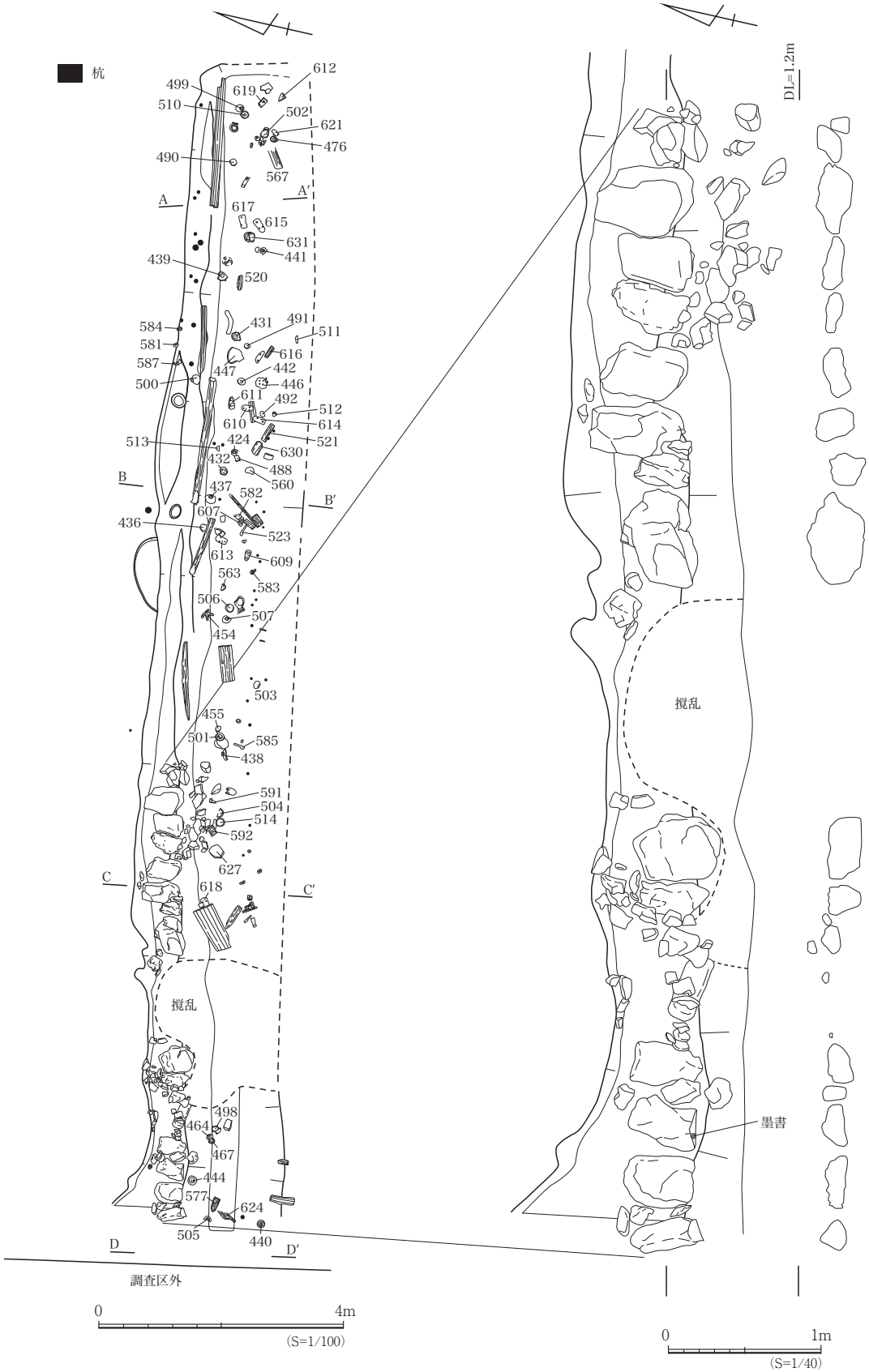
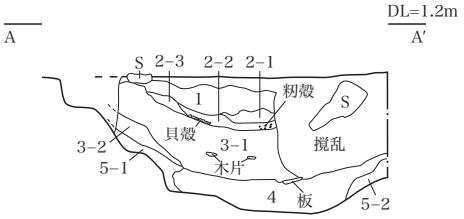


Fig.53　SD3 平面図・遺物出土状況図・石列検出状況図・断面図

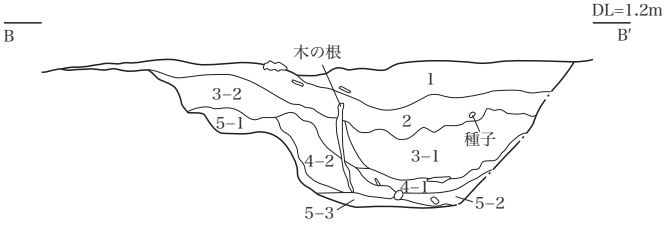


A–A′

1 層：10YR4/1 褐灰色シルト（0.2〜0.3 ㎝大の円礫、2〜4 ㎝大の円礫を少量含む。炭化物を少量含む。木片を含む。）
2–1 層：10YR4/1 褐灰色粘土（木片を含む。）
2–2 層：2.5Y4/1 黄灰色粘土（南斜面下面にハマグリが堆積する。木片を含む。）
2–3 層：2.5Y4/1 黄灰色砂混じりシルト（炭化物を含む。）
3–1 層：2.5Y4/1 黄灰色シルト（1〜2 ㎝大の礫を少量含む。粘土ブロック含む。中央部に粘土塊。炭化物を少量含む。木片が傾斜に沿って堆積する。）
3–2 層：5Y5/1 灰色砂混じりシルト（粗砂、2mm の礫を少量含む。）
4 層：5Y4/1 灰色砂混じり粘土（0.5〜1.5 ㎝大の円礫を多く含む。粗砂ブロックを含む。炭化物・木片を含む。）
5–1 層：5Y5/1 灰色粘土（中粒砂が部分的に混じる。V 層の砂ブロックを含む。）
5–2 層：5Y5/1 灰色砂混じり粘土質シルト（粗砂、0.2 ㎝大の礫を少量含む。）

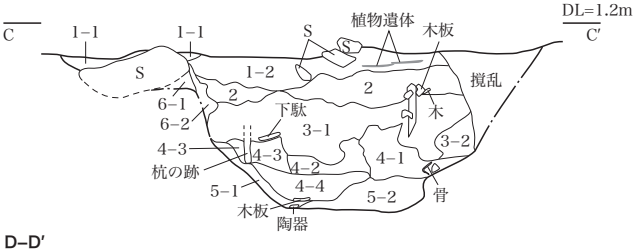
B–B′

1 層：10YR3/1 黒褐色砂質シルト（0.2〜0.6 ㎝大の角礫・円礫、1〜2 ㎝の円礫を多く含む。橙色土粒を多く含む。）
2 層：2.5Y4/1 黄灰色砂混じり粘土（部分的に粗砂、0.2 ㎝大の角礫を少量含む。1〜2 ㎝の円礫を少量含む。3–2 層ブロックを含む。炭化物を多く含む。）
3–1 層：2.5Y4/1 黄灰色砂混じり粘土質シルト（粗砂、0.2〜0.4 ㎝大の円礫を多く含む。粘土ブロックを含む。木片を含む。）
3–2 層：2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト（粗砂、0.2〜0.4 ㎝大の角礫・円礫を多く含む。1〜2 ㎝大の円礫を多く含む。炭化物を少量含む。）
4–1 層：10YR4/1 褐灰色粘土（木片・木板を含む。）
4–2 層：10YR3/1 黒褐色砂混じり粘土（0.2〜0.4 ㎝大の角礫・円礫を多く含む。1〜2 ㎝の角礫を少量含む。）
5–1 層：2.5Y5/1 黄灰色シルト（粗砂、0.2 ㎝大の円礫、1〜2 ㎝大の円礫を少量含む。V 層ブロックを少量含む。）
5–2 層：7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト（0.2 ㎝大の円礫を多く含む。1〜5 ㎝大の円礫を少量含む。）
5–3 層：10YR3/1 黒褐色砂混じりシルト（粗砂、0.2 ㎝大の角礫・円礫を多く含む。V 層の砂ブロックを含む。木片・貝殻を含む。）



C–C′

1–1 層：10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
1–2 層：2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト（0.2〜0.4 ㎝大の円礫、1 〜 2 ㎝大の円礫を多く含む。）
2 層：2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト（2〜8 ㎝大の円礫を多く含む。）
3–1 層：2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト（粘土ブロックを多く含む。）
3–2 層：2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト（1〜2 ㎝の円礫、粘土ブロックを多く含む。）
4–1 層：5Y4/1 灰色粘土
4–2 層：2.5Y4/1 黄灰色砂混じり粘土質シルト（0.2〜0.4 ㎝大の角礫・円礫を多く含む。）
4–3 層：10YR5/1 褐灰色砂質シルト（0.2〜2 ㎝大の角礫を少量含む。）
4–4 層：5Y4/1 灰色粘土（下部に 0.2〜0.4 ㎝大の円礫を多く含む。）
5–1 層：2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト（粗砂を多く含む。V 層ブロックを含む。）
5–2 層：2.5Y4/1 黄灰色砂混じり粘土質シルト（0.2〜0.4 ㎝大の角礫・円礫、1〜2 ㎝大の円礫を多く含む。）
6–1 層：10YR5/1 褐灰色砂混じり粘土質シルト
6–2 層：2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト（粗砂を多く含む。）



D–D′

1–1 層：10YR4/1 褐灰色砂質シルト（1〜2 ㎝大の角礫・円礫を多く含む。木片・炭化物を多く含む。）
1–2 層：2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト（0.2 ㎝大の角礫、1〜3 ㎝大の円礫を多く含む。炭化物を少量含む。）
2 層：2.5Y5/1 黄灰色粘土（粗砂、0.2 ㎝大の角礫、2〜4 ㎝大の円礫を少量含む。）
3 層：2.5Y5/1 黄灰色砂混じり粘土質シルト（1〜2 ㎝大の円礫、3〜4 ㎝大の角礫・円礫を多く含む。橙色土ブロックを含む。）
4–1 層：2.5Y5/1 黄灰色砂混じり粘土
4–2 層：2.5Y5/1 黄灰色粗砂混じり粘土質シルト（粗砂を含む。0.2〜1 ㎝大の角礫・円礫を多く含む。）
5–1 層：2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト（粗砂、0.2〜1 ㎝大の角礫・円礫を多く含む。2〜4 ㎝大の円礫を少量含む。）
5–2 層：10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質砂（粗砂を含む。0.2〜1 ㎝大の角礫・円礫を少量含む。）
6–1 層：2.5Y5/1 黄灰色砂混じり粘土質シルト（1〜2 ㎝大の円礫、3〜4 ㎝大の角礫・円礫を多く含む。橙色土ブロックを含む。）
6–2 層：2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト（粗砂、0.2〜1 ㎝大の角礫・円礫を多く含む。2〜4 ㎝大の円礫を少量含む。）

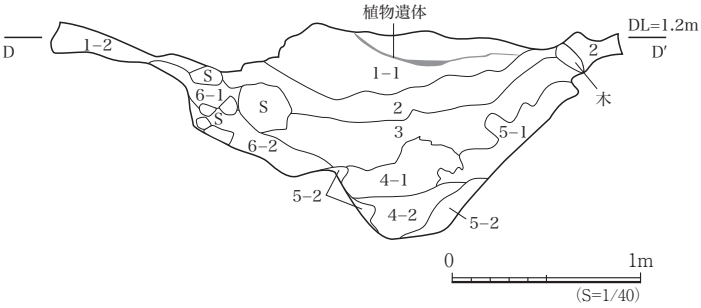


Fig.54　SD3 セクション図

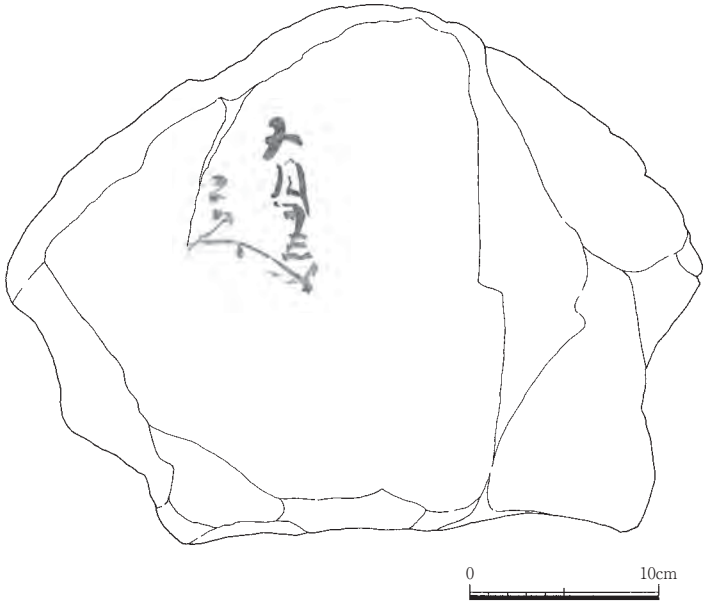


Fig.55　SD3石列墨書実測図（南より）

に配置されており、石列は溝に伴って築かれたものとみられる。また、北側背面では、5～30cm大の割石を検出した。西壁のトレンチ断面で背面状況を確認したところ、石列は、埋土上層下部の、滞水状態で埋積したとみられる粘土層の２層が堆積する以前には築かれていたとみられる。この石列の対岸は、多くが撹乱されており、不明な部分が多いが、肩部が残存する西端部では石列は検出されず、当初から北側のみに築かれていた可能性が考えられる。また、東半部で確認された何らかの施設の基礎とみられる柱状の木杭や板材との関係については、板材の検出面が石列の上位にあたり、石列の方が下位にある。石列の下部構造については、西壁トレンチを除いて未調査であるため、石の直下で木杭や板材などの有無は確認できていないが、少なくとも西壁付近においては見られなかった。また、石列をなす石の一つに、溝の内側側面に墨書で文字が書かれたものを確認しており、文字内容については不明であるが、図示した。SD3の切り合い関係ではSD4、SK33を切る。検出面はⅤ-1層であるが、西壁断面で近世前期の整地層とみられるⅢ′層を切ることを確認した。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付小皿２点、青花碗３点・皿３点、白磁皿１点、青磁碗１点、陶器中碗11点・大皿２点・大皿又は中皿３点・小皿35点・向付２点・瓶１点・壺１点・甕１点・壺又は甕３点・不明１点、土師質土器小皿174点・焼塩壺６点・焼塩壺蓋１点・土錘１点、鞴の羽口１点、鉄製品蓋１点、煙管１点、及び木製品と木片である。また、瓦片では軒丸瓦４点、丸瓦51点、平瓦128点が出土している。

図示したものは408～630である。408～419は磁器で、413～416・418が中国産、その他は肥前産である。408～412は染付。408～410は中碗。408は丸形で外面に山水文を描く。411・412は小皿。411は蛇ノ目高台をもつもので、内面に二重圏線を描く。412は内面に円圏と菊花、唐草文を描く。417は白磁の中皿である。419は青磁の小皿で、オリーブ灰色の半透明の釉を施す。高台内と見込みを釉剥ぎし、釉剥ぎ部に目痕が残る。413～416は中国景徳鎮窯系の青花。413は中碗で、やや厚手の体部をもつ。414も中碗で、外面に蝶又は植物その他の文様を描く。415は中皿で、内面に鹿と植物を描く。高台内に放射状の鉋痕が残る。416は丸形小皿で、口縁部内面に四方襷を描く。418は中国龍泉窯系の青磁碗。高台内無釉で、オリーブ灰色の釉を施す。

420～461は陶器。420は肥前産の灰釉丸形中碗で、17世紀後半～18世紀前半に生産された高台施釉灰釉丸碗の口縁部にあたる。421～424は唐津系灰釉陶器の中碗である。425は唐津系の鉄釉碗で、黒色の釉を施す。426は瀬戸・美濃産の鉄釉天目形碗で、黒色の釉を施す。427も天目形碗であ

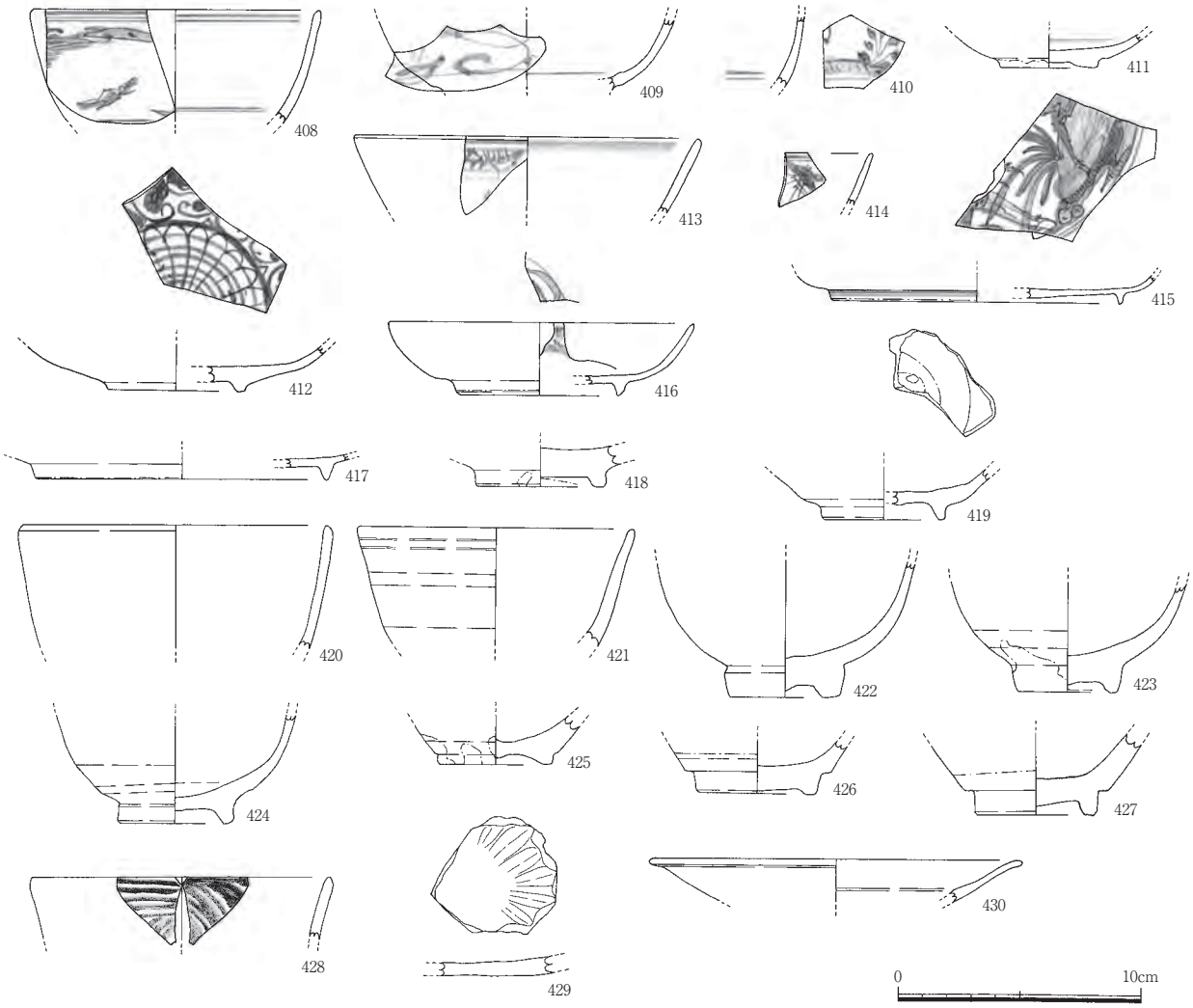


Fig.56　SD3出土遺物実測図（1）

る。428は肥前産の白化粧土刷毛目碗で、17世紀第4四半期～18世紀前半。429は軟質施釉陶器の皿で、内面に型による菊弁を施す。外底施釉で、灰白色を帯びる白濁した釉を施す。430は灰釉の五寸皿で、内底に段をもつ。431 ～ 444は唐津系灰釉陶器の小皿。431 ～ 436は内底に胎土目痕をもつもので、431は口縁部の数箇所をユビオサエし輪花形に変形させる。437 ～ 444は内底に砂目痕が残るもので、437 ～ 441・443は口縁部が溝縁状を呈する。また431・434 ～ 444は内底に段をもつ。446 ～ 449は唐津系灰釉陶器の大皿で、口縁部は折縁状を呈する。446・447は内底に胎土目痕が残る。445・450は志野焼の鉢。445は内面に鉄絵を描き、外底に紐状の三足を貼付する。450は外面に鉄絵を描く。451 ～ 453は擂鉢。452は備前の擂鉢で、焼締め。外面に回転ナデ、内面に櫛目を施す。454は把手を貼付するもので、水注類か。皿部分はロクロ成形の後ユビオサエして輪花形に成形している。体部は焼締めで、口縁部内外面にオリーブ黒色の釉が掛かる。455は鉄釉の小瓶で、黒褐色の釉を施す。456は灰釉の壺。内面無釉で、暗灰黄色の釉を施す。457 ～ 460は壺又は甕の底部で、457は備前。458は焼締めで、外面に自然釉が掛かる。459は灰釉の壺又は甕で、丹羽か。内外面施釉で、外面ににぶい褐色、内面に灰オリーブ色の釉を施す。460は焼締めの壺又は甕である。461は鉄釉の壺又は甕の体部で、外面に格子状のタタキ目、内面に円圏状の圧痕を残す。

464 ～ 494は土師質土器。464 ～ 486は小皿。464 ～ 485は外底回転糸切りで、485・486は外底に

直線方向の圧痕が残る。487 ～ 492は焼塩壺、493は焼塩壺の蓋である。493は胎土中に金雲母を含み関西産とみられる。494は土錘である。462・463は鞴の羽口である。筒状で、462は二次被熱により部分的に橙色に発色し、463は外面に自然釉が流れる。

495・496は銅製品。495は煙管の吸口。496は釣針である。497は鉄製の蓋で、紐状の摘みをもつ。

498 ～ 625は木製品。498 ～ 520は漆器。498 ～ 510は漆器椀である。498 ～ 502は高い高台をもつもので、498・500・502の高台内は浅く挽かれている。499・500・502は内外面黒漆。498は内外面に黒漆、外面に赤蒔絵を施す。501は外面に黒漆、内面に赤漆、外面の三方に蕪・俵の赤蒔絵を施している。500は高台内に「大」の彫りを認める。 503 ～ 506・508は低い高台をもつもので、503 ～ 505は内外面に黒漆、506・508は外面に黒漆、内面に赤漆を施す。503 ～ 506・508は外面に赤蒔絵による文様を施している。507・509は器壁が厚い椀で、外面に黒漆、内面に赤漆を施す。507は赤蒔絵による鶴を描く。510は外面黒漆、内面赤漆の椀で、無文である。511 ～ 514は漆器椀の蓋。512は内外面に黒漆を施し、外面に赤蒔絵による俵を描く。513は外面に黒漆、内面に赤漆を施し、外面に赤蒔絵による俵を描く。515は漆器の蓋物で、内外面に黒漆を施す。516は漆器の蓋物蓋で、楕円形。削り出しによって内面を窪ませている。外面に黒漆を施し、内面の漆は剥離している。517・518は器種不明で、517は両端に切り込み、片側面に山状の抉りを入れる。外面に黒漆を施し、内面の漆は剥離している。518は曲線的な抉り込みがあり、内外面に黒漆を施している。519は曲物の底板か。３枚の板を組み合わせており、内面に黒漆を施す。520は上部と片側面に方形の差し込み穴をもつもので、調度具の脚部か。外面に黒漆を施している。

521は盤か。隅丸方形で、上面の周縁に側板を貼り、木の皮紐で固定させている。周縁の数箇所に棒状の差し込み穴を認める。522は周縁に木釘が残存する。523 ～ 533は篦状製品で、523 ～ 528・531・532は先端付近を薄く削り出している。534 ～ 555は箸。556・558・559は盤や曲物等の底板か。556・558は数枚貼り合わせの底板の一部で、周縁に棒状の穴を穿ち、木皮の紐を通す。557は用途不明の板状製品である。560は曲物の底板で、一枚板を円形に削り出している。561・562は曲物の底板又は蓋、563は底板又は蓋である。564は曲物の側板で下部に釘穴、側面に紐孔を認める。565は手桶の側板の柄か。566・567は桶の底板で、複数の板を組み合わせる。568・569は栓か。570・571・573 ～ 576は桶の側板である。572は木製品の側板か。577は羽子板とみられるもので柄は欠損している。579は櫛である。背は湾曲し、歯は断面三角形を呈する。578は木刀で、刃部を薄く削り出し、鍔（581）を組み合わせる。鍔は八角形を呈する。580は両面に面取りを施し先端を尖らせる。柄は欠損する。582 ～ 585は独楽で、丸木を削り出して先端部を尖らせている。582 ～ 584は先端に鉄製の心棒が残存する。586は用途不明の円盤状製品で、中央に円孔を穿つ。587は灯明受皿の受け台で、アーチ状に削り出した２枚の板を十文字に組み合わせている。588は調度具の部品とみられるもので、円孔を穿つ。接合部には釘が残存する。589は中央に径1.5㎝の円孔をもち、両先端を双方から面取り径２㎜の円孔を穿つ。590 ～ 592・595 ～ 600は用途不明の板状製品。593は周縁と下部を曲線的に削り出しており、釘穴を認める。594は木製品の台部か。601は箱状の板材を斜めに削り出している。602・604は棒状製品である。603は棕櫚の縄紐、605・606は杭である。607 ～ 622は下駄。607 ～ 618は連歯下駄で、歯は削り出しによる。607・608は子供用の下駄である。

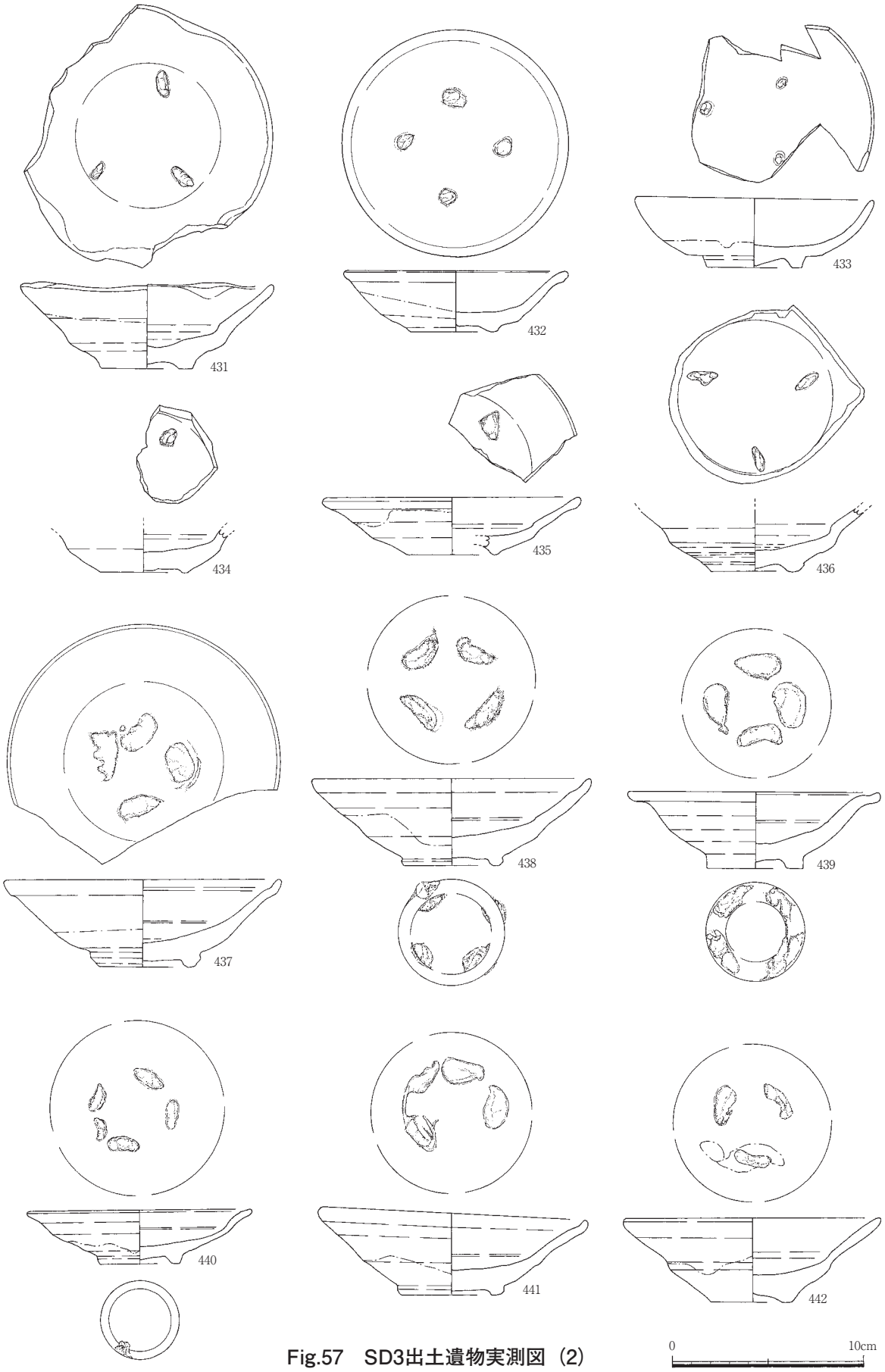


Fig.57　SD3出土遺物実測図（2）

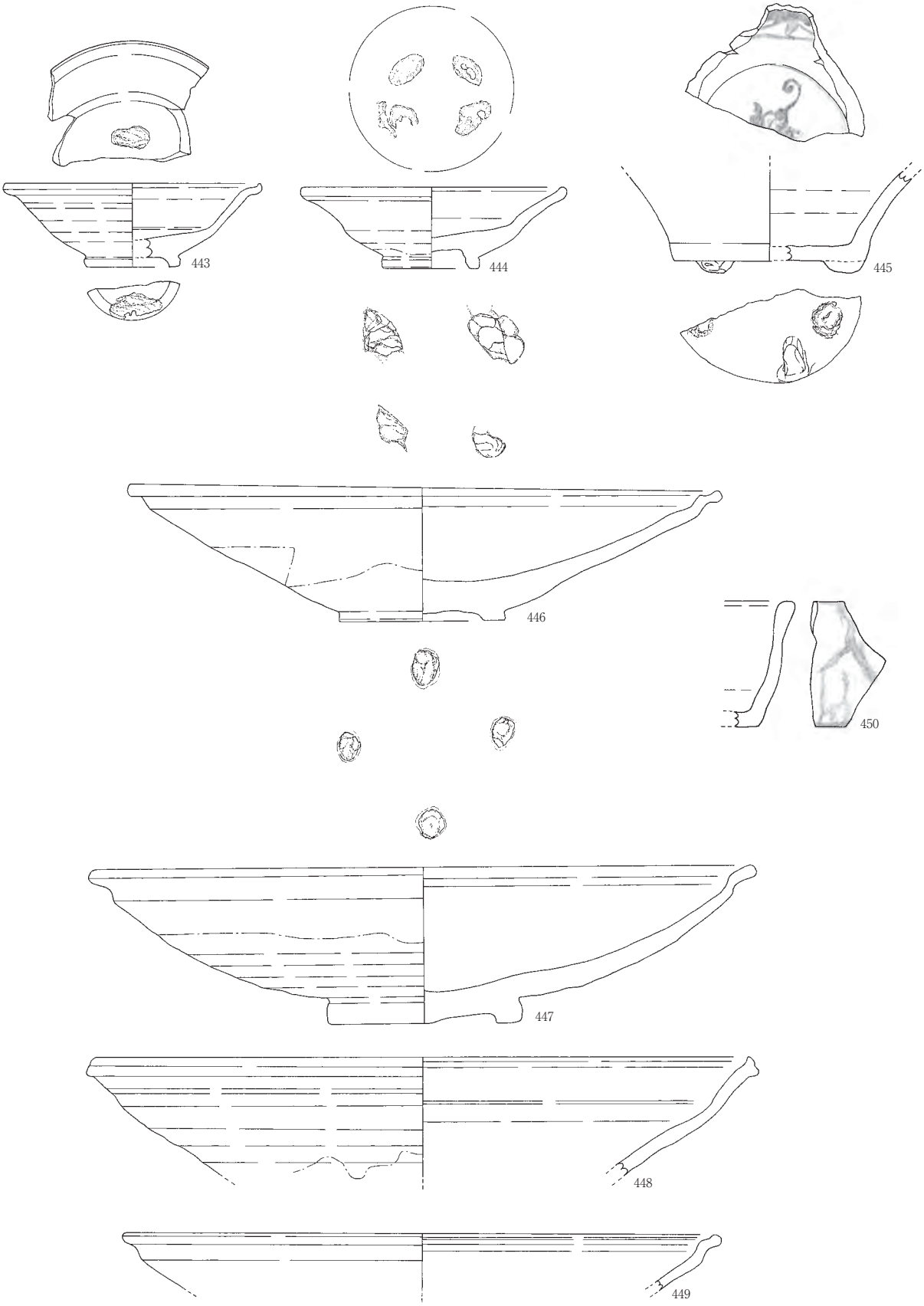


Fig.58　SD3出土遺物実測図（3）

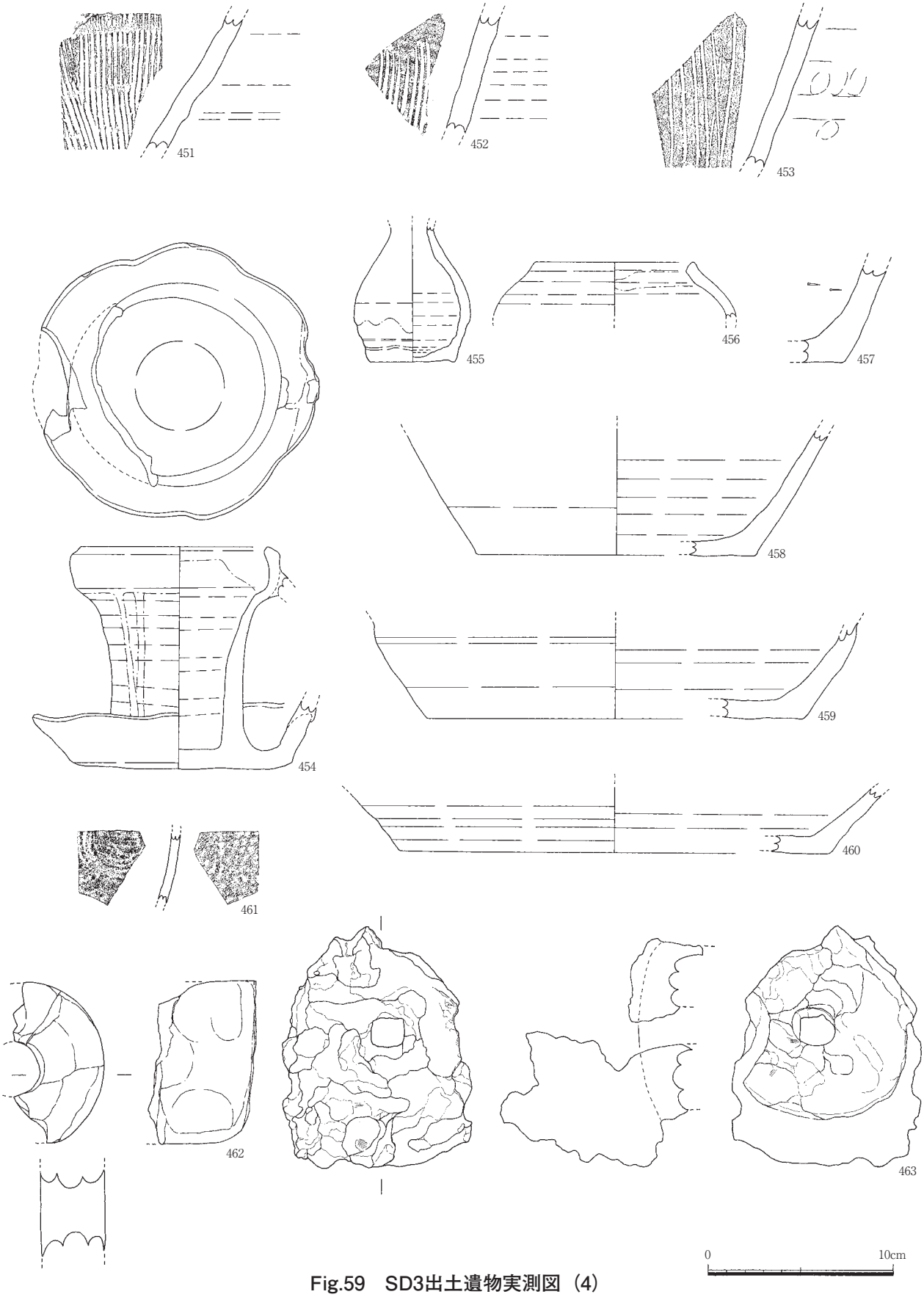


Fig.59　SD3出土遺物実測図（4）

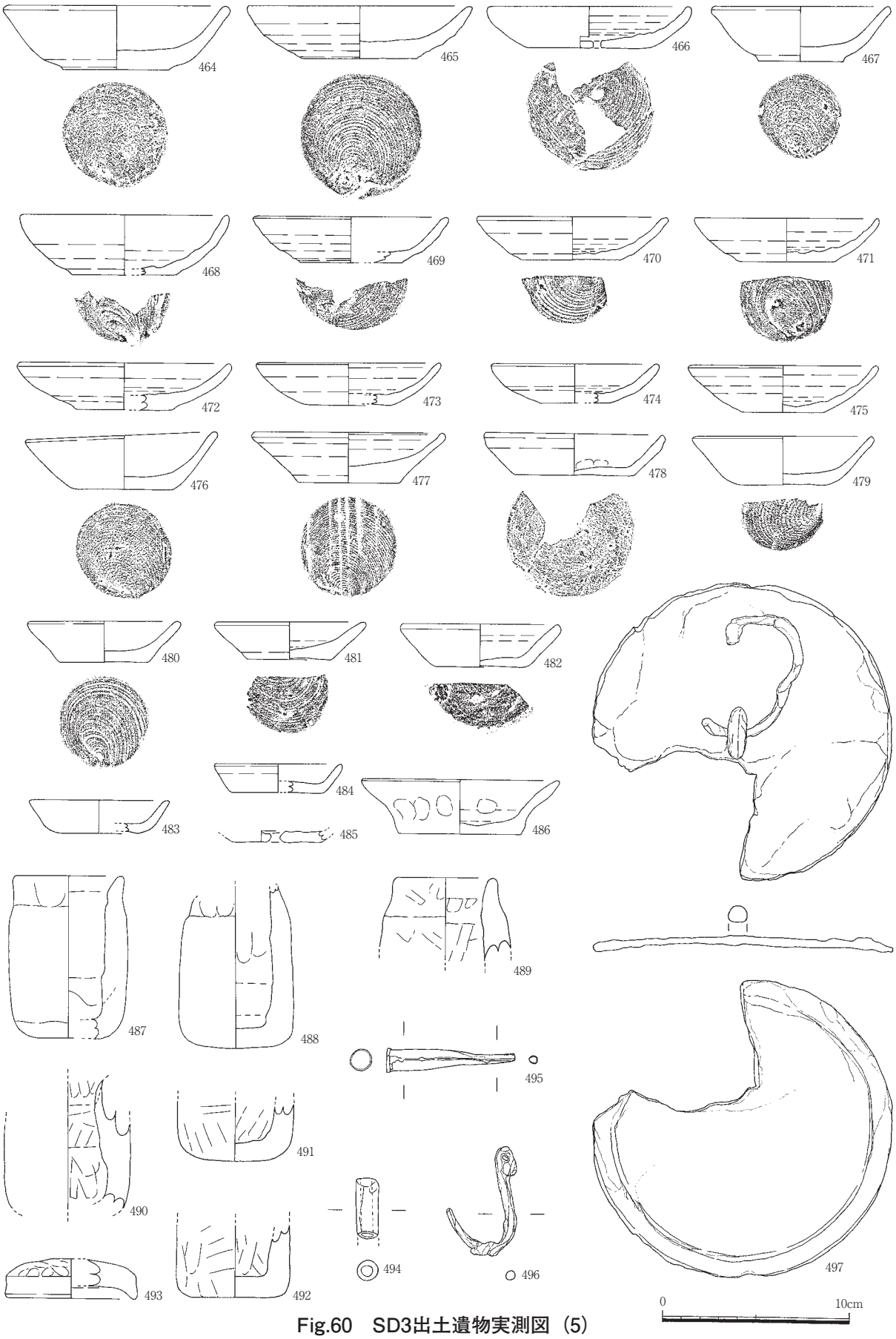


Fig.60　SD3出土遺物実測図（5）

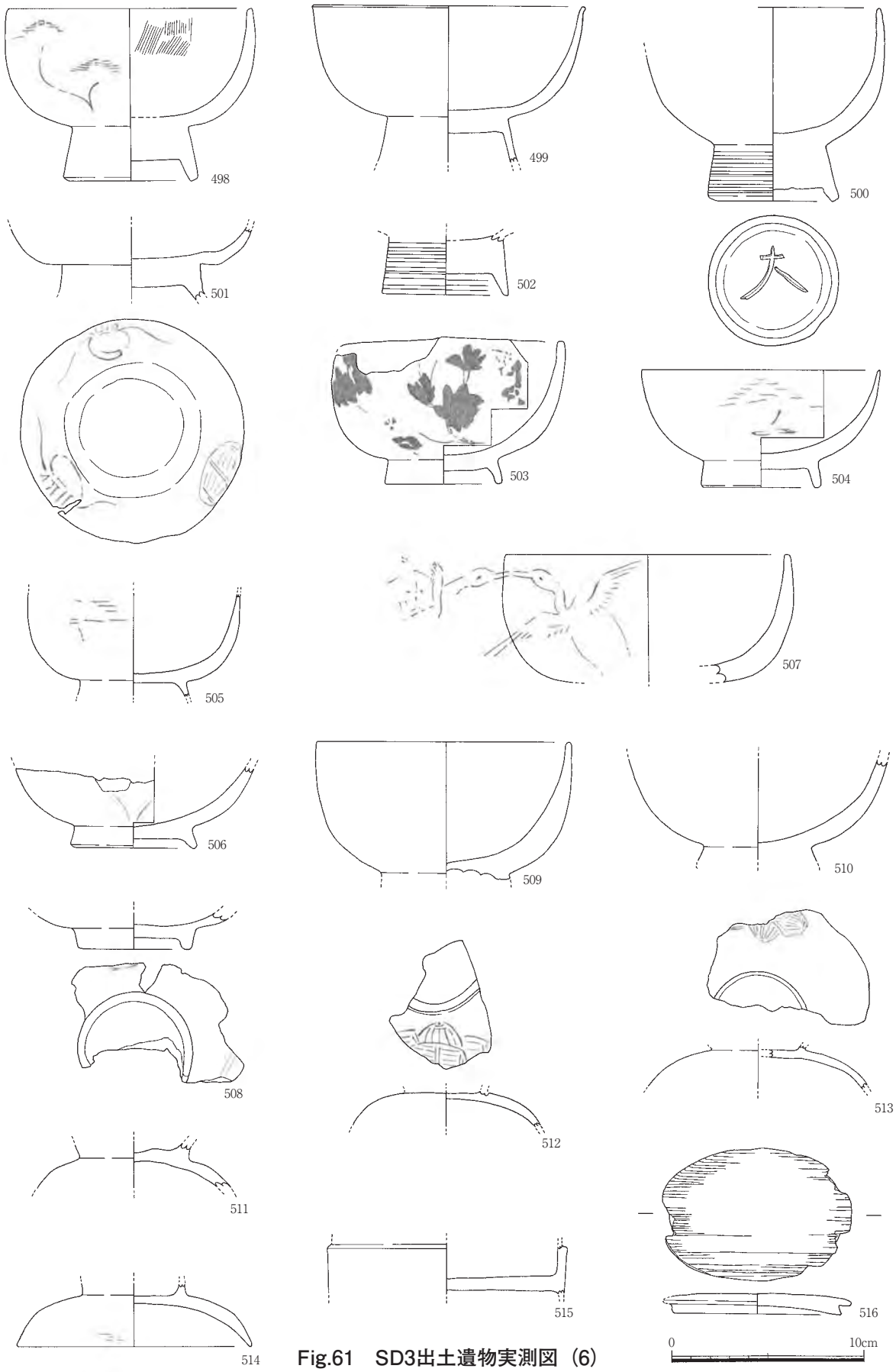


Fig.61　SD3出土遺物実測図（6）

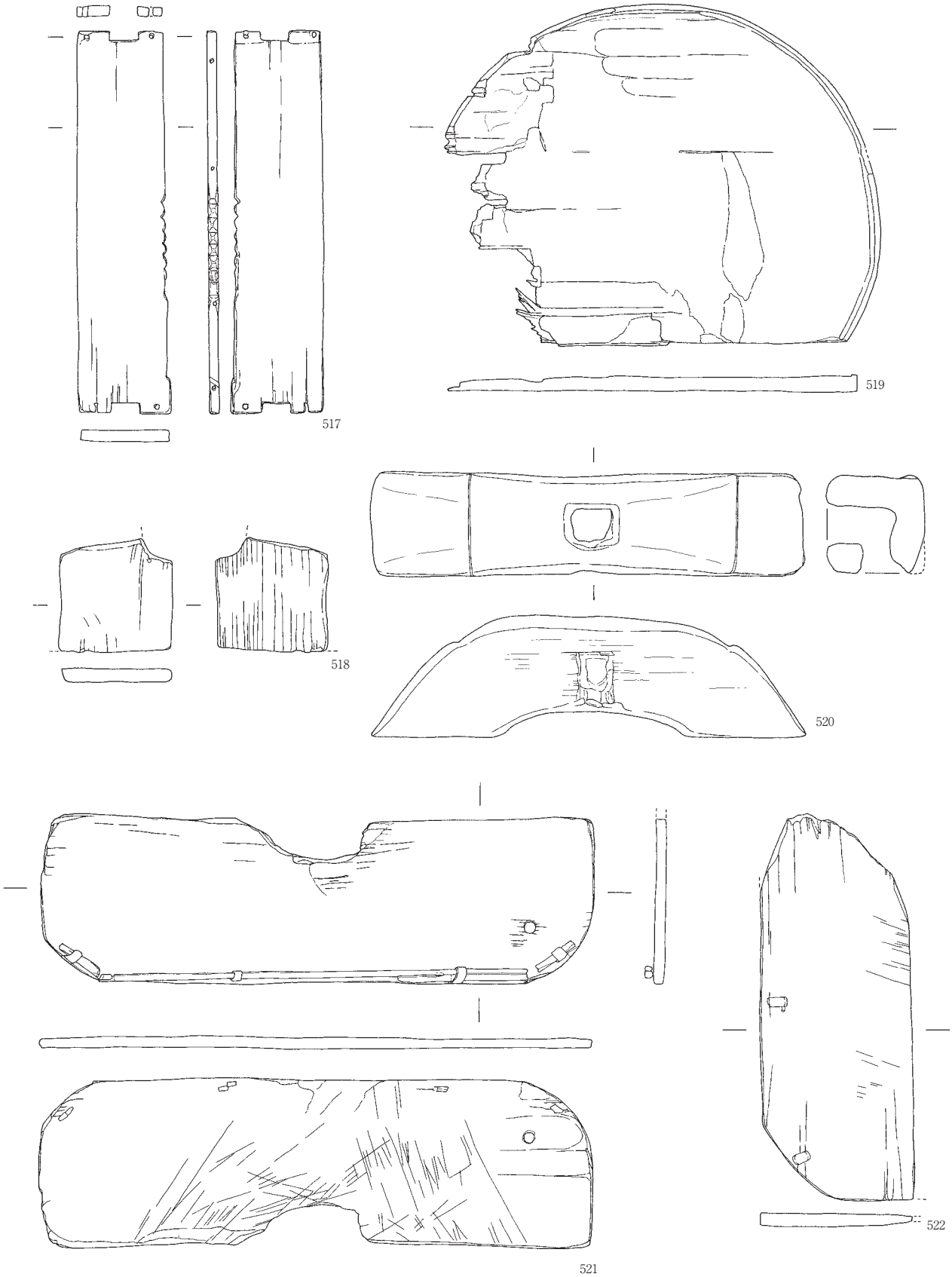


Fig.62　SD3出土遺物実測図（7）

0　10cm

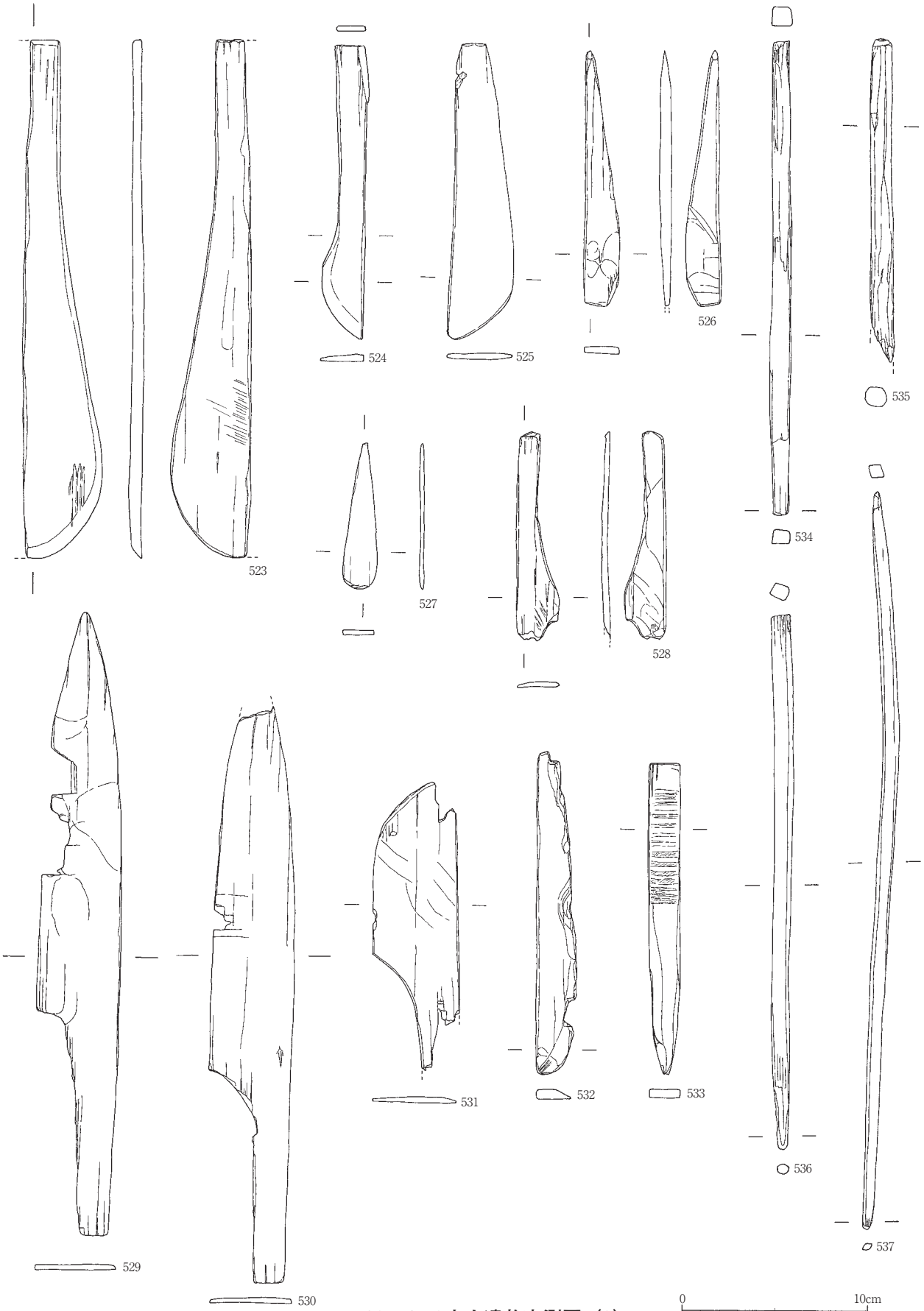


Fig.63　SD3出土遺物実測図（8）

Fig.64　SD3出土遺物実測図（9）

0　10cm

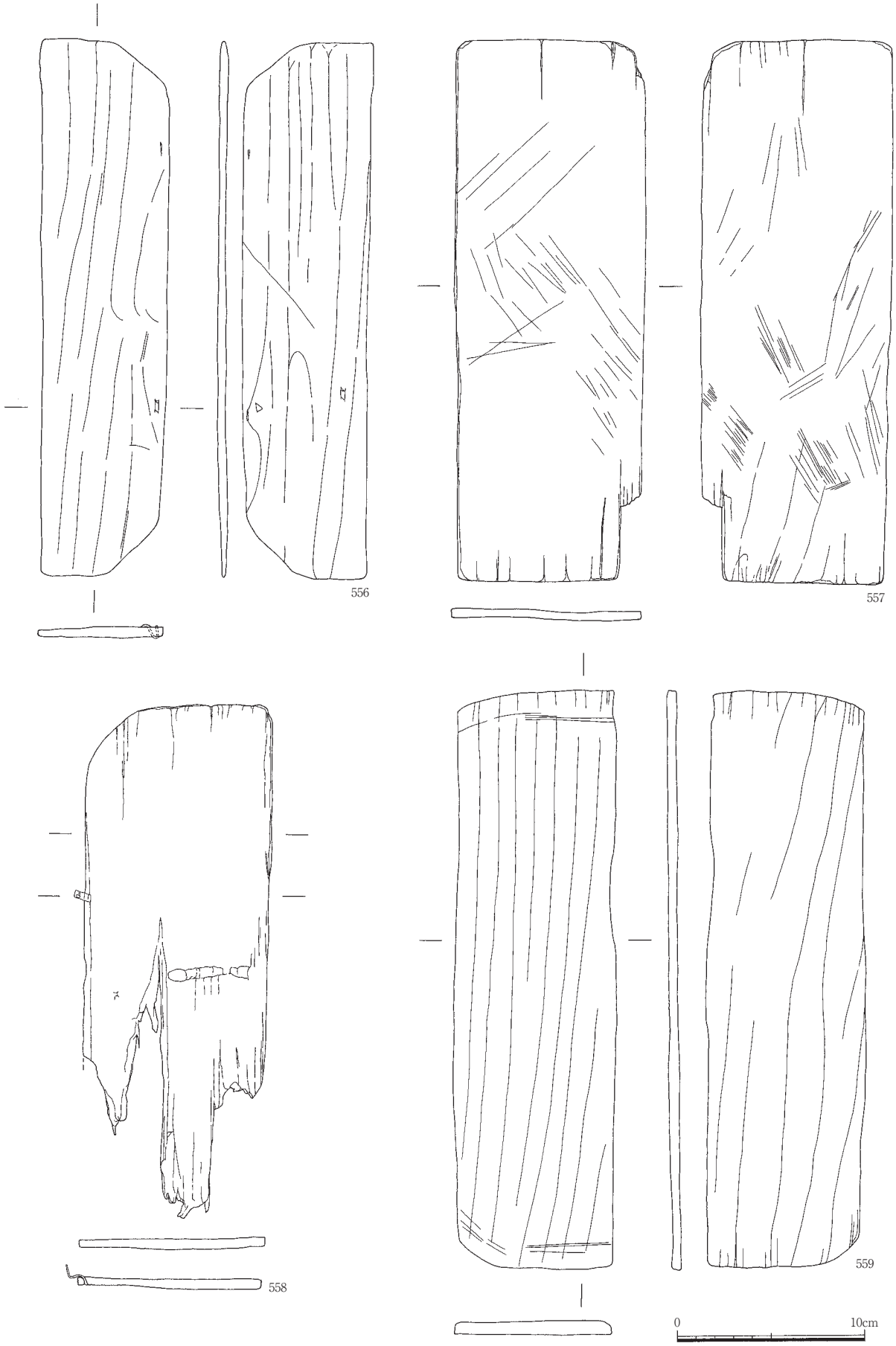


Fig.65　SD3出土遺物実測図（10）

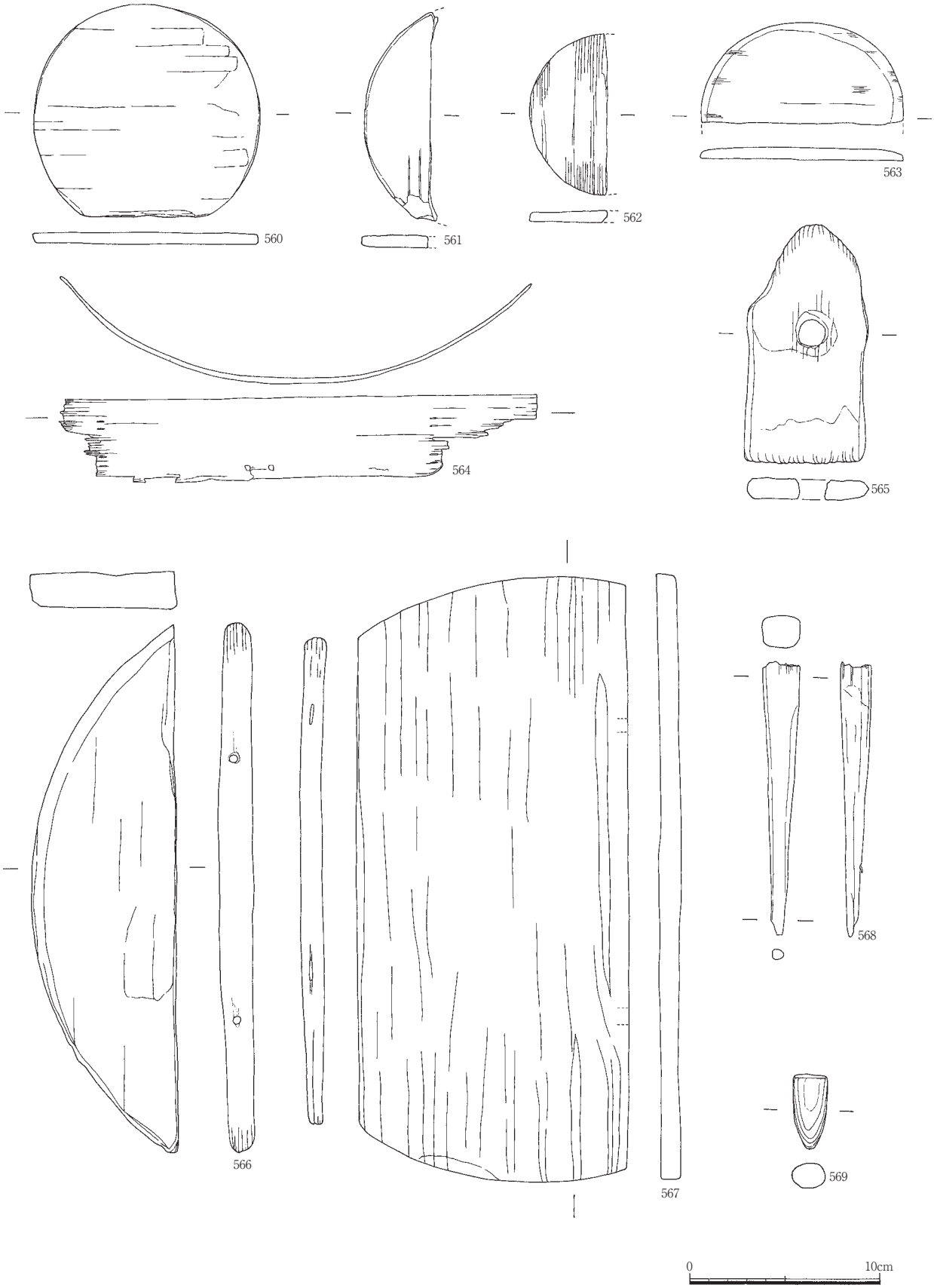


Fig.66　SD3出土遺物実測図（11）

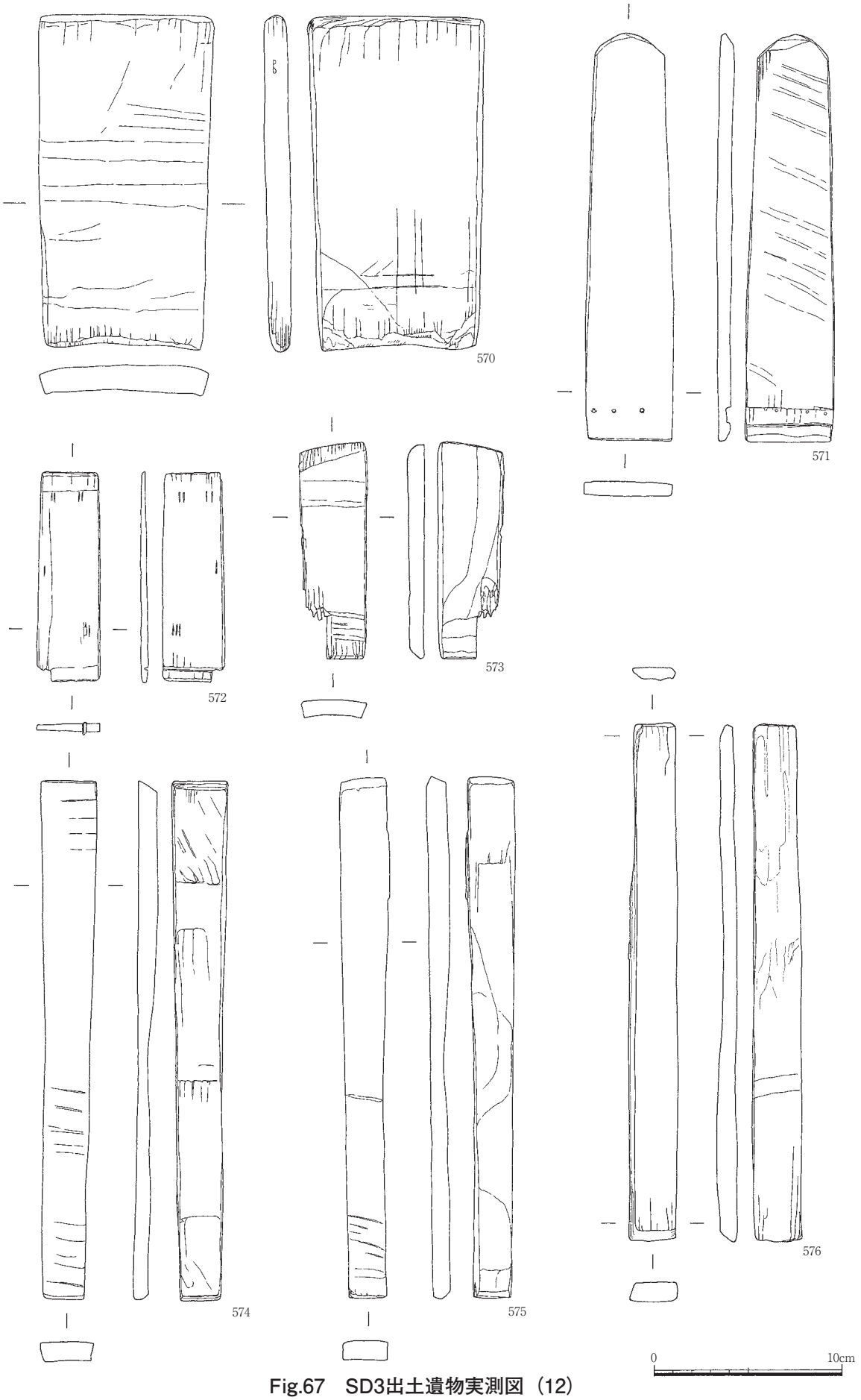


Fig.67　SD3出土遺物実測図（12）

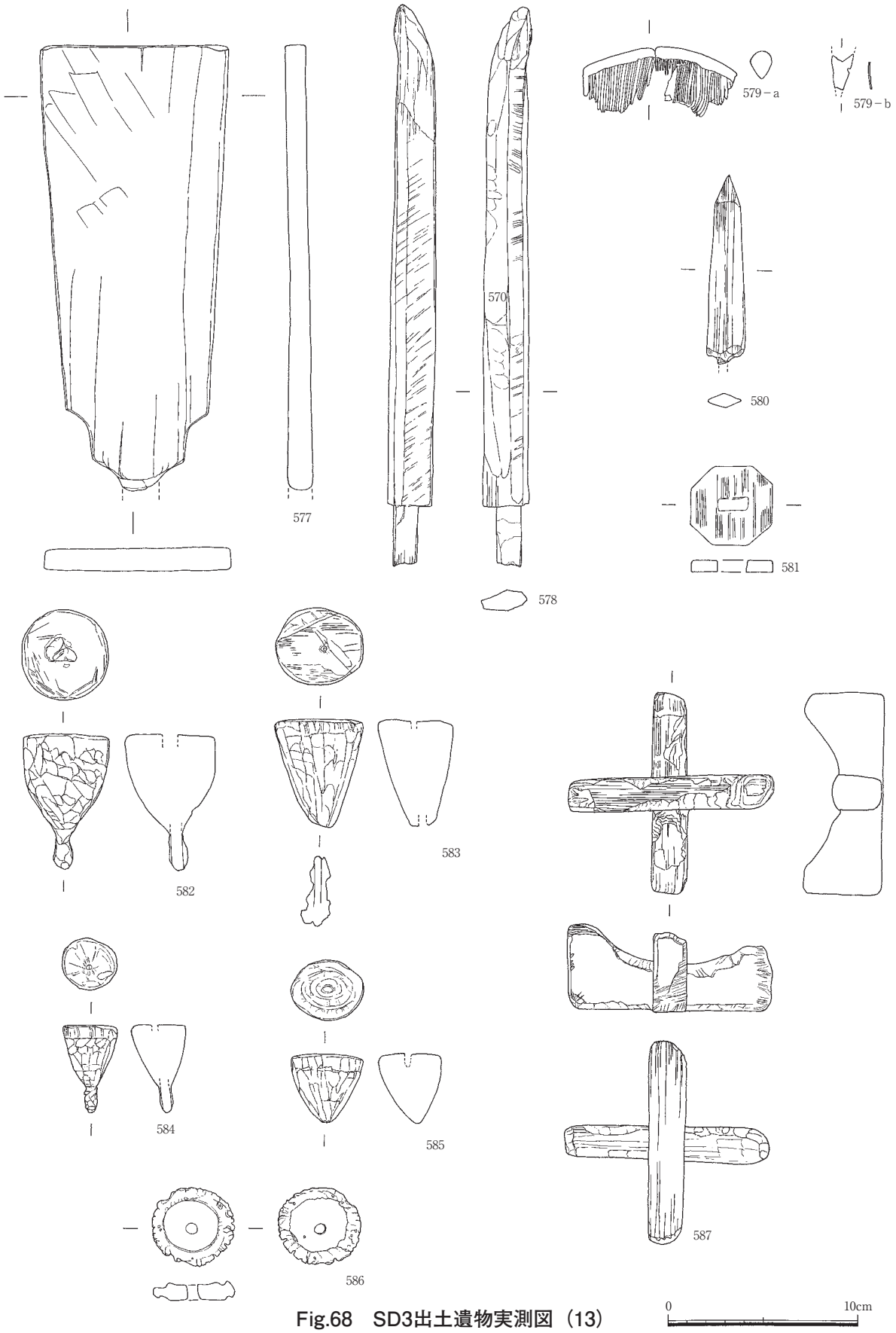


Fig.68　SD3出土遺物実測図（13）

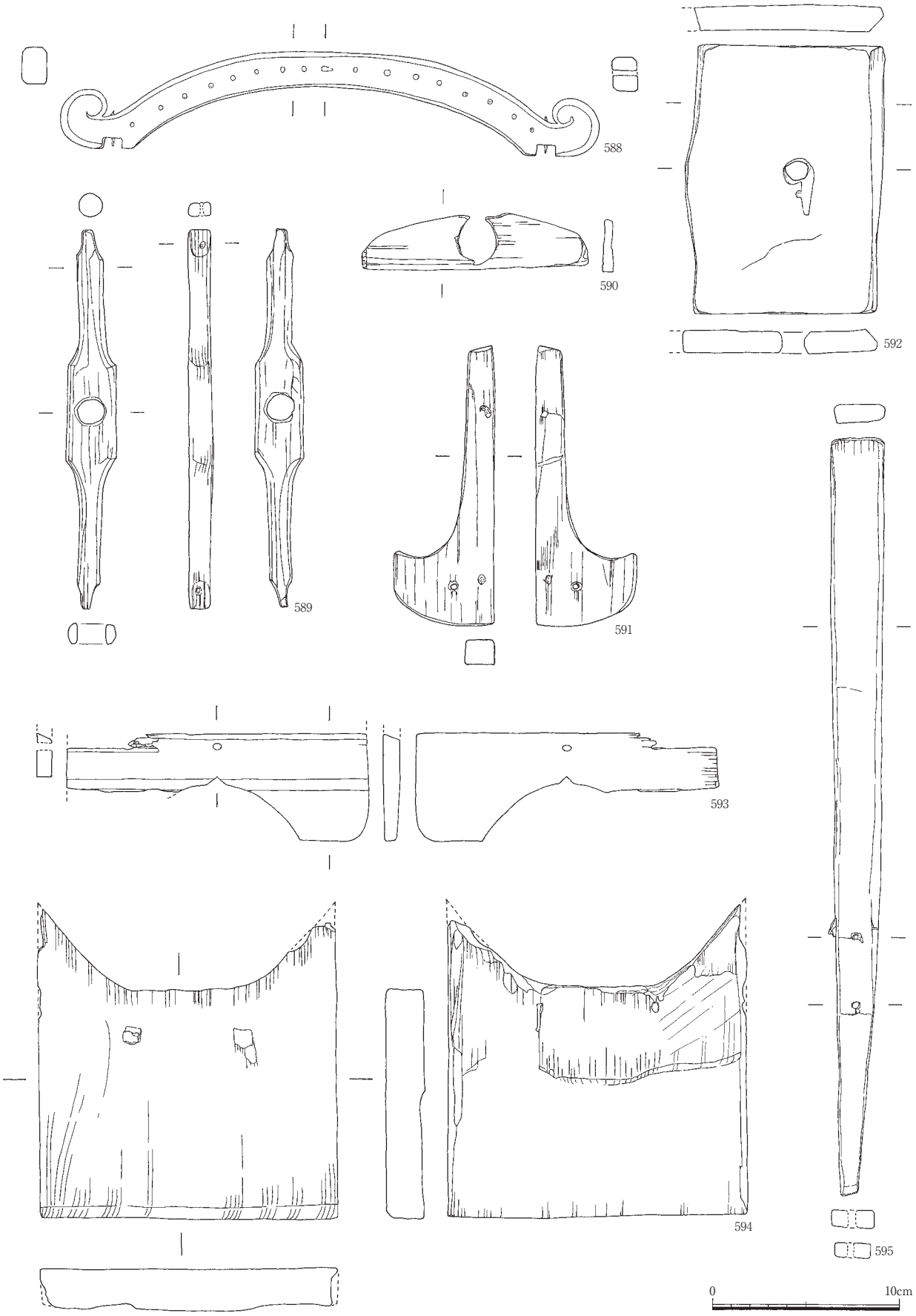


Fig.69　SD3出土遺物実測図（14）

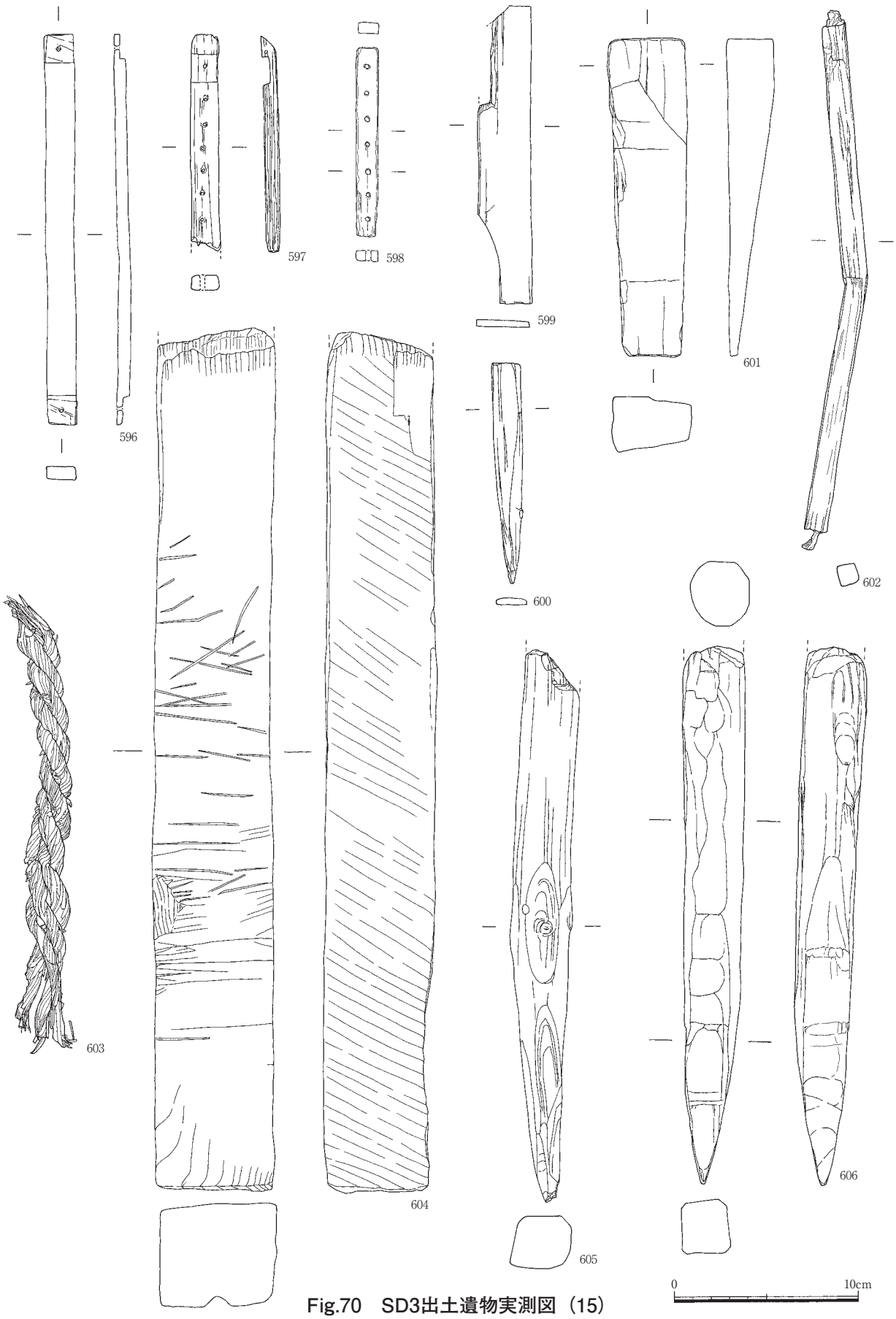


Fig.70　SD3出土遺物実測図（15）

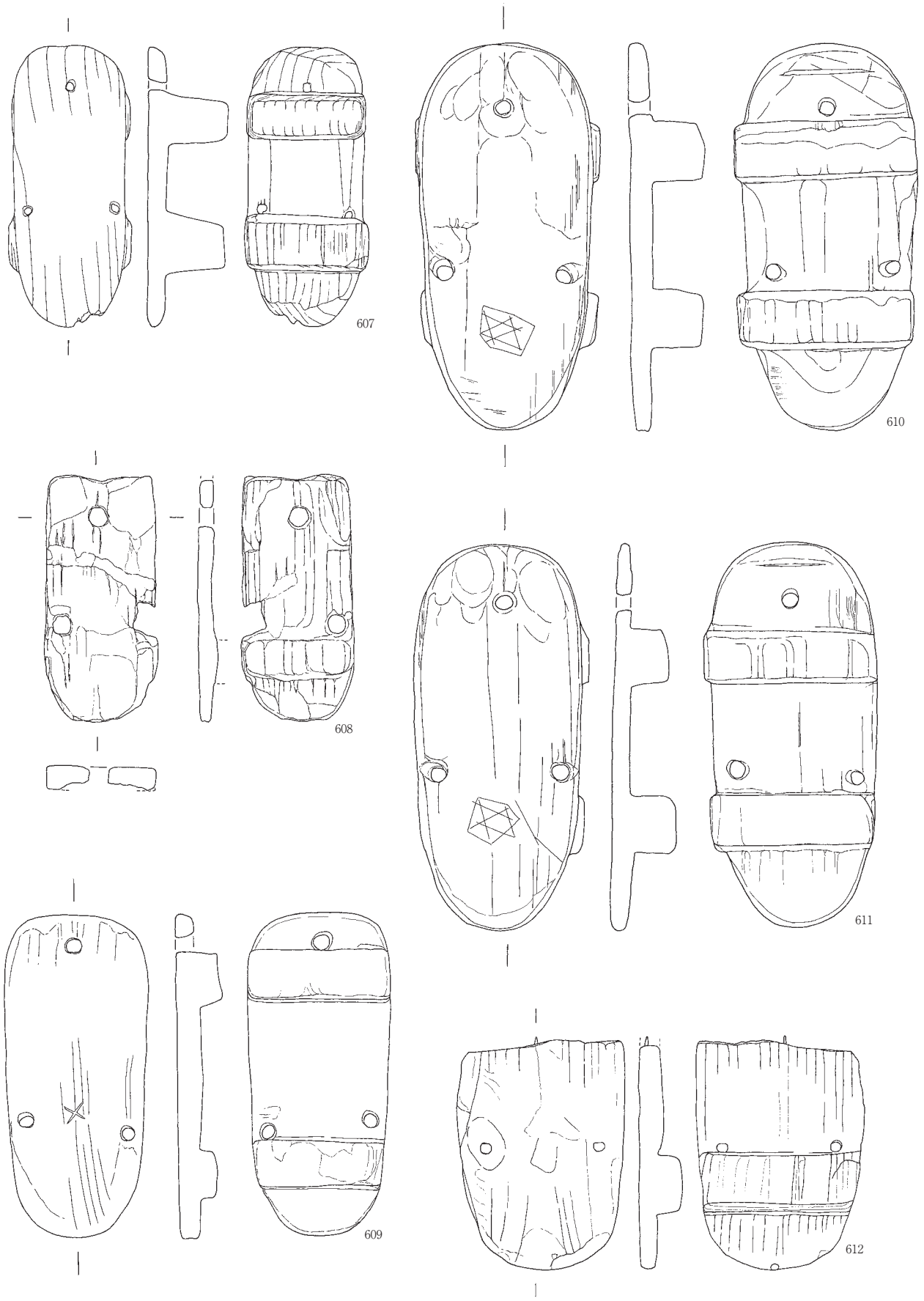


Fig.71　SD3出土遺物実測図（16）

0　10cm

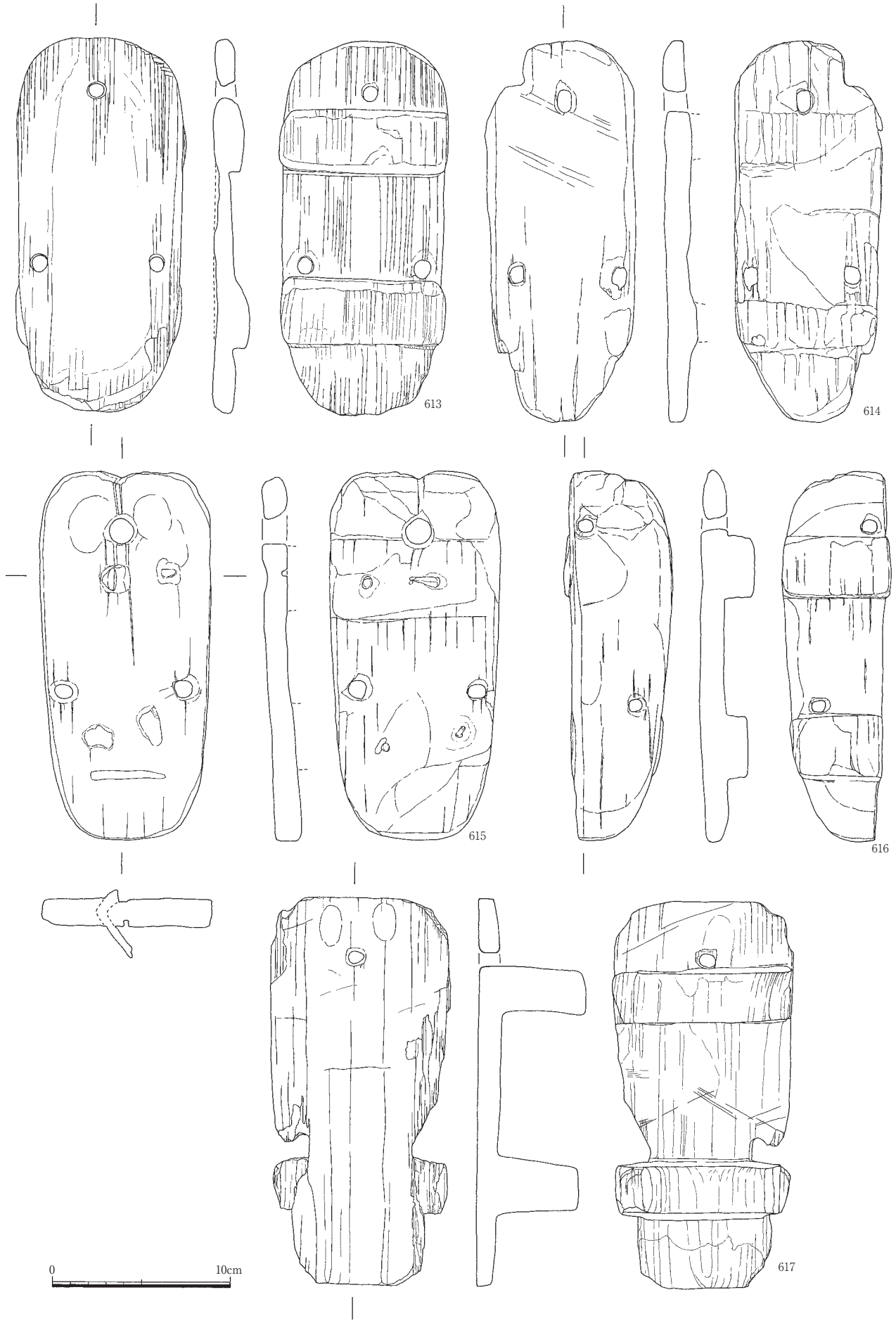


Fig.72　SD3出土遺物実測図（17）

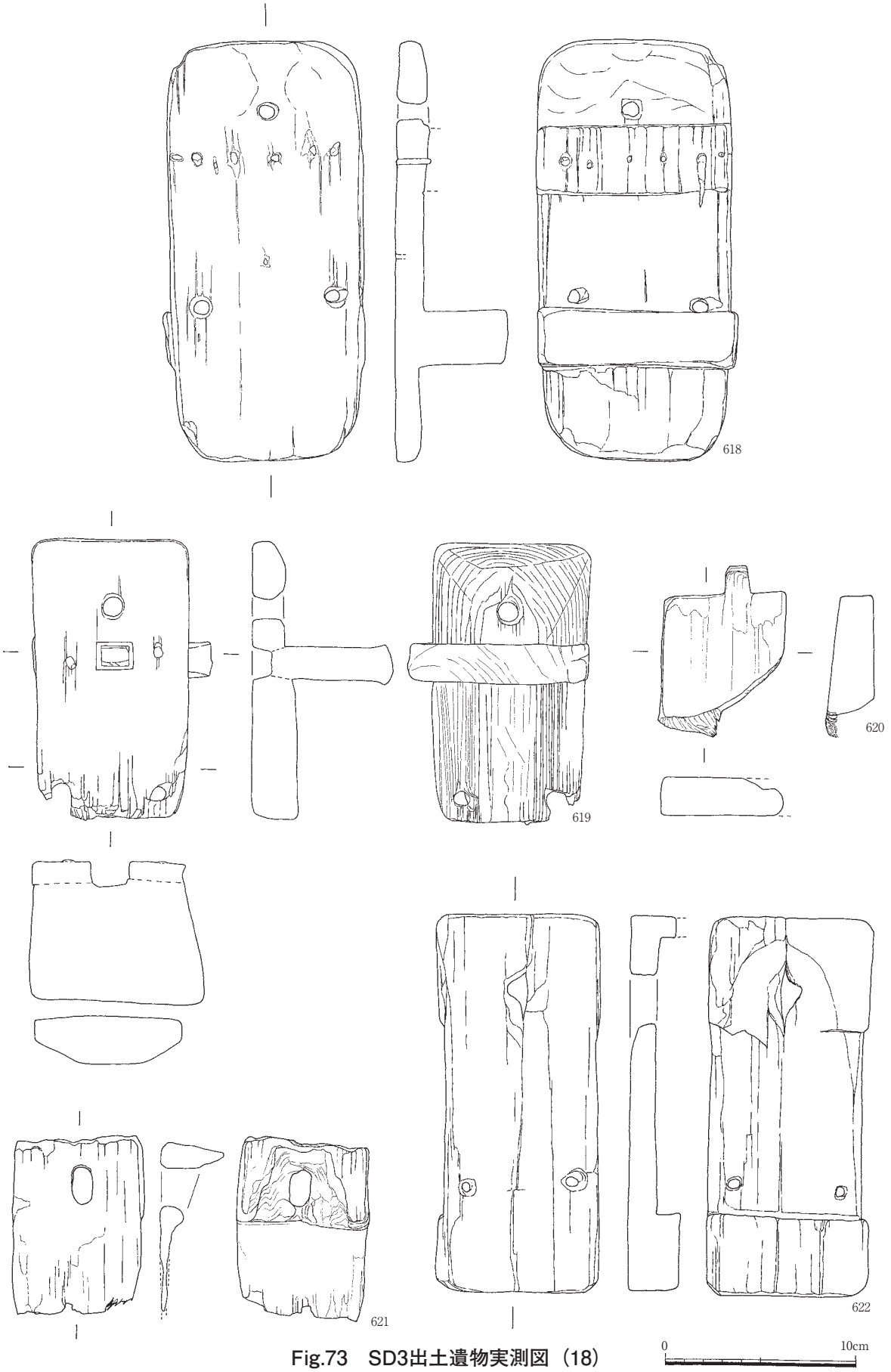


Fig.73　SD3出土遺物実測図（18）

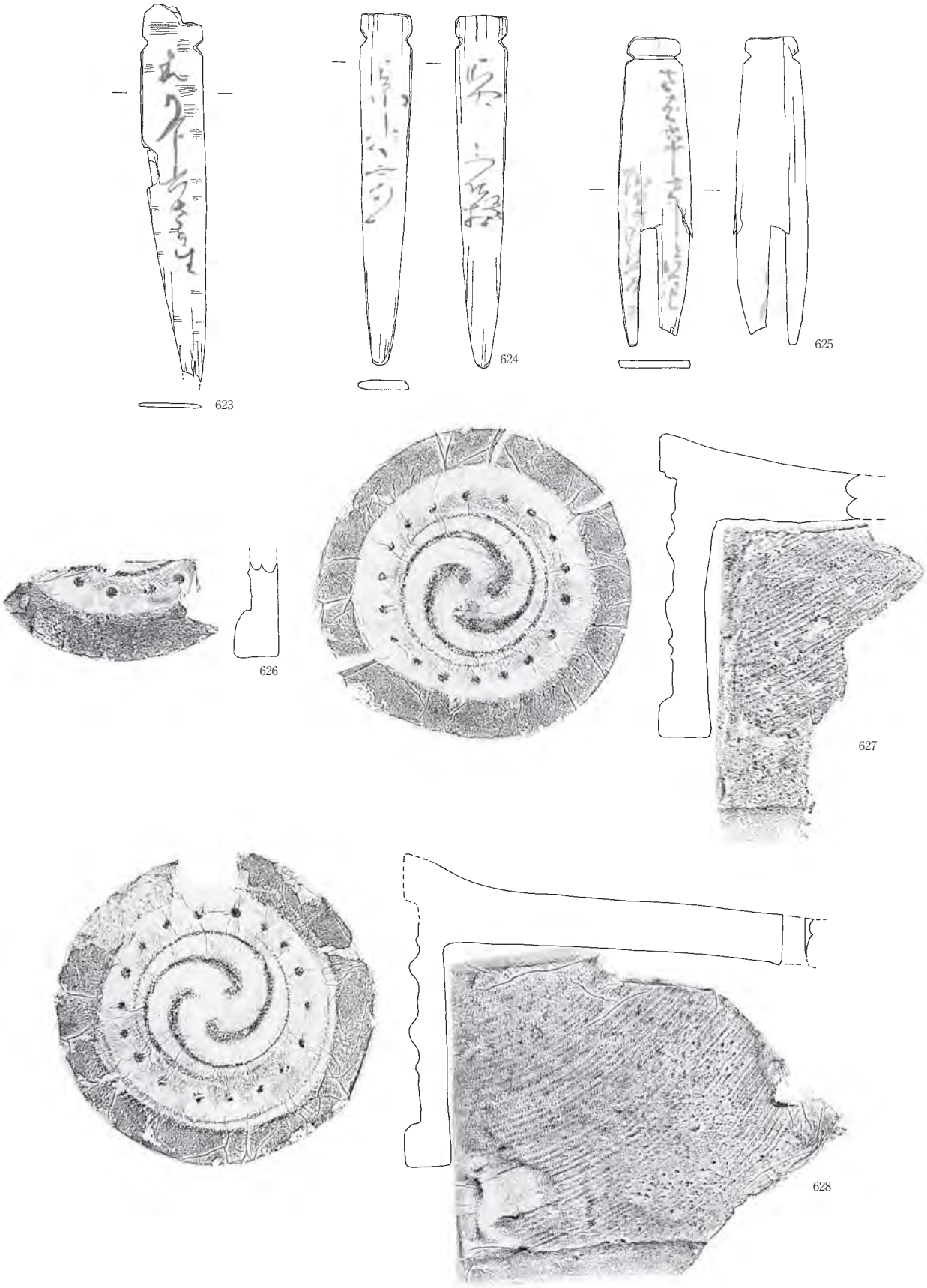
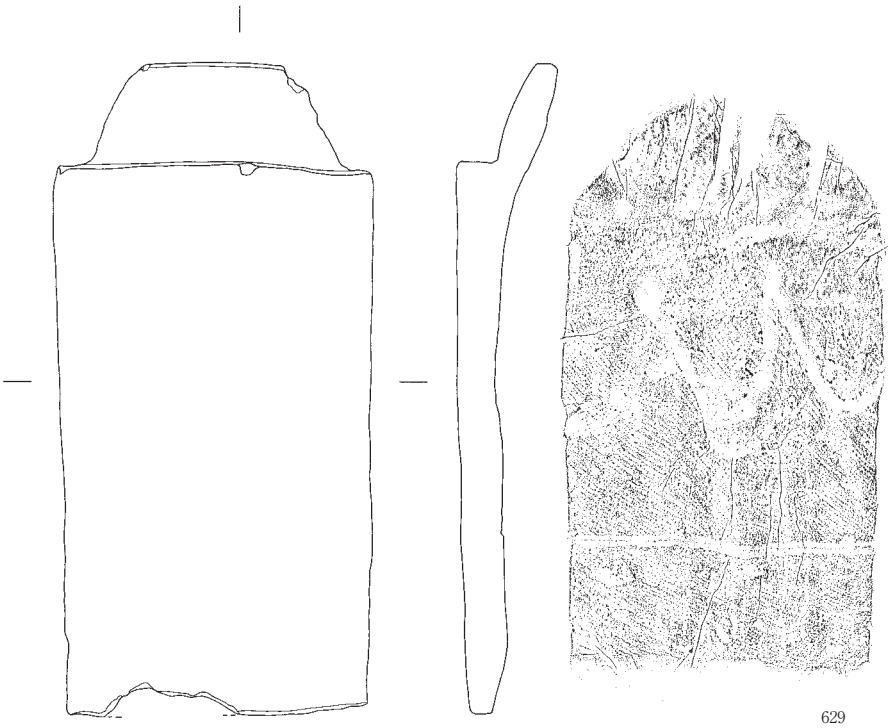
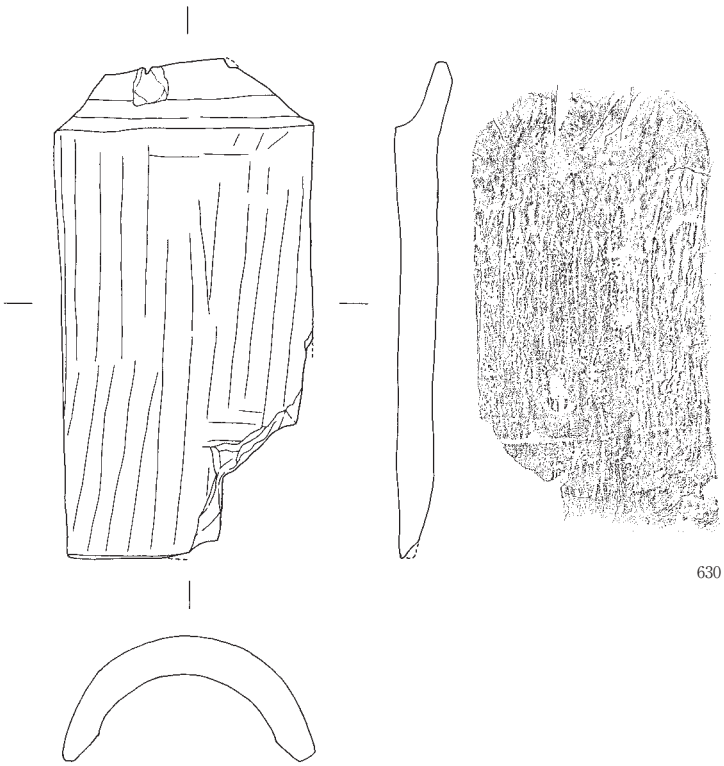


Fig.74　SD3出土遺物実測図（19）　0　10cm





0 10cm

Fig.75　SD3出土遺物実測図（20）

609 ～ 611は台部上面に釘彫りを認める。619・620は陰卯下駄で、歯は差し込みによる。619は歯の差し込みが使用により欠損し、鉄釘で補強している。621・622は刳り下駄である。623 ～ 625は木札で、上部に抉りをもつ。624・625は両面、623は片面に墨書を認める。

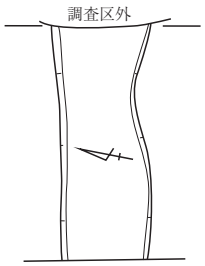
626 ～ 630は瓦。626 ～ 628は軒丸瓦、629・630は丸瓦である。627・628は連珠三巴文で、宝珠18個。瓦当面は荒く粗砂を含む。

SD3は17世紀に比定され、埋め戻し埋土中の遺物からその廃絶は17世紀第３四半期と推定される。

SD5（Fig.76・78）

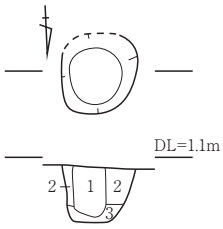
Ⅲ区A ～ B5グリッド、Ⅳ-1層で検出した東西方向の溝である。軸方向はN-77°-Eである。西部及び東部が調査区外に広がるため、規模は不明である。残存長1.24m、幅0.47m、深さ９cmを測る。埋土は上部が黒褐色シルト、下部が黄褐色砂混じりシルトである。北壁断面ではⅢ′層を切る。

図示したものは唐津系灰釉陶器の中碗（631）である。



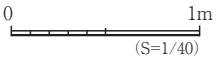
SD5

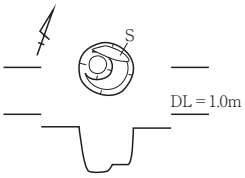
1 層：10YR3/2 黒褐色シルト（0.2 ～ 0.4 ㎝大の角礫、0.8～2 ㎝大の円礫を少量含む。橙色土粒を含む。炭化物を多く含む。）
2 層：10YR4/2 灰黄褐色砂混じりシルト（10YR5/2 灰黄褐色シルトブロックを含む。）



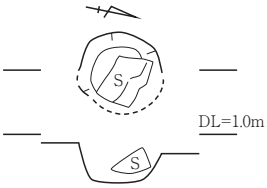
P25

1 層：10YR3/2 黒褐色シルト（0.2～1 ㎝大の角礫・円礫を少量含む。腐植土。）
2 層：2.5YR4/2 暗灰黄色シルト（0.2～1 ㎝大の角礫・円礫を少量含む。黄色シルトブロックを少量含む。炭化物を多く含む。）
3 層：10YR4/1 褐灰色粘土質シルト（1～2 ㎝大の円礫を多く含む。黄色シルトブロックを含む。）

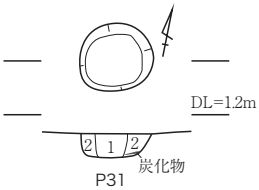




P9

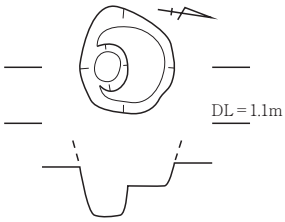


P20

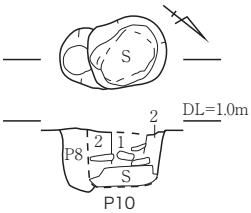


P31

1 層：10YR4/2 灰黄褐色シルト
2 層：10YR5/2 灰黄褐色シルト（0.3～0.5 ㎝大の角礫・円礫を含む。10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロックを含む。炭化物を少量含む。）

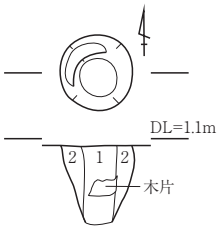


P45



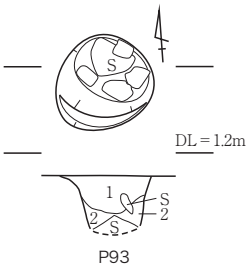
P10

1 層：7.5YR3/3 暗褐色（腐植土。締まりなし。）
2 層：10YR5/2 灰黄褐色粗砂混じりシルト（0.5～2 ㎝大の角礫・円礫を含む。浅黄色シルトブロック・炭化物を多く含む。）



P34

1 層：10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト（0.2～1 ㎝大の角礫・円礫を多く含む。木片を含む。腐植土。）
2 層：10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（0.2～1 ㎝大の角礫・円礫を多く含む。2 ㎝大の円礫を少量含む。黄色・明赤褐色ブロック、炭化物を少量含む。）



P93

1 層：10YR4/3 にぶい黄褐色砂混じりシルト（粗砂、0.4～1 ㎝の角礫、灰黄褐色シルトブロックを少量含む。橙色土粒を少量含む。）
2 層：10YR4/1 褐灰色砂混じりシルト（粗砂、0.2 ㎝の角礫を少量含む。）

Fig.76　SD5・P8 ～ 10・20・25・31・34・45・93 平面図・セクション図・エレベーション図

(5) ピット

調査区内からは、建物やピット列を構成するとして第２節（1）に挙げたピットを除き、近世及び近世と考えられるピットを59基検出している。これらのうち、検出層位、出土遺物や遺構の切り合い関係などから確実に近世と判断できるものは17基（P1 ～ 6・9・10・18・20・21・25・31・45・93・113・115）であり、他は検出層位、埋土の特徴などから近世の可能性が高いと判断したものである。ゆえに、このなかには、中世まで遡る可能性があるものも16基（P38・76 ～ 78・81 ～ 86・89・91・94・110 ～ 112）含まれており、出土遺物や埋土の特徴からは判断できなかったが近代のピットも少数含まれる可能性がある。また、検出層位や埋土の特徴、瓦の出土などから３基のピット（P79・95・117）は中世又は近世後期に該当する可能性がある。柱痕跡の確認されたピットは９基（P10・25・31・34・45・83・84・90・104）である。また、床面で根石や礎石状の石が確認されたピットは７基（P9 ～ 11・20・93・95・116）である。以下ではこれらのピットを示した。

P9（Fig.76）

TP5、Ⅳ-1層で検出した。径28×20㎝、深さ24㎝を測る。埋土中位から長辺20cmの石を確認した。埋土は灰黄褐色粘土質シルトである。出土遺物は唐津系灰釉陶器皿の体部１点と土師質土器杯又は皿の体部５点である。

P10（Fig.76）

TP5、Ⅳ-1層で検出した。径40㎝、深さ28㎝、柱痕径15cmを測る。掘方埋土が灰黄褐色粗砂混じりシルトで、柱痕埋土が暗褐色を呈する腐植土層である。柱痕床で長辺36cmの上面が平らな礎石状の石が検出された。P8を切る。周辺のP9・11・20でも埋土中層～下部で礎石状の石が検出されていることから、調査区外の状況によっては、これらの柱穴は建物を構成する可能性がある。出土遺物は色絵磁器の体部１点である。

P11（Fig.77）

TP5、Ⅳ-1層で検出した。径40cm、深さ11㎝を測る。床面で長辺20cm程の石を検出した。埋土は灰黄褐色粘土質シルトである。

P20（Fig.76・78）

TP5、SD1埋土中で検出した。径43cm、深さ10cmを測る。下層で長辺34㎝の割石を検出した。埋土は、灰色シルトである。SD1を切る。出土遺物は唐津系灰釉陶器小皿の口縁部１点、灰釉皿の口縁部１点、肥前産染付瓶の体部１点である。

P25（Fig.76）

TP9、Ⅳ-1層で検出した。径40㎝、深さ30cm、柱痕径17㎝を測る。掘方埋土は暗灰黄色～褐灰色を呈するシルト～粘土質シルト、柱痕埋土は黒褐色シルトである。出土遺物は土師質土器小皿の底部２点と体部細片、瓦片２点である。また柱痕からは柱根とみられる木片が出土している。

P31（Fig.76）

TP7、SK12埋土中で検出した。径36㎝、深さ13cm、柱痕径17㎝を測る。埋土は掘方、柱痕ともに灰黄褐色シルトである。SK13を切る。遺物は柱痕から土師質土器杯又は皿の口縁部１点が出土している。

P34（Fig.76）

TP7、Ⅳ-1層で検出した。径37㎝、深さ40cm、柱痕径15cmを測る。掘方埋土はにぶい黄褐色シルト、柱痕埋土は灰黄褐色粘土質シルトである。出土遺物は、中世の土師質土器鍋又は甕の体部１点である。

P45（Fig.76）

TP7、SK12埋土中で検出した。径44cm、深さ17㎝、柱痕径15cmを測る。埋土は掘方、柱痕ともに、灰黄褐色シルトであり、柱痕部には木片が残存していた。SK13を切る。出土遺物は確認できていない。

P79（Fig.77）

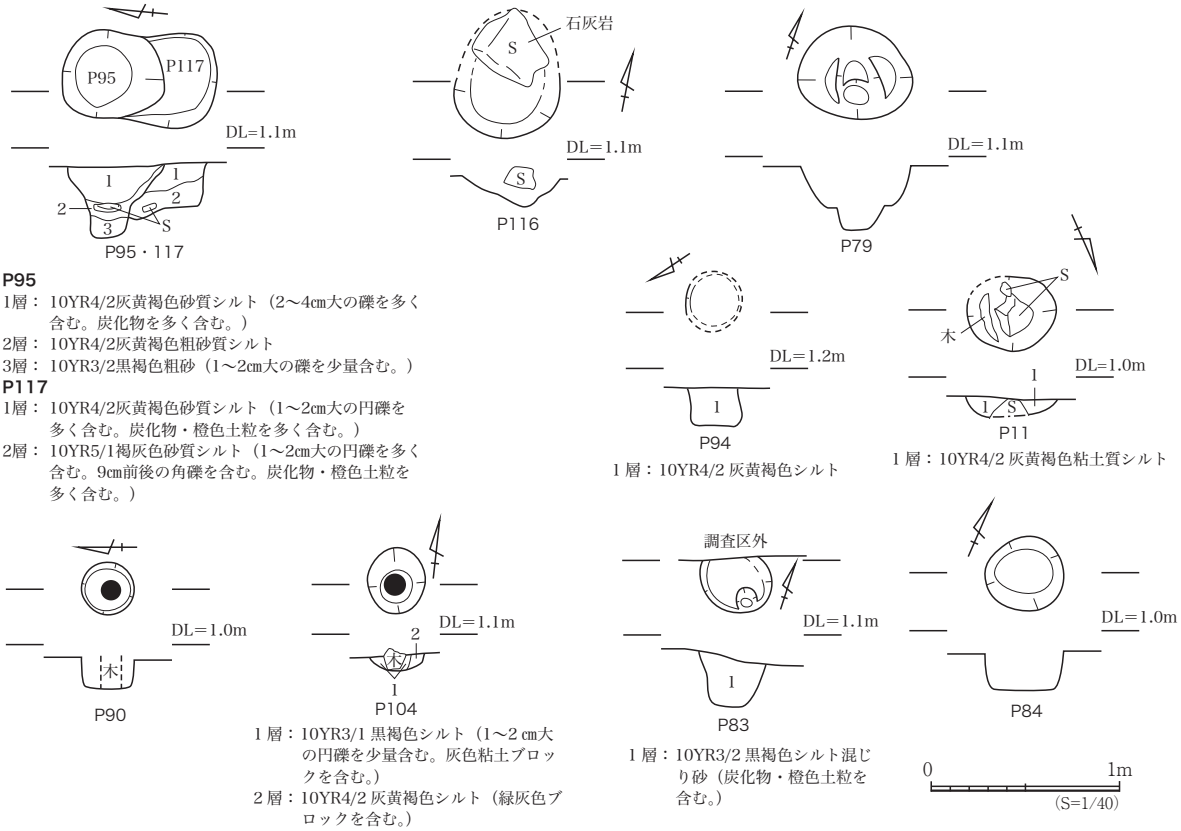
Ⅰ区B2グリッド、Ⅳ-1層で検出した。径24㎝、深さ33㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は、土師質土器小皿の底部２点と瓦片12点である。

P83（Fig.77）

Ⅰ区F1グリッド、Ⅳ-3層で検出した。径38㎝、深さ29cm、柱痕径８㎝を測る。埋土は黒褐色シルト混じり砂で、柱痕部には褐灰色シルトブロックを含む。

P84（Fig.77）

Ⅰ区F1グリッド、Ⅳ-3層で検出した。径37㎝、深さ13cmである。柱痕径は８㎝を測る。埋土は黒褐色シルト混じり砂で、柱痕部には褐灰色シルトブロックを含む。



P95
1層： 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト（2～4㎝大の礫を多く含む。炭化物を多く含む。）
2層： 10YR4/2灰黄褐色粗砂質シルト
3層： 10YR3/2黒褐色粗砂（1～2㎝大の礫を少量含む。）

P117
1層： 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト（1～2㎝大の円礫を多く含む。炭化物・橙色土粒を多く含む。）
2層： 10YR5/1褐灰色砂質シルト（1～2㎝大の円礫を多く含む。9㎝前後の角礫を含む。炭化物・橙色土粒を多く含む。）

1層：10YR4/2 灰黄褐色シルト

1層：10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト

1層：10YR3/1 黒褐色シルト（1～2㎝大の円礫を少量含む。灰色粘土ブロックを含む。）
2層：10YR4/2 灰黄褐色シルト（緑灰色ブロックを含む。）

1層：10YR3/2 黒褐色シルト混じり砂（炭化物・橙色土粒を含む。）

Fig.77　P11・79・83・84・90・94・95・104・116・117 平面図・セクション図・エレベーション図

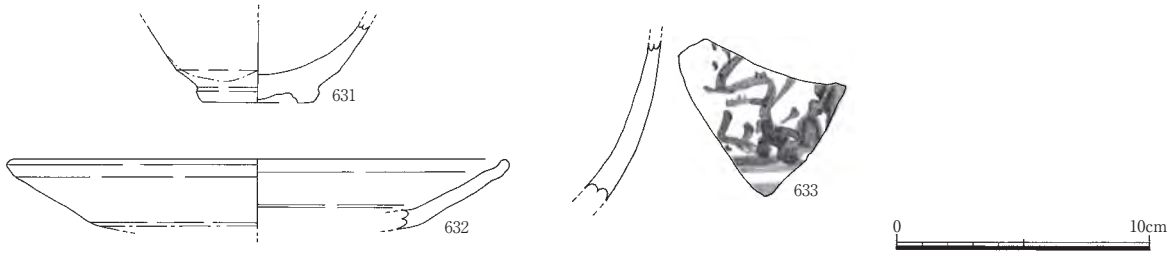


Fig.78　SD5・P20出土遺物実測図
（SD5：631、P20：632・633）

P90（Fig.77）

Ⅰ区D2グリッド、Ⅴ-1層で検出した。径27㎝、深さ24㎝を測る。径10cm程の柱が残存しており、柱の底部分を検出したとみられ、本来はさらに上から掘り込まれていたと考えられる。埋土は灰黄褐色シルトで下部は灰色を呈する。出土遺物は土師質土器杯又は皿の口縁部1点と体部である。

P93（Fig.76）

Ⅲ区A5グリッド、Ⅳ-1層で検出した。径48cm、深さ30cmを測る。埋土はにぶい黄褐色～褐灰色を呈する砂混じりシルトである。下部で角礫の集中を検出した。出土遺物は銅緑釉を施した土瓶の体部１点と土師質土器小皿の口縁部１点である。

P94（Fig.22・77）

Ⅲ区A5グリッド、Ⅳ-1層で検出した。径27㎝、深さ20㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

P95（Fig.77）

Ⅰ区C2グリッド、Ⅴ-1層で検出した。径56㎝、深さ40cmを測る。下部で長辺15cmの石を検出した。埋土は灰黄褐色砂質シルトで最下部は黒褐色粗砂である。P117を切る。出土遺物は、土師質土器杯又は皿の口縁部1点と体部である。また、埋土中から焼土塊が出土している。

P104（Fig.77）

Ⅲ区A4グリッド、Ⅳ-1層で検出した。径30cm、深さ10cmを測る。径12㎝の柱が残存しており、埋土は黒褐色～灰黄褐色を呈するシルトに灰色粘土ブロックを含む。P90とは、SD3に隣接することや、柱の状況が似ており、同じ用途で築かれた可能性がある。出土遺物は確認できていない。

P116（Fig.77）

Ⅰ区C2グリッド、Ⅴ-1層で検出した。径69×55㎝、深さ16㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトに橙色土粒を多く含み、黄色土ブロックを含む。検出面で長辺40cmの礎石状の割石を検出するが、遺構の下位での検出とみられ、石は下層部分にあたるとみられる。SK29を切る。出土遺物は、土師質土器杯又は皿の底部1点と体部である。

P117（Fig.77）

Ⅰ区C2グリッド、Ⅴ-1層で検出した。径58cm、深さ27cmを測る。埋土は灰黄褐色～褐灰色砂質シルトである。P95に切られる。出土遺物は土師質土器細片１点、焼成の軟質な瓦片１点である。

P118（Fig.10・22）

TP9西壁セクション、Ⅳ-1層で検出したピットである。断面径28cm、深さ22㎝を測る。埋土は褐灰色シルトである。出土遺物は中世の土師質土器椀（123）である。

(6) 性格不明遺構

SX5・6は平面での検出には至らなかったが、断面観察で落ち込み状の堆積が確認できた遺構及び遺物集中堆積である。

SX5（Fig.9・79）

遺物は17世紀から19世紀中葉までの製品が出土している。

図示したものは634～644である。634は肥前産の高台施釉の灰釉中碗で17世紀後半～18世紀前半。

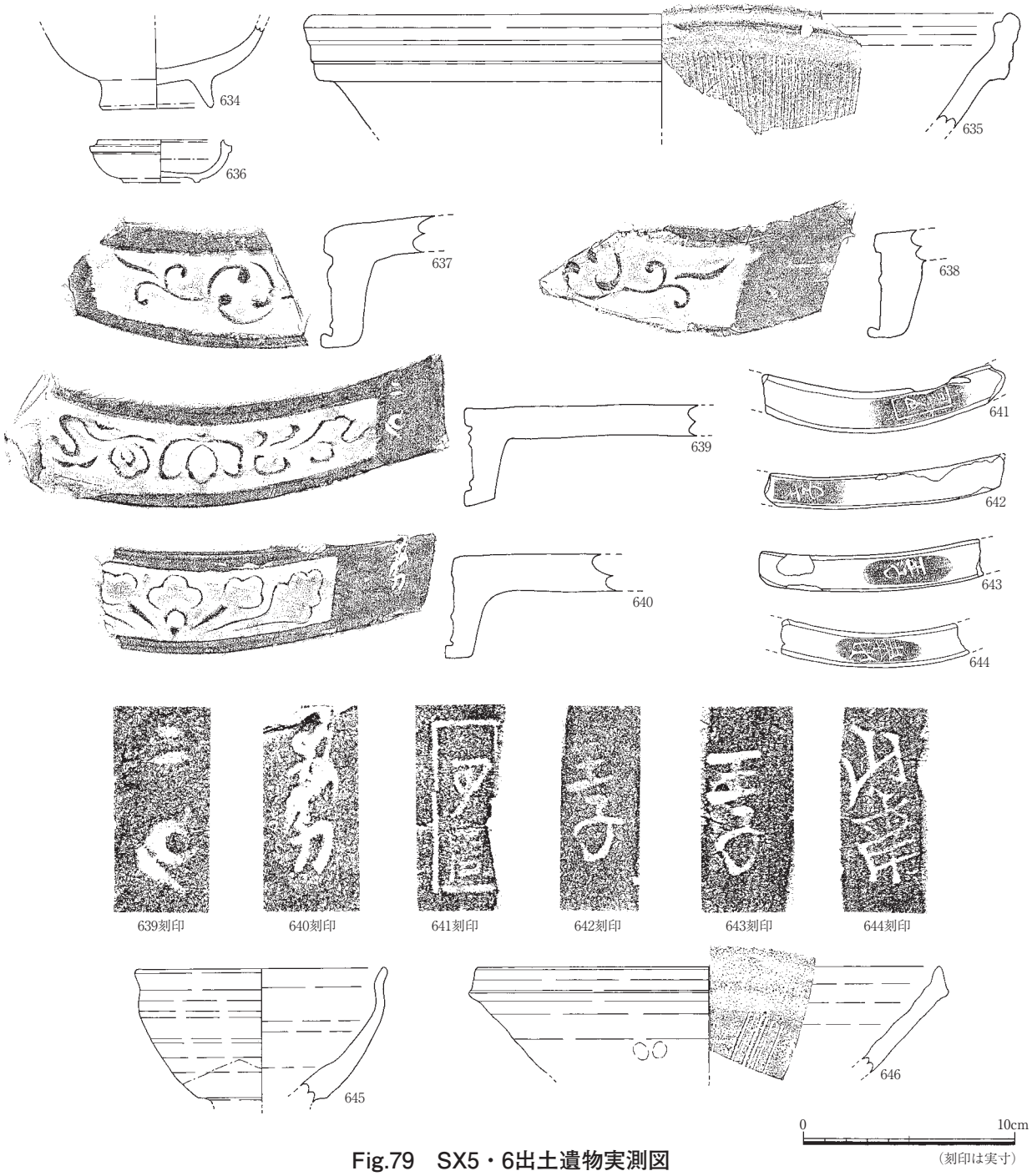


Fig.79　SX5・6出土遺物実測図
（SX5：634～644、SX6：645・646）

635は備前の擂鉢。636は軟質施釉陶器の蓋物で、外面に緑色の低火度釉、内面に透明の低火度釉を施す。637 ～ 644は瓦で、638・639は軒桟瓦、637・640は軒桟瓦又は軒平瓦、641 ～ 644は桟瓦又は平瓦である。637・638は中心飾りが三巴文、639は蔦文、640は丁字文である。642・643は「王子」銘印をもち徳王子（高知県香南市香我美町徳王子）産。また、640は「□□カ」、641は角枠内「□□」銘印、644は「山南」とみられる銘印をもち、639も銘印を認める。

SX5は19世紀中葉に比定される。

SX6（Fig.10・79）

遺物は17世紀から19世紀中葉までの製品が出土している。

図示したものは645・646である。645は鉄釉の天目形中碗で、釉は焼成不良でにぶい黄橙色に発色する。646は焼締めの擂鉢で、褐灰色の胎土をもつ。外面回転ナデで体部中位にユビオサエ痕が残る。口縁部内面に自然釉が掛かる。

SX6は19世紀中葉に比定される。

(7) 包含層出土遺物・その他の遺物

Ⅲ層遺物集中出土の遺物（Fig.10・80）

TP6で検出したⅢ層の遺物集中１から、中世～近世の遺物がまとまって出土している。図示したものは、土師質土器杯（647・648）、焼塩壺（650）、青花皿（649）、瓦器椀（116）である。

Ⅱ層出土の遺物（Fig.80・81）

近世の整地層にあたるⅡ層からは、近世後期～近代初頭の遺物が出土している。図示したものはⅡ層出土の652 ～ 654である。652は肥前産の染付端反形中碗。653は陶器の鉢で灰白色の釉を施す。654は灰釉土瓶である。

Ⅲ・Ⅲ′層出土の遺物（Fig.81）

近世の整地層にあたるⅢ・Ⅲ′層からは、中世～近世前期の遺物が出土している。図示したもの

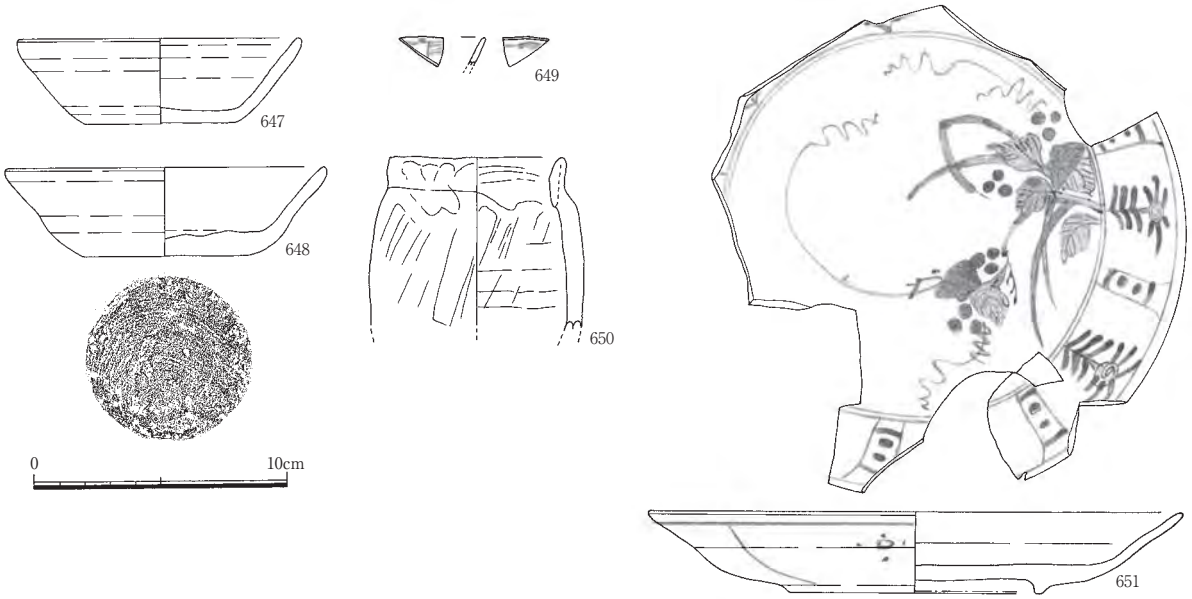


Fig.80　Ⅲ層遺物集中1・Ⅱ～Ⅲ層出土遺物実測図（Ⅲ層遺物集中１：647 ～ 650、Ⅱ～Ⅲ層：651）

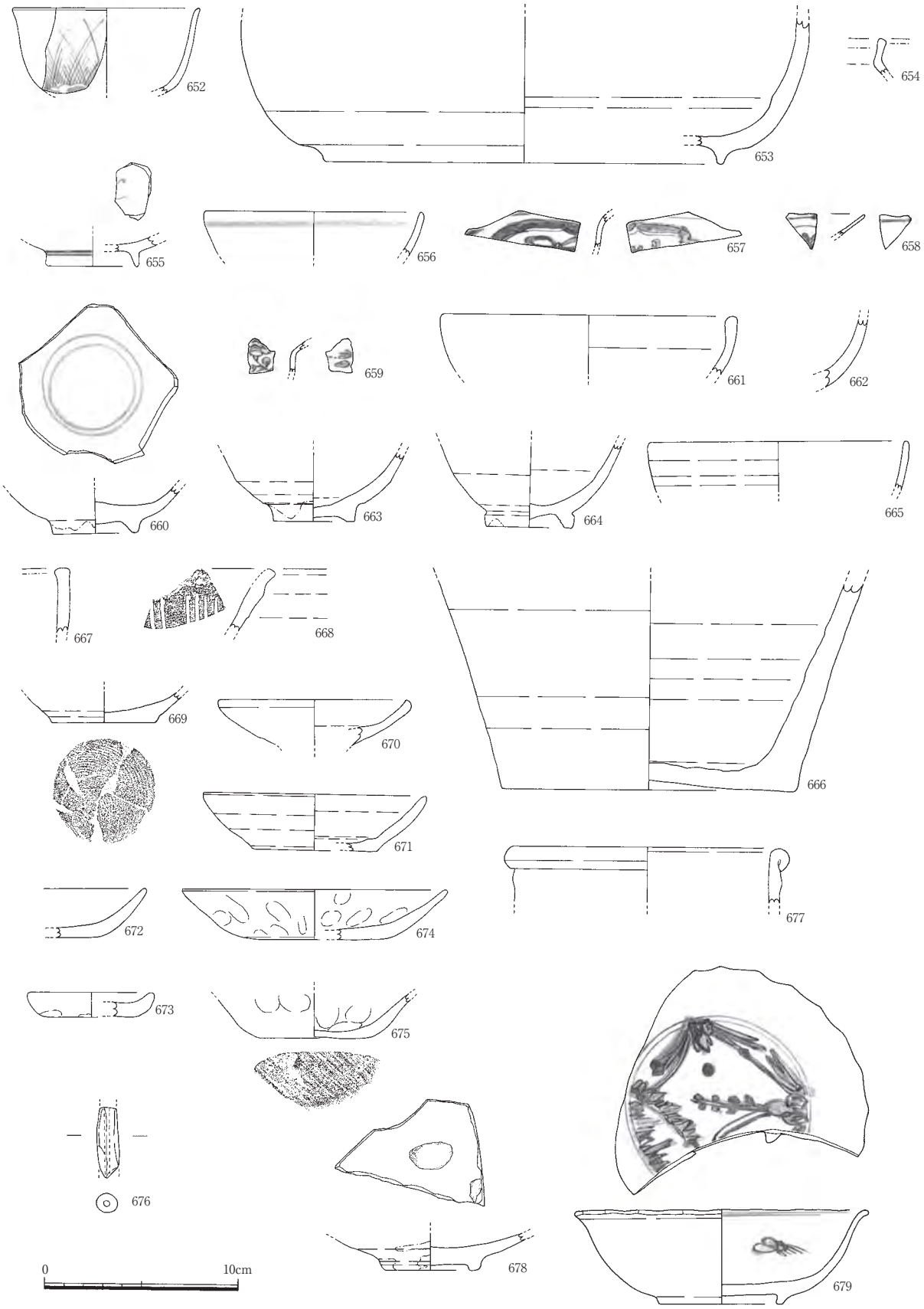


Fig.81　Ⅱ・Ⅲ・Ⅲ′・Ⅳ層出土遺物実測図（Ⅱ層：652 ～ 654、Ⅲ層：656・657・662 ～ 673・675・676、Ⅲ′層：655・658 ～ 661・674、Ⅱ～Ⅲ層：679、Ⅲ～Ⅳ層：677、Ⅳ層：678）

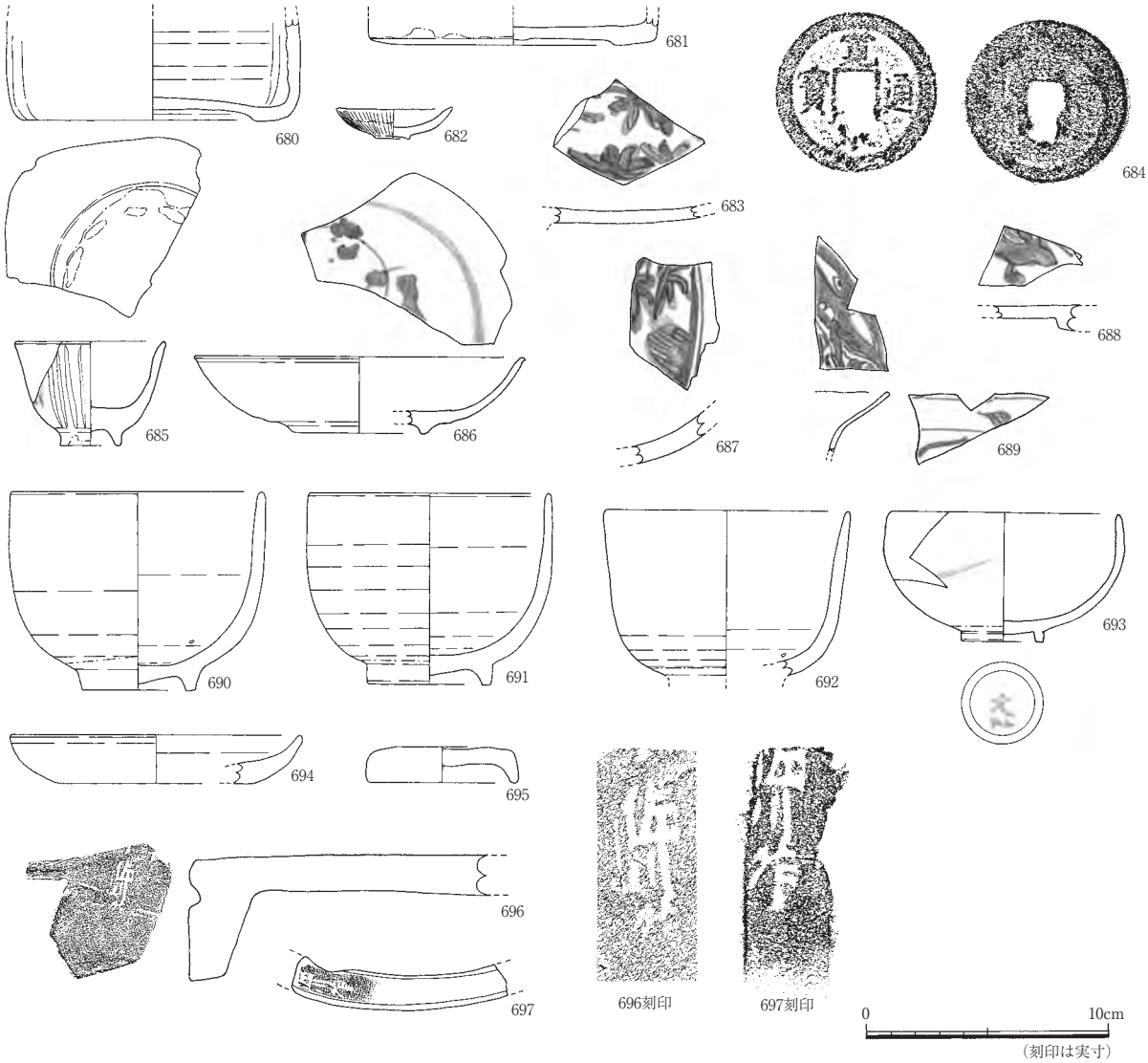


Fig.82　Ⅰ～Ⅲ・Ⅰ層・撹乱層出土遺物実測図
（Ⅰ～Ⅲ層：680 ～ 684、Ⅰ層：689・694 ～ 697、撹乱層：685 ～ 688・690 ～ 693）

はⅢ層出土の656・657・662 ～ 673・675・676、Ⅲ′層出土の655・658 ～ 661・674である。この他、Ⅱ～Ⅲ層出土の651・679、Ⅲ～Ⅳ層出土の677も併せて図示している。

656は染付又は青花の中碗。657・658は中国景徳鎮窯系の青花皿で16世紀末～ 17世紀初頭。659は中国景徳鎮窯系の青花皿又は鉢である。660は中国福建省系の万頭心碗である。661は青磁中碗。662は肥前産の高台施釉タイプの灰釉丸碗で、17世紀後半～ 18世紀前半。663は肥前産の唐津系灰釉陶器中碗。664は肥前産の灰釉中碗。665は尾戸窯の灰釉中碗。666は備前の壺又は甕。667は火入れで、外面に白化粧と灰釉、口縁部外面に灰オリーブ色の釉を施している。668は擂鉢。669 ～ 674は土師質土器小皿。675は土師質土器杯又は皿である。676は土錘。677は土師質土器で焜炉か。679は肥前産の染付鉢で、口縁部稜花形。17世紀前半の製品である。651は肥前産の染付中皿である。

Ⅳ層出土の遺物（Fig.81）

中世～近世初頭の堆積層にあたるⅣ層からも近世初頭の遺物が出土している。

図示したものはⅣ層出土の唐津系灰釉陶器小皿（678）である。

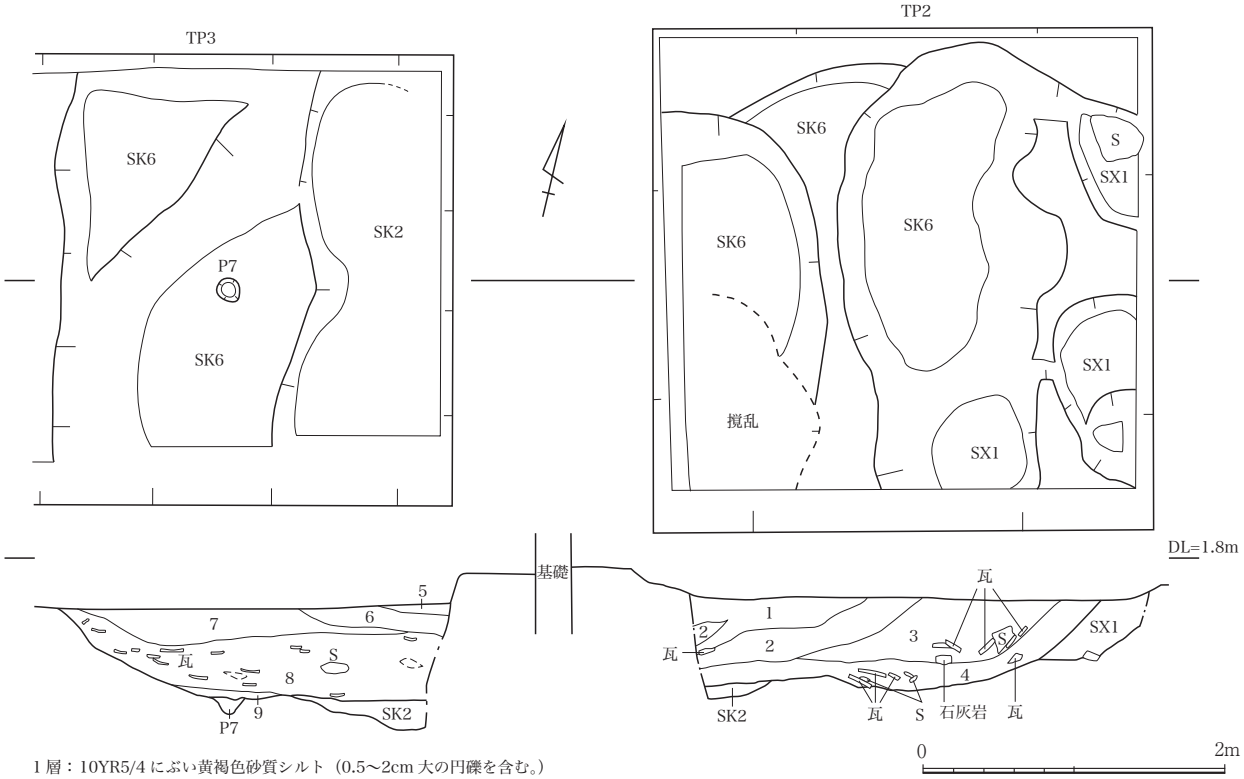
Ⅰ層・撹乱層出土の遺物（Fig.82）

近現代の整地層であるⅠ層、及び撹乱層からも近世の遺物が出土している。

図示したものはⅠ層出土の689・694 ～ 697、Ⅰ～Ⅲ層出土の680 ～ 684、撹乱層出土の685 ～ 688・690 ～ 693である。680・681は志野焼の向付で16世紀末～ 17世紀初頭。682は肥前産の白磁紅皿である。683・687は中国漳州窯系の青花皿で16世紀末～ 17世紀初頭。688は中国景徳鎮窯系の青花皿、689は青花皿又は鉢で、16世紀末～ 17世紀初頭。684は寛永通宝である。685は肥前産の染付小杯、686は小皿で、1630 ～ 1650年代。690は肥前産の灰釉碗で、部分的に緑釉がかかる。691・692は尾戸窯の灰釉碗。693は京都・信楽系の色絵半球形小碗である。694は尾戸窯の白土器小皿である。695は土師質土器で、焼塩壺の蓋。696は軒桟瓦、697は桟瓦又は平瓦である。696と697は「佐川□」銘印をもち、佐川（高知県佐川町）の製品か。

3. 近代の遺構と遺物

調査地南部を中心に、近代とみられる土坑10基、溝１条、性格不明遺構２基、ピット１基を検出した。また、調査地南壁断面で土坑１基（SK20）の堆積を確認した。



1 層：10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト（0.5～2cm 大の円礫を含む。）
2 層：10YR5/2 灰黄褐色砂礫（粗砂・シルトを含む。1～5cm 大の円礫を多く含む。）
3 層：10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（0.5cm 前後の角礫、0.5～1cm 大の円礫を多く、2～4cm 大の円礫、5～10cm 大の石灰岩の割石を少量含む。橙色土粒を多く含む。炭化物を多く含む。）
4 層：10YR4/2 灰黄褐色シルト（0.3～1cm 大の円礫を少量含む。炭化物を多く含む。）
5 層：10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト（0.5～1cm 大の角礫・円礫を多く、2～3cm 大の円礫を少量含む。橙色土粒を少量含む。炭化物を少量含む。）
6 層：10YR5/2 灰黄褐色砂（粗砂・シルトを含む。0.5～1cm 大の円礫を多く含む。炭化物を少量含む。）
7 層：10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
8 層：10YR4/2 灰黄褐色シルト（0.5～4cm 大の円礫を多く含む。石灰岩の割石を含む。明黄褐色～黄橙色粘土質土のブロックを含む。）
9 層：10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト（粗砂を含む。0.5～1cm 大の角礫・円礫を含む。床面に植物遺体が出土。）

Fig.83　SK6 平面図・セクション図

(1) 土坑

SK6（Fig.83 ～ 92）

TP2 ～ 3にかけて、Ⅰ層下面で検出した大型廃棄土坑である。北部と南部が調査区外に広がるため、規模、形態は不明である。南北残存長2.51m、東西長6.93m、検出面からの深さは67cmである。調査時、SX1との境界は埋土の分別が困難であったが、中央部の断面観察からSX1を切る土坑であることを確認した。他に、SK2、P7を切る。埋土はにぶい黄褐色～灰黄褐色を呈する砂～シルトである。埋土中には石灰岩の割石とハンダと見られる明黄褐色～黄橙色粘土質シルトブロックを含む。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗178・小碗６・小杯49・中皿８・小皿又は五寸皿130・鉢27・皿又は鉢３・猪口17・碗蓋56・蓋物14・蓋物蓋７・急須３・燗徳利19・瓶９・仏飯器３・段重４・水滴１・火入れ２・器種不明11、青磁染付中碗１・皿１、白磁小碗２・小杯12・小皿55・瓶１・紅皿６・戸車１、青磁鉢１、磁器色絵中碗８・小碗３・小杯10・小皿１・瓶１・水滴１、陶胎染付土瓶又は急須６、陶器中碗26・小碗３・小杯１・小皿40・鉢３・捏鉢又は片口32・擂鉢16・おろし皿４・鍋51・鍋蓋51・土瓶又は急須44・土瓶又は急須蓋58・燗徳利３・瓶15・壺６・甕29・蓋物５・焜炉１・火鉢10・灯明受皿43・柄杓１・餌猪口４・鳥の水入れ１・器種不明22、軟質施釉陶器羽釜１・ミニチュア１、土師質土器中皿２・小皿18・釜２・焙烙１・焼塩壺１・火消し壺蓋１・焜炉27・焜炉のさな３・竈５・人形５・型１・泥面子29、瓦質土器釜１・焜炉又は火鉢12・火鉢１、施釉土器ミニチュア３、窯道具２、銅製品匙３・煙管２・紐２・棒状製品４・板状製品２・器種不明１、鉄釘多数、寛永通宝１、雁首銭３、石製品硯１、木製品櫛１、貝殻、骨片３、及び瓦片多数である。陶器、土器には近世と近代の識別がつかないものが多く含まれるが、染付、青磁染付、色絵染付では、近世の製品が422点、酸化コバルトを施した近代の製品が151点の割合で含まれている。

図示したものは中世末～近世初頭の715、近世の698 ～ 707・710 ～ 714・716 ～ 723・758・759、近代の724 ～ 756・765 ～ 769・771、近世又は近代の708・709・757・760 ～ 764・770・772 ～ 858である。

698 ～ 723は磁器。712・713は瀬戸・美濃産、704・705は関西系、721は能茶山窯の可能性をもつもの、715は中国産、その他は肥前産又は肥前系である。698 ～ 703・714・716 ～ 721・723は染付。698・699は端反形中碗で、698は外面に船と水、見込みに松竹梅円形文、699は外面に植物を描く。700は小碗。701 ～ 703は小杯である。716は皿又は鉢である。717は八角形の鉢で、蛇ノ目凹形高台をもつ。718・719は碗蓋。718は広東形碗の蓋である。714は変形形の蓋か。720は蓋物。721は器種不明。胎土断面は荒く、能茶山窯産の可能性をもつ。723は辣韮形の小瓶で、蛸唐草文と若松、梅、草を描く。710 ～ 713・722は白磁。710・711は菊花形の小皿で、内面に型による菊弁が施され、蛇ノ目凹形高台をもつ。712・713は端反形の小皿で、内面に型による陰刻文様を施す。722は紅皿で、外面に型による陽刻文様を施す。704 ～ 707は色絵染付の小杯。704・705は平形の小杯で、704は内面に金の上絵付による文様を描き、高台内に銘をもつ。705は内面に呉須による圏線と黒・赤・黄・緑・金の上絵付による地球儀・本・文字を描く。706は色絵染付の薄手酒杯で、内面に黒の上絵付による文字文を描く。707は見込みに黒の上絵付による「有田」、高台内に黒の上絵付による角枠内「今戸」銘を描く。708・709は色絵磁器で、近世又は近代。708は平形小杯で、内面に金の上絵付で松を描き、

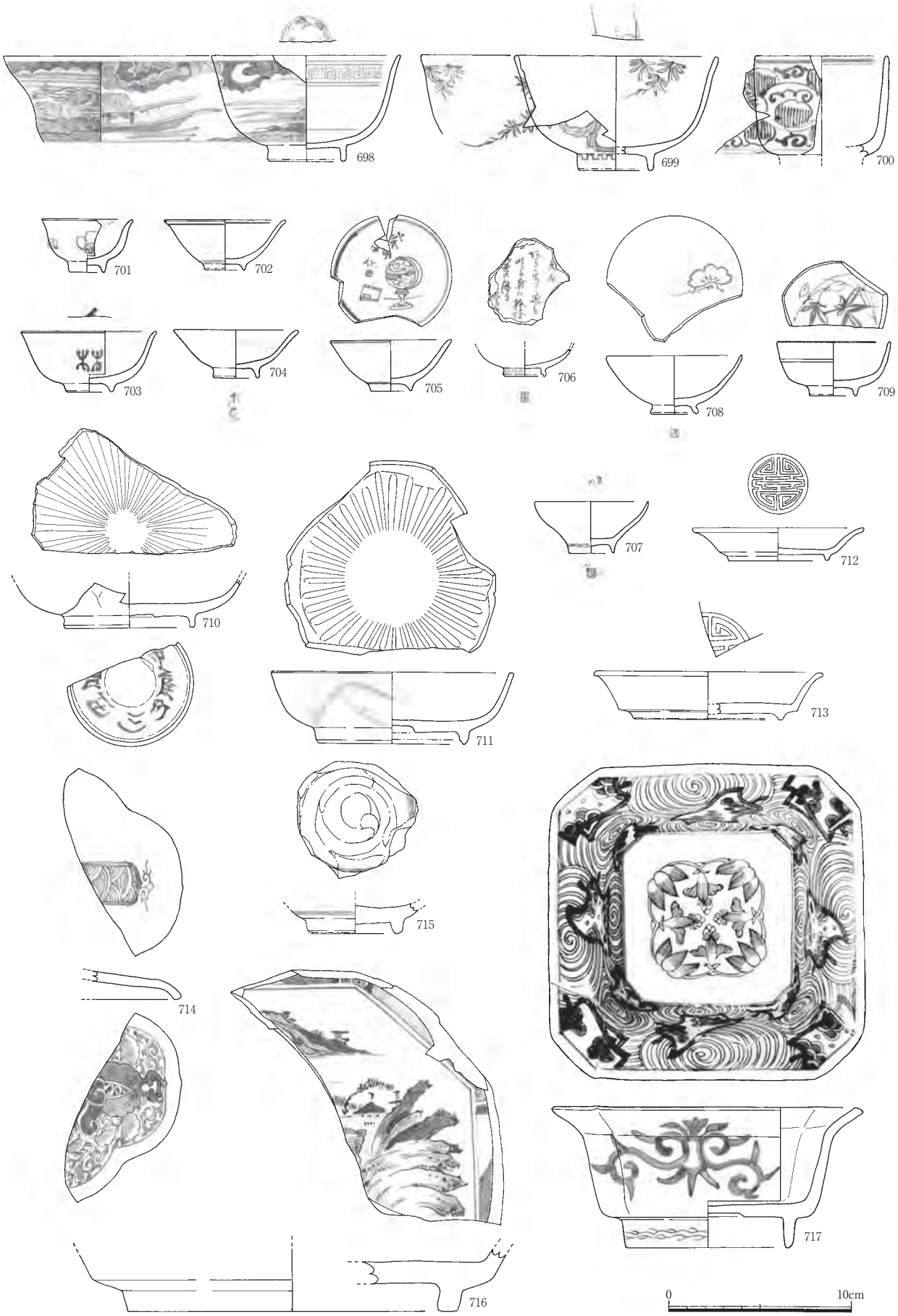


Fig.84　SK6出土遺物実測図（1）

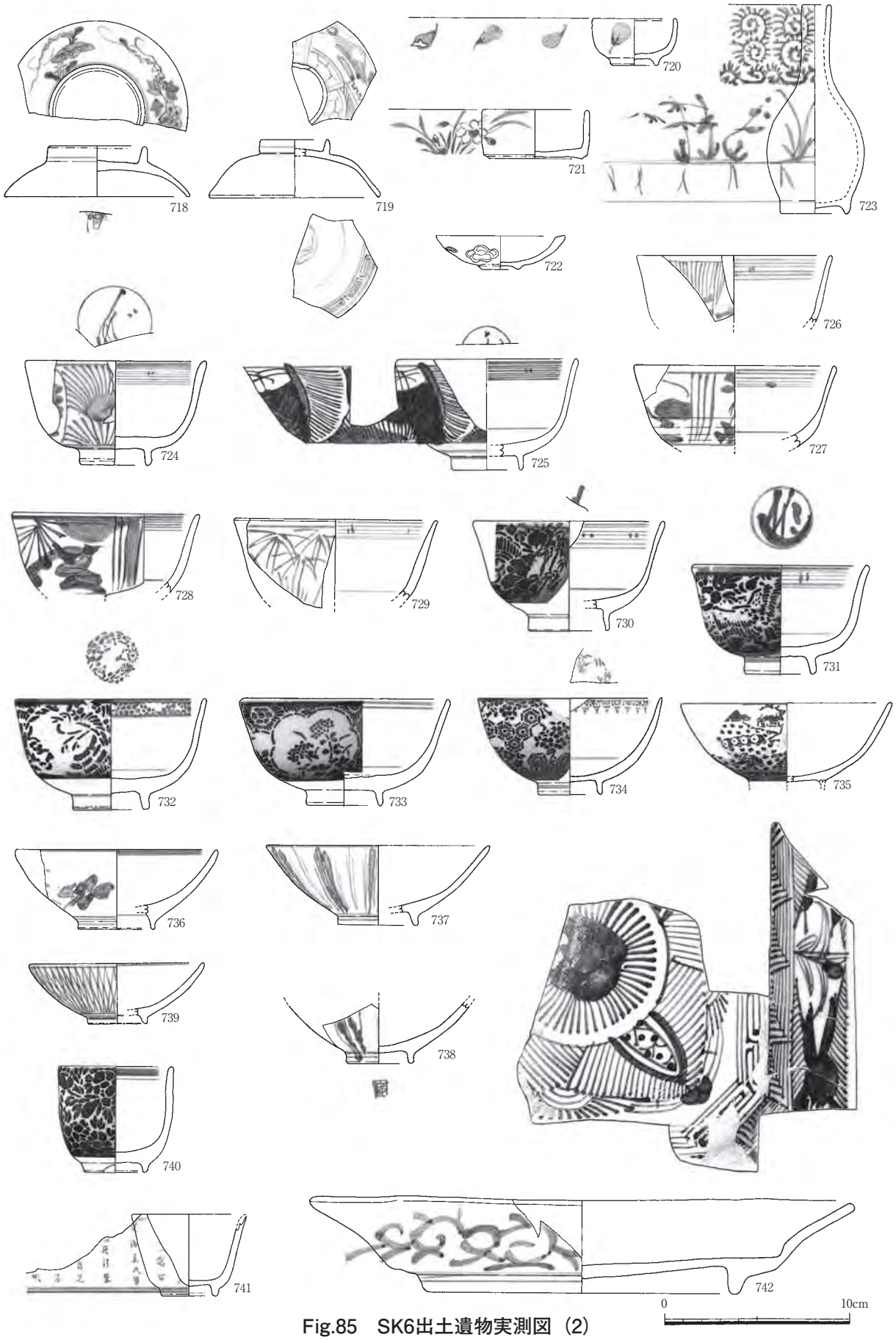


Fig.85　SK6出土遺物実測図（2）

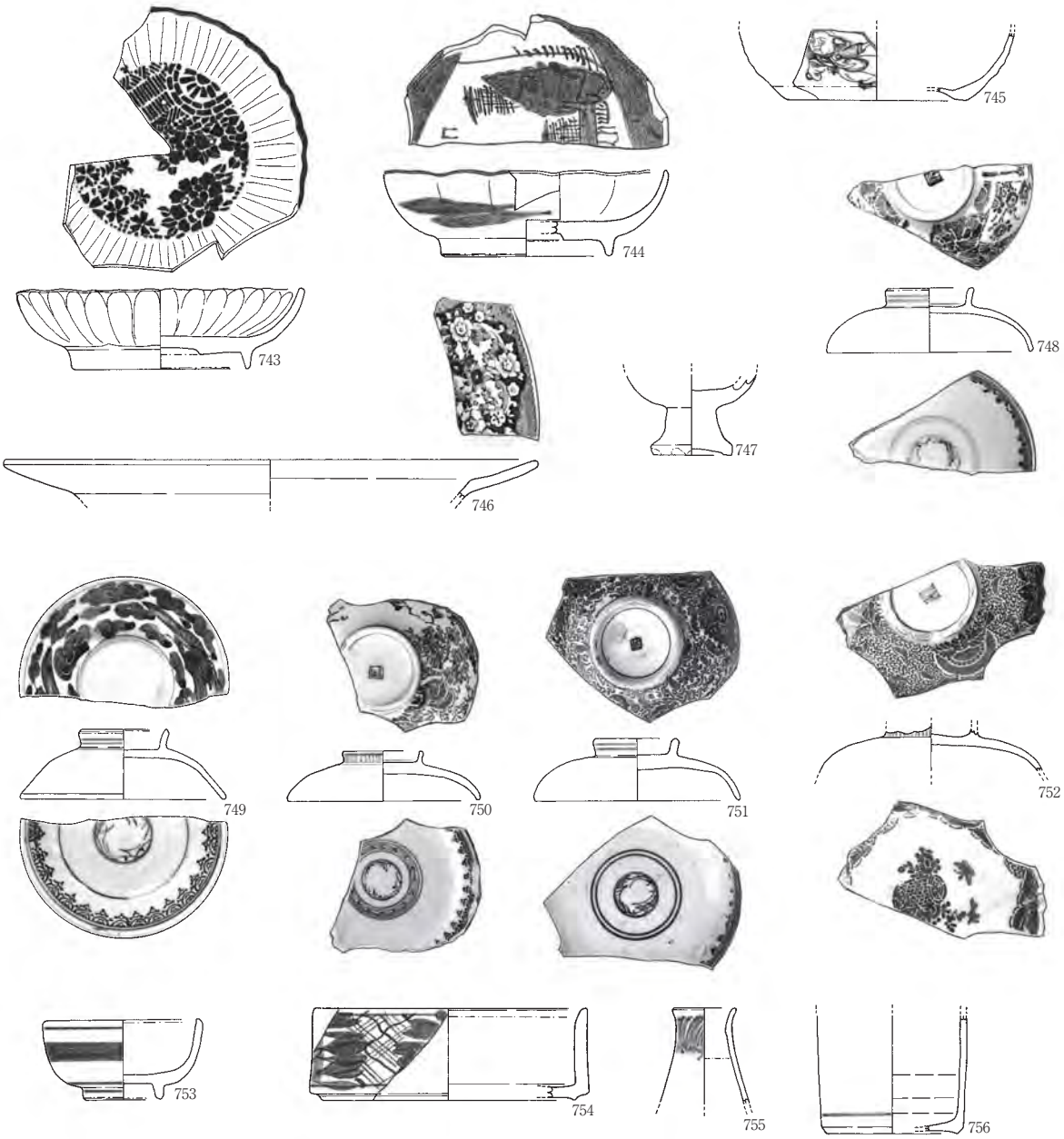


Fig.86　SK6出土遺物実測図（3）　0　10cm

高台内に銘をもつ。709は丸形小杯で外面中位に稜をもち、内面に赤の上絵付で紅葉を描く。715は青花で中国漳州窯系16世紀末～17世紀初頭の製品か。

724～745・748～756は近代の染付で、酸化コバルトによる文様を施す。724～729・744は鹿児窯産の可能性をもつもの、730・731は鹿児窯又は肥前系、その他は肥前産又は肥前系である。724～738は中碗。724～733は端反形中碗である。724～729は手描きによる文様を描くもので、724～727・729は口縁部内面に多重圏線と点、728は多重圏線を描く。730・731は口縁部内面に同様の多重圏線と点を描くものであるが、外面に型紙刷りによる文様を施している。732・734・735は内外面とも型紙刷りによる文様を施すものである。732は外面に型紙刷りによる文様、見込みに円形文を施す。734は丸形中碗で、外面に型紙刷りによる文様、口縁部内面に型紙刷りによる宝珠繋

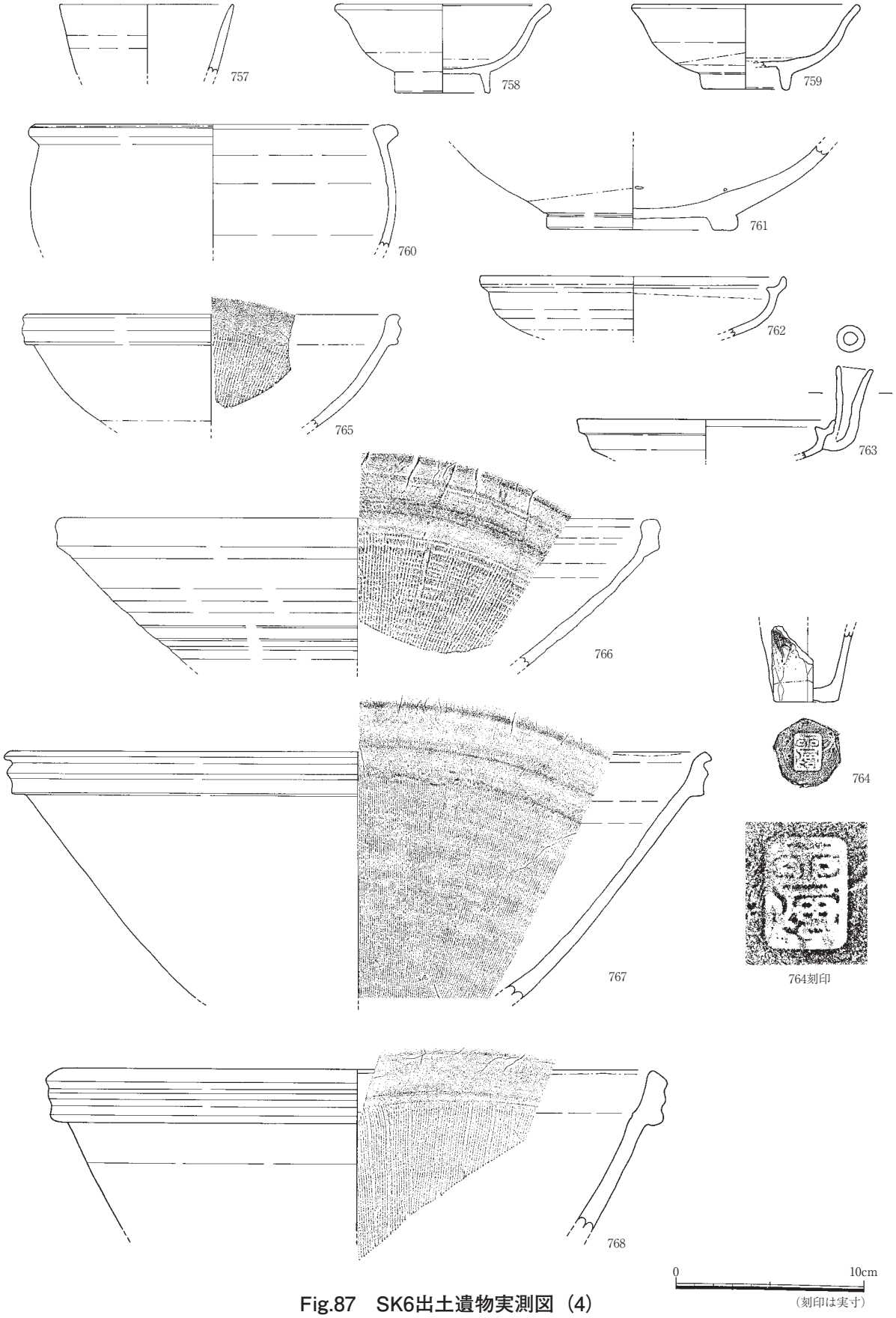


Fig.87　SK6出土遺物実測図（4）

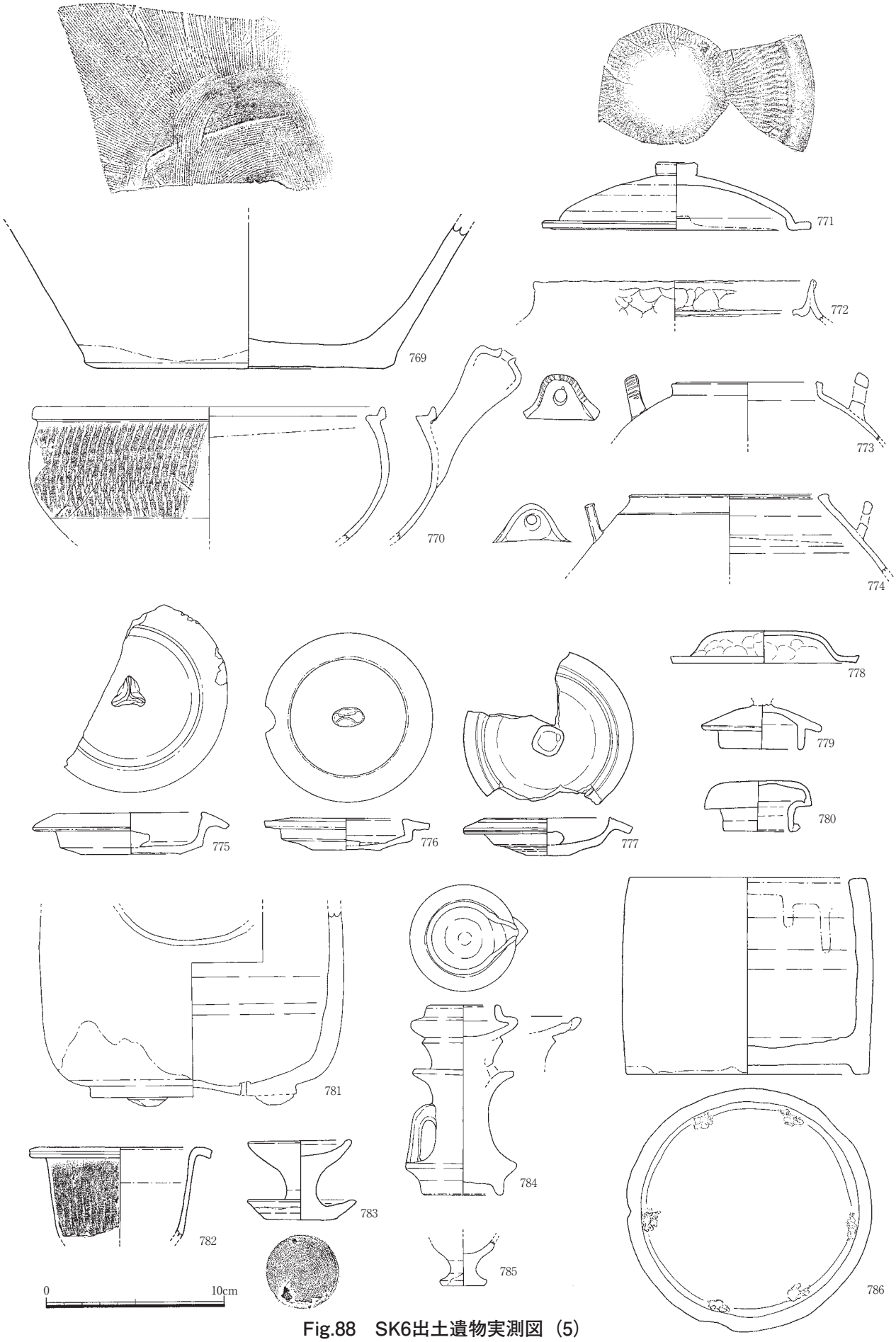


Fig.88　SK6出土遺物実測図（5）

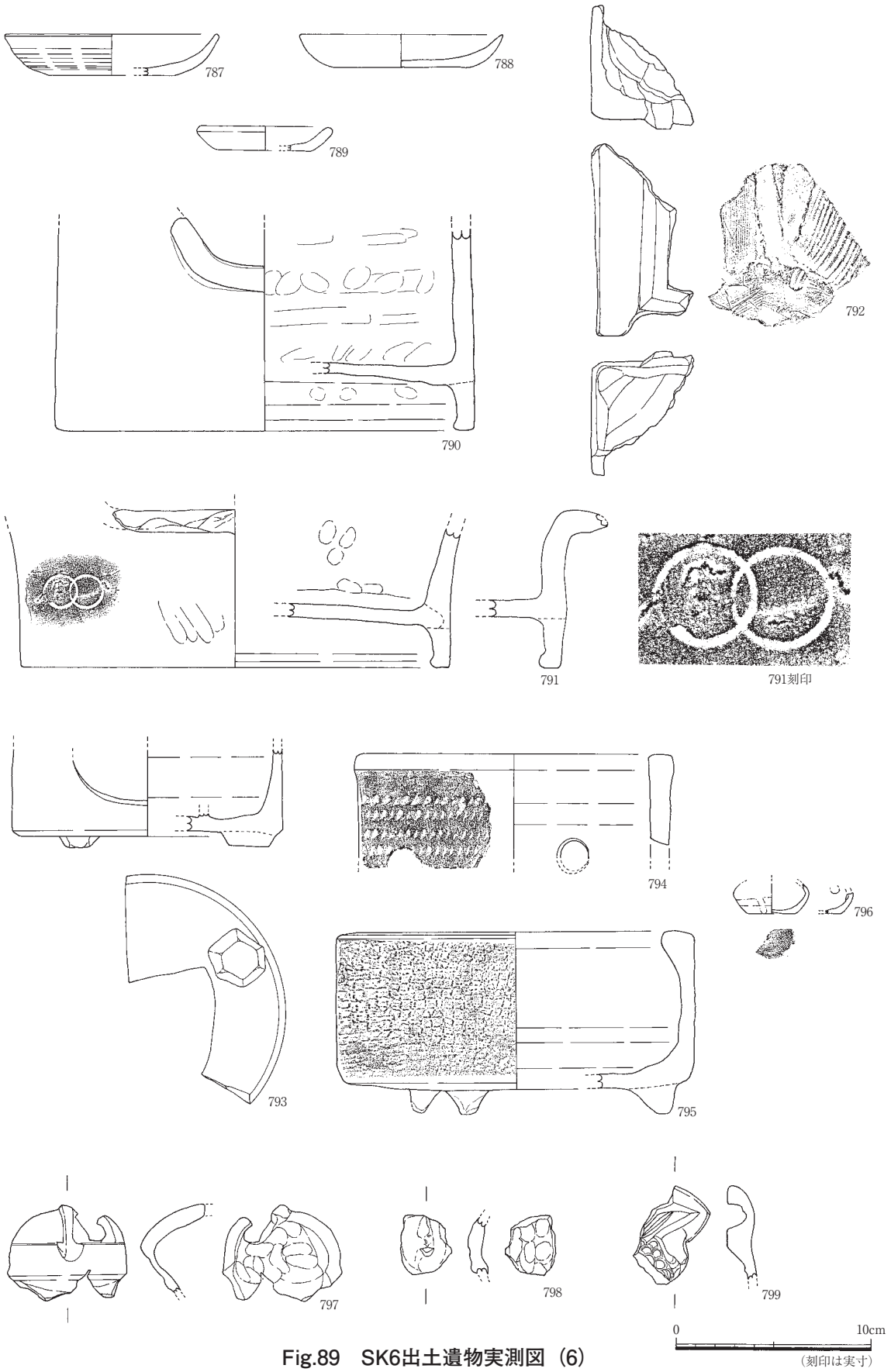


Fig.89　SK6出土遺物実測図（6）

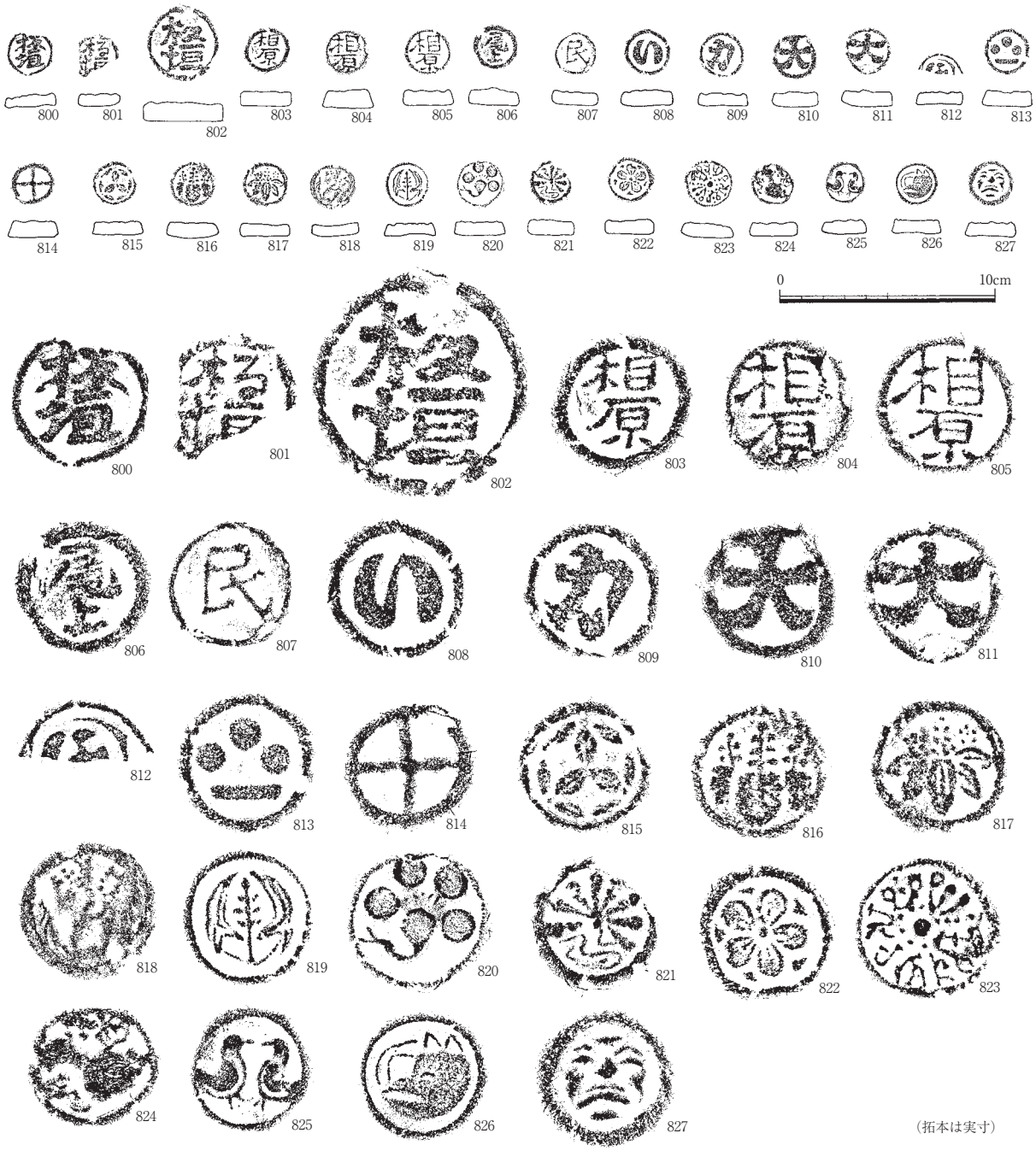


Fig.90　SK6出土遺物実測図（7）

ぎ、見込みに型紙刷りによる松竹梅円形文を施す。735は外面と口縁部内面に型紙刷りによる田と人物を描く。733は見込み蛇ノ目釉剥ぎ。外面に型紙刷りによる文様を施す。736 ～ 738は平形中碗。738は外面に縞を描き、高台内に角枠内銘をもつ。739・740は小碗。739は平形小碗で、外面に網目文を描く。740は筒丸形小碗で、外面に型紙刷りによる文様を描く。741は小杯で、外面に文字文を描き、高台内に銘をもつ。742は変形形の大皿で、外面に略化した唐草文、内面に花卉と雷文帯を描く。743・744は小皿。743は型打成形による菊花形の小皿で蛇ノ目凹形高台をもつ。744は口縁部輪花形の小皿で、蛇ノ目凹形高台をもつ。外面に山又は土坡、内面に山水文を描く。748 ～ 752は

碗蓋で、型紙刷りと手描きによる文様を施す。745は土瓶又は急須で、外面に型による陰刻文様と唐子を施す。753は蓋物である。754は段重で、外面に四方襷と植物を描く。755は燗徳利。756は燗徳利か。747は白磁の仏飯器で、近代の製品か。746は中皿で、胎土は軟質である。

757 ～ 776・778 ～ 784・786は陶器。757は尾戸窯の灰釉中碗で、灰白色を帯びる透明の釉を施す。764は小杯か。ロクロ成形の後、底部を六角形に面取っている。灰白色を帯びる透明の釉に、部分的に青色の釉を施す。外底に印刻による角枠内銘をもつ。758 ～ 763・765 ～ 771・774・775・782 ～ 784は能茶山窯の陶器。758・759は鉄釉小皿で、見込みを蛇ノ目釉剥ぎし白土を施す。760は捏鉢又は片口。口縁端部を釉剥ぎし、白土を施す。761は鉄釉捏鉢で、黒褐色の釉を施す。762は柳川鍋で、内外面に鉄釉を刷毛塗りする。763は鉄釉鍋で、手付き。765 ～ 769は近代の鉄釉擂鉢である。770は行平で、外面上半に鉄釉を刷毛塗りし飛鉋を巡らす。771は鍋蓋で近代か。外面に飛鉋を施し鉄釉を円圏状に巡らす。774は鉄釉土瓶、775は鉄釉土瓶蓋で、ともに黒褐色の釉を施す。782は能茶山窯の植木鉢か。外面に飛鉋を巡らせ、暗赤褐色の釉を施している。783は台付き灯明受皿である。784は手付瓶形のひょうそくである。772は土瓶又は急須。焼締めで、内外面にナデとユビオサエを施している。773は土瓶で、橙色を帯びる透明の釉を施す。776は灰釉の土瓶蓋で、手捏ねによる摘みを貼付する。778･779は土瓶又は急須の蓋。778は焼締めで、たたら作りの後手捏ねで成形している。780は水注類の蓋か。781は瀬戸・美濃産の焜炉で、体部前方に窓をもつ。灰釉を施し、灰白色～緑灰色の釉を流し掛けする。786は瀬戸・美濃産の火入れで、黄褐色の釉を施し、外底に錆釉を刷毛塗りする。777・785は軟質施釉陶器。777は土瓶蓋で、明赤褐色の低火度釉を施す。785はミニチュアで、外面に橙色の低火度釉、内面に白土と透明釉を施す。外底に回転糸切り痕が残る。

787 ～ 827は土師質土器。787 ～ 789は小皿である。787は尾戸窯の白土器小皿で、無文。788も尾戸窯の小皿で、口径10㎝前後、橙色系の胎土をもつ。789は口径６㎝前後で、外底にナデを施す。790 ～ 794は焜炉。790・791は筒形で、体部前方下位に窓をもち外面に赤彩を施す。791は体部前方下位に輪繋ぎ文の刻印を認める。793は京都系の筒形焜炉で、白色系の胎土をもつ。体部前方下位に窓をもち、内部施設は剥離する。794も筒形の焜炉で、内外面に白土を施し、外面に飛鉋を巡らす。797・798は人形で、型押し成形貼り合わせによる。798は人物。799は型で、金魚か。800 ～ 827は泥面子で、型による陽刻文様を施す。800 ～ 811は文字を表わすもので、800 ～ 802は「板垣」、803 ～ 805は「相原」、806は「尾上」、807は「民」、808は「い」、809は「力」、810・811は「大」。813 ～ 817・819は家紋で、813は渡辺星、814は丸に十文字、815は九枚笹、816は五七の桐、817は桐、819は抱き沢潟である。この他、820・822は梅花、821は水に菊、824は瓢箪、825は鳥、826は狐の面、827は人物の顔を表わす。このうち、「板垣」「相原」の泥面子は明治15年の岐阜事件以降に作られたものと推定される。792・795は瓦質土器。792は箱形の焜炉である。795は火鉢で、体部外面に網状の圧痕を残す。796は施釉土器で、ミニチュアか。外面に白土と透明の低火度釉を施す。

828 ～ 833は銅製品。828は煙管の雁首で火皿を欠損する。829は煙管の吸口で、側面に宝珠他の陰刻文様を施す。830・831は匙である。832は棒状の製品で、簪か。833は雁首銭で、煙管の火皿を転用している。834 ～ 836は石製品。834は棒状の石製品で、先端部を尖らせている。835は板状製品で、粘板岩製。片面の周縁に面取りが施される。836は凝灰岩製の硯で、砥石に転用している。

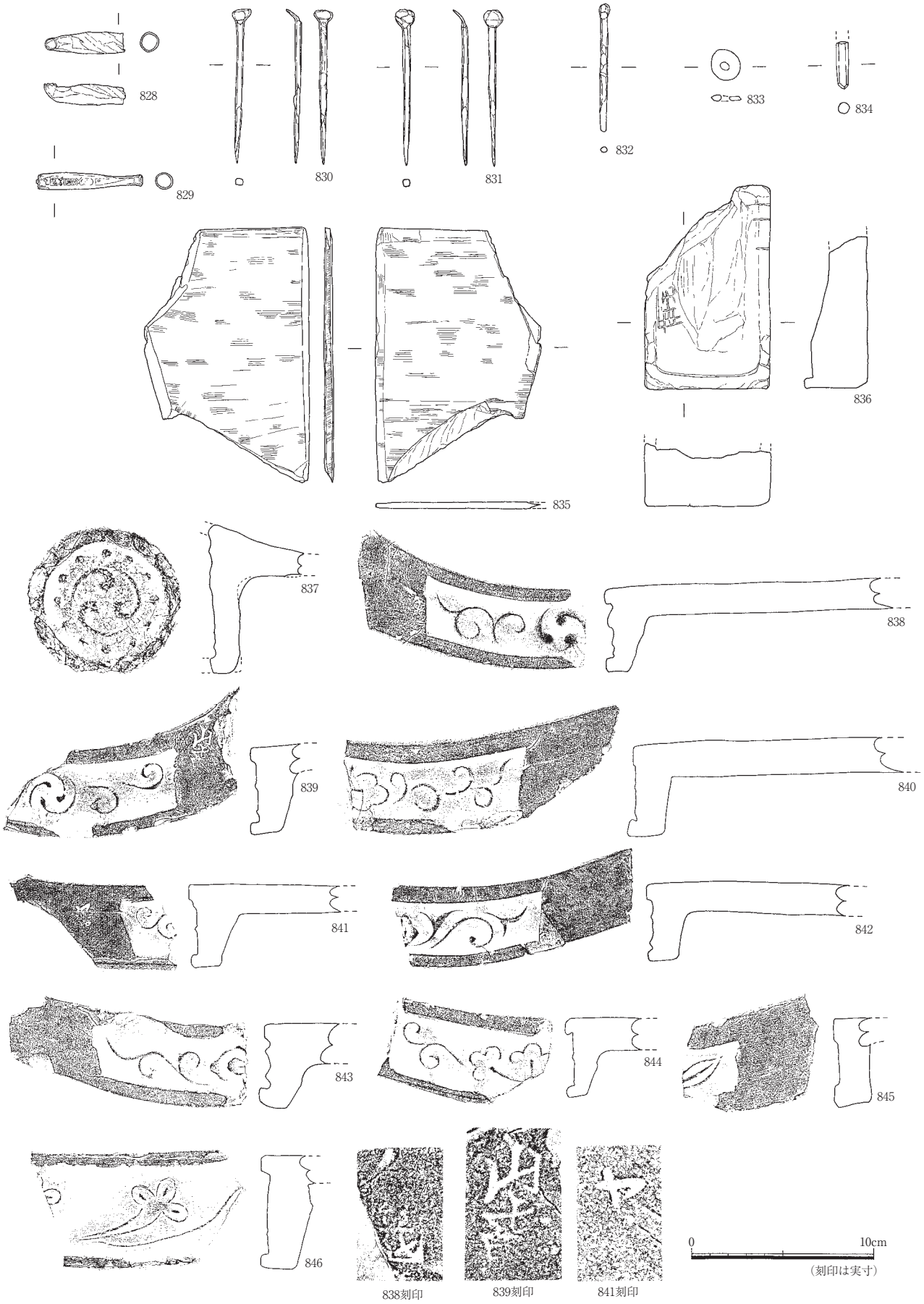


Fig.91　SK6出土遺物実測図（8）

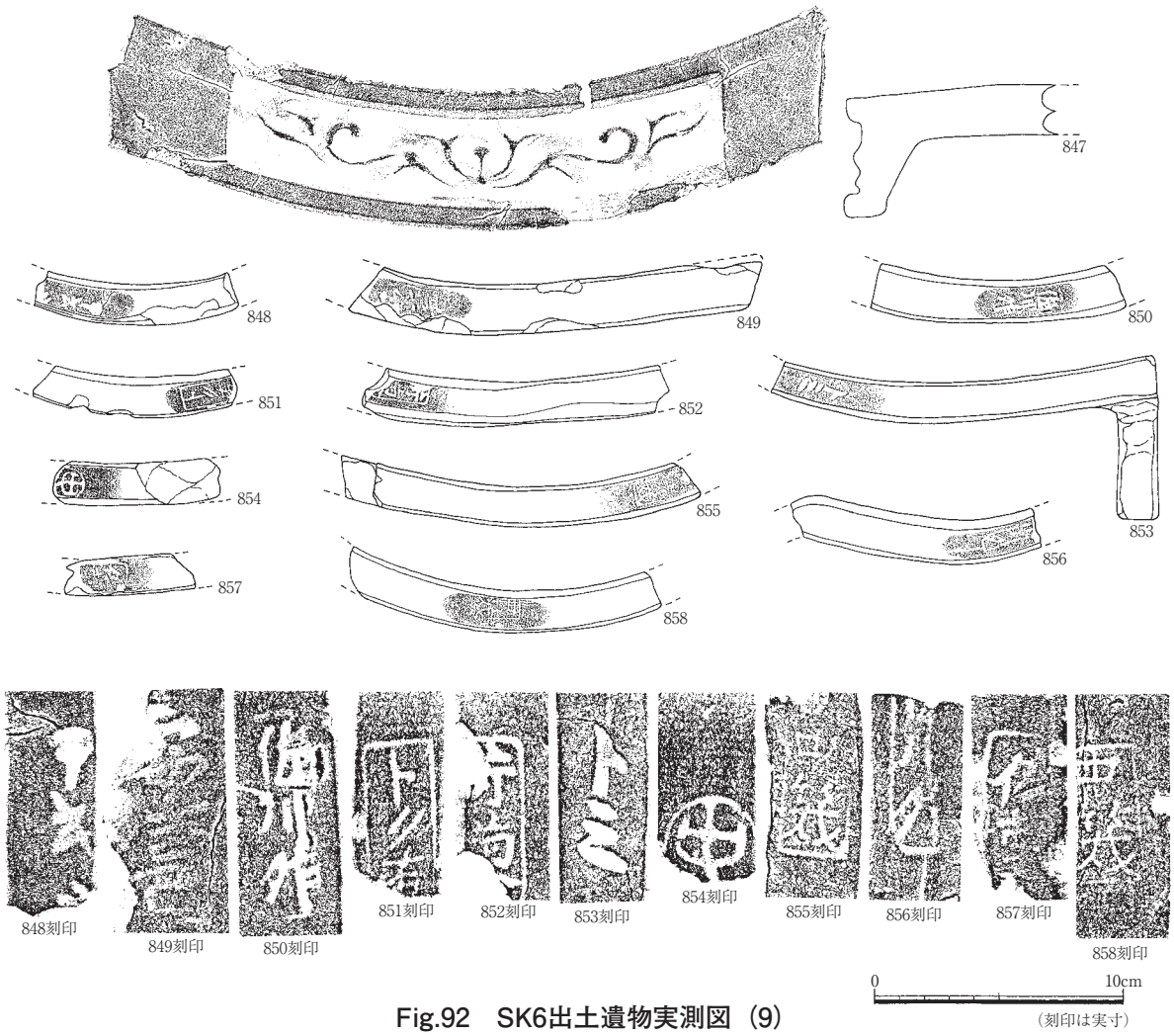


Fig.92　SK6出土遺物実測図（9）

837 ～ 858は瓦で、837は軒桟瓦の丸瓦部、838・839・841・845は軒桟瓦、840・842 ～ 844・846は軒桟瓦又は軒平瓦、847は軒平瓦か、856は桟瓦、853は平瓦、848 ～ 852・854・855・857・858は桟瓦又は平瓦である。837は連珠三巴文。838・839は中心飾りが三巴文、842・843は花文、844・846は丁字文、840は花文又は丁字である。845の中心飾りは不明で外側に葉を描く。このうち、849は「安喜」、848は「アキ」銘印をもち安芸（高知県安芸市）産。855・858は角枠内「中笑」、838は角枠内「□笑」、854は小判枠内「中□…」銘印をもち中山田（高知県香南市野市町中山田）産。851は角枠内「トク右…」銘印をもち徳王子（高知県香南市香我美町徳王子）産、852は角枠内「片兼」とみられる銘印をもち、片地（高知県香美市土佐山田町片地）の製品である。この他、853は「トミ」、850は角枠内「佐川□」、856は角枠内「…□タ」、857は角枠内銘印をもつ。

SK6は19世紀後葉（明治15年以降）に比定される。また、SK6・19・21間では出土遺物の接合関係があり、同時期に遺物廃棄と遺構廃絶が行われたことが推定される。

SK18（Fig.93・94）

TP7、Ⅳ-1層で検出した。隅丸方形を呈する。検出規模は長軸0.96m、短軸0.52m、深さ46cmを測る。土坑の中位では、土坑と同規模の長方形の銅製の板が出土し、この銅板の上下では木炭が密に敷き詰められた状態で出土した。これらを埋設するために構築されたものと考えられる。SK16、

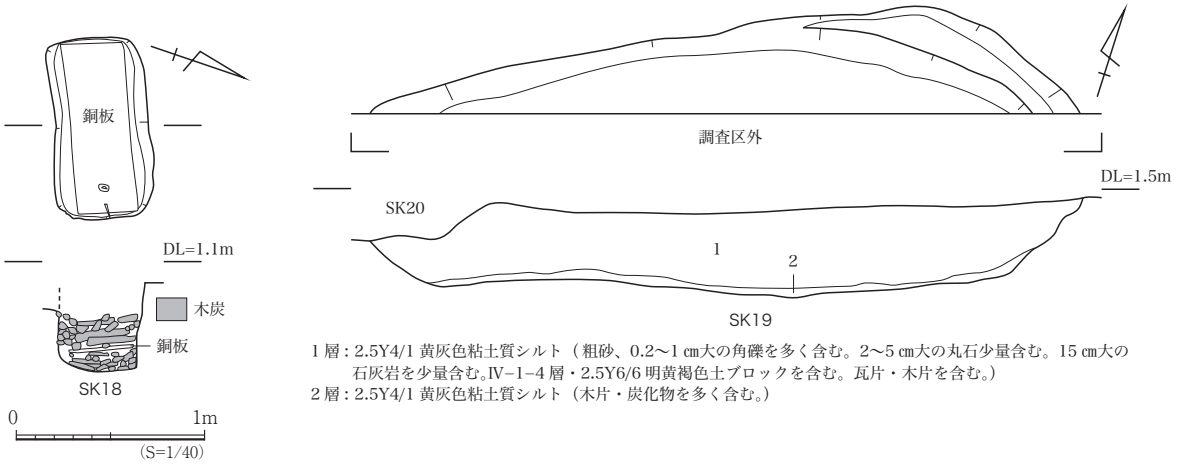


Fig.93　SK18・19 平面図・セクション図

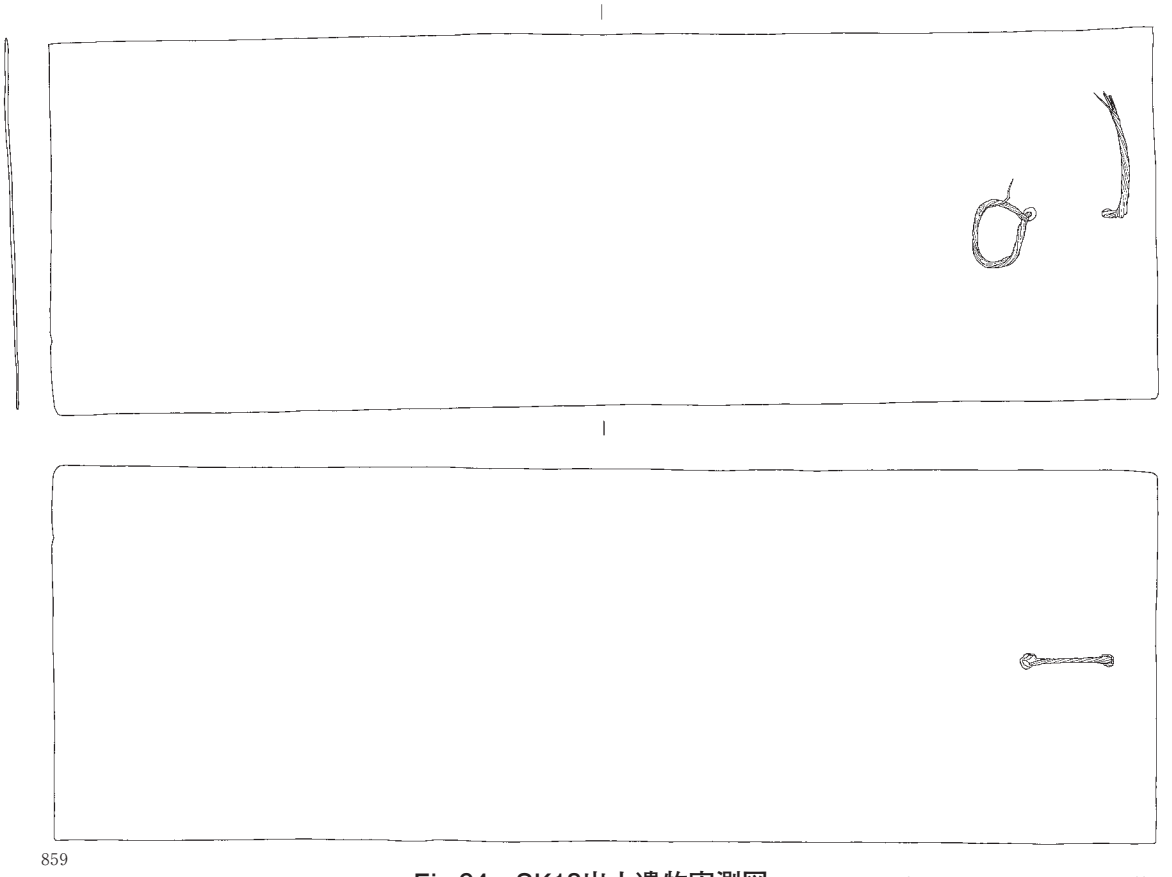


Fig.94　SK18出土遺物実測図

SB2-P4を切る。後掲のSK39との関連性から、本来の遺構上面はさらに上とみられる。

出土遺物は土師質土器小皿１点と銅板１点で、土師質土器小皿は最下層から出土している。また、銅板の上下からは、木炭が６箱分出土している。図示したものは銅板（859）である。

SK19（Fig.93・96）

Ⅱ区B ～ C8・C7グリッド、Ⅳ-1層で検出した。南部が調査区外に広がるため規模、形態は不明である。南北確認長0.56m、東西確認長3.76m、深さ50cmを測る。埋土は黄灰色粘土質シルトで、礫を含み、下部に木片、炭化物を多く含む。また、埋土にⅣ-1層のブロックを含む。

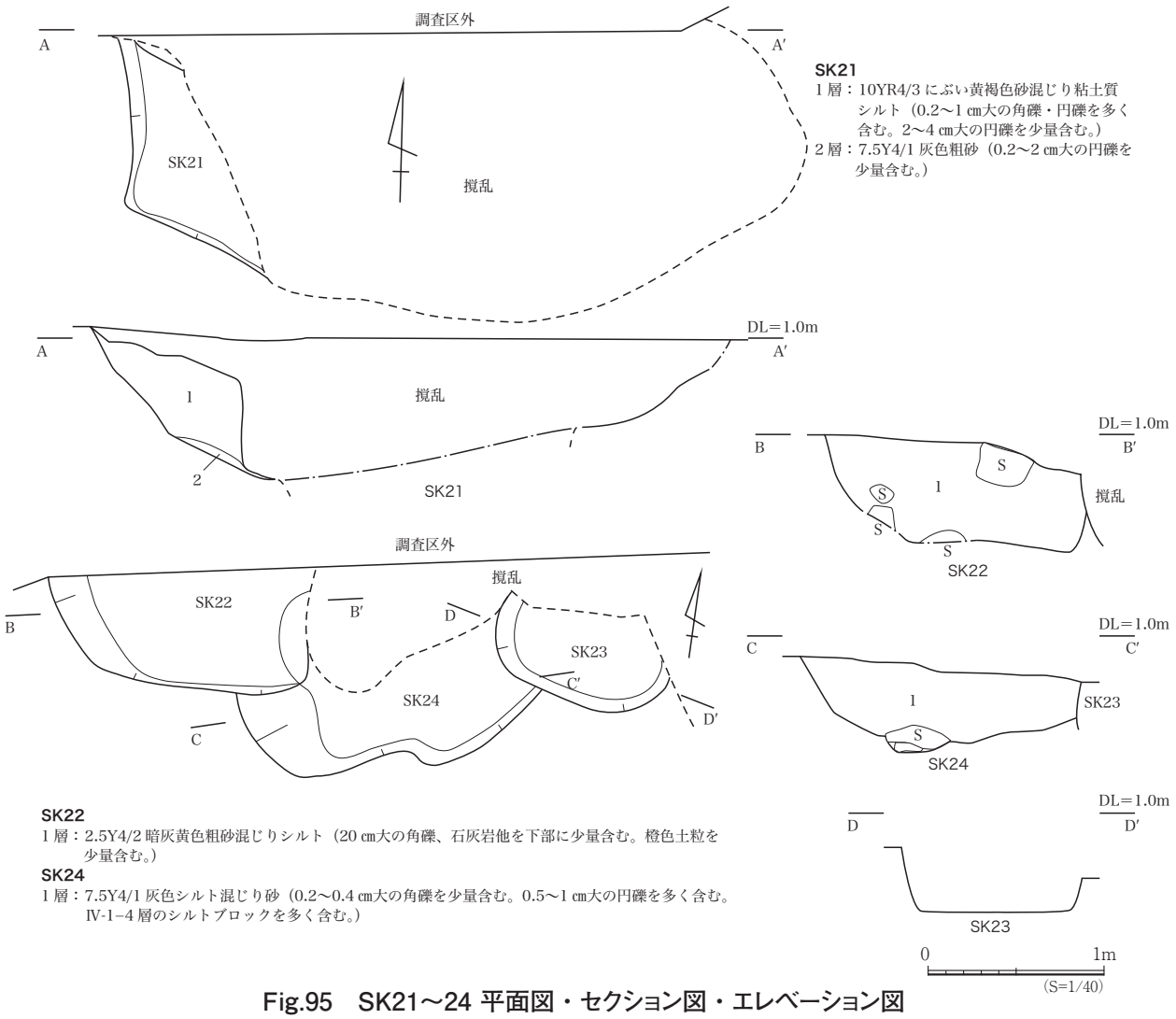


Fig.95　SK21〜24 平面図・セクション図・エレベーション図

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗４点・小杯１点・小皿１点・鉢２点、白磁小皿１点、陶器小皿２点・鍋２点・土瓶１点・土瓶蓋１点・甕１点、土師質土器小皿３点・中皿１点・焜炉１点、瓦質土器焜炉１点である。染付には酸化コバルトを用いた近代の製品４点が含まれる。

図示したものは860 〜 868である。861は近世の青磁染付中碗、863は染付鉢である。863は、外面に連続唐草文、内面に波と唐草文、見込みに手描きによる五弁花文、高台内に「太明成化年製」を描く。二次被熱により釉が変質している。860・862は酸化コバルトを用いた近代の染付である。860は丸形中碗で、外面に型紙刷りによる文様と菊花、丸に蝶、口縁部内面に型紙刷りによる宝珠繋ぎを施す。862は型打成形による菊花形の小皿で、蛇ノ目凹形高台をもつ。内面に型紙刷りによる草花文を施し、口縁部にコバルトを施す。864は陶器。864は焼締めの五寸皿で、外面に煤が付着する。865・866は瓦質土器の筒形焜炉である。867・868は瓦。867は軒桟瓦の丸瓦部で、連珠三巴文。868は桟瓦又は平瓦で、「安喜」銘印をもち安芸（高知県安芸市）産である。

SK19は19世紀後葉（明治15年以降）に比定される。また、SK19とSK6・20・21間では出土遺物の接合関係があり、同時期に遺物廃棄と遺構廃絶が行われたことが推定される。

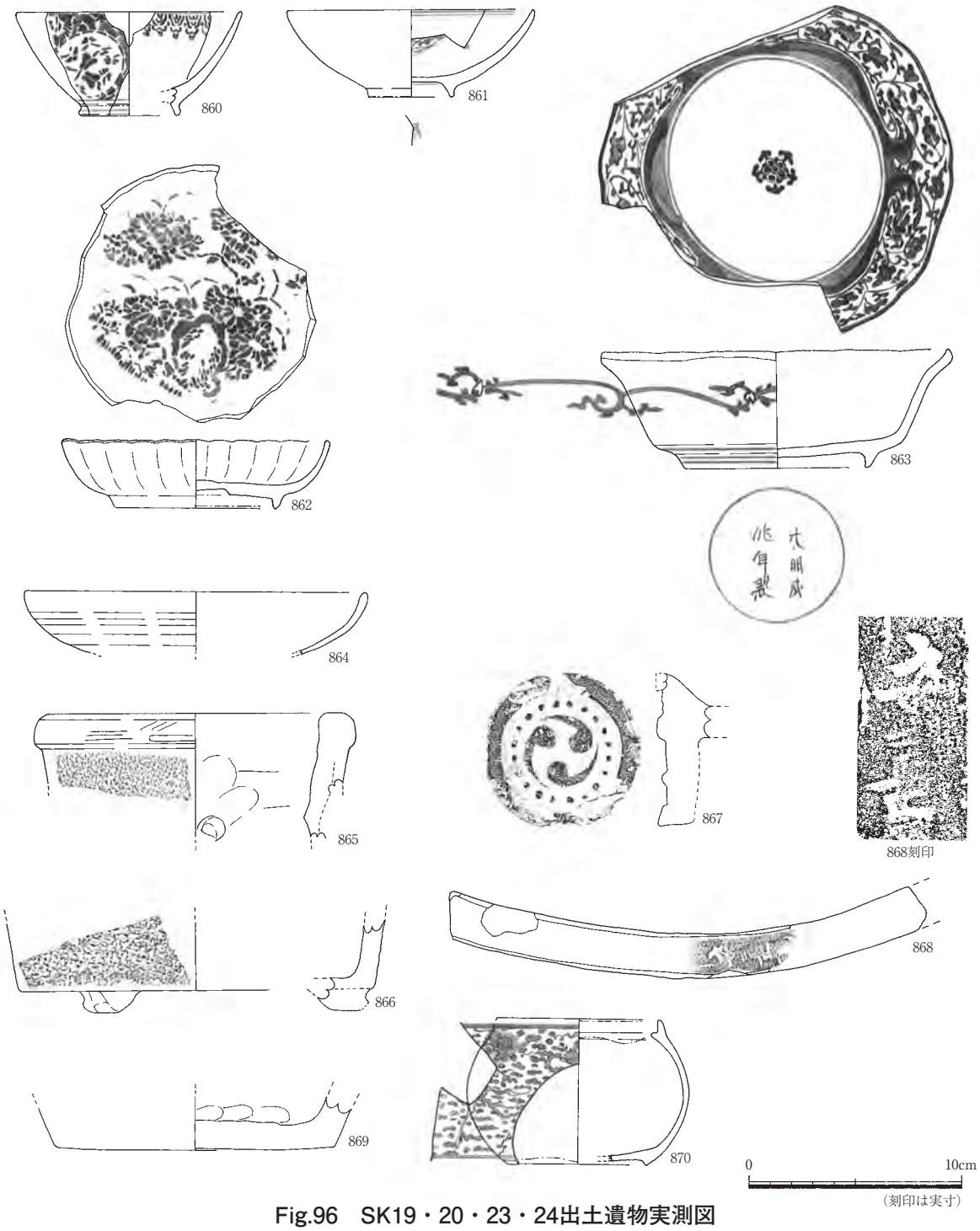


Fig.96　SK19・20・23・24出土遺物実測図
（SK19：860 ～ 868、SK20：861、SK23：869、SK24：870）

SK20（Fig.7・96）

SK20はⅡ区調査区南壁断面で確認した遺構である。断面による東西確認長は1.12m、深さは20cmである。埋土は炭化物を多く含む灰色砂混じりシルトである。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、青磁染付中碗１点、陶器土瓶１点である。この他、鉄釉

の陶器の体部片１点、土師質土器焜炉の体部片１点が出土している。このうち、青磁染付中碗（861）はSK19出土の破片と接合関係をもつ。

SK20は19世紀後葉（明治15年以降）に比定される。また、SK20とSK19間では出土遺物の接合関係があり、同時期に遺物廃棄と遺構廃絶が行われたことが推定される。

SK21（Fig.95・97 ～ 100）

Ⅱ区B ～ C7グリッド、Ⅳ-1層で検出した。北東部が撹乱に接し、中央部の多くを削平されているため、規模、形態は不明である。わずかに残る形状から、土坑の中心部は北東側にあるとみられる。南北残存長1.56m、東西残存長0.62m、深さ86cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂混じり粘土質シルトで、円礫を多く含む。下部に粗砂が堆積する。調査時、撹乱層と埋土の分別が難しく、遺物についても一部混在する可能性がある。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗７点・小杯３点・大皿４点・中皿４点・小皿６点・

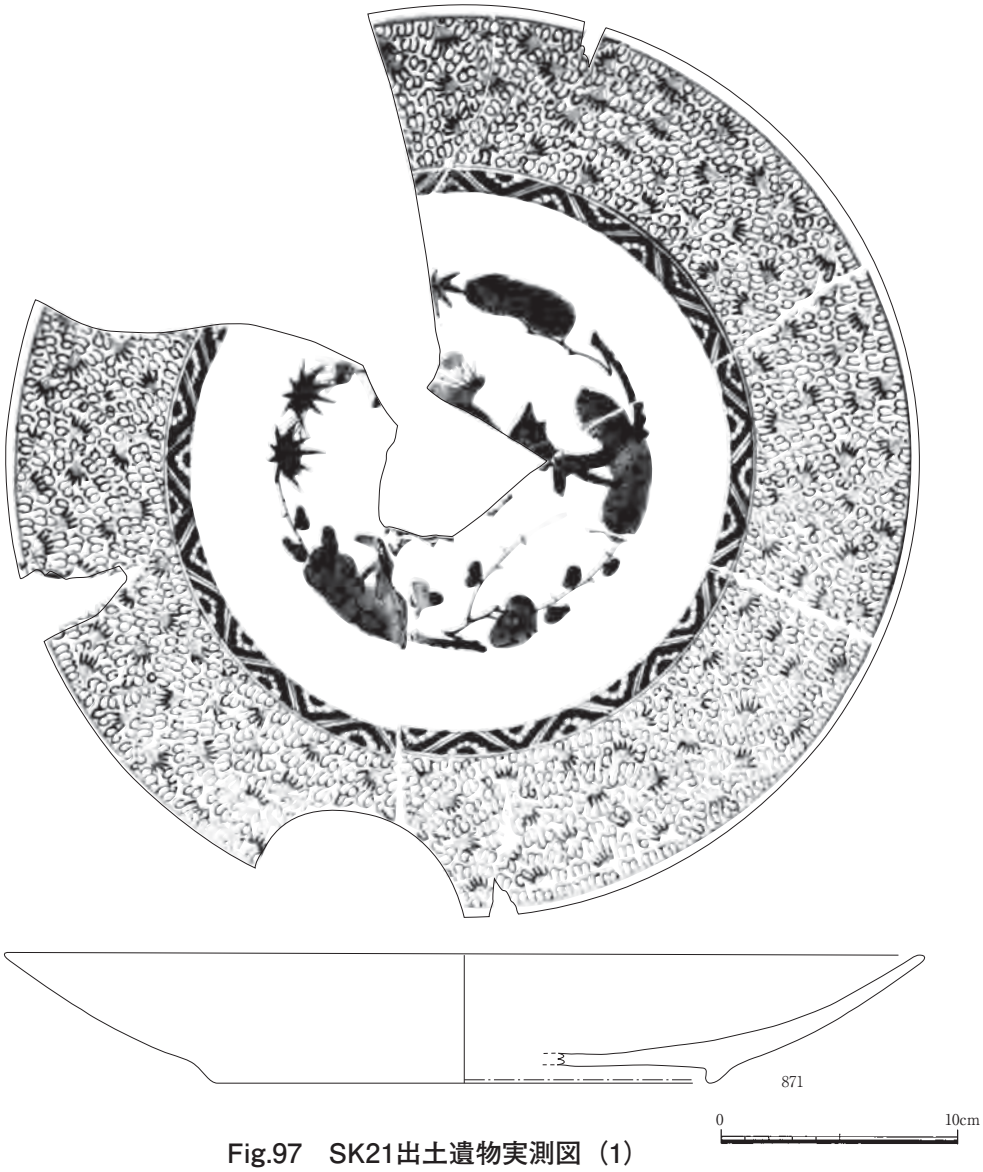


Fig.97　SK21出土遺物実測図（1）

瓶１点、陶器小碗１点・擂鉢４点・捏鉢４点・鍋３点・鍋蓋３点・土瓶２点・瓶１点・甕１点・蓋１点・灯明受皿２点・不明２点、土師質土器小皿１点・白土器小皿３点・中皿１点・焜炉２点、瓦質土器焜炉２点で、この他、鉄釘２点、貝（カキ）、瓦片13点が出土している。

図示したものは近世の871・873、近代の874 ～ 878・880・882、近世又は近代の872・879・881・883 ～ 891である。871は染付の大皿で、外面に唐草文、内面に花唐草文、半菊文の帯線、松竹梅円形文を描く。高台内にハリ支え痕を認める。873は色絵染付の蛇形の大皿で、貼付高台。外面に赤・金の上絵付による龍、宝珠、瓔珞文、内面に呉須と赤・緑・金の上絵付による草花文、宝文、窓に

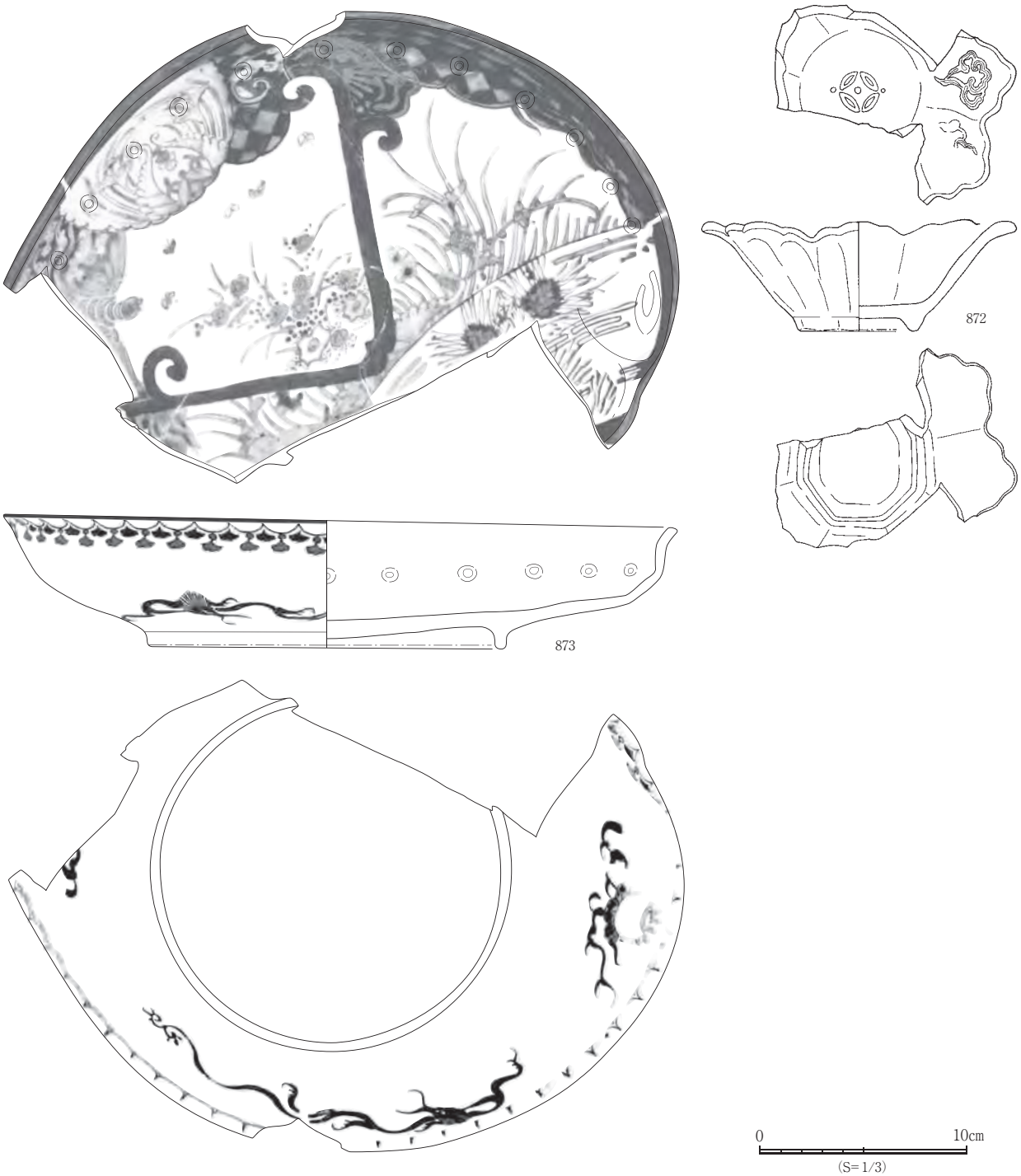


Fig.98　SK21出土遺物実測図（2）

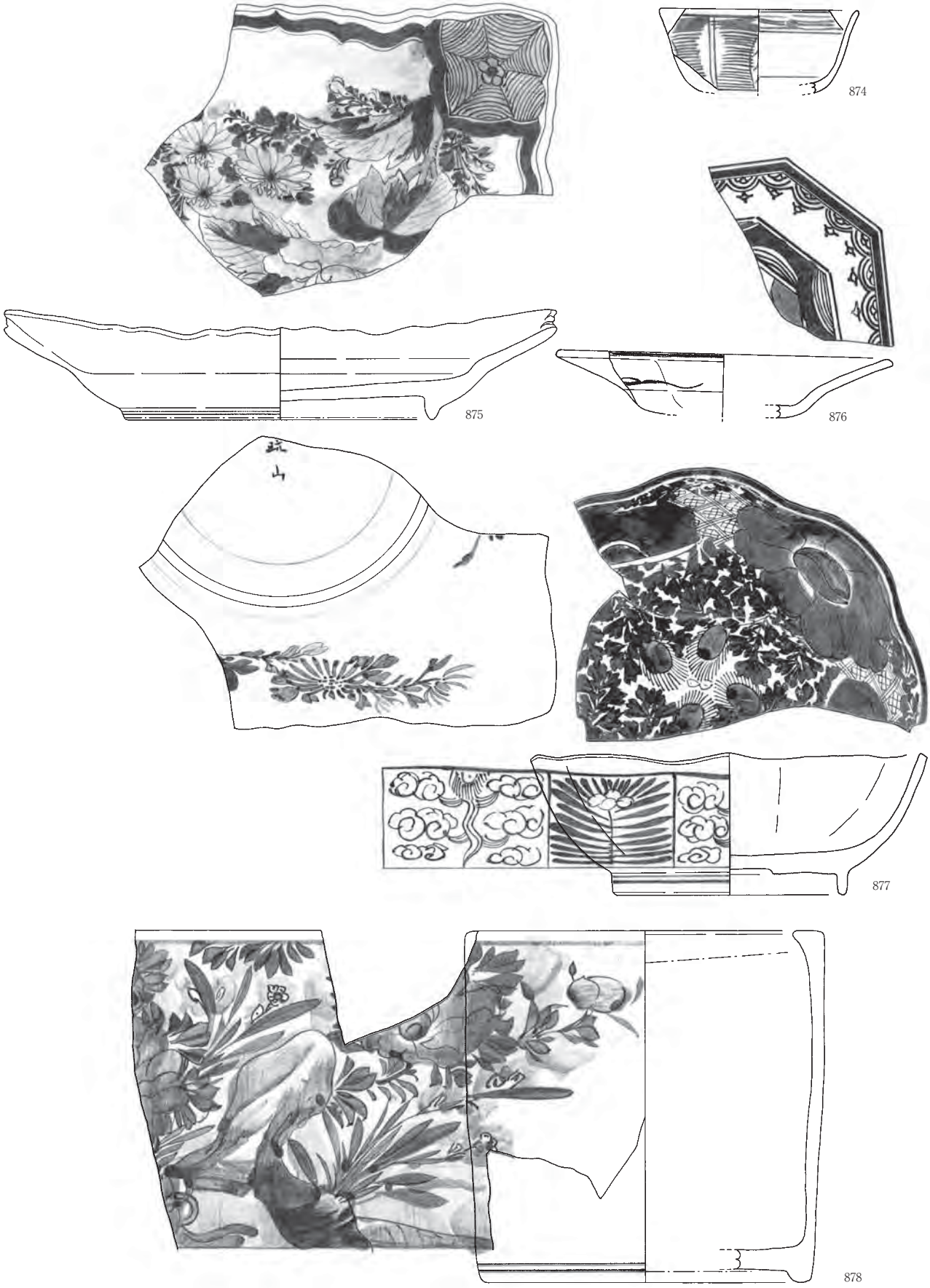


Fig.99　SK21出土遺物実測図（3）

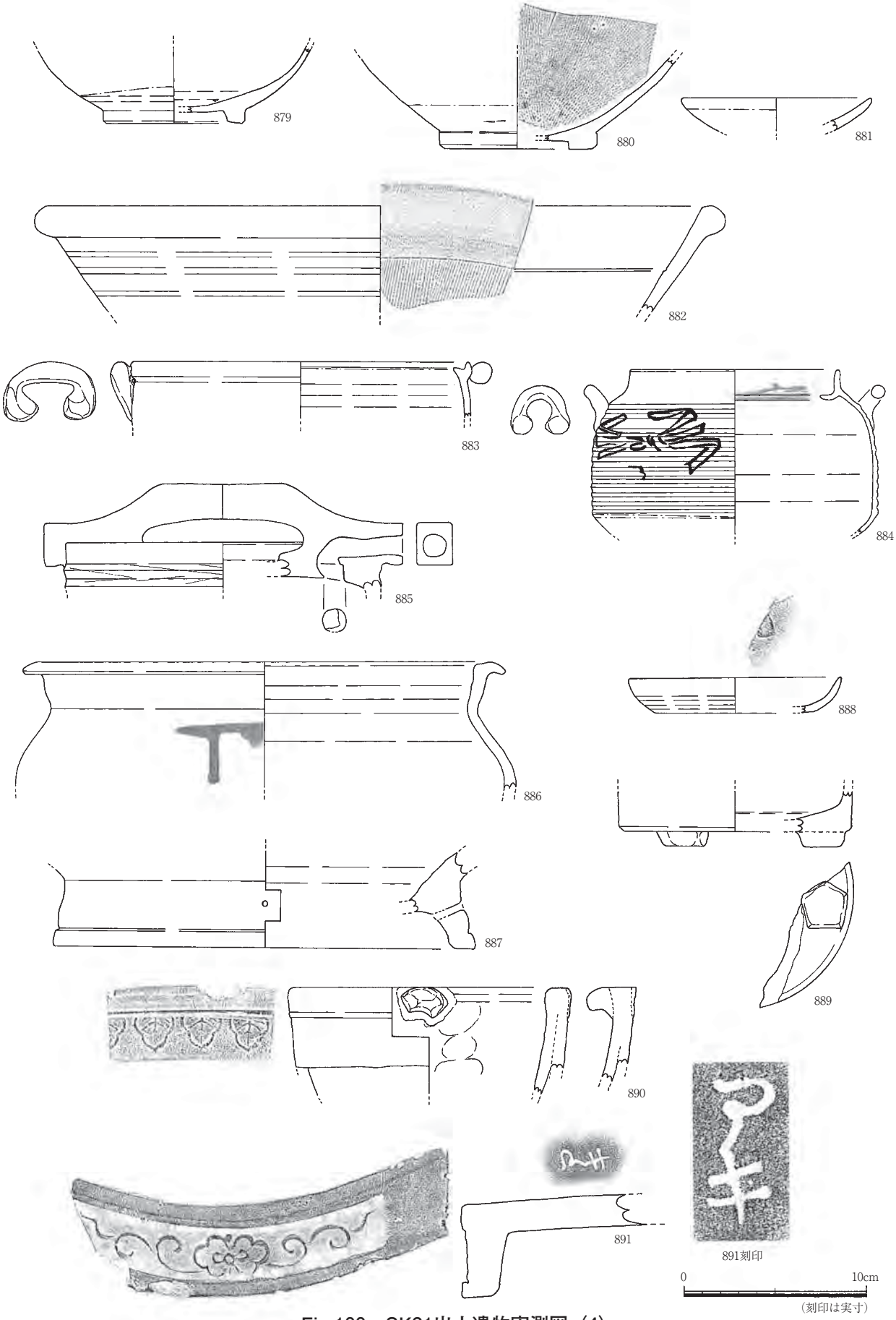


Fig.100　SK21出土遺物実測図（4）

花卉、雷文を描く。口縁端部には金彩を施す。872は青磁の変形形の鉢で、八角形の高台をもつ。内面に型による陽刻の宝文と雲を施す。874 ～ 878は酸化コバルトによる近代の染付である。874は端反形中碗で、外面に区画間に縞と不明文様、口縁部内面に帯線と略化した不明文様を描く。875は型打ち成形による方形の大皿で、部分的に緑釉を施す。高台内に「玩山」銘をもつ。876は八角形の中皿で、外面に不明文様、内面に宝珠繋ぎと不明文様を描く。877は口縁部輪花形の鉢で、蛇ノ目凹形高台をもつ。878は筒形の火鉢で、草花文を描く。

879 ～ 887は陶器。881は肥前産の灰釉小皿で、1590 ～ 1630年代。879は能茶山窯の鉢で、黒褐色の釉を施す。880・882は擂鉢。880は高台付の擂鉢の底部で、内底まで櫛目を施す。外面に黒色の釉を施す。883は鍋で、能茶山窯の製品か。双耳を貼付し、外面に灰白色の釉、内面に暗赤褐色の釉を施す。884は灰釉の土瓶で、鉄絵の宝文を描く。紐状の把手を貼付し、外面に多段の凹線を巡らす。885は水注類。把手を貼付し、灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施す。886は能茶山窯の鉄釉甕。暗赤褐色の釉を施し、肩部に黒色の釉を流し掛けする。887は火鉢又は灰釉の焜炉である。

888・889は土師質土器。888は尾戸窯の白土器小皿で、内面に型による陽刻の高砂文を施す。889は京都系の筒形焜炉で、白色系の胎土をもつ。890は瓦質土器の筒形の焜炉で、外面に型による陽刻文様を施す。内部施設をもち、口縁部内面に手捏ねによる受けを貼付している。

891は軒桟瓦又は軒平瓦で、中心飾りは花文である。平瓦部の上面に「アキ」銘印をもち、安芸（高知県安芸市）の製品である。この他、古代の混入とみられる須恵器杯（121）が出土している。

SK21は19世紀後葉（明治15年以降）に比定される。また、SK6・19・21間では出土遺物の接合関係があり、同時期に遺物廃棄と遺構廃絶が行われたことが推定される。

SK22（Fig.95）

Ⅱ区C7グリッド、Ⅳ-1層で検出した。北部が調査区外に広がり、東部が撹乱に接するため、規模、形態は不明である。南北残存長0.71m、東西残存長1.50m、深さ67cmを測る。埋土は暗灰黄色粗砂混じりシルトで20cm大の石灰岩角礫を少量含む。SK24を切る。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗４点・皿又は鉢１点、白磁小皿１点で、この他、

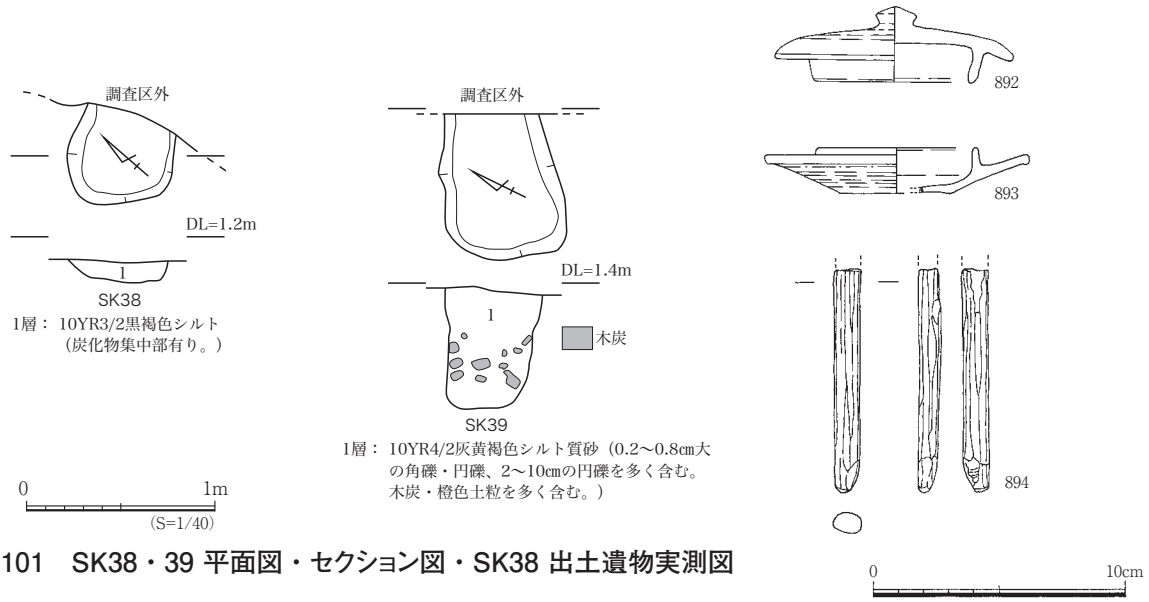


Fig.101　SK38・39 平面図・セクション図・SK38 出土遺物実測図

陶器碗・瓶類・甕の体部、土師質土器小皿の体部、鉄製の棒状製品、瓦片が出土している。染付では、近世の製品は４点、酸化コバルトを用いた近代の製品は１点が含まれる。

SK23（Fig.95・96）

Ⅱ区C ～ D7グリッド、Ⅳ-1層で検出した。北部及び東部が撹乱に接するため、規模、形態は不明である。南北残存長0.54m、東西残存長1.04m、深さ37cmである。埋土は灰色シルト混じり砂である。SK24を切る。

出土遺物は、器種不明の鉄釉陶器の口縁部１点、瓦質土器又は陶器の底部１点、器種不明の鉄製品１点である。図示したものは瓦質土器又は陶器の底部（869）である。

SK24（Fig.95・96）

Ⅱ区C7グリッド、Ⅳ-1層で検出した。北部が撹乱に接し、さらにSK22・23に切られるため、規模、形態は不明である。南北残存長0.70m、東西残存長1.72m、深さ50cmである。埋土は灰色シルト混じり砂で円礫を多く含む。また、埋土にⅣ-1層のブロックを多く含む。

出土遺物は、近世の染付広東形碗の底部１点と急須の口縁部１点、染付細片２点、近世又は近代の鉄釉の鍋又は土瓶の体部１点、土師質土器細片１点、棒状の鉄製品１点、瓦片３点である。

図示したものは染付の急須（870）である。870は外面に雲龍文を描く。

SK38（Fig.101）

Ⅲ区A ～ B5グリッド、Ⅳ-1層で検出した。東部が調査区外に広がるため、規模、形態は不明である。南北長0.56m、東西残存長0.50m、深さ12cmを測る。埋土は黒褐色シルトで炭化物集中を含む。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗２点・碗又は鉢１点、陶器土瓶蓋１点・灯明受

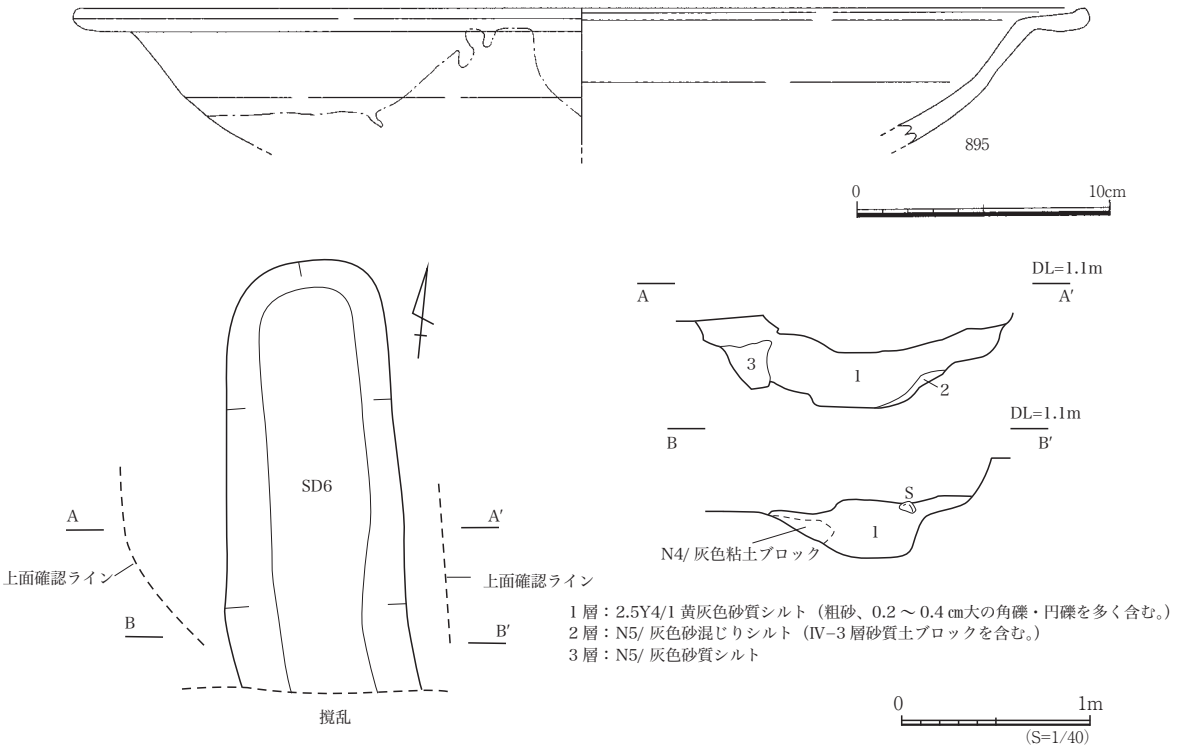


Fig.102　SD6 平面図・セクション図・出土遺物実測図

皿１点、土師質土器小皿１点で、この他、染付細片、陶器細片、瓦質土器焜炉の体部、棒状の石製品が出土している。

図示したものは892 ～ 894である。892は鉄釉の土瓶蓋で、能茶山窯の製品か。893は灰釉の灯明受皿で、浅黄橙色を帯びる透明の釉を施す。894は棒状の石製品で、簪か。断面楕円形で、先端を面取り尖らせている。

SK39（Fig.101）

Ⅰ区D2グリッド、Ⅳ-3層で検出した。北部が調査区外に広がるため正確な規模、形態は不明であるが、残存部の形状から、隅丸方形を呈していると思われる。南北確認長0.78m、東西長0.61m、北壁断面による深さ65cmを測る。埋土は、礫、炭化物、橙色土粒を多く含む灰黄褐色シルト質砂である。土坑からは、大量の木炭が出土し、木炭の下部では銅線で編んだ籠状遺物が出土した。これらの出土遺物の特徴から、銅板と大量の木炭が出土したTP7のSK18との関連性が窺える。北壁断面の観察から掘り込み面はⅡ層上面であることを確認した。P109を切る。

(2) 溝

SD6（Fig.102）

Ⅰ区F ～ G2グリッド、Ⅰ層下面で検出した南北方向の溝である。軸方向はN-11°-Wである。南部が撹乱に接するため、規模は不明である。残存長1.95m、幅0.93m、検出面からの深さ24cmを測る。遺構下部での検出となったが、堆積状況確認のために残した土層断面では、上部まで確認でき、それによると、幅1.62m、深さ49cmを測る。埋土は黄灰色砂質シルトが主体で、灰色粘土ブロックを含む。また下部には、灰色砂混じりシルトや砂質シルトが堆積する。

図示したものは肥前産の陶器大皿（895）である。

(3) 性格不明遺構

SX1（Fig.103 ～ 105）

TP1の北東部を除く全域とTP2の東部において、Ⅰ層の下面で検出された遺構である。西部をSK6に切られ、北部と南部、東部が調査区外に広がるため、規模、形態は不明である。南北残存長3.09m、東西残存長6.79m、深さ78cmを測る。下面は数ヶ所の落ち込みが確認でき、数回に分けて掘削された廃棄土坑とみられる。埋土は礫を多く含むにぶい黄褐色～灰黄褐色シルトが主体であり、５～ 20cm大の石灰岩の割石を含む。

図示したものは、近世の897・898・900 ～ 902・904・906・928 ～ 932、近代の896・905・907・908、近世又は近代の899・903・909 ～ 927である。

897・900 ～ 902・904・906は近世の染付。906は筒丸形小碗。外面に花卉、口縁部内面に四方襷を描く。897は鉢で、外面に蔓草、内面に区画間に唐草文、菊花を描く。900は丸形の小皿で、高台内に角枠内銘をもつ。901は蓋物の蓋で、天井部の周縁に錆釉を施し、花卉を描く。902は半筒形の蓋物で、外面に唐草文と略化した蓮弁文を描く。904は牛形の水滴で型押成形左右貼り合わせによる。898は色絵染付の端反形小杯で、見込みに呉須による圏線と「酒」の文字、金の上絵付による

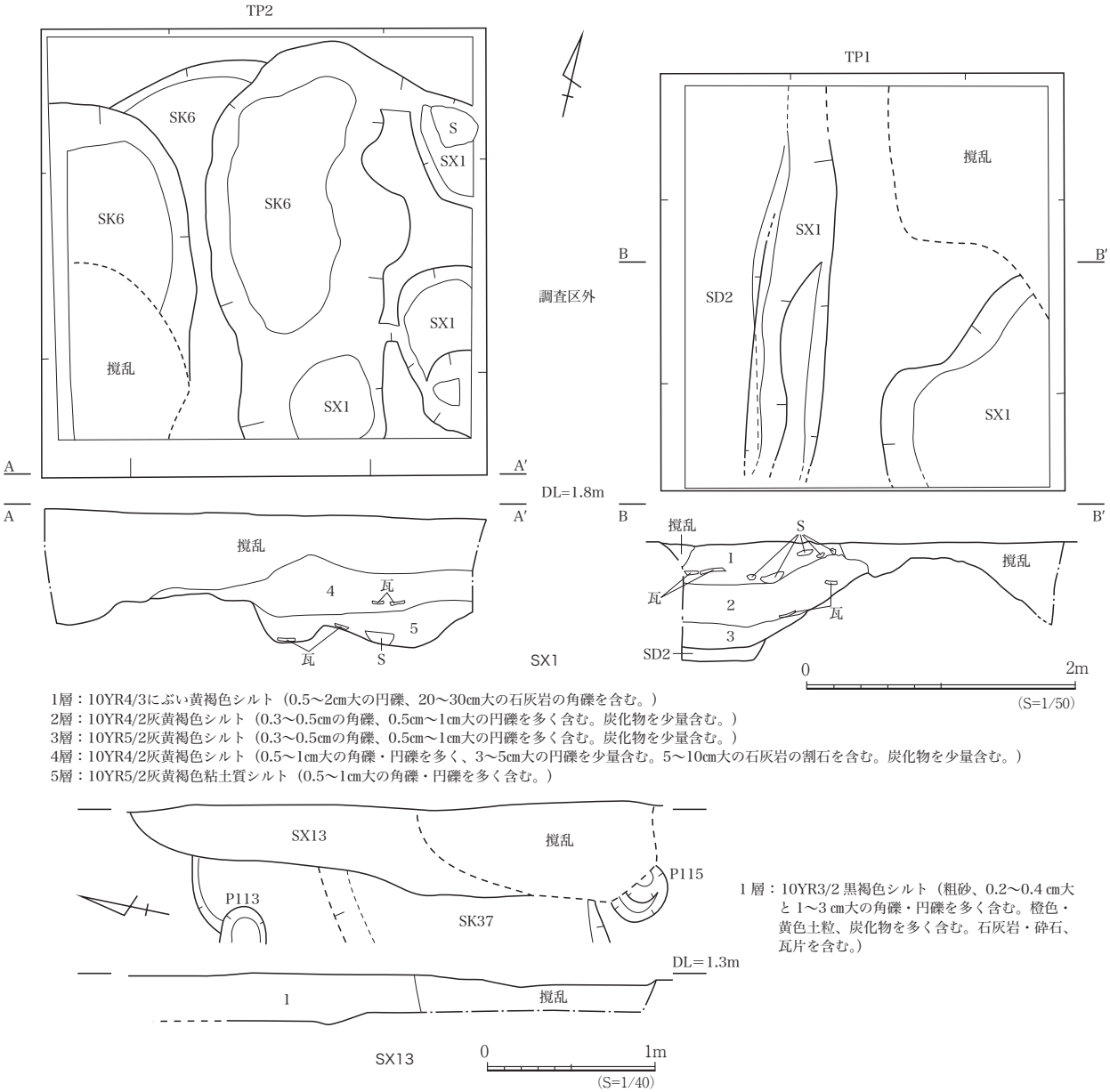


Fig.103　SX1・13 平面図・セクション図

文字を描く。899は色絵磁器の小碗で、口縁部外面に赤の上絵付による帯線、外面に黒・青・その他の上絵付による松と植物、高台内に赤による「九谷」銘を描く。903は白磁又は染付の鉢である。

896・905・907・908は近代の染付で、酸化コバルトによる文様を施す。896は端反形中碗で、見込み蛇ノ目釉剥ぎ。外面に多重圏線と唐草文、口縁部内面に二重圏線を描く。905は中碗で、肥前系又は鹿児窯の製品か。蛇ノ目凹形高台をもち、外面に圏線と不明文様、見込みに略化した海浜風景文を描く。908は鉢で、口縁部輪花形。907は小瓶である。

909・910・912～921は陶器。909は尾戸窯の灰釉の陶器で、盃台か。上面に黒象嵌による花唐草文を巡らせ、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。910は尾戸窯の灰釉碗又は皿。高台無釉で、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。912は土瓶。焼締めで、外面上半を手捏ねで亀甲状に成形する。内

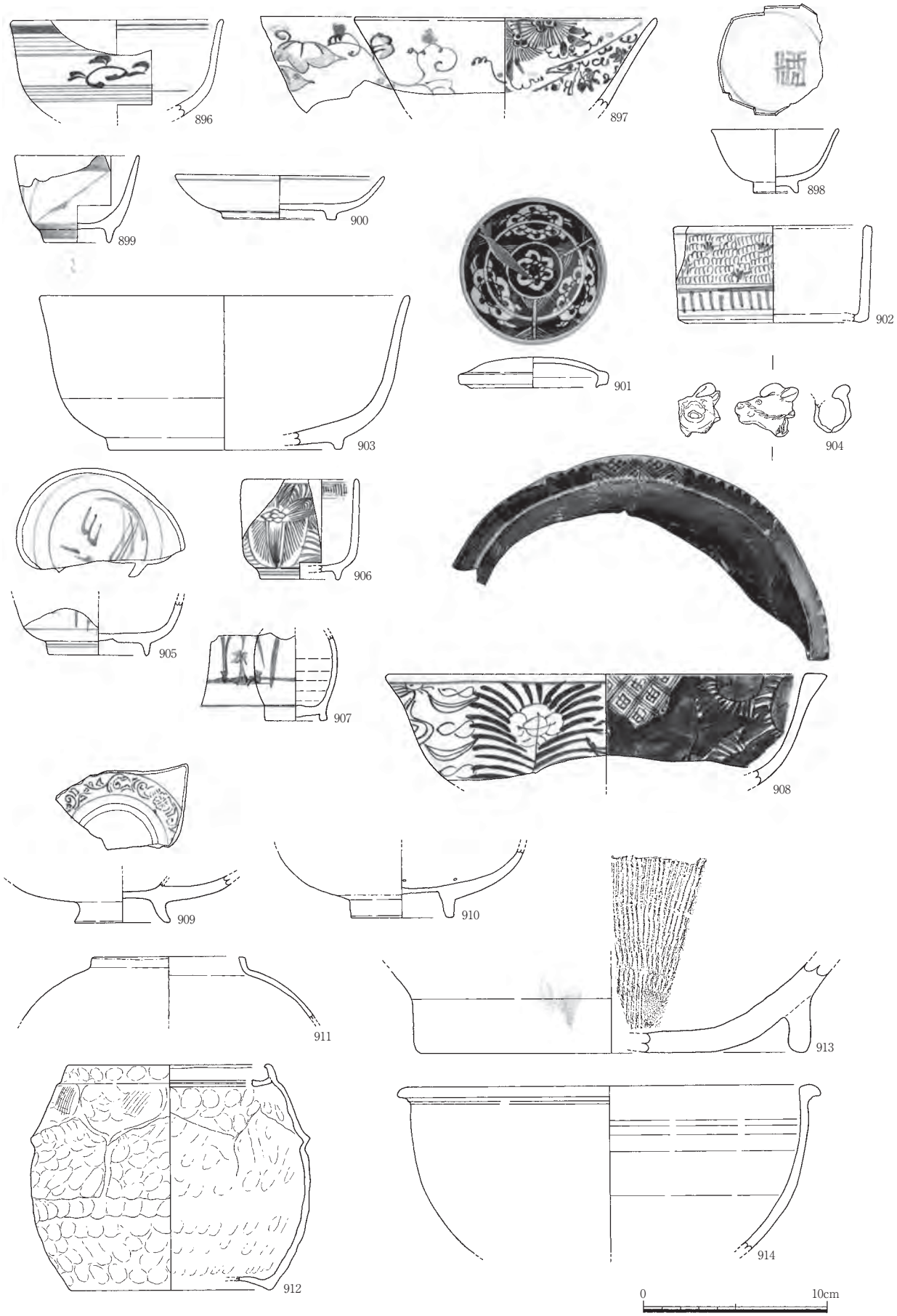


Fig.104　SX1出土遺物実測図（1）

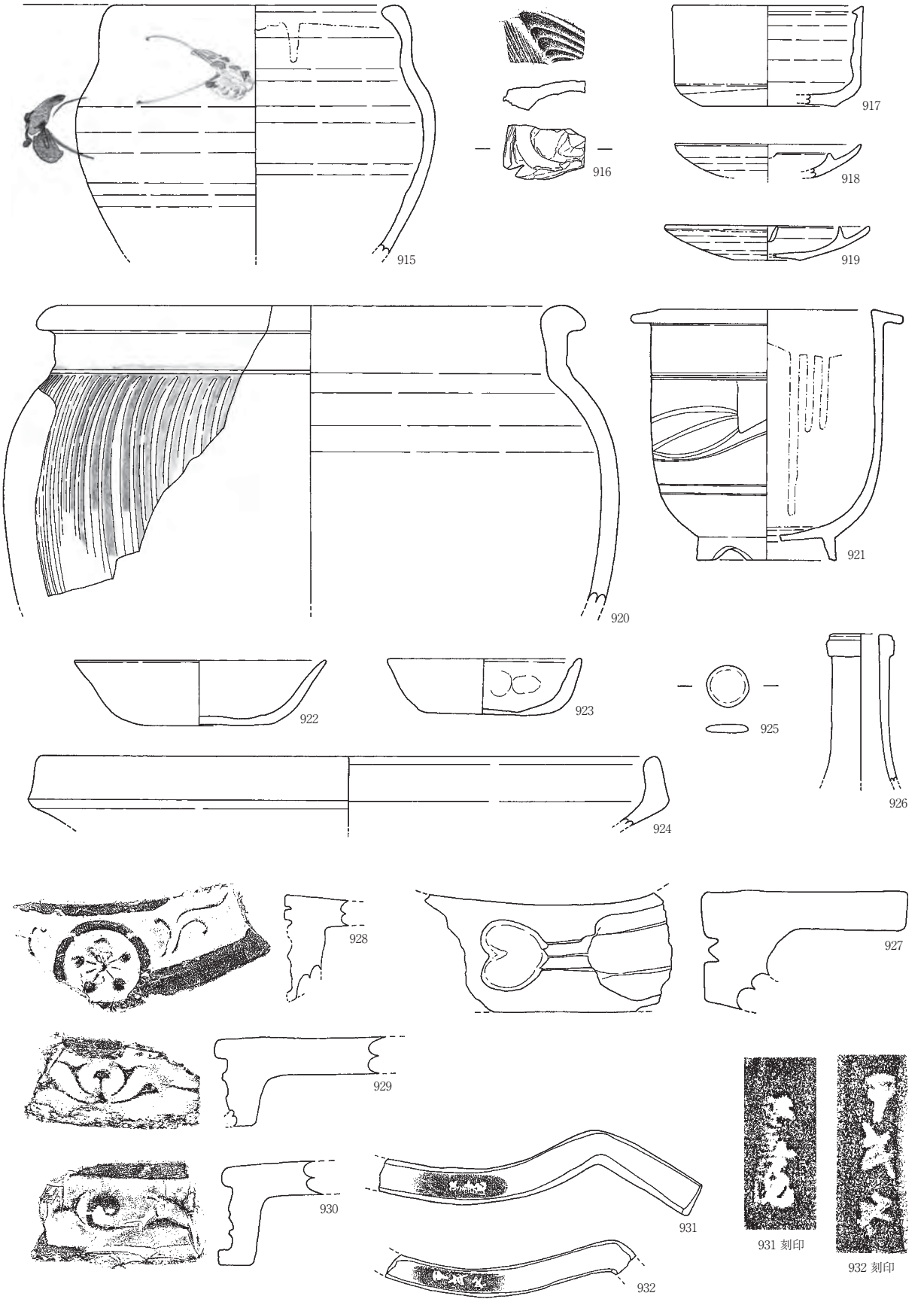


Fig.105　SX1出土遺物実測図（2）

外面にユビオサエ痕、外底に布目痕を残す。913は備前の擂鉢で、輪高台を貼付する。914は能茶山窯の鉄釉捏鉢で、暗赤褐色の釉を施す。915は尾戸窯の灰釉の陶器で、水指か。外面に呉須と鉄錆で蝶を描き、灰白色を帯びる透明の釉を施す。916は蓋物の蓋か。焼締めで、外面に型による陽刻文様を施す。鳥の羽は細かな線彫りで描いている。胎土は緻密で、灰色を呈する。917は灰釉の半筒形蓋物で、淡黄色を帯びる透明の釉を施す。918は備前の灯明受皿。外面上位と内面回転ナデ、外面下位回転ケズリで、外面に錆釉を施す。919は京都・信楽系の灯明受皿。外面無釉で、内面に灰黄色を帯びる透明の釉を施す。920は灰釉の甕。外面にヘラ彫りによる縦筋を施し、外面上位に青色の釉を流し掛けする。921は植木鉢で、能茶山窯の製品か。外面に鉄釉を刷毛塗りし、ヘラ彫りによる圏線と波状文を巡らす。911は軟質施釉陶器の土瓶で、橙色の低火度釉を施す。

922 ～ 924は土師質土器。923は小皿。922は杯又は皿である。924は関西産の焙烙である。925は粘板岩製の碁石。926はガラス製の瓶である。

928 ～ 932は瓦で、928は軒桟瓦、927 ～ 930は軒桟瓦又は軒平瓦、931・932は桟瓦である。928は中心飾りが梅鉢文、929・930は橘文である。このうち931は「安喜」とみられるもの、932は「アキ□」銘印をもち安芸（高知県安芸市）産である。927は瓦か。

SX1は19世紀後葉（明治10年代以降）に比定される。

SX13（Fig.103・106）

Ⅲ区A4グリッド、Ⅲ層で検出した。南部が撹乱に接し、東部が調査区外に広がるため、全体の規模、形態は不明である。南北残存長2.38m、東西残存長0.51m、深さ30cmを測る。埋土は礫、炭化物、橙色・黄色土粒を多く含む黒褐色シルトである。SK37を切る。

図示したものは陶器製の土管（933）、軒桟瓦又は軒平瓦（934）である。

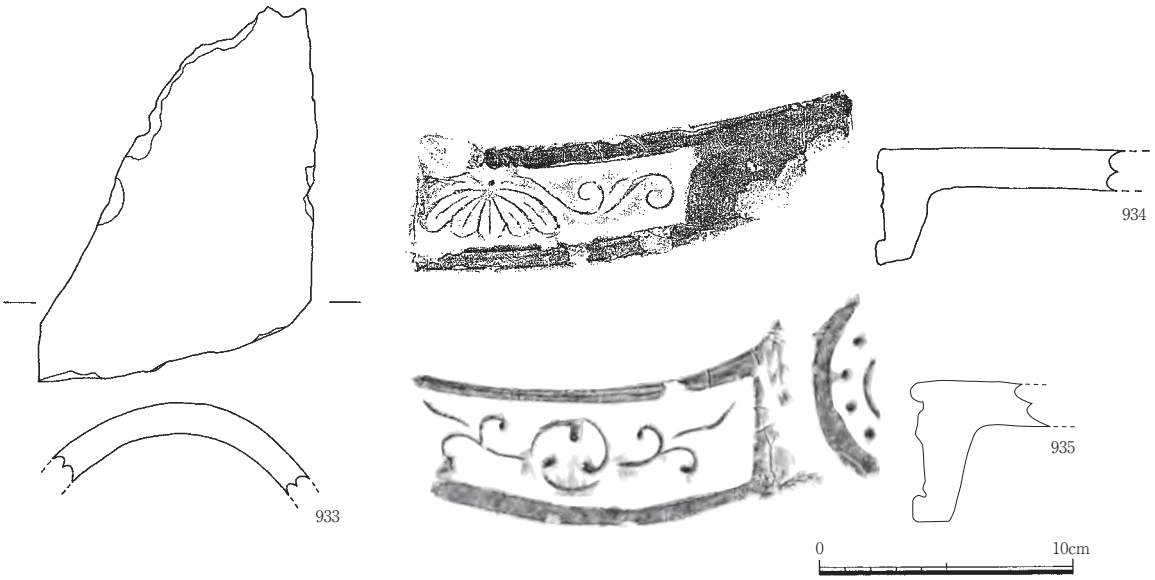


Fig.106　SX13出土遺物・SD2混入遺物実測図

Tab.1　遺構一覧表（SK・SE）

遺構名	検出位置	形態	長軸（m）	短軸（m）	深さ（cm）	切り合い関係	時期
SK1	TP4・C6	不明	0.79	残0.78	16		近世（19世紀中葉）
SK2	TP3・D5-E6	不明	残3.14	残2.41	22	SK6に切られる。	近世（17～18世紀）
SK3	TP5・G4	不明	1.54	残1.02	26	SD1に切られる。	近世（17世紀）
SK4	TP5・G3-G4	不明	残2.30	1.32	25	SD1、P20・21・23・40を切る。 SK5に切られる。	近世（17世紀後半～18世紀前半）
SK5	TP5・G3	不明	1.76	残1.63	38	SK4、SD1、P20・38を切る。	近世（19世紀前半）
SK6	TP2-3・D5-E6	不明	6.93	残2.51	67	SK2、P7、SX1を切る。	近代（19世紀後葉）
SK7	TP8・C5-D5	不明	残2.06	残1.76	48	SK17を切る。	近世（19世紀中葉）
SK9	TP9・B5-C5	不明	残1.78	1.52	33		近世（17世紀前半）
SK10	TP9・B4	不明	残1.94	残0.61	8		近世
SK11	TP8・C4-D5	不明	残3.66	残2.48	56	SK17を切る。 SE1、SB2-P1に切られる。	近世（18世紀後半～19世紀）
SK12	TP7・D4-E5	不明	残2.56	2.20	34	SK13を切る。 SB1-P4・5、SB2-P2、P45に切られる。	近世（17世紀前半）
SK13	TP7・D4-E4	不明	残1.64	1.48	20	SK12、P31・45に切られる。	近世（17世紀前半）
SK14	TP6・F4	不明	1.60	残1.16	25	SD2に切られる。	中世又は近世
SK15	TP6・F3	不明	残1.52	残0.76	28	SD2に切られる。	中世
SK16	TP7・E5	不明	残2.25	残0.88	24	SK18、P118、SB1-P4に切られる。	近世（17世紀）
SK17	TP8・C5-D5	不明	残2.42	残1.16	22	SK7、11、SE1、SB2-P5に切られる。	近世（17世紀）
SK18	TP7・E5	隅丸方形	0.96	0.52	46	SK16、SB2-P4を切る。	近代か
SK19	Ⅱ区・B7-C8	不明	確認3.76	確認0.56	50	SK20に切られる。	近代（19世紀後葉）
SK20	Ⅱ区・C8	不明	確認1.12	不明	20	SK19を切る。	近代（19世紀後葉）
SK21	Ⅱ区・B7	不明	残1.56	残0.62	86		近代（19世紀後葉）
SK22	Ⅱ区・C7	不明	残1.50	残0.71	67	SK24を切る。	近代
SK23	Ⅱ区・C7-D7	不明	残1.04	残0.54	37	SK24を切る。	近代又は現代
SK24	Ⅱ区・C7	不明	残1.72	残0.70	50	SK22・23に切られる。	近世又は近代
SK27	Ⅰ区・A2	不明	2.11	確認0.46	10	P81に切られる。	中世又は近世
SK29	Ⅰ区・C2	楕円形	2.01	1.29	64	P87・88を切る。 P76・116に切られる。	中世（15世紀前半）
SK31	Ⅰ区・B2	不明	確認2.74	確認1.70	60	SD7に切られる。	中世又は近世
SK33	Ⅰ区・C2-D2	不明	残1.16	残0.42	31	SD3に切られる。	中世か
SK36	Ⅲ区・A5-B5	楕円形か	0.84	0.28	12	P94を切る。	近代か
SK37	Ⅲ区・A4	不明	2.59	確認0.84	56	P113、SX13に切られる。	近世
SK38	Ⅲ区・A5-B5	不明	0.56	残0.50	12		近代か
SK39	Ⅰ区・D2	隅丸方形か	確認0.78	0.61	65	P109を切る。	近代か
SE1	TP8・C4-D4	円形か	掘方径2.18	井筒径0.68	154	SK11・17を切る。	近世（19世紀前半～中葉）
SE2	Ⅰ区・E2	楕円形	掘方径1.45×1.22	井筒径0.52	132	P59に切られる。	中世（15世紀）
SE3	Ⅰ区・F1-F2	楕円形か	掘方径1.78×確認1.45	井筒径0.58	132		中世（14世紀～15世紀前半）

Tab.2　遺構一覧表（SD）

遺構名	検出位置	軸方向	長軸（m）	短軸（m）	深さ（cm）	切り合い関係	時期
SD1	TP5・G3-G4	N-8°-W	残4.85	1.14	58	SK4・5、P20・21に切られる。	近世（17世紀前半～中葉）
SD2	TP1·6・E3-F6	N-9°-W	残9.97	1.46	76	SK14・15を切る。	近世（17世紀前葉～中葉）
SD3	Ⅰ区・A3-E2	N-79°-E	確認19.05	2.94	114	SK33、SD4を切る。	近世（17世紀第３四半期）
SD4	Ⅰ区・F2	N-77°-E	残3.39	1.15	70	SD3、P82・86に切られる。	中世
SD5	Ⅲ区・A5-B5	N-77°-E	残1.24	0.47	9		近世
SD6	Ⅰ区・F2-G2	N-11°-W	残1.95	1.62	49		近代か
SD7	Ⅰ区・B2-B3	N-16°-W	残1.34	0.40	13	SK31を切る。	中世又は近世

Tab.3　ピット一覧表

遺構名	検出位置	径（cm）	深さ（cm）	柱痕・切り合い関係	時期
P1	TP4・B6	26	27		近世
P2	TP4・C6	29	11		近世
P3	TP4・C6	26	11		近世
P4	TP4・C6	42	11		近世
P5	TP4・C6	26	12		近世
P6	TP4・C6	26	23		近世
P7	TP3・D6	17	10	SK6に切られる。	近世か
P8	TP5・G3	30	33	P10に切られる。	近世か
P9	TP5・G3	28×20	24		近世
P10	TP5・G3	40	28	柱痕（径15cm） P8を切る。	近世
P11	TP5・G4	40	11		近世か
P18	TP9・C4	29	8	SA1-P5を切る。	近世
P20	TP5・G3	43	10	SD1、P23を切る。 SK4･5に切られる。	近世
P21	TP5・G4	40	25	SD1を切る。 SK4に切られる。	近世
P22	TP9・B4	34	27	SA1-P2に切られる。	近世か
P23	TP5・G3	32	12	SK4、P20に切られる。	近世か
P25	TP9・C5	40	30	柱痕（径17cm）	近世
P28	TP5・G3	30	15		近世か
P29	TP9・C5	33×37	24		近世か
P31	TP7・D4	36	13	柱痕（径17cm） SK13を切る。	近世
P34	TP7・E4	37	40	柱痕（径15cm）	近世か
P38	TP5・G3	23	3	SK5に切られる。	中世又は近世
P39	TP5・G3	24	3		近世か
P40	TP5・G4	26	5	SK4に切られる。	近世か
P43	TP9・B5	26	16		近世か
P44	TP9・B5	23	6		近世か
P45	TP7・E4	44	17	柱痕（径15cm） SK13を切る。	近世
P46	TP9・B5	13	3		近世か
P47	TP7・E4	36	16		近世か
P49	TP7・E4	23	12		近世か
P50	TP7・E4	21	42	柱痕部分か（径21cm）	近世か
P55	Ⅰ区・E2	29	39		中世か
P57	Ⅰ区・E2	27	22		中世か
P58	Ⅰ区・E2	28	4		中世か
P59	Ⅰ区・E2	27	22	SE2を切る。	中世か
P60	Ⅰ区・E2	30	12		中世か
P61	Ⅰ区・F2	25	26		中世か
P62	Ⅰ区・E2	22	7		中世か
P63	Ⅰ区・E2	25	10		中世か
P64	Ⅰ区・E1	26	18		中世か
P65	Ⅰ区・F2	32	8		中世か
P66	Ⅰ区・F2	29	14		中世か
P67	Ⅰ区・F2	30	18		中世か
P68	Ⅰ区・E2	25	19		中世か
P70	Ⅰ区・E2	26	9		中世か
P71	Ⅰ区・D2	25	8	P73･74を切る。	中世か
P72	Ⅰ区・C2	28	2		中世か
P73	Ⅰ区・D2	22	5	P71に切られる。	中世か

遺構名	検出位置	径（cm）	深さ（cm）	柱痕・切り合い関係	時期
P74	Ⅰ区・D2	28	3	P71に切られる。	中世か
P75	Ⅰ区・D2	24	30		中世か
P76	Ⅰ区・C2	32	12	SK29を切る。	中世又は近世
P77	Ⅰ区・B2	25	14		中世又は近世
P78	Ⅰ区・B2	25	3		中世又は近世
P79	Ⅰ区・B2	24	33		中世又は近世
P80	Ⅰ区・D2	23	13		中世か
P81	Ⅰ区・A2	48	19	SK27を切る。	中世又は近世
P82	Ⅰ区・F2	12	5	SD4を切る。	中世又は近世
P83	Ⅰ区・F1	38	29	柱痕（径8cm）	中世又は近世
P84	Ⅰ区・F1	37	13	柱痕（径8cm）	中世又は近世
P85	Ⅰ区・F1	32	29		中世又は近世
P86	Ⅰ区・F2	18	9	SD4を切る。	中世又は近世
P87	Ⅰ区・C2	21	21	柱痕（径6cm） SK29に切られる。	中世
P88	Ⅰ区・C2	36	23	SK29に切られる。	中世
P89	Ⅰ区・D3	22	39		中世又は近世
P90	Ⅰ区・D2	27	24	柱痕（径10cm）	近世か
P91	Ⅰ区・B2	20	9		中世又は近世
P92	Ⅰ区・E2	25	20		中世か
P93	Ⅲ区・A5	48	30		近世
P94	Ⅲ区・A5	27	20	SK36に切られる。	中世又は近世
P95	Ⅰ区・C2	56	40	P117を切る。	中世又は近世
P96	Ⅰ区・D2	31	28		中世か
P97	Ⅰ区・D2	25	30		中世か
P98	Ⅰ区・D2	23	7		中世か
P99	Ⅰ区・D2	30	23		中世か
P100	Ⅰ区・D2	23	29		中世か
P101	Ⅰ区・D2	26	25		中世か
P102	Ⅰ区・D2	52	28		中世か
P104	Ⅲ区・A4	30	10	柱痕（径12cm）	近世か
P105	Ⅰ区・C3	35	26	P87･88に切られる。	中世
P106	Ⅰ区・D2	26	40	P107･108を切る。	中世か
P107	Ⅰ区・D2	23	23	P106に切られる。	中世か
P108	Ⅰ区・D2	20	21	P106に切られる。	中世か
P109	Ⅰ区・D2	18	26	SK39に切られる。	中世か
P110	Ⅲ区・A5	29	19		中世又は近世
P111	Ⅲ区・A5	24	8		中世又は近世
P112	Ⅲ区・A5	34	13		中世又は近世
P113	Ⅲ区・A4	40	7	SK37を切る。	近世
P114	Ⅲ区・A4	39	9		近代か
P115	Ⅲ区・A4	32	32		近世
P116	Ⅰ区・C2	69×55	16	SK29を切る。	近世か
P117	Ⅰ区・C2	58	27	P95に切られる。	中世又は近世
P118	TP9・B5	28	22		近世か
P119	TP7・E5	50	18	SK16、SB2-P5を切る。	近世か
P120	TP6・E4-F4	24×20	41		近世か
P121	TP9・B5	13	5		近世か
P122	TP9・B5	12	4		近世か

Tab.4　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
1	SK27	土師質土器	杯	11.9	4.2	7.1	—	にぶい橙7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。外面に多段の強いロクロ目。	13世紀末～14世紀
2	SK27上層	土師質土器	杯	11.4	—	—	—	にぶい橙7.5YR6/4		内外面回転ナデ。内面ロクロ目。	
3	SK27上層	土師質土器	杯	—	—	7.2	—	にぶい橙7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。外面に多段の強いロクロ目。	13世紀末～14世紀
4	SK27上層	土師質土器	杯	—	—	6.0	—	にぶい黄橙10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。外面に多段の強いロクロ目。	13世紀末～14世紀
5	SK27	土師質土器	杯又は皿	—	—	7.6	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
6	SK27上層	土師質土器	杯又は皿	—	—	6.0	—	橙2.5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内面ロクロ目。	
7	SK27下層	土師質土器	小皿	10.1	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ	
8	SK27下層	土師質土器	小皿	6.8	1.6	4.4	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内底凸状でユビオサエ。	
9	SK27上層	土師質土器	小皿	7.1	1.6	4.9	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
10	SK27上層	土師質土器	小皿	—	—	4.5	—	橙5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
11	SK27上層	土師質土器	椀	14.4	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/3		内外面回転ナデ	
12	SK27下層	土師質土器	杯又は椀	14.4	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4		口縁部内面に段。内外面回転ナデ	古代
13	SK27上層	瓦器	椀	13.2	—	—	—	外）黄灰2.5Y4/1・褐灰10YR6/1 内）黄灰2.5Y4/1 断）灰白10YR7/1		口縁部内外面回転ナデ。外面ユビオサエ・ナデ。内面ナデ。内底に暗文。	和泉型
14	SK27	瓦質土器又は瓦器	椀	12.6	4.0	6.0	—	外）黄灰2.5Y6/1 断）灰白2.5Y7/1		口縁部外面ヨコナデ。外面下半ユビオサエ・ナデ。内面ヨコナデ。内底に直線方向と円圏状の暗文。	在地系
15	SK27	土師質土器又は瓦質土器	鍋	20.4	—	—	鍔部径22.6	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y8/1		鍔を貼付。口縁部外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ・ナデ。内面ナデ。	
16	SK27上層	瓦質土器	鍋	—	—	—	—	外）黄灰2.5Y6/1 断）灰白10YR8/2		鍔を貼付し上下をヨコナデ。体部内外面ナデ。	13世紀末～14世紀 外面に煤。
17	SK27上層	瓦質土器	鍋脚付き	—	—	—	—	外）灰白2.5Y7/1 断）黄灰2.5Y5/1		外面ナデ。接合部で剥離。	13世紀末～14世紀
18	SK15上層	土師質土器	杯又は皿	9.8	—	—	—	灰白10YR8/2		内外面回転ナデ。	
19	SK15上層	白磁	碗	—	—	—	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y8/1	白磁釉	灰黄色を帯びる透明の釉。釉は粗い貫入が入る。	中国 白磁碗Ⅵ又はⅧ類 12世紀～13世紀初頭
20	SK29上層	白磁	碗	—	—	—	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y8/1	内）ヘラ描きによる沈線　白磁釉	灰黄色を帯びる透明の釉。	中国 白磁碗Ⅴ類12世紀
21	SK29中層	陶器	碗か	—	—	—	—	外）褐7.5YR4/4 断）灰白10YR7/1	鉄釉	褐色を帯びる半透明の釉。	
22	SK29下層	陶器	擂鉢又は捏鉢	—	—	—	—	外）灰褐5YR4/2 断）灰褐5YR5/2・褐灰10YR6/1	焼締め	口縁部外面ユビオサエ・回転ナデ。内外面回転ナデ。内外面に自然釉。	備前 14世紀後半～15世紀前半
23	SK29下層	土師質土器	杯	—	—	7.4	—	浅黄橙7.5YR8/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内底ロクロ目。	
24	SK29下層	土師質土器	杯	—	—	8.2	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
25	SK29	土師質土器	杯又は皿	—	—	8.0	—	浅黄橙7.5YR8/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
26	SK29下層	土師質土器	杯	—	—	6.0	—	橙5YR6/6		内外面回転ナデ。外面に多段の強いロクロ目。	
27	SK29上層	土師質土器	杯又は皿	—	—	5.0	—	にぶい黄橙10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
28	SK29上層	瓦器	椀	13.8	—	—	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1		外面上位回転ナデ、下位ユビオサエ・ナデ。内面ナデ・ミガキ。内面に円圏状の暗文。外面炭素吸着なし、内面僅かにあり。	
29	SK29上層	瓦器	椀	—	—	5.0	—	外）灰白10YR7/1 内）黄灰2.5Y6/1 断）灰白10YR7/1		輪高台を貼付。外面下半と外底ユビオサエ・ナデ。内底に平行状の暗文。外面下半炭素吸着なし。	

Tab.5　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
30	SK29 下層	土師質 土器	椀	—	—	6.8	—	灰白10YR8/2		輪高台を貼付。内外面ナデ。	
31	SK29 中層	土師質 土器	土錘	全長 3.8	全厚 1.1	全幅 1.0	重量 3.3 g	にぶい黄橙10YR7/3		外面ナデ。孔径0.4cm	
32	SK29 下層	瓦質 土器	鍋	17.5	—	—	—	外）黄灰2.5Y5/1 内）黄灰2.5Y5/1 断）灰白2.5Y7/1		口縁部外面ユビオサエ・回転ナデ。口縁部内面回転ナデ。	
33	SK29 上層	瓦質 土器	鍋	—	—	—	—	外）褐灰10YR6/1 内）黄灰2.5Y6/1 断）灰白2.5Y7/1		断面三角形の鍔を貼付し上下を回転ナデ。外面上半回転ナデ、下半ナデ。内面ナデ。	
34	SE2 下層	陶器	擂鉢	—	—	—	—	外）にぶい赤褐 5YR4/3 断）にぶい橙 5YR6/4		外面に自然釉。	備前
35	SE2	土師質 土器	杯又は 皿	—	—	7.2	—	浅黄橙7.5YR8/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
36	SE2	土師質 土器	小皿	—	—	5.6	—	にぶい橙7.5YR7/3		摩耗し調整不明。外底回転糸切り。	
37	SE2 上層	瓦器	椀	13.2	—	—	—	外）黄灰2.5Y4/1 内）黄灰2.5Y5/1 断）灰白2.5Y7/1		外面ユビオサエ・ナデ。内面ナデ。内外面に炭素吸着。	和泉型
38	SE2	土師質 土器	鍋	—	—	—	—	外）にぶい黄橙 10YR7/3 断）にぶい黄橙 10YR7/3		外面平行状のタタキ目。内面ヨコナデ。	
39	SE2 中層	土師質 土器	鍋か	—	—	—	—	外）褐灰7.5YR4/1 内）褐灰10YR6/1 断）灰黄褐10YR6/2		内外面ナデ。	外底に焦げ。
40	SE2	土師質 土器	不明	17.0	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/3		内外面ナデ。	
41	SE2 上層	瓦質 土器	鍋	18.6	—	—	—	外）灰黄褐10YR5/2 内）褐灰10YR6/1 断）灰白10YR7/1		外面ユビオサエ・ナデ。内面ヨコナデ。	外面に煤。
42	SE2	土師質 土器	土錘	全長 6.2	全厚 2.2	全幅 2.2	重量 26.9 g	にぶい橙5YR6/3		外面ナデ。孔径0.7cm。	
43	SE3	陶器	皿	—	—	—	—	外）黄灰2.5Y5/1 断）灰褐5YR5/2			
44	SE3 床	土師質 土器	杯又は 皿	11.2	—	—	—	にぶい褐7.5YR5/4		内外面回転ナデ	
45	SE3	土師質 土器	杯又は 皿	—	—	7.0	—	にぶい橙5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内外面ロクロ目。	
46	SE3 上層	土師質 土器	小皿	6.8	1.9	4.6	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
47	SE3 下層	土師質 土器	小皿	—	—	4.7	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	外面に煤。
48	SE3 最下層	土師質 土器	不明	11.0	—	—	—	橙5YR6/6		内外面回転ナデ	
49	SE3	瓦器	椀	15.0	—	—	—	外）灰N4/・灰白 10YR7/1 断）灰白10YR7/1		口縁部外面回転ナデ。外面ユビオサエ・ナデ。内面ナデ。内面と外面上半に炭素吸着。	和泉型
50	SE3	瓦器	椀	—	—	4.5	—	外）灰N5/ 断）灰白10YR7/1		内外面ナデ。内底に直線方向の暗文。輪高台を貼付。高台外側回転ナデ。	和泉型
51	SE3	須恵器	鉢	24.2	—	—	—	黄灰2.5Y6/1		口縁部と外面上位回転ナデ。外面下位ユビオサエ・ナデ。内面ナデ。外面ロクロ目。	東播系 13世紀
52	SE3 床	土師質 土器	鍋	—	—	—	—	外）にぶい黄橙 10YR7/2 断）にぶい黄橙 10YR7/2		外面ユビオサエ・ナデ。内面ナデ。	内外面に焦げ。
53	SE3 上層	瓦質 土器	鍋	22.7	—	—	—	外）黄灰2.5Y6/1 断）灰白2.5Y7/1		内外面ヨコナデ。	14世紀～15世紀前半
54	SX10 上層	瓦質 土器	火鉢	40.8	—	—	—	外）灰N4/ 断）灰白N7/		体部前方に窓をもつ。外面上位に2条の突帯を貼付し、その間に陰刻による雷文帯を巡らす。	14世紀～15世紀前半
55	SX10 上層	瓦質 土器	鍋	20.1	—	—	—	外）灰N4/ 断）灰白2.5Y7/1		口縁部内外面回転ナデ。体部外面ユビオサエ・ナデ。内面上位回転ナデ、下半ユビオサエ・回転ナデ・不定方向のナデ。	14世紀～15世紀前半
56	TP4 SX10	瓦器	椀	—	—	—	—	外）灰N6/ 内）灰白N7/ 断）灰白5Y8/1		摩耗し調整不明。内外面の炭素吸着は剥離する。	和泉型

Tab.6　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
57	TP9 SR2	青磁	碗	—	—	—	—	外）灰オリーブ 7.5Y5/2 断）灰白N7/		内面上位に沈線。灰オリーブ色の半透明の釉。	中国 龍泉窯系
58	TP5 Ⅲ′層	青花	皿	—	—	約4.0	—	外）白 断）白	内）十字花文		中国 景徳鎮窯系 15世紀後半～16世紀前半
59	TP7 Ⅲ層	青磁	碗	—	—	—	—	外）オリーブ灰 10Y5/2 断）灰白N7/	見込み）印花文	オリーブ灰色の透明の釉で粗い貫入が入る。	中国 龍泉窯系 15世紀後半～16世紀前半 2次被熱により釉は変質。
60	TP7 Ⅲ層	青磁	皿	12.6	—	—	—	外）明オリーブ灰 5GY7/1 断）灰白2.5Y7/1		口縁部稜花形。明オリーブ灰色の半透明の釉。	中国 龍泉窯系 16世紀
61	TP5 Ⅲ′層	白磁	皿 端反形	11.6	3.6	6.6	—	外）白 断）白	白磁釉		中国 15世紀後半～17世紀初頭
62	TP5 Ⅲ層	陶器	擂鉢	—	—	—	—	外）褐灰5YR5/1 内）灰褐5YR5/2 断）褐灰10YR6/1		口縁部内外面回転ナデ。口縁部下端に別個体の重ね焼の痕。	備前 15世紀後半
63	TP6 Ⅳ層下位	青磁	碗	14.5	—	—	—	外）灰オリーブ 7.5Y5/2 断）灰N6/		灰オリーブ色の半透明の釉。	中国 景徳鎮窯系 14世紀後半～16世紀
64	TP4 Ⅳ-1層	青磁	碗	—	—	—	—	外）オリーブ灰 2.5GY6/1 断）灰白N7/	外）蓮弁文	外面にヘラ彫りによる蓮弁文。オリーブ灰色の半透明の釉。	
65	Ⅰ区 Ⅳ-3層	青磁	皿	—	—	7.7	—	外）オリーブ灰 10Y6/2 断）灰白N8/	青磁釉	見込み釉剥ぎ。高台内無釉。オリーブ灰色の釉。	
66	TP1 Ⅳ-2層	青磁	碗	—	—	—	—	外）オリーブ灰 2.5GY6/1 断）灰白N8/	内）ヘラ彫による文様 青磁釉	オリーブ灰色を帯びる半透明の釉。	中国 龍泉窯系
67	TP4 Ⅳ層	青磁	碗	—	—	—	—	外）にぶい黄 2.5Y6/3 断）灰白2.5Y7/1	外）櫛目 青磁釉	にぶい黄色を帯びる半透明の釉。	中国 同安窯系 12世紀後半～13世紀前半
68	TP1 Ⅳ層	青磁	碗	—	—	—	—	外）にぶい黄 2.5Y6/3 断）灰白2.5Y7/1		外面に櫛目。にぶい黄色の透明の釉。	中国 同安窯系 12世紀後半～13世紀前半
69	TP6 Ⅳ層	陶器	中碗 天目形	11.0	—	—	—	外）黒10YR2/1 断）灰白2.5Y8/2		黒色の釉。	瀬戸
70	TP3 Ⅳ層	陶器	中碗 天目形	—	—	—	—	外）黒褐7.5YR3/2 断）灰白10YR7/1	鉄釉	黒褐色の釉。	瀬戸
71	TP7 Ⅳ層	陶器	小皿	10.6	—	—	—	外）浅黄2.5Y7/4 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	内面ヘラ彫りによる縦筋。被熱し釉は変質。	瀬戸 16世紀
72	TP4 Ⅳ層	須恵器又は陶器	壺又は甕	—	—	—	—	外）灰N6/ 断）灰白2.5Y7/1		内外面ロクロ目。	
73	TP4 Ⅳ-1層	瓦器	椀又は皿	10.2	—	—	—	外）にぶい黄橙 10YR7/2 内）褐灰10YR6/1 断）にぶい黄橙 10YR7/2		内外面ナデ。内面に炭素吸着あり。外面炭素吸着なし。	和泉型
74	TP1 Ⅳ層	瓦器	椀	—	—	—	—	外）灰白10YR7/1 内）灰白10YR7/1 断）灰白10YR7/1		輪高台を貼付。内外面ナデ。内外面とも炭素吸着なし。	
75	TP7 Ⅳ層	土師質土器	杯	11.4	3.2	6.0	—	橙7.5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
76	TP1 Ⅳ層	土師質土器	杯	12.5	3.7	9.8	—	浅黄橙7.5YR8/6		摩耗し調整不明。	
77	Ⅰ区 Ⅳ層	土師質土器	杯	12.0	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/3		内外面回転ナデ。外面に多段の強いロクロ目。	
78	TP3 Ⅳ層	土師質土器	杯又は皿	—	2.6	—	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。	
79	TP4 Ⅳ-1層	土師質土器	杯	13.6	—	—	—	橙5YR7/6		内外面回転ナデ。	
80	TP9 Ⅳ層	土師質土器	杯	—	—	3.6	—	にぶい橙5YR7/4		内外面回転ナデ。外面に強いロクロ目。外底回転糸切り。	
81	Ⅰ区 Ⅳ層	土師質土器	杯	—	—	5.0	—	にぶい橙7.5YR6/4		摩耗し調整不明。	
82	Ⅰ区 Ⅳ-1・2層	土師質土器	杯	—	—	6.6	—	にぶい橙5YR7/4		内外面回転ナデ。外面に多段のロクロ目。外底回転糸切り。	
83	Ⅰ区 Ⅳ-1・2層	土師質土器	杯	—	—	5.8	—	橙5YR7/6		内外面回転ナデ。外面に強いロクロ目。	

Tab.7　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
84	TP4 Ⅳ-1層	土師質土器	杯	—	—	5.4	—	にぶい橙5YR7/4		摩耗し調整不明。	
85	TP7 Ⅳ層	土師質土器	杯	—	—	6.0	—	橙5YR7/6		内外面回転ナデ。内底に強いロクロ目。外底回転糸切り。	
86	TP4 Ⅳ層	土師質土器	杯	—	—	8.0	—	浅黄橙10YR8/3		摩耗し調整不明。内底ロクロ目。	
87	TP7 Ⅳ層	土師質土器	杯又は皿	—	—	6.4	—	にぶい橙5YR7/4		内外面回転ナデ。内底に強いロクロ目。外底回転糸切り。	
88	Ⅰ区 Ⅳ層	土師質土器	杯又は皿	—	—	7.4	—	にぶい橙7.5YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
89	TP5 Ⅲ～Ⅳ層	土師質土器	杯	—	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
90	TP1 Ⅳ層	土師質土器	不明	—	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
91	TP7 Ⅳ層	土師質土器	小皿	—	—	3.0	—	にぶい橙7.5YR7/4		外底ナデ。内底ナデ。	
92	TP1 Ⅳ-2層	土師質土器	小皿	8.0	1.9	6.1	—	灰黄2.5Y7/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
93	TP4 Ⅳ-1層	土師質土器	小皿	6.8	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4		摩耗し調整不明。	
94	TP4 Ⅳ-1層	土師質土器	小皿	8.2	1.4	6.0	—	橙5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
95	Ⅰ区A-3・B-3 遺物集中 Ⅳ層	土師質土器	杯	12.4	—	—	—	にぶい橙5YR7/4		摩耗し調整不明。外面ロクロ目。	
96	Ⅰ区A-3・B-3 遺物集中 Ⅳ層	土師質土器	杯	—	—	6.6	—	浅黄橙7.5YR8/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内面に強いロクロ目。	
97	Ⅰ区A-3・B-3 遺物集中 Ⅳ層	土師質土器	杯又は皿	—	—	7.2	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
98	Ⅰ区A-3・B-3 遺物集中 Ⅳ層	土師質土器	杯又は皿	—	—	6.6	—	にぶい橙5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内底ロクロ目。	
99	TP3 Ⅳ層	土師質土器	皿	15.0	2.5	9.6	—	にぶい橙7.5YR7/3		口縁部内外面回転ナデ。体部内外面ナデ。外底ナデと直線方向の圧痕。	
100	TP6 Ⅳ層	土師質土器	鍋	—	—	—	—	外）にぶい橙7.5YR7/4 断）にぶい橙7.5YR7/3		外面ユビオサエ・回転ナデ。内面回転ナデ。	15世紀後半～16世紀
101	Ⅰ区 Ⅳ層	瓦質土器	鍋	—	—	—	—	外）褐灰10YR6/1 断）灰白10YR7/1		口縁部内外面回転ナデ。	13世紀末～14世紀
102	Ⅰ区 Ⅳ層	瓦質土器	鍋	—	—	—	—	外）灰5Y5/1 断）灰白5Y7/1		鍔を貼付し上下をナデ。内外面ナデ。	13世紀末～14世紀
103	TP9 Ⅳ層	瓦質土器	鍋	—	—	—	—	外）黄灰2.5Y6/1 断）灰白2.5Y7/1		内外面ナデ。	13世紀末～14世紀
104	Ⅰ区A-3・B-3 遺物集中 Ⅳ層	瓦質土器	鍋 脚付き	—	—	—	—	外）灰白10YR7/1 断）褐灰10YR5/1		外面ナデ。接合部で剥離。	13世紀末～14世紀
105	Ⅰ区 Ⅳ層	土師質土器	土錘	残存長［3.2］	全厚 1.2	全幅 1.2	重量［3.9g］	外）にぶい橙7.5YR6/4 断）褐灰10YR6/1		外面ナデ。孔径0.3cm	
106	Ⅰ区 Ⅳ層	土師質土器	土錘	残存長［4.0］	全厚 1.0	全幅 1.1	重量［3.4g］	にぶい橙7.5YR7/3		外面ナデ。孔径0.4cm	
107	Ⅰ区 Ⅳ層	土師器	甕	18.5	—	—	—	外）にぶい赤褐5YR5/3 断）橙5YR6/6		口縁部内外面回転ナデ。	8世紀後半～9世紀 外面に煤。
108	TP7 Ⅳ層	土師器	甕	26.6	—	—	—	外）にぶい褐7.5YR5/3 断）にぶい橙7.5YR6/4		口縁部内外面ナデ。口縁端部内外面回転ナデ。	古代 口縁部内外面に煤。
109	TP2 Ⅴ-2層	土師質土器	杯	—	—	—	—	橙5YR7/6		摩耗し調整不明。	

Tab.8　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
110	TP9 V-2層	土師質土器	皿	13.2	2.3	10.0	—	橙5YR7/6		口縁部内面に段。摩耗し調整不明。	
111	TP2 V-2層	土師質土器	杯	—	2.8	—	—	橙5YR7/6		内外面回転ナデ。	9世紀
112	TP5 V-2層	土師質土器	小皿	—	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/4		摩耗し調整不明。	口縁部に灯芯油痕。
113	Ⅰ区 Ⅴ層	土師質土器	杯又は皿	—	—	6.4	—	浅黄橙7.5YR8/4		摩耗し調整不明。	
114	Ⅱ区 Ⅴ層	須恵器又は陶器	甕	—	—	—	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1		外面平行状のタタキ目。内面青海波状の圧痕。	古代
115	Ⅰ区 Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	鉢	—	—	15.6	—	外）灰白2.5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1		外面ロクロ目。	
116	TP6 Ⅲ層遺物集中1	瓦器	椀	12.6	—	—	—	外）灰N6/ 断）灰白5Y8/1		内外面ナデ。内外面に炭素吸着あり。	和泉型
117	SK14 下層	青磁	皿 端反形	11.0	—	—	—	外）オリーブ灰10Y6/2 断）灰白N8/	青磁釉	オリーブ灰色を帯びる透明の釉。釉は粗い貫入が入る。	中国 龍泉窯系 16世紀
118	SK14	瓦質土器	釜	—	—	—	—	外）灰N6/ 断）灰白2.5Y7/1		鍔を貼付し上下をヨコナデ。体部内外面ナデ。	
119	SK14 下層	土師質土器	不明	—	—	6.6	—	外）橙5YR7/6 断）褐灰10YR4/1・橙5YR7/6		内外面ナデ。	
120	SK16 上層	瓦質土器	鍋	—	—	—	—	外）灰白2.5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1		鍔を貼付し、上部に横方向のイタナデ、下部にユビオサエ。	
121	SK21 上層	須恵器	杯	笠部径14.2	—	かえり径12.2	—	灰白5Y7/1		外面摩耗し調整不明。内面回転ナデ。	7世紀
122	SK37	青磁	碗	—	—	—	—	オリーブ灰10Y6/2	外）ヘラ彫りによる菊弁 青磁釉	オリーブ灰色の半透明の釉。	中国 龍泉窯系
123	P118	土師質土器	椀	—	—	5.2	—	外）にぶい褐7.5YR6/3 断）にぶい橙7.5YR7/3		内外面ナデ。	
124	P94	瓦器	椀	—	—	4.2	—	外）灰白2.5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1		外面ユビオサエ・ナデ。内面ナデ。内底に直線方向の平行状の暗文。内外面とも炭素吸着無し。	
125	SB1-P2	土師質土器	杯又は小皿	—	—	7.0	—	にぶい橙7.5YR7/4		外面ナデ・ユビオサエ。内底直線方向のナデ。外底直線方向の圧痕。	
126	SB2-P2	瓦質土器	鍋	15.2	—	—	—	外）灰5Y5/1 内）灰白2.5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1		外面ナデ・ユビオサエ。内面ナデ。	13世紀末～14世紀
127	SK1	陶器	甕	31.1	—	—	34.0	外）暗褐7.5YR3/3 断）褐灰7.5YR5/1	鉄釉	体部上位に櫛描による波状文。口縁部から黒色の釉を流し掛け。内面施釉。暗褐色の釉。	能茶山窯
128	SK1	陶器	擂鉢	—	—	12.0	—	外）にぶい赤褐5YR4/3 内）にぶい赤褐2.5YR4/4 断）橙2.5YR6/6	鉄釉	外面回転ナデ。外底回転糸切り。内面櫛目、内底放射状の櫛目。貼付高台。高台内外面回転ナデ。内外面に鉄釉を薄く施す。	
131	SK2 下層	青花	小碗	7.0	—	—	—	外）白 断）白	外）草花文 見込み）圏線 口縁端部に呉須		中国 景徳鎮窯系 17世紀前葉～中葉
132	SK2 下層	陶器	皿又は鉢	—	—	11.0	—	外）灰黄褐10YR6/2 内）灰白2.5Y8/2 断）にぶい橙7.5YR6/4	外）灰釉 内）白化粧土・透明釉・緑釉	二彩手。内面白化粧の後透明の釉と緑釉の流し掛け。外面下位無釉。内底に砂目。	肥前 武雄
133	SK2	土師質土器	小皿	14.0	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/2		内外面回転ナデ。	
134	SK2	土師質土器	中皿	—	—	6.6	—	にぶい黄橙10YR7/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内底に強いロクロ目。	内底に焦げ。
135	SK2 床	土師質土器	焼塩壺	6.2	8.9	5.0	—	外）にぶい橙7.5YR6/4 断）にぶい橙7.5YR7/3	チャートの粗砂を含む	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。内面ユビオサエ・ナデ・チヂレ目。外底に凹凸。	
136	SK3	陶器	小皿 丸形	12.0	—	—	—	外）にぶい黄橙10YR6/3 断）浅黄橙10YR8/4	灰釉	外面下半無釉。にぶい黄橙色を帯びる半透明の釉。	肥前産 1590～1630年代

Tab.9　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
137	SK3	土師質土器	小皿	10.8	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/3		内外面回転ナデ。	内外面に煤。
138	SK3	土師質土器	小皿	8.2	1.2	5.6	—	橙5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部内面に煤。
139	SK3	土師質土器	小皿	9.7	1.9	5.2	—	にぶい黄橙10YR7/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
140	SK3	土師質土器	小皿	—	—	5.8	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内底に強いロクロ目。	
142	SK4	磁器染付	中碗丸形	11.0	7.6	4.6	—	外）明緑灰10GY8/1 断）白	外）二重圏線・不明 高台外）圏線	畳付に砂が付着。	肥前産 1630～1650年代
143	SK4	磁器染付	中碗	9.6	—	—	—	外）白 断）白	外）二重圏線・寿字文 口縁内）圏線	外面に面取りを施す。	肥前産 1610～1650年代
144	SK4	磁器染付	小杯丸形	6.2	2.5	2.8	—	外）白 断）白	外）不明	呉須は暗緑灰色に発色。透明釉は貫入が入る。	肥前産
145	SK4	磁器染付	小皿	13.0	3.0	4.8	—	外）白 断）白	内）区画間に花文・円圏と菊花	口縁部輪花形。外面に縦筋。畳付に砂が付着。	肥前産 1640年代
146	SK4上層	青磁	皿	—	—	6.6	—	外）明オリーブ灰2.5GY7/1 断）灰白5Y8/1	内）鉄絵 青磁釉	見込み蛇ノ目釉剥ぎ。外面下位回転ケズリ後回転ナデ。外面下位無釉。明オリーブ灰色を帯びる透明の釉。	
147	SK4上層	青花	皿	—	—	—	—	外）白 断）白	内）植物	高台内に放射状の鉋痕。	中国 景徳鎮窯系 16世紀末～17世紀初頭
148	SK4	陶器	小皿端反形	11.0	—	—	—	外）にぶい黄橙10YR7/2 断）灰白10YR8/2	灰釉	唐津系灰釉陶器。にぶい黄橙色を帯びる半透明の釉。	肥前産 1590～1630年代
149	SK4	陶器	小皿端反形	11.4	—	—	—	外）灰白10YR8/2 断）灰白10YR8/2	灰釉	唐津系灰釉陶器。釉は焼成不良で白濁。	肥前産 1590～1630年代
150	SK4	陶器	小皿丸形	13.0	3.3	4.6	—	外）灰白5Y7/2 内）緑灰10G5/1 断）灰白2.5Y8/1	外）灰釉 内）銅緑釉	蛇ノ目釉剥ぎ。外面下半無釉。目痕なし。	肥前 内野山窯 18世紀前半
151	SK4	陶器	中碗	—	—	4.0	—	外）黒褐7.5YR2/2 断）灰赤2.5YR4/2	外）蛍手 内）白化粧土打刷毛目灰釉		肥前産 18世紀前半
152	SK4	陶器	小皿	—	—	5.4	—	外）灰褐7.5YR5/2 内）灰褐7.5YR4/2 断）灰褐5YR6/2	内）鉄釉	唐津系陶器。外面無釉。灰褐色を帯びる半透明の釉。内底に砂目。	肥前産 1610～1630年代
153	SK4上層	陶器	擂鉢	25.2	—	—	—	外）橙2.5Y6/6 断）橙2.5Y6/6	焼締め	口縁部外面に2条の凹線。口縁部内面櫛目後回転ナデ。体部外面回転ケズリ。内面櫛目。	堺・明石系
154	SK4	陶器	皿又は鉢	31.3	—	—	—	外）黒褐7.5YR3/1 断）褐灰7.5YR4/1	焼締め	内外面回転ナデ。	備前
155	SK4	土師質土器	小皿	10.2	—	—	—	橙5YR7/6		内外面回転ナデ。	
156	SK4	土師質土器	小皿	—	—	4.8	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
157	SK4	瓦質土器	火鉢か	20.1	—	17.4	—	外）黄灰2.5Y5/1 断）灰白2.5Y7/1		外面上位と下位に粘土帯を貼付しユビオサエで波状に変形させる。間にヘラ描きによる波状文を巡らす。三足は剥離。	口縁端部に敲打痕。
162	SK5下層	磁器染付	中碗広東形	11.2	6.2	6.2	—	外）灰白10Y8/1 断）白	外）草花文・蝶 口縁内）二重圏線 見込み）圏線・火焔宝珠	呉須は暗青灰色に発色。	
163	SK5下層	磁器染付	中碗広東形	12.2	6.3	5.8	—	外）白 断）白	外）竹文 高台外）圏線 見込み）圏線		肥前産又は肥前系
164	SK5下層	磁器染付	中碗広東形	12.5	6.5	6.8	—	外）白 断）白	外）草花文 見込み）宝文		肥前産又は肥前系
165	SK5下層	磁器染付	中碗広東形	11.2	6.2	6.0	—	外）灰白7.5Y8/1 断）白	外）岩・草・植物	呉須は暗青灰色に発色。透明釉は貫入が入る。内底に目痕。	肥前産又は肥前系
166	SK5	陶胎染付	中碗広東形	12.2	6.1	6.3	—	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白10YR8/1	外）草花文 高台外）圏線 見込み）コンニャク印判による五弁花文	太白手。呉須は暗緑灰色に発色。透明釉は貫入が入る。	瀬戸・美濃 1780～1860年代
167	SK5上層・下層	陶胎染付	中碗広東形	11.8	6.1	5.8	—	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/1	外）呉須と鉄錆による宝珠文 高台外）二重圏線 見込み）圏線・コンニャク印判による五弁花文	呉須は暗緑灰色に発色	瀬戸・美濃
168	SK5 1層	磁器染付	中碗腰張形	11.8	—	—	—	外）白 断）白	外）稲束	透明釉は貫入が入る。	肥前産又は肥前系

Tab.10　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
169	SK5	青磁染付	中碗丸形	11.6	5.9	4.2	—	外）明オリーブ灰5GY7/1 断）白	外）青磁釉 口縁内）二重圏線 見込み）圏線・手描きによる五弁花文	呉須はオリーブ灰色に発色。	肥前産 18世紀後半
170	SK5	青磁染付	中碗杉形	11.8	6.7	4.5	—	外）明オリーブ灰5GY7/1 断）灰白N8/	外）青磁釉 口縁内）四方襷 見込み）二重圏線・手描きによる五弁花文 高台内）角枠内渦「福」		肥前産 1750～1810年代
171	SK5下層	磁器染付	小碗半筒形	7.8	6.4	4.0	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）丸・若松		肥前産 18世紀後半
172	SK5下層	磁器染付	小碗丸形	8.6	5.8	3.4	—	外）灰白N8/ 断）白	外）竹文・圏線 口縁内）二重圏線 見込み）圏線・手描きによる五弁花文		肥前産
173	SK5下層	磁器染付	小碗丸形	8.5	5.1	3.5	—	外）白 断）白	外）竹・筍と人物・圏線 高台外）二重圏線 口縁内）二重圏線 見込み）圏線・不明		肥前産又は肥前系
174	SK5下層	磁器染付	小碗丸形	8.1	5.2	3.3	—	外）白 断）白	外）若松・宝文 見込み）手描きによる五弁花文	呉須は暗青灰色に発色。	肥前産
175	SK5下層	磁器染付	小杯丸形	5.5	2.6	1.4	—	外）灰白2.5GY8/1 断）白	外）草花文	透明釉は貫入が入る。	肥前産又は肥前系
176	SK5上層	磁器染付	小杯丸形	7.4	3.5	2.6	—	外）白 断）白	外）文字		肥前産
177	SK5下層	磁器染付	碗蓋	笠部径10.0	2.4	—	摘み径4.0	外）白 断）白	外）梅鉢文・蓮弁文 摘み外）二重圏線 内）花文	透明釉は貫入が入る。	肥前産
178	SK5下層	磁器染付	碗蓋	笠部径11.4	2.7	—	摘み径4.5	外）白 断）白	外）変形字 摘み外）圏線 内）二重圏線 摘み内）二重圏線		肥前産
179	SK5下層	磁器染付	中皿	23.2	3.7	13.2	—	外）白 断）白	内）型打成形による陽刻文・二重圏線・山水文 口錆	口縁部輪花形。	肥前産
180	SK5	磁器染付	中皿	—	—	13.2	—	外）白 断）白	内）二重圏線・山水文・陽刻文様	内面周縁に型打成形による陽刻文様。	肥前産
181	SK5下層	磁器染付	小皿丸形	13.4	3.8	8.2	—	外）灰白N8/ 断）灰白N8/	外）連続唐草文・圏線 内）竹文・コンニャク印判による五弁花文 高台内）圏線・渦「福」		肥前産 18世紀
182	SK5 1層	磁器染付	五寸皿	14.2	3.4	10.4	—	外）白 断）白	外）略化した連続唐草文 内）草花文	蛇ノ目凹形高台。外底無釉。	肥前産 1780～1860年代
183	SK5下層	磁器染付	小皿丸形	12.5	2.0	8.6	—	外）白 断）白	外）連続唐草文・圏線 高台外）二重圏線 内）墨弾きによる波文		肥前産
184	SK5下層	磁器染付	小皿	8.7	2.2	4.8	—	外）白 断）白	内）葦・雁・網代 口錆	口縁部輪花形。	肥前産又は肥前系
185	SK5上層	青花	皿	—	—	—	—	外）白 断）白	内）芙蓉手	口縁部輪花形。	中国 景徳鎮窯系 二次被熱により釉は変質。
186	SK5下層	白磁	鉢端反形	16.0	—	—	—	外）白 断）白	透明釉		肥前産
187	SK5下層	磁器染付	蓋物蓋	笠部径10.6	—	かえり径9.4	—	外）灰白10Y8/1 断）白	外）圏線・変形字	内面施釉。かえり無釉。呉須は暗青灰色に発色。透明釉は貫入が入る。胎土断面は荒い。	肥前産又は肥前系
188	SK5	磁器鉄釉	蓋物蓋	—	—	—	—	外）暗赤褐5YR3/4 内）白 断）白	外）浮文による菊花・鉄釉 内）透明釉	天井部に型作りによる菊花形の白色の浮文を貼付。外面に鉄釉、浮文には透明釉を施す。	肥前産又は肥前系 188・189同一個体。
189	SK5下層	磁器鉄釉	蓋物蓋	笠部径12.0	—	かえり径10.6	—	外）暗赤褐5YR3/4 内）白 断）白	外）鉄釉 内）透明釉	内面施釉。かえり無釉。外面に暗赤褐色の釉。内面に透明釉。	肥前産又は肥前系 188・189同一個体。
190	SK5下層	磁器染付	蓋物腰張形	7.6	4.2	3.8	—	外）灰白10Y8/1 断）白	外）青海波・圏線 高台外）圏線	端部無釉。呉須は暗青灰色に発色。	肥前産又は肥前系
191	SK5	磁器染付	小瓶	1.6	—	—	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）蛸唐草文・不明		肥前産
192	SK5下層	磁器染付	小瓶	1.7	—	—	—	外）灰白N8/ 断）灰白N8/	外）不明	内面無釉。	肥前産
193	SK5下層	白磁	紅皿菊花形	4.8	1.6	1.6	—	外）白 断）白	外）型による菊弁	型押成形。外面無釉。外底にチヂレ目。	肥前産 18世紀後半～1860年代

Tab.11　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
194	SK5下層	磁器染付	仏飯器	8.0	6.6	4.7	—	外）白 断）白	外）略化した雲龍文・圏線		肥前産又は肥前系
195	SK5下層	陶器	中碗丸形	10.4	7.8	4.8	—	外）灰白2.5Y7/1 断）灰白10YR7/1	灰釉	内外面ロクロ目。高台無釉。灰白色を帯びる透明の釉。内底に目痕。	尾戸窯
196	SK5下層	陶器	中碗丸形	10.8	7.4	4.4	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）浅黄橙10YR8/3	灰釉	内面ロクロ目。高台無釉。灰黄色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
197	SK5下層	陶器	中碗丸形	10.8	6.8	5.4	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	内外面ロクロ目。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。内底に目痕。	尾戸窯
198	SK5 1層	陶器	中碗丸形	10.2	6.7	4.6	—	外）灰白2.5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。内底に目痕3足。	尾戸窯
199	SK5上層	陶器	中碗丸形	10.2	7.4	4.8	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。内底に目痕3足。	尾戸窯
200	SK5下層	陶器	中碗丸形	10.3	—	—	—	外）灰白5Y7/1・灰白N8/ 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で部分的に白濁する。内底に目痕。	尾戸窯
201	SK5上層	陶器	中碗	—	—	4.6	—	外）灰白2.5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1・浅黄橙10YR8/3	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。内底に目痕3足。	尾戸窯
202	SK5下層	陶器	中碗	—	—	4.8	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	高台無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。焼成不良気味で部分的に白濁。内底に目痕3足。	尾戸窯
203	SK5上層・下層	陶器	中碗	—	—	5.5	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白10YR7/1	灰釉	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。内底に目痕。	尾戸窯
204	SK5下層	陶器	中碗	—	—	4.6	—	外）灰白10YR8/2 断）灰白10YR8/2	灰釉	内面ロクロ目。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
205	SK5下層	陶器	中碗	—	—	4.0	—	外）灰白5Y8/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
206	SK5下層	陶器	中碗端反形	11.2	—	—	—	外）淡黄2.5Y8/3・オリーブ黒5Y3/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉・緑釉	高台無釉。淡黄色を帯びる透明の釉。口縁部内外面にオリーブ黒色の釉。	尾戸窯
207	SK5下層	陶器	小碗端反形	8.7	—	—	—	外）灰白2.5Y8/2・緑 断）灰白2.5Y8/1	灰釉・緑釉	高台無釉。灰白色を帯びる透明の釉。口縁部内外面に緑釉。	信楽 19世紀
208	SK5下層	陶器	小碗	—	—	3.4	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白2.5Y8/1・灰白2.5Y8/2	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	
209	SK5下層	陶器	小杯丸形	5.4	2.8	2.0	—	外）灰白10YR8/2 断）灰白2.5Y8/2	外）鉄絵 灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる透明の釉。	京都系
210	SK5	陶器	小皿丸形	12.0	3.9	4.5	—	外）にぶい黄橙10YR7/4 断）浅黄橙10YR8/3	見込み）鉄絵 灰釉	見込み蛇ノ目釉剥ぎ。内面ロクロ目。外面下位無釉。にぶい黄橙色を帯びる透明の釉。	
211	SK5	陶器	小皿	10.6	2.1	5.4	—	外）オリーブ黄5Y6/3 断）灰白10YR7/1	灰釉	口縁部折縁状。高台施釉。オリーブ黄色を帯びる透明の釉。内底に目痕。	瀬戸 16世紀
212	SK5下層	陶器	皿	約13.6	—	—	—	外）灰褐5YR4/2 断）にぶい赤褐5YR5/3	焼締め	内外面ロクロ目。外面に自然釉。	備前
213	SK5下層	陶器	碗蓋	笠部径9.4	2.4	—	摘み径4.8	外）灰白5Y7/1 断）灰白2.5Y8/1	外）鉄絵による岩と樹木か 内）樹木か 灰釉	ロクロ成形の後笠部を輪花形に変形させ、上部の数箇所をユビオサエし窪ませる。摘み内に渦状の鉋痕。	尾戸窯
214	SK5下層	陶器	擂鉢	28.9	9.9	14.2	—	外）にぶい赤褐2.5YR4/4 断）赤橙10R6/8	焼締め	口縁部外面に2条の凹線。口縁部内面櫛目後回転ナデ。体部外面回転ナデ。内面回転ナデ後櫛目。外底に凹凸。	備前
215	SK5下層	陶器	擂鉢	—	—	13.0	—	外）にぶい赤褐5YR5/3 断）赤10R5/6	焼締め	体部外面下位ヨコナデ。内面櫛目。内底に斜方向の櫛目。外底凹凸。	備前
216	SK5下層	陶器	鍋	18.3	—	—	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	把手を貼付。内面施釉。灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	
217	SK5下層	陶器	急須又は土瓶	7.0	—	—	—	外）灰7.5Y6/1 断）黄灰2.5Y6/1	灰釉	受部は輪花形に変形させる。体部外面上位に緩やかな凹線を多段巡らす。内面施釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	

Tab.12　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
218	SK5 下層	陶器	土瓶	7.4	—	—	—	外）灰オリーブ5Y5/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	双耳を貼付。内面無釉。灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	
219	SK5	陶器	土瓶 算盤玉形	—	—	6.4	15.0	外）灰オリーブ5Y6/2 断）灰白5Y7/1	灰釉	体部外面上位に数条の凹線。底部無釉。灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	外面に煤。
220	SK5 下層	陶器	小瓶	—	—	—	—	外）暗赤褐10R3/3 断）灰褐5YR5/2 内）赤褐10R5/4	外）浮文による人物 焼締め	ロクロ成形の後体部を窪ませ浮文を貼付。内外面ロクロ目。	備前
221	SK5	陶器	水注	—	—	4.8	—	外）黒褐10YR3/1 断）褐灰10YR6/1	鉄釉	把手を貼付。内外面ロクロ目。内面無釉。高台施釉。黒褐色の釉。畳付に砂が付着。	
222	SK5	陶器	水注か	—	—	5.8	—	外）暗赤褐5YR3/4 断）灰白2.5Y8/1	鉄釉	把手を貼付。内面ロクロ目。内面施釉。高台無釉。暗赤褐色の釉。	
223	SK5 下層	陶器	壺	20.0	—	—	—	外）赤灰2.5YR4/1 断）灰赤2.5YR5/2	焼締め	内外面ロクロ目。外面に自然釉。	備前
224	SK5 下層	陶器	甕	—	—	24.0	—	外）にぶい赤褐2.5YR4/3 内）暗灰黄2.5Y4/2 断）黄灰2.5Y6/1	外）鉄釉 内）灰釉	内面ロクロ目。外底周縁に粗砂が付着。外面ににぶい赤褐色、内面に暗灰黄色の釉。	丹羽
225	SK5 下層	陶器	蓋物蓋	笠部径10.2	1.1	かえり径8.6	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y8/1	灰釉	内面施釉。かえり無釉。灰白色を帯びる透明の釉。	京都・信楽系 19世紀
226	SK5 下層	陶器	灯明受皿	11.0	2.4	3.2	—	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白10YR8/1	内）浮文による菊花 灰釉	外面上半回転ナデ、下半回転ケズリ。内面回転ナデ。浮文を貼付。外面下半無釉。灰白色を帯びる透明の釉。内底に目痕。	京都系
227	SK5 下層	陶器	灯明受皿	8.8	1.3	4.0	受部径6.4	外）赤褐10R4/4 断）赤10R5/6	焼締め	受部の数カ所にアーチ状の抉りあり。外面上位と内面回転ナデ。外面下位と外底回転ケズリ。外底の中央に回転糸切り痕が残る。	備前
228	SK5 下層	陶器	灯明受皿	9.1	1.2	7.0	受部径6.8	外）灰赤2.5YR4/2 断）灰5Y6/1	焼締め	受部の数カ所にアーチ状の抉りあり。外面上位と内面回転ナデ。外面下位と外底回転削り。外底の中央に回転糸切り痕が残る。	備前 抉りの周囲に灯芯油痕。
229	SK5 下層	陶器	火入 半筒形	10.0	7.5	10.3	—	外）灰白5Y8/1・暗オリーブ5Y4/4 断）灰白2.5Y7/1	白化粧土・灰釉・緑釉	高台の数箇所にアーチ状の抉り。内面と高台無釉。外面と内面上半に白化粧土を施し灰釉を施釉。口縁部に緑釉。	「錦光山」銘印あり。
230	SK5 下層	土師質土器	中皿	18.5	3.8	12.6	—	淡橙5YR8/3		外面上半回転ナデ。外面下半回転ケズリ後ナデ。外底ナデ。内面回転ナデ。内底ナデ。	尾戸窯 内底に焦げ。
231	SK5 下層	土師質土器	中皿	18.2	3.7	13.0	—	橙5YR6/6		外面上半回転ナデ後ナデ。外面下半回転ケズリ後ナデ。外底回転ケズリ。内面回転ナデ。内底ナデ。	尾戸窯 内外面に焦げ。
232	SK5 上層	土師質土器	中皿	17.2	—	—	—	淡橙5YR8/4		外面上半回転ナデ、下半回転ケズリ。外底ナデ。内面回転ナデ。	尾戸窯 内底に焦げ。
233	SK5 下層	土師質土器	小皿	12.6	1.8	9.8	—	にぶい橙7.5YR7/4		外面上半回転ナデ、下半回転ケズリ。外底回転ケズリ。内面回転ナデ。内底ナデ。	尾戸窯 口縁部外面に焦げ。
234	SK5 下層	土師質土器	小皿	9.7	2.2	6.4	—	にぶい黄橙10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。外底に直線方向の圧痕。	口縁部にタール状の灯芯油痕。
235	SK5 下層	土師質土器	小皿	7.5	0.9	5.4	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油痕。
236	SK5 下層	土師質土器	焜炉 筒形	—	—	26.0	—	外）赤10R5/6 断）にぶい橙7.5YR7/3	外）赤彩 胎土中に金雲母を含む。	外面ナデ・ミガキ。内面ロクロ目。貼付高台。高台内外面回転ナデ。	関西産
237	SK5 下層	土師質土器	焜炉 丸形	—	—	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	胎土中に金雲母を含む。	口縁部から切り込むアーチ状の窓をもつ。内面上位に手捏ねによる突起を貼付。外面ナデ・ミガキ。内面ナデ。	関西産 口縁部周辺に煤と吹きこぼれ状の滲み。
240	SK7 1層	磁器 染付	中碗 端反形	10.3	6.0	4.0	—	外）白 断）白	外）若松文・圏線 高台外）圏線 口縁内）雷文帯 見込み）圏線・若松文	見込み蛇ノ目釉剥ぎ。	肥前産 1820～1860年代
241	SK7 1層	磁器 染付	中碗 端反形	10.2	6.0	3.9	—	外）灰白10Y8/1 断）白	外）草花・格子・圏線 高台外）二重圏線 口縁内）連弧文か 見込み）圏線・梅文	胎土断面は荒い。	肥前系 1820～1860年代

Tab.13　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
242	SK7 1層	磁器 染付	中碗 端反形	10.4	5.5	3.8	—	外）白 断）白	外）縞・不明 高台外）圏線 口縁内）圏線・不明 見込み）圏線・水に岩		肥前産 1820～1860年代
243	SK7 1層	磁器 染付	小碗 筒丸形	7.3	6.4	4.9	—	外）白 断）白	外）水に紅葉 高台外）櫛歯文 口縁内）雷文帯		肥前産 1820～1860年代
244	SK7 1層	磁器 染付	小碗 筒形	8.0	6.8	4.8	—	外）白 断）白	外）山水文・圏線 高台外）列点文・圏線 口縁内）雷文帯		肥前産 19世紀中葉
245	SK7 1層	磁器 染付	小碗 端反形	7.4	3.8	3.2	—	外）灰白2.5Y8/1 断）白	外）丸文・圏線 高台外）圏線 口縁内）圏線 見込み）圏線・不明		肥前産又は肥前系
246	SK7 1層	磁器 染付	小杯 丸形	6.8	2.6	2.1	—	外）白 断）白	外）笹文	呉須は青灰色に発色。	肥前産
247	SK7 上層	磁器 色絵	小杯 端反形	7.6	3.3	3.0	—	外）白 断）白	内）青の上絵付による竹に雀	見込み蛇ノ目釉剥ぎ。	肥前産又は肥前系
248	SK7	磁器 染付	小皿	12.9	3.2	8.0	—	外）灰白5GY8/1 断）白	内）草花文・二重圏線 口錆	口縁部輪花形。蛇ノ目凹形高台。	肥前産
249	SK7 上層	磁器 染付	小皿 丸形	11.1	2.4	6.0	—	外）白 断）白	外）岩に植物か 内）岩に植物		肥前産
250	SK7 1層	白磁	小皿 端反形	9.4	2.1	5.0	—	外）白 断）白	内）印刻による文様 透明釉	胎土は透明感をもつ。	瀬戸・美濃
251	SK7 2層	白磁	小皿 菊花形	13.2	3.7	6.6	—	外）灰白5GY8/1 断）白	内）型による菊弁 透明釉	口縁部輪花形。蛇ノ目凹形高台。透明釉は明緑灰色を帯びる。内底に目痕5足。	肥前産又は肥前系
252	SK7 2層	磁器 染付	鉢 八角形	16.6	6.5	7.2	—	外）白 断）白	外）区画割・不明 内）区画割に松竹梅 見込み）鶴・圏線 高台内）角枠内「茶」	蛇ノ目凹形高台。内底に砂が付着。	能茶山窯 1820～1860年代 角枠内「茶」銘あり。
253	SK7	磁器 染付	鉢 八角形	14.4	5.3	9.0	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）区画間に花・宝文 内）山水文・鳥		肥前産
254	SK7 1層	磁器 染付	鉢 端反形	—	—	6.3	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	外）山水文か 内）雷文帯 見込み）圏線・不明		肥前産又は肥前系
255	SK7 上層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.2	2.9	—	摘み径 3.6	外）白 断）白	外）麻の葉文 内）雷文帯・圏線・略化した松竹梅円形文		肥前産 1820～1860年代
256	SK7 1層	磁器 染付	蓋物 腰張形	12.4	6.7	7.3	—	外）白 断）白	外）扇・竹・圏線 高台外）圏線	口縁端部無釉。	
257	SK7 上層	磁器 染付	蓋物 腰張形	12.6	6.4	7.0	—	外）白 断）白	外）不明・圏線	呉須は青色に発色。	肥前産
258	SK7 1層	磁器 染付	蓋物	12.0	—	—	—	外）白 断）白	外）帯線に鋸歯文・草花文	内面施釉。口縁端部無釉。透明釉は貫入が入る。胎土断面は荒い。	能茶山窯か 1820～1860年代
259	SK7 1層	磁器 染付	大碗又は蓋物	—	—	6.6	—	外）灰白5Y8/1 断）白	外）花文・不明・圏線	透明釉は貫入が入る。胎土断面は荒い。内底に目痕。	能茶山窯か 1820～1860年代
260	SK7 1層	磁器 染付	蓋物 半筒形	8.0	4.2	7.8	—	外）白 断）白	外）氷裂文	内面施釉。口縁端部無釉。	肥前産
261	SK7 上層	磁器 染付	小瓶	1.5	5.4	2.5	3.5	外）白 断）白	外）梅花文・笹文	内面と高台無釉。	肥前産又は肥前系
262	SK7 上層	磁器 染付	小瓶	—	—	2.2	—	外）灰白7.5Y8/1 断）白	外）若松文か	内面ロクロ目。高台内兜巾状。内面無釉。	肥前産
263	SK7 2層	陶器	小皿 端反形	12.4	5.3	5.2	—	外）褐7.5YR4/4 断）にぶい橙 7.5YR7/4	鉄釉	見込み蛇ノ目釉剥ぎし白土を施す。外面下半無釉。	能茶山窯 1820～1860年代
264	SK7 1層	陶器	小皿 端反形	12.5	4.8	5.3	—	外）黒褐7.5YR2/2 断）褐灰10YR4/1	鉄釉	見込み蛇ノ目釉剥ぎの後白土を施す。外面下半無釉。黒褐色の釉。	能茶山窯 1820～1860年代
265	SK7 1層	陶器	皿 変形形	—	—	—	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1	内）呉須と鉄錆による文様 灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
266	SK7 2層	陶器	皿 変形形	—	2.0	—	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	型作りによる脚を貼付。灰白色を帯びる透明の釉。	尾戸窯
267	SK7	陶器	小杯 丸形	5.4	3.1	2.0	—	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	京都系
268	SK7 1層	陶器	鉢	36.2	—	—	—	外）にぶい黄褐 10YR5/3 断）灰黄褐10YR6/2	焼締め	口縁部内外面に自然釉。口縁部内面に凹線。口縁端部凹状。	丹羽又は信楽か
269	SK7 2層	陶器	片口	18.0	9.0	7.3	—	外）暗褐7.5YR3/3 断）灰褐7.5YR5/2	鉄釉	口縁端部釉剥ぎの後白土を施す。内面施釉。外面下位無釉。暗褐色の釉。内底に目痕。	能茶山窯 1820～1860年代

Tab.14　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
270	SK7 2層	陶器	捏鉢	16.6	6.8	—	—	外）暗赤褐5YR3/3 断）灰白10YR7/1	鉄釉	内外面ロクロ目。内面施釉。口縁端部無釉。暗赤褐色の釉。	能茶山窯 1820～1860年代
271	SK7	陶器	擂鉢	18.0	6.1	8.8	—	外）にぶい赤褐2.5YR5/4 断）明赤褐2.5YR5/6	焼締め	口縁部外面に2条の凹線。口縁部内面櫛目後回転ナデ。体部外面回転ケズリ後ナデ。内面櫛目。内底に不定方向の櫛目。外底に凹凸。	堺・明石系
272	SK7 上層	陶器	蓋	笠部径12.9	—	—	—	外）灰白10YR8/1 断）灰白2.5Y8/1	外）鉄絵 馬の目 灰釉	内面施釉。透明の釉。	
273	SK7 1層	陶器	鍋蓋	笠部径16.2	4.6	—	摘み径3.1	外）暗赤褐5YR3/2・淡黄2.5Y8/3 断）淡黄2.5Y8/3	外）飛鉋 鉄釉	摘みは削り出しによる。外面に飛鉋を輪状に巡らせ、鉄釉を部分的に刷毛塗り。内面施釉。笠部無釉。	在地か
274	SK7 1層	陶器	鍋蓋	笠部径15.1	3.3	—	摘み径5.2	外）灰褐7.5YR4/2 内）褐灰5YR4/1 断）橙5YR7/6	外）飛鉋・白土による梅花・鉄釉 内）鉄釉	外面に飛鉋を輪状に巡らせ、鉄釉を部分的に刷毛塗り。無釉部分の三方に白土による梅花文。内面施釉。笠部無釉。	能茶山窯か 1820～1860年代
275	SK7 1層・2層	陶器	鍋 行平	19.7	—	—	—	外）黒褐7.5YR3/1 断）橙5YR6/6	外）飛鉋 鉄釉	把手を貼付。外面鉄釉の後飛鉋を巡らす。外面下位と受部無釉。内面施釉。黒褐色の釉。	
276	SK7 2層	陶器	土瓶	9.8	—	—	—	外）灰黄褐10YR5/2 断）褐灰10YR5/1	灰釉	外面上半に多段の凹線。内面ロクロ目。口縁端部と内面無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。灰白色の釉を部分的に流し掛けする。	
277	SK7 上層	陶器	蓋	笠部径11.0	1.8	3.2	—	外）灰オリーブ5Y5/3 断）灰白5Y7/1	灰釉	内外面回転ナデ。外底回転糸切り。外面無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。部分的に白土を刷毛塗り。	
278	SK7 上層	陶器	土瓶蓋	笠部径9.0	—	かえり径6.3	—	外）灰黄褐10YR6/2 内）にぶい黄橙10YR7/2 断）にぶい黄橙10YR7/2	外）鉄絵と白土による梅花文 灰釉	笠部周縁に沈線。内面とかえり無釉。透明の釉。	京都 内面に角枠内「寶山」銘印あり。
279	SK7 1層	陶器	土瓶蓋	笠部径10.0	2.9	かえり径7.4	摘み径1.6	外）にぶい赤褐5YR4/3 断）褐灰7.5YR5/1	鉄釉	内面とかえり無釉。にぶい赤褐色の釉。	能茶山窯 1820～1860年代
280	SK7 1層	陶器	蓋	笠部径13.1	—	—	—	外）にぶい黄橙10YR6/3 断）灰白10YR7/1	焼締め	内外面ユビオサエ。笠部下面に布目。	
281	SK7 上層	陶器	土瓶蓋	笠部径10.2	2.8	4.8	摘み径1.8	外）にぶい褐7.5YR5/3 内）灰オリーブ5Y5/3 断）褐灰10YR5/1	灰釉	手捏ねによる摘みを貼付。外面無釉。灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	
282	SK7	陶器	瓶	—	—	9.0	16.0	外）黒10YR2/1 断）にぶい赤褐2.5YR5/4	鉄釉	内外面ロクロ目。外底に凹凸。内面施釉。外底無釉。黒色の釉。	能茶山窯 1820～1860年代
283	SK7 1層	陶器	水注	—	—	—	—	外）黒10YR2/1 内）にぶい赤褐5YR4/3 断）褐灰7.5YR4/1	鉄釉	把手を貼付。内外面ロクロ目。内面施釉。黒褐色の釉。	能茶山窯 1820～1860年代
284	SK7 上層	陶器	蓋物蓋	笠部径9.4	2.0	かえり径7.6	—	外）灰白7.5Y7/1 断）灰白2.5Y8/1	灰釉	内面とかえり無釉。灰白色を帯びる透明の釉。	京都・信楽系
285	SK7 1層	陶器	蓋物 半筒形	8.8	—	—	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰黄2.5Y7/2	灰釉	内面施釉。端部無釉。釉は焼成不良気味で白濁。	尾戸窯又は京都系
286	SK7 1層	陶器	餌猪口	—	—	3.6	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y8/1	灰釉	外底回転糸切り。外底無釉。灰黄色を帯びる透明の釉。	
287	SK7	陶器	ミニチュア鍋	6.3	2.5	2.8	—	外）にぶい赤褐2.5YR4/4 断）にぶい橙7.5YR7/3	鉄釉	ロクロ成形。外面下半回転ケズリ。把手と三足を貼付。外面下半無釉。	
288	SK7 上層	陶器	灯明受皿台付き	6.3	4.9	4.1	—	外）極暗赤褐5YR2/3 断）褐灰10YR5/1	鉄釉	外底回転糸切り。極暗赤褐色の釉。	能茶山窯 1820～1860年代
289	SK7 1層	陶器	灯明受皿台付き	6.6	5.0	3.6	—	外）灰褐5YR4/2 断）褐灰7.5YR4/1	鉄釉	外底回転糸切り。灰褐色の釉。	能茶山窯 1820～1860年代
290	SK7 1層	陶器	灯明受皿容器付き立鼓形	7.0	4.0	4.4	受部径3.8	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	台内抉りあり。内面と外底無釉。灰黄色を帯びる半透明の釉。	

Tab.15　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
291	SK7 上層	陶器	灯明受皿	10.2	2.1	4.8	受部径6.9	外）灰白2.5Y7/1 断）灰白N8/	灰釉	油溝半月状。外面上半と内面回転ナデ。外面下半と外底回転ケズリ。外面と受部先端無釉。灰白色を帯びる透明の釉。	京都・信楽系
292	SK7 上層	陶器	灯明受皿	9.4	1.8	4.0	受部径5.9	外）灰黄褐10YR6/2 断）灰黄褐10YR6/2	灰釉	油溝V字状。内面と口縁部外面回転ナデ。外面と外底回転ケズリ。外面と受部先端無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	
293	SK7 1層	陶器	灯明受皿	10.0	2.0	4.5	—	外）灰黄2.5Y6/2 内）灰オリーブ5Y5/3 断）黄灰2.5Y6/1	内）櫛目 灰釉	内面と口縁部外面回転ナデ。外面と外底回転ケズリ。外面下半無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	口縁部外面にタール状の焦げ。
294	SK7 上層	陶器	灯明受皿	11.1	2.2	5.0	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰白5Y8/1	灰釉	外面上半と内面回転ナデ。外面下半と外底回転ケズリ。外面無釉。灰黄色を帯びる透明の釉。	口縁部外面にタール状の焦げ。
295	SK7	土師質土器	白土器小皿	11.0	1.7	7.6	—	灰白10YR8/1	内）型による松竹梅鶴亀文	内底型による陽刻文様。内面周縁と外面ヨコナデ。外底直線方向のナデ。	尾戸窯
296	SK7 2層	土師質土器	焜炉筒形	11.8	—	—	—	灰白10YR8/1	外）印刻による「春」「花」	上位に窓を設ける。窓の周囲に粘土帯を貼付しユビオサエ。上位に径1.3cmの円孔数穴。内外面回転ナデ。口縁部は外側に折り込み肥厚させる。	京都系 口縁部に吹き溢れ状のシミ。
297	SK7 1層	土師質土器	焜炉箱形	約17.3	—	—	胴部径22.0	外）黒10YR7/1 断）にぶい橙7.5YR7/3		扇形の把手を貼付。内部施設は欠損する。外面ナデ・ミガキ。内面櫛目。	
298	SK7 2層	土師質土器	焜炉箱形	—	—	—	—	外）黒10YR7/1 断）にぶい橙7.5YR7/3		たたら成形。外面ナデ・ミガキ。内面櫛目、接合部付近にナデ。	
314	SK9 3層	陶器	小皿	10.8	2.9	3.8	—	外）黄褐2.5Y5/3 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	唐津系灰釉陶器。黄褐色を帯びる透明の釉。内底に砂目。	肥前産 1610～1630年代
315	SK9	陶器	小皿	—	—	4.5	—	外）にぶい黄橙10YR7/2 断）灰黄褐10YR6/2	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面下位無釉。釉は焼成不良で白濁。	肥前産 1590～1630年代
316	SK9 3層	陶器	甕	—	—	—	—	外）褐灰10YR6/1 内）暗灰黄2.5Y4/2 断）灰白10YR7/1	内）灰釉	外面タタキ目。外面無釉。	
317	SK9 下層	土師質土器	小皿	10.0	2.3	5.0	—	にぶい黄橙10YR7/2		内外面回転ナデ。外底ナデ。内底ユビオサエ・ナデ。	
318	SK9 床	土師質土器	小皿	8.6	3.0	4.5	—	外）褐灰10YR5/1 断）褐灰10YR6/1		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。外底に直線方向の圧痕。内底ユビナデ。	
319	SK9 床	土師質土器	小皿	13.4	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/3		内外面回転ナデ。	
320	SK11 1層	陶器	壺	10.8	—	—	—	外）褐灰5YR4/1 断）灰赤2.5YR5/2	焼締め	肩部に紐状の耳を貼付。内外面回転ナデ。内面粘土帯接合部付近にユビオサエ。外面に自然釉。	備前
321	SK12	陶器	小皿	—	—	5.0	—	外）褐灰7.5YR6/1 断）橙2.5YR6/6	内）鉄絵 灰釉	絵唐津。内外面ロクロ目。高台無釉。	肥前産 1590～1610年代
322	SK12 下層	土師質土器	杯	10.2	—	—	—	橙5YR6/6		内外面回転ナデ。	
323	SK12	土師質土器	小皿	—	—	7.4	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
324	SK12 上層	土師質土器	土錘	残存長［3.7］	全厚1.1	全幅1.1	重量［3.8g］	にぶい橙7.5YR6/4		外面ナデ。孔径0.3cm。	
325	SK13 上層	陶器	鉢又は向付	—	—	—	—	外）灰白7.5YR8/2 断）浅黄橙10YR8/3	長石釉	志野焼。灰白色の半透明の釉で貫入が入る。	美濃 16世紀末～17世紀初頭
326	SK13 床	土師質土器	杯	11.2	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/4		内外面回転ナデ。	
327	SK13 床	土師質土器	杯又は皿	11.0	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/3		内外面ナデ。	
329	SK17 上層	陶器	小皿	11.0	—	—	—	外）黄褐2.5Y5/3 断）灰黄褐10YR6/2	灰釉	唐津系灰釉陶器。黄褐色を帯びる半透明の釉。	肥前産 1590～1630年代
330	SK17 下層	土師質土器	小皿	—	—	8.4	—	橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
331	SK17 上層	陶器	壺又は甕	—	—	—	—	外）褐灰10YR6/1 断）褐灰10YR6/1	焼締め	体部外面中位に凹線。内外面回転ナデ。	
332	SK16 上層	土師質土器	小皿	—	—	6.5	—	にぶい橙7.5YR7/4		摩耗し調整不明。	

Tab.16　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
335	SK37	陶器	小皿	11.0	3.3	4.2	—	外）黄灰2.5Y6/1 断）にぶい橙7.5YR6/4	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面下位無釉。釉は焼成不良で黄灰色に発色。内底に砂目。	肥前産 1610～1630年代
336	SK37	土師質土器	杯又は小皿	—	—	7.2	—	橙5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切りの後直線方向の圧痕。	
338	SE1 1層	磁器 染付	中碗 広東形	11.6	6.6	6.4	—	外）白 断）白	外）草花文 口縁内）二重圏線 見込み）火焔宝珠・圏線	胎土断面は荒い。	能茶山窯又は肥前系 1780～1860年代
339	SE1 2層	磁器 染付	小碗 丸形	8.6	5.5	3.4	—	外）白 断）白	外）稲束		肥前産又は肥前系
340	SE1 1層	磁器 染付	中碗 丸形	11.4	—	—	—	外）灰白10Y8/1 断）白	外）区画間に四方襷 口縁内）二重圏線 見込み）圏線		肥前産
341	SE1 2層	磁器 染付	小碗 丸形	9.0	6.0	3.2	—	外）白 断）白	外）土坡に植物・鳥 見込み）花文		肥前産 19世紀前半～中葉
342	SE1 1層	磁器 染付	小碗 端反形	6.6	—	—	—	外）灰白7.5Y8/1 断）白	外）竹文	透明釉は焼成不良で白濁。	肥前産
343	SE1 2層	青磁	中皿	—	—	—	—	外）灰オリーブ7.5Y6/2 断）白	青磁釉	高台は畳付まで施釉。灰オリーブ色の釉。	肥前産
344	SE1 3・4層	磁器 染付	皿 端反形	—	—	—	—	外）白 断）白	外）連続唐草文か 内）唐草文		肥前産
345	SE1 2層	磁器 染付	中皿	—	—	10.9	—	外）白 断）白	内）山水文か	畳付に粗砂が付着。	肥前産
346	SE1 3・4層	白磁	鉢	10.8	—	—	—	外）白 断）白	外）型による陽刻文様	口縁部稜花形。	肥前産
347	SE1 1層	磁器 染付	蓋物 半筒形	10.0	7.8	6.0	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）草花文 高台外）二重圏線	内面施釉。口縁端部無釉。透明釉は粗い貫入が入る。	肥前産
348	SE1 2層	陶器	中碗 丸形	11.0	6.9	4.8	—	外）灰黄2.5Y7/1 断）灰黄2.5Y7/1	灰釉	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。釉は部分的に白濁。内底に目痕3足。	尾戸窯
349	SE1 2層	陶器	中碗 腰張形	10.4	—	—	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白5Y7/1	灰釉	灰白色を帯びる透明の釉。内底に目痕。	尾戸窯
350	SE1 1層	陶器	中碗 丸形	—	—	4.8	—	外）灰白N8/・灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。釉は焼成不良気味で部分的に白濁。	尾戸窯
351	SE1 2層	陶器	中碗 丸形	9.7	—	—	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰黄2.5Y7/2	灰釉	内外面に緩やかなロクロ目。灰黄色を帯びる透明の釉。	尾戸窯
352	SE1 2層	陶器	中碗	—	—	5.0	—	外）灰白2.5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。内底に目痕3足。	尾戸窯
353	SE1 2層	陶器	中碗 丸形	10.9	—	—	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	尾戸窯
354	SE1 2層	陶器	中碗 丸形	13.0	—	—	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白5Y7/1	灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉で粗い貫入が入る。	尾戸窯
355	SE1 2層	陶器	土瓶	8.7	—	—	—	外）黒褐7.5YR3/1 内）暗赤褐5YR3/3 断）褐灰10YR6/1	鉄釉	体部上位に2条の凹線と櫛目を巡らせる。内面施釉。黒褐色の釉。	
356	SE1 2層	陶器	土瓶蓋	笠部径 9.0	2.6	4.3	摘み径 2.1	外）暗褐7.5YR3/3 断）褐灰10YR6/1	鉄釉	摘みを添付し変形させる。外面ケズリ。外面無釉。暗褐色の釉。	
357	SE1 2層	陶器	鍋	—	—	9.2	—	外）黒褐7.5YR3/2 断）にぶい黄橙10YR7/2	鉄釉	三足を添付。外底無釉。黒褐色の釉。	外底に煤。
358	SE1 1層	陶器	水鉢 又は 植木鉢	29.0	—	—	—	外）浅黄5Y7/3 断）灰白2.5Y8/1	灰釉	内面ロクロ目。内面下半無釉。浅黄色を帯びる透明の釉。	瀬戸・美濃
359	SE1 3・4層	陶器	灯明 受皿	12.2	—	—	—	外）灰白2.5Y7/1 内）灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	外面上位回転ナデ、下位回転ケズリ。内面ナデ。外面無釉。灰黄色を帯びる透明の釉。	京都・信楽系 19世紀
360	SE1 2層	陶器	灯明 受皿	10.0	—	—	受部径 7.2	外）褐灰7.5YR5/1 内）黒褐7.5YR3/1 断）灰褐7.5YR6/2	内）錆釉	外面上半と内面回転ナデ。外面下半と外底回転ケズリ。外面無釉。	備前
361	SE1 2層	土師質土器	小皿	13.4	2.3	8.2	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
362	SE1 3・4層	土師質土器	小皿	—	—	5.2	—	橙5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内底ロクロ目。	
363	SE1 1層	土師質土器	ひょうそく	4.0	1.8	2.5	—	外）灰白10Y8/2 断）灰白10Y8/2		受部を添付。外面斜方向のハケ。外底ナデ。	

Tab.17　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
369	SD1 下層	青花	鉢又は皿	—	—	8.4	—	外）灰白10Y8/1 断）白	外）不明 高台外）二重圏線 内）草花・不明 高台内）圏線	毬挟み手。	中国 景徳鎮窯系 16世紀末～17世紀初頭
370	SD1 上層・SK9	青花	大皿	—	—	17.4	—	外）灰白2.5Y8/1 断）浅黄橙7.5YR8/3	外）圏線・不明 内）植物・花卉・圏線 白化粧土	白化粧の後透明釉を施す。透明釉は粗い貫入が入る。呉須は暗青灰色に発色する。	中国 漳州窯系 16世紀末～17世紀初頭
371	SD1	陶器	小皿 丸形	10.6	3.0	4.5	—	外）灰黄2.5Y6/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面下位無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	肥前産 1590～1630年代
372	SD1 中層	陶器	小皿 丸形	11.0	3.1	4.6	—	外）灰オリーブ7.5Y4/2・オリーブ黒7.5Y3/2 断）褐灰10YR4/1	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面下位無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉で部分的に青灰色に発色。	肥前産 1590～1630年代
373	SD1 上層	陶器	小皿 丸形	11.4	—	—	—	外）にぶい黄橙10YR7/3 断）にぶい黄橙10YR7/3	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面下位無釉。にぶい黄橙色を帯びる半透明の釉。	肥前産 1590～1630年代
374	SD1 上層	陶器	小皿 丸形	10.9	3.5	5.6	—	外）灰黄褐10YR6/2 断）橙2.5YR6/6	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面無釉。灰黄褐色を帯びる半透明の釉。焼成不良気味で部分的に白濁。内底に砂目。	肥前産 1610～1630年代
375	SD1 中層	土師質土器	鞴の羽口	—	—	—	—	外）にぶい橙7.5YR6/4 断）橙5YR6/6		外面ナデ。	
376	SD1 上層・中層	土師質土器	杯	11.8	3.2	6.2	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内外面ロクロ目。内底回転ナデ後直線方向のナデ。	口縁部にタール状の灯芯油痕。
377	SD1 上層	土師質土器	杯	10.7	3.5	5.6	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内底に強いロクロ目。	
378	SD1 上層	土師質土器	杯	11.8	3.0	6.6	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
379	SD1 上層	土師質土器	小皿	9.3	2.5	5.0	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内底に強いロクロ目。	
380	SD1 上層	土師質土器	杯又は皿	—	—	5.0	—	にぶい橙7.5YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内底に強いロクロ目。	
381	SD1 上層	土師質土器	杯又は皿	—	—	5.2	—	にぶい橙5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
382	SD1 上層	土師質土器	杯又は皿	—	—	5.2	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内底に強いロクロ目。	
383	SD1 上層	土師質土器	小皿	7.4	—	—	—	橙5YR7/6		内外面回転ナデ。	
384	SD1	土師質土器	小皿	9.8	—	—	—	にぶい橙5YR6/4		内外面回転ナデ	
385	SD2 1層	青花	中碗 丸形	12.4	—	—	—	外）灰白N8/ 断）白	外）植物・鳥・二重圏線 口縁内）二重圏線	口縁端部の釉が虫食い状に剥がれる。	中国 景徳鎮窯系 17世紀前葉～中葉
386	SD2 1層	青花	小杯	—	—	2.3	—	外）白 断）白	高台外）二重圏線 見込み）圏線・不明		中国 景徳鎮窯系 17世紀前葉～中葉
387	SD2 1層	陶器	中碗 端反形	9.6	—	—	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白2.5Y8/1	灰釉	薄手。灰白色を帯びる半透明の釉。	
388	SD2 1層	陶器	中碗	11.0	—	—	—	外）灰5Y6/1 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	唐津系灰釉陶器。灰色を帯びる半透明の釉。	肥前産 1590～1630年代
389	SD2 1層	陶器	中碗	—	—	4.6	—	外）黄灰2.5Y6/1 断）灰白2.5Y7/1・にぶい橙5YR6/4	灰釉	唐津系灰釉陶器。内外面ロクロ目。高台無釉。黄灰色を帯びる半透明の釉。釉は焼成不良で部分的に白濁。	肥前産 1590～1630年代
390	SD2 1層	陶器	小皿 端反形	10.8	2.9	4.0	—	外）黄灰2.5Y6/1 断）にぶい橙5YR6/4	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面下半無釉。黄灰色を帯びる半透明の釉。内底に胎土目。	肥前産 1590～1610年代
391	SD2 1層	陶器	小皿	11.4	3.1	4.2	—	外）灰白10YR8/1・にぶい褐7.5YR5/3 断）にぶい橙7.5YR7/4	灰釉	唐津系灰釉陶器。内底に段。高台内兜巾状。外面下半無釉。内底に胎土目。	肥前産 1590～1610年代
392	SD2 1層	陶器	小皿	—	—	5.2	—	外）灰褐7.5YR6/2・灰白7.5YR7/1 断）にぶい橙5YR6/4	灰釉	唐津系灰釉陶器。内底に段。外面下半無釉。灰褐色を帯びる半透明の釉。内底に砂目。	肥前産 1610～1630年代
393	SD2	陶器	小皿	14.0	—	—	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	唐津系灰釉陶器。口縁部溝縁状。灰白色を帯びる半透明の釉。	肥前産 1610～1630年代

Tab.18　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
394	SD2 1層	陶器	小皿	11.2	—	—	—	外）灰白10YR7/1 断）にぶい橙7.5YR7/3	灰釉	唐津系灰釉陶器。口縁部溝縁状。内底に段。釉は焼成不良で白濁。内底に砂目。	肥前産 1610～1630年代
395	SD2 1層	陶器	中皿	24.8	—	—	—	外）灰黄褐10YR6/2 断）にぶい黄橙10YR7/2	灰釉	唐津系灰釉陶器。灰黄褐色を帯びる透明の釉。	肥前産 1590～1630年代
396	SD2 1層	陶器	擂鉢	—	—	—	—	外）にぶい赤褐5YR5/4 断）にぶい橙5YR6/4	焼締め	外面ヨコナデ。内面櫛目。	備前
397	SD2 1層	土師質土器	杯	11.5	—	—	—	にぶい橙7.5YR6/4		内外面回転ナデ。	
398	SD2 1層	土師質土器	杯又は皿	—	—	6.6	—	にぶい橙7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内底ロクロ目。	
399	SD2 2層	土師質土器	杯	—	—	5.8	—	にぶい橙7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
400	SD2 2層	土師質土器	小皿	10.2	2.6	4.6	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
401	SD2 1層	土師質土器	杯又は皿	—	—	6.2	—	橙5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
402	SD2 1層	土師質土器	小皿	10.0	1.8	7.3	—	にぶい橙5YR7/4		内外面回転ナデ。外底ナデ、直線方向の圧痕。内底不定方向のユビナデ。	口縁部内外面に煤。
403	SD2 1層	土師質土器	小皿	10.0	2.1	7.5	—	橙5YR7/6		内外面回転ナデ。外底ナデ。内底円圏状のナデ。	
404	SD2	土師質土器	小皿	—	—	4.5	—	にぶい橙5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内外面ロクロ目。	
405	SD2 2層	土師質土器	小皿	8.2	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。内外面ロクロ目。	
406	SD2	土師質土器	焼塩壺	—	—	4.0	—	外）にぶい橙7.5YR7/4 断）にぶい橙5YR6/4	石英・長石・チャートの粗砂を含む。	外面ナデ。内面ヨコナデ。	
407	SD2 2層	土師質土器	土錘	残存長［3.6］	全厚1.0	全幅1.0	重量［4.2g］	にぶい橙5YR6/4		円孔径0.2cm。外面ナデ。	
408	SD3 上層	磁器染付	中碗丸形	11.8	—	—	—	外）白 断）白	外）山水文・二重圏線 口縁内）二重圏線 見込み）二重圏線		
409	SD3 上層	磁器染付	中碗	—	—	—	—	外）白 断）白	外）唐草文か 見込み）圏線	内底に段。	肥前産 1650～1670年代
410	SD3	磁器染付	中碗	—	—	—	—	外）白 断）白	外）土坡・植物 見込み）二重圏線		肥前産 1650～1670年代
411	SD3 上層	磁器染付	小皿	—	—	4.0	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白10YR8/1	内）二重圏線	蛇ノ目高台。透明釉は白濁し粗い貫入が入る。	肥前産 1640～1650年代
412	SD3 上層	磁器染付	小皿	—	—	5.6	—	外）灰白10Y8/1 断）白	内）唐草文・円圏・菊花	呉須は暗青灰色に発色。畳付に砂が付着。	肥前産 1630～1650年代
413	SD3 下層	青花	中碗	14.0	—	—	—	外）明緑灰10GY8/1 断）灰白N8/	外）不明 口縁内）圏線		中国 景徳鎮窯系 16世紀
414	SD3 下層	青花	中碗	—	—	—	—	外）白 断）白	外）蝶又は植物・二重圏線 口縁内）二重圏線		中国 景徳鎮窯系 17世紀前葉～中葉
415	SD3 下層	青花	中皿	—	—	11.7	—	外）灰白N8/ 断）白	内）植物・鹿	高台内に放射状の鉋痕。畳付に粗砂が付着。	中国 景徳鎮窯系 16世紀末～17世紀初頭
416	SD3 下層	青花	小皿丸形	12.5	3.0	6.5	—	外）白 断）白	口縁内）四方襷 見込み）圏線・不明		中国 景徳鎮窯系 17世紀前葉～中葉
417	SD3 上層	白磁	中皿	—	—	12.0	—	外）白 断）白	白磁釉		肥前産
418	SD3 上層	青磁	碗	—	—	5.4	—	外）オリーブ灰5GY6/1 断）灰白2.5Y7/1	青磁釉	高台内無釉。畳付施釉。オリーブ灰色の釉。	中国 龍泉窯系
419	SD3	青磁	小皿	—	—	4.6	—	外）オリーブ灰10Y6/2 断）黄灰2.5Y6/1	青磁釉	見込み釉剥ぎ。高台施釉。高台内釉剥ぎ。	
420	SD3 上層	陶器	中碗丸形	12.6	—	—	—	外）にぶい黄橙10YR7/3 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	にぶい黄橙色を帯びる透明の釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
421	SD3 下層	陶器	中碗	11.2	—	—	—	外）灰5Y6/1 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	唐津系灰釉陶器。灰色を帯びる透明の釉。	肥前産 1590～1630年代
422	SD3	陶器	中碗	—	—	4.5	—	外）灰黄2.5Y6/2 断）灰白2.5Y8/2・灰白2.5Y7/1	灰釉	唐津系灰釉陶器。高台内兜巾状。高台内無釉。高台外側まで施釉。灰黄色を帯びる半透明の釉。	肥前産 1590～1630年代

Tab.19　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
423	SD3	陶器	中碗	—	—	4.0	—	外）灰5Y6/1 断）黄灰2.5Y6/1	灰釉	唐津系灰釉陶器。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	肥前産 1590～1630年代
424	SD3 上層	陶器	中碗	—	—	4.6	—	外）灰黄2.5Y6/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	唐津系灰釉陶器。高台施釉。灰黄色を帯びる透明の釉。	肥前産 1590～1630年代
425	SD3 中層	陶器	中碗	—	—	4.4	—	外）黒10YR2/1 断）にぶい黄橙10YR7/2	鉄釉	唐津系灰釉陶器。外面下位無釉。黒色の釉。	肥前産 1590～1630年代
426	SD3 上層	陶器	中碗 天目形	—	—	4.8	—	外）黒7.5YR2/1 断）灰白2.5Y8/2	鉄釉	高台無釉。黒色の釉。	瀬戸・美濃
427	SD3 石列	陶器	中碗 天目形	—	—	4.8	—	外）黒10YR2/1 断）灰白10YR7/1	鉄釉	高台無釉。黒色の釉。	
428	SD3 下層	陶器	中碗	12.2	—	—	—	外）灰白2.5Y7/1・灰5Y4/1 断）褐灰10YR4/1	白化粧土刷毛目・透明釉	内外面白化粧土刷毛目の後透明釉を施す。	肥前産 17世紀第4四半期～18世紀前半
429	SD3 上層	軟質施釉陶器	皿	—	—	—	—	外）にぶい黄橙10YR7/2 断）明褐灰7.5YR7/2	内）型による菊弁	外底施釉。灰白色を帯びる白濁した釉。焼成軟質。	京都又は関西系 17世紀前葉
430	SD3	陶器	五寸皿 端反形	15.1	—	—	—	外）灰白2.5Y7/1 断）灰白2.5Y8/1	灰釉	内底に段。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯又は京都か
431	SD3 上層	陶器	小皿	13.1	4.4	4.7	—	外）灰黄2.5Y6/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	唐津系灰釉陶器。口縁部の数箇所をユビオサエし輪花形に変形させる。内底に段。外面下半無釉。灰黄色を帯びる透明の釉。内底に胎土目。高台脇の4箇所に胎土目の剥離痕。	肥前産 1590～1610年代
432	SD3 中層	陶器	小皿	11.5	3.2	4.3	—	外）暗灰黄2.5Y5/2 断）にぶい橙7.5YR6/4	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面下半無釉。暗灰黄色を帯びる半透明の釉。内底に胎土目。	肥前産 1590～1610年代
433	SD3 上層	陶器	小皿 丸形	12.3	3.6	5.0	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）にぶい黄橙10YR6/3	灰釉	唐津系灰釉陶器。高台内兜巾状。外面下半無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。内底に胎土目。	肥前産 1590～1610年代
434	SD3 上層	陶器	小皿	—	—	4.6	—	外）灰白2.5Y7/1 断）にぶい橙7.5YR7/3	灰釉	唐津系灰釉陶器。内底に段。高台内兜巾状。外面下半無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。内底に胎土目。	肥前産 1590～1610年代
435	SD3 下層	陶器	小皿	13.2	3.0	4.8	—	外）暗灰黄2.5Y5/2 断）にぶい黄橙10YR7/2	灰釉	唐津系灰釉陶器。内底に段。外面下半無釉。暗灰黄色を帯びる半透明の釉。内底に胎土目。	肥前産 1590～1610年代
436	SD3 上層	陶器	小皿	—	—	4.5	—	外）灰黄2.5Y6/2 断）黄灰2.5Y6/1	灰釉	唐津系灰釉陶器。内底に段。高台内兜巾状。外面下半無釉。灰黄色を帯びる半透明の釉。内底に胎土目。	肥前産 1590～1610年代
437	SD3 中層	陶器	小皿	14.5	4.6	5.6	—	外）黄灰2.5Y6/1 断）にぶい橙7.5YR6/4	灰釉	唐津系灰釉陶器。口縁部溝縁状。内底に段。外面下半無釉。黄灰色を帯びる半透明の釉。内底に砂目。畳付の4箇所に砂目痕。	肥前産 1610～1630年代
438	SD3 中層	陶器	小皿	14.4	4.5	5.1	—	外）灰褐7.5YR6/2 断）にぶい橙7.5YR7/4	灰釉	唐津系灰釉陶器。口縁部溝縁状。内底に段。外面下半無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。内底に砂目。畳付の4箇所に砂目痕。	肥前産 1610～1630年代
439	SD3 上層	陶器	小皿	12.8	4.0	4.9	—	外）にぶい黄橙10YR6/3 断）にぶい橙7.5YR7/3	灰釉	唐津系灰釉陶器。口縁部溝縁状。内底に段。高台施釉。にぶい黄橙色を帯びる透明の釉。内底に砂目。畳付の4箇所に砂目痕。	肥前産 1610～1630年代
440	SD3	陶器	小皿	11.8	2.8	4.2	—	外）灰褐7.5YR4/2 断）にぶい橙7.5YR6/4	灰釉	唐津系灰釉陶器。口縁部溝縁状。内底に段。外面下位無釉。灰白色を帯びる透明の釉。内底に砂目。畳付の4箇所に砂目痕。	肥前産 1610～1630年代
441	SD3 上層	陶器	小皿	13.9	4.2	5.1	—	外）褐灰10YR6/1 断）にぶい橙7.5YR6/4	灰釉	唐津系灰釉陶器。口縁部溝縁状。内底に段。外面下位無釉。褐灰色を帯びる半透明の釉。内底に砂目。	肥前産 1610～1630年代
442	SD3 中層	陶器	小皿	13.5	4.4	4.2	—	外）にぶい黄褐10YR5/3 断）にぶい橙5YR6/4	灰釉	唐津系灰釉陶器。内底に段。外面下半無釉。にぶい黄褐色を帯びる透明の釉。内底に砂目。	肥前産 1610～1630年代
443	SD3 上層	陶器	小皿	13.2	4.3	4.8	—	外）にぶい黄橙10YR7/2 断）にぶい黄褐10YR7/3	灰釉	唐津系灰釉陶器。口縁部溝縁状。内底に段。高台施釉。にぶい黄橙色を帯びる半透明の釉。内底に砂目。畳付に砂目痕。	肥前産 1610～1630年代

Tab.20　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
444	SD3	陶器	小皿	13.6	4.2	4.9	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）灰白N7/	灰釉	唐津系灰釉陶器。内底に段。高台内兜巾状。外面下位無釉。灰オリーブ色を帯びる透明の釉。内底に砂目。	肥前産 1610～1630年代
445	SD3 上層	陶器	鉢	—	—	9.8	—	外）灰白10YR8/ 断）灰白10YR8/2・灰白10YR8/1	内）鉄絵 長石釉	志野焼。紐状の三足を貼付。灰白色を帯びる半透明の釉。外底に胎土目痕。	美濃 16世紀末～17世紀初頭
446	SD3	陶器	大皿	30.6	6.7	8.4	—	外）灰オリーブ5Y5/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	唐津系灰釉陶器。口縁部折縁状。外面下半無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。内底に胎土目。	肥前産 1590～1610年代
447	SD3 上層	陶器	大皿	33.8	8.1	9.8	—	外）灰オリーブ5Y4/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	唐津系灰釉陶器。口縁部折縁状。外面下半無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。内底に胎土目。畳付の4箇所に胎土目の剥離痕。	肥前産 1590～1610年代
448	SD3 上層	陶器	大皿	34.0	—	—	—	外）暗灰黄2.5Y4/2 断）にぶい赤褐5YR5/3	灰釉	唐津系灰釉陶器。口縁部折縁状。外面ロクロ目。外面下位無釉。暗灰黄色を帯びる半透明の釉。	肥前産 1590～1630年代
449	SD3 中層	陶器	大皿	30.6	—	—	—	外）灰5Y4/1 断）にぶい黄緑10YR7/4	灰釉	唐津系灰釉陶器。口縁部折縁状。オリーブ黒色を帯びる半透明の釉。	肥前産 1590～1630年代
450	SD3 上層	陶器	鉢	—	—	—	—	外）明褐灰7.5YR7/2 断）灰白10YR8/2	外）鉄絵 長石釉	志野焼。灰白色を帯びる半透明の釉。	美濃 16世紀末～17世紀初頭
451	SD3 上層	陶器	擂鉢	—	—	—	—	外）灰黄褐10YR4/2 断）灰白10YR7/1	焼締め	外面回転ナデ。内面回転ナデ後櫛目。	
452	SD3	陶器	擂鉢	—	—	—	—	外）にぶい赤褐2.5YR5/4 断）黄灰2.5Y6/1	焼締め	外面回転ナデ。内面櫛目。	備前
453	SD3 中層	陶器	擂鉢	—	—	—	—	外）灰褐7.5YR5/2 断）にぶい褐7.5YR6/4	焼締め	外面ユビオサエ・ナデ。内面櫛目。	
454	SD3 上層	陶器	水注類か	10.2	12.0	11.0	—	外）にぶい赤褐5YR4/3 断）明赤褐2.5YR5/6	焼締め・鉄釉	皿部分はロクロ成形の後ユビオサエして輪花形に成形。把手を貼付。内外面回転ナデ。外底にチヂレ目。口縁部内外面にオリーブ黒色の釉。	
455	SD3 下層	陶器	小瓶	—	—	4.6	6.3	外）黒褐10YR3/1・黒褐10YR3/2 断）褐灰10YR6/1	鉄釉	内面ロクロ目。内面無釉。黒褐色の釉。	肥前か
456	SD3 上層	陶器	壺	8.5	—	—	—	外）暗灰黄2.5Y5/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	内面無釉。暗灰黄色の釉。	
457	SD3	陶器	壺又は甕	—	—	—	—	外）灰赤10R4/2 断）灰赤10R5/2	焼締め	内外面ナデ。外底チヂレ目。	備前
458	SD3 上層	陶器	壺又は甕	—	—	15.2	—	外）灰黄褐10YR5/2 断）灰白2.5Y7/1	焼締め	外面ナデ。内面ロクロ目。外底凹凸。内面無釉。外面に自然釉。	
459	SD3 上層	陶器	壺又は甕	—	—	20.2	—	外）にぶい褐7.5YR5/4 内）灰オリーブ5Y5/3・褐7.5YR4/3 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	内外面ロクロ目。外底に直線方向の圧痕。内外面施釉。外面にぶい褐色、内面灰オリーブ色の釉。	丹羽か
460	SD3 中層～下層	陶器	壺又は甕	—	—	23.2	—	外）にぶい橙7.5YR6/4 断）灰白2.5Y7/1	焼締め	内外面回転ナデ。外底チヂレ目。内面無釉。	信楽か
461	SD3	陶器	壺又は甕	—	—	—	—	外）黒褐7.5YR2/2 断）褐灰7.5YR5/1	鉄釉	外面格子状のタタキ目。内面円圏状の圧痕。	
462	SD3 上層	土器	鞴の羽口	残存長［4.7］	—	径9.3	円孔径2.9	外）にぶい橙7.5YR7/3 断）灰白7.5YR8/1		外面ナデ・チヂレ目。	二次被熱により部分的に橙色に発色。
463	SD3 中層	土器	鞴の羽口	残存長［3.0］	—	径9.5	円孔径1.6	断）明赤褐5YR5/6		円孔径1.5㎝。外面に自然釉が流れる。	
464	SD3 上層	土師質土器	小皿	11.8	3.4	5.7	—	にぶい橙7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部内外面と内底に焦げ。
465	SD3	土師質土器	小皿	11.8	2.8	6.3	—	にぶい黄橙10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	内外面にタール状の焦げ。
466	SD3 上層	土師質土器	小皿	10.7	2.2	6.5	—	褐灰10YR6/1		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内面ロクロ目。底部に径0.3㎝の円孔。	口縁部内外面と内面に焦げ。
467	SD3 上層	土師質土器	小皿	9.3	2.9	4.6	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	内外面にタール状の焦げ。

Tab.21　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
468	SD3下層	土師質土器	小皿	11.0	3.2	5.6	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内底に強いロクロ目。	内外面にタール状の焦げ。
469	SD3下層	土師質土器	小皿	10.4	2.4	5.8	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。外面に強いロクロ目。	内外面にタール状の焦げ。
470	SD3下層	土師質土器	小皿	10.0	2.3	5.4	—	灰黄2.5Y7/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内底に強いロクロ目。	外面に焦げ。
471	SD3	土師質土器	小皿	9.8	2.3	5.0	—	にぶい橙7.5YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内底に強いロクロ目。	内外面に焦げ。
472	SD3	土師質土器	小皿	11.2	2.5	5.2	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内面ロクロ目。	口縁部内外面にタール状の焦げ。
473	SD3上層	土師質土器	小皿	9.8	2.2	4.5	—	灰白10YR7/1		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	内外面に焦げ。
474	SD3上層	土師質土器	小皿	8.8	2.1	3.8	—	にぶい黄橙10YR7/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内底に強いロクロ目。	内外面と断面に焦げ。
475	SD3中層	土師質土器	小皿	10.0	2.5	4.4	—	灰黄2.5Y7/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内底に強いロクロ目。	
476	SD3下層	土師質土器	小皿	10.1	2.9	5.1	—	にぶい橙7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油痕。
477	SD3上層	土師質土器	小皿	10.0	2.7	5.4	—	にぶい橙7.5YR6/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部内外面に灯芯油痕。
478	SD3上層	土師質土器	小皿	9.5	2.2	6.4	—	にぶい橙7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	内外面に焦げ。
479	SD3	土師質土器	小皿	9.5	2.6	4.8	—	外）にぶい褐7.5YR6/3 断）褐灰7.5YR4/1		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
480	SD3上層	土師質土器	小皿	8.0	2.2	4.7	—	にぶい黄橙10YR7/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
481	SD3上層	土師質土器	小皿	8.1	2.0	4.5	—	にぶい黄橙10YR7/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
482	SD3上層	土師質土器	小皿	8.3	2.3	5.0	—	にぶい褐7.5YR6/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	外面にタール状の焦げ。
483	SD3	土師質土器	小皿	7.4	1.8	4.3	—	にぶい橙7.5YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
484	SD3上層	土師質土器	小皿	6.4	1.5	4.8	—	にぶい黄橙10YR7/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
485	SD3中層	土師質土器	小皿	—	—	4.8	—	にぶい橙7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切りの後直線方向の圧痕。底部に円孔。	
486	SD3下層	土師質土器	小皿	10.4	2.9	6.6	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ後中位の一部にユビ痕。外底直線方向の圧痕。	口縁部にタール状の灯芯油痕。
487	SD3上層	土師質土器	焼塩壺	5.8	8.6	4.2	6.4	外）橙5YR6/6 断）橙5YR7/6	石英・長石・雲母・チャートの粗砂を含む。	口縁部外面にユビオサエ。外面ナデ。内面布目・チヂレ目。内面に粘土帯接合痕が残る。	
488	SD3上層	土師質土器	焼塩壺	—	—	4.1	6.1	外）にぶい橙5YR6/4 断）にぶい橙5YR7/3	石英・長石・チャートの粗砂を含む。	口縁部外面にユビオサエ。外面ナデ。内面ナデ。	
489	SD3中層	土師質土器	焼塩壺	5.2	—	—	—	外）にぶい褐7.5YR6/3 断）にぶい橙5YR6/4		口縁部外面にユビオサエ。外面ナデ。内面ナデ・チヂレ目。	
490	SD3上層	土師質土器	焼塩壺	—	—	—	6.8	にぶい黄橙10YR7/2		外面ナデ。内面ナデ・チヂレ目。内面に粘土帯接合痕が残る。	
491	SD3上層	土師質土器	焼塩壺	—	—	3.8	—	外）にぶい橙7.5YR6/4 断）にぶい褐7.5YR6/3		外面ナデ。内面ナデ・チヂレ目。	
492	SD3上層	土師質土器	焼塩壺	—	—	4.7	—	にぶい橙7.5YR7/4		外面ナデ。内面ナデ・チヂレ目。	
493	SD3	土師質土器	焼塩壺蓋	笠部径6.8	2.1	—	—	にぶい赤褐5YR5/4	胎土中に金雲母を含む。	内外面ナデ。	関西産
494	SD3上層	土師質土器	土錘	残存長［3.2］	全厚1.1	全幅1.1	重量［4.2g］	外）にぶい橙5YR6/4 断）明褐灰5YR7/2		外面ナデ。孔径0.6cm	

Tab.22　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
631	SD5	陶器	中碗	—	—	4.4	—	外）灰オリーブ5Y5/2 断）にぶい橙7.5YR7/3	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面下位無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	肥前産 1590～1630年代
632	P20	陶器	中皿	19.6	—	—	—	外）灰黄褐10YR6/2 断）橙7.5YR6/6	灰釉	唐津系灰釉陶器。口縁部溝縁状。内底に段。高台無釉。灰白色を帯びる透明の釉。	肥前産 1590～1630年代
633	P20	磁器染付	瓶	—	—	—	—	外）灰白7.5Y8/1 断）白	外）山水文か	内面ロクロ目。内面無釉。	肥前産
634	SX5中層	陶器	中碗	—	—	5.2	—	外）にぶい黄橙10YR7/3 断）灰白10YR8/2	灰釉	高台施釉。にぶい黄橙色を帯びる透明の釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
635	SX5上層	陶器	擂鉢	33.4	—	—	—	外）灰赤2.5YR4/2 断）赤灰2.5YR4/1	焼締め	口縁部外面に2条の凹線。口縁部内面回転ナデ。体部外面回転ケズリ。内面櫛目。	備前
636	SX5	軟質施釉陶器	蓋物	6.0	2.0	3.6	—	外）薄緑 断）にぶい黄橙10YR7/4	外）緑色の低火度釉 内）透明の低火度釉	内面施釉。外底施釉。受部無釉。外面に緑色の釉。	
645	SX6	陶器	中碗天目形	11.6	—	—	—	外）にぶい黄橙10YR6/3 断）にぶい褐7.5YR6/3	鉄釉	内外面ロクロ目。外面下位無釉。釉は焼成不良でにぶい黄橙色に発色。	肥前か
646	SX6	陶器	擂鉢	22.0	—	—	—	外）にぶい赤褐5YR4/3 断）褐灰10YR6/1	焼締め	外面回転ナデ。体部中位にユビオサエ。内面ロクロ目・櫛目。口縁部内面に自然釉。	信楽か
647	Ⅲ層遺物集中1	土師質土器	杯	11.1	3.3	6.0	—	橙5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
648	Ⅲ層遺物集中1	土師質土器	杯	12.6	3.5	6.5	—	橙5YR7/6		内外面回転ナデ。内底ロクロ目。外底回転糸切り。	
649	Ⅲ層遺物集中1	青花	皿	—	—	—	—	外）白 断）白	外）不明 内）芙蓉手		中国 景徳鎮窯系 16世紀末～17世紀前葉 2次被熱により釉は変質。
650	Ⅲ層遺物集中1	土師質土器	焼塩壺	7.0	—	—	—	淡赤橙2.5YR7/3		口縁部内外面ユビオサエ・ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。	
651	TP9Ⅱ～Ⅲ層	磁器染付	中皿	21.0	3.2	10.0	—	外）白 断）白	外）区画間に宝文 内）芙蓉手、区画間に花卉・瓔珞文・草花文・二重圏線	外底中央の1箇所にハリ支え痕。	肥前産
652	TP5Ⅱ層	磁器染付	中碗端反形	9.6	—	—	—	外）白 断）白	外）格子文又は柵・岩 口縁内）帯線・圏線		肥前産 1820～1860年代
653	TP5Ⅱ層	陶器	鉢か	—	—	20.6	—	外）灰白10YR8/1 断）灰白2.5Y8/1	長石釉	高台施釉。透明の釉で貫入が入る。釉の表面に円孔が多く入る。	
654	TP8Ⅱ層	陶器	土瓶	—	—	—	—	外）浅黄2.5Y7/3 断）灰白10YR8/2	灰釉		
655	TP9Ⅲ′層	磁器染付	中碗	—	—	4.6	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白5Y8/1	外）圏線 高台外）二重圏線 見込み）不明	透明釉は貫入が入る。呉須は青灰色に発色。	
656	TP7Ⅲ層	染付又は青花	中碗	11.2	—	—	—	外）灰白5Y8/1 断）灰白5Y8/1	口縁外）圏線 口縁内）圏線	透明釉は焼成不良で白濁。口縁部の釉が部分的に剥がれる。呉須はオリーブ灰色に発色。	
657	TP5Ⅲ層	青花	皿	—	—	—	—	外）白 断）白	外）蓮弁文 内）モンスターマスク		中国 景徳鎮窯系 16世紀末～17世紀初頭
658	TP4Ⅲ′層	青花	皿	—	—	—	—	外）白 断）白	外）圏線 内）圏線・花		中国 景徳鎮窯系 16世紀末～17世紀初頭
659	TP4Ⅲ′層	青花	皿又は鉢	—		—	—	外）白 断）白	外）不明 内）草花		中国 景徳鎮窯系 16世紀末～17世紀初頭
660	Ⅲ′層	青花	碗	—	—	4.2	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）圏線 見込み）二重圏線	万頭心。高台無釉。透明釉は粗い貫入が入る。	中国 福建省系 16世紀後半～17世紀初頭
661	TP5Ⅲ′層	青磁	中碗	14.8	—	—	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）灰白5Y8/1	青磁釉		
662	TP8Ⅲ層	陶器	中碗	—	—	—	—	外）にぶい黄2.5Y6/4 断）にぶい黄橙10YR7/2	灰釉	にぶい黄色を帯びる透明の釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半

Tab.23　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
663	Ⅲ層	陶器	中碗	—	—	4.1	—	外）灰オリーブ7.5Y6/2 断）灰黄褐10YR6/2	灰釉	唐津系灰釉陶器。内外面ロクロ目。高台無釉。灰オリーブ色の釉。焼成不良で釉は部分的に白濁。	肥前産 1590～1630年代
664	TP6 Ⅲ層	陶器	中碗	—	—	4.5	—	外）にぶい黄橙10YR7/2 断）灰白10YR8/2	灰釉	高台内無釉。にぶい黄橙色を帯びる半透明の釉。	肥前産 1590～1630年代
665	TP5 Ⅲ層	陶器	中碗	13.2	—	—	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	外面ロクロ目。灰黄色を帯びる透明の釉。	尾戸窯
666	TP3 Ⅲ層	陶器	壺又は甕	—	—	15.2	—	外）にぶい赤褐2.5YR5/3 内）にぶい橙2.5YR6/4 断）灰赤2.5YR4/2	焼締め	内外面回転ナデ。内面ロクロ目。外底ナデ。外底に凹凸。	備前
667	TP5 Ⅲ層	陶器	火入れ	—	—	—	—	外）灰オリーブ7.5YR5/3 内）にぶい橙7.5YR6/4 断）灰白2.5Y7/1	外）白化粧・灰釉・緑釉	内面無釉。外面白化粧の後、透明の釉。口縁部外面に灰オリーブ色の釉。	口縁端部に敲打痕。
668	TP9 Ⅲ層	須恵器又は瓦質土器	擂鉢	—	—	—	—	外）灰N5/ 断）灰白2.5Y7/1	石英・長石の粗砂・細砂を含む。	口縁部外面回転ナデ。外面ヨコナデ。内面回転ナデ後櫛目。	
669	TP7 Ⅲ層	土師質土器	小皿	—	—	5.4	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
670	TP5 Ⅲ層	土師質土器	小皿	9.8	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/3		内外面回転ナデ。	
671	TP6 Ⅲ層	土師質土器	小皿	11.6	2.9	6.5	—	橙5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
672	TP4 Ⅲ層	土師質土器	皿	—	2.5	—	—	にぶい橙7.5YR7/3		内外面ナデ。	
673	TP7 Ⅲ層	土師質土器	小皿	6.3	1.3	4.7	—	外）橙2.5YR6/6 断）浅黄橙7.5YR8/3		口縁部外面ナデ。外面下半と外底ユビオサエ・ナデ。内面回転ナデ。	
674	TP4 Ⅲ′層	土師質土器	小皿	13.6	2.6	7.2	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面ユビオサエ・ナデ。	
675	TP5 Ⅲ層	土師質土器	杯又は皿	—	—	5.6	—	にぶい橙7.5YR7/3		内外面ナデ。外底ナデ・直線方向の圧痕。内底ユビオサエ・ナデ。	
676	TP5 Ⅲ層	土師質土器	土錘	残存長 ［3.6］	全厚 1.0	全幅 1.1	重量 ［2.9g］	にぶい橙5YR7/4		外面ナデ。孔径0.2cm	
677	TP5 Ⅲ～Ⅳ層	土師質土器	焜炉か	14.0	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/4		内外面回転ナデ。	
678	Ⅰ区 Ⅳ層	陶器	小皿	—	—	4.8	—	外）灰褐7.5YR6/2 断）にぶい橙5YR6/4	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面下位無釉。灰褐色を帯びる半透明の釉。焼成不良気味で部分的に白濁。内底に砂目。	肥前産 1610～1630年代
679	Ⅱ区 Ⅱ～Ⅲ層	磁器染付	鉢	15.0	4.9	6.3	—	外）白 断）白	内）草花文・二重圏線 口縁内）圏線	口縁部稜花形。	肥前産 1610～1650年代
680	Ⅰ～Ⅲ層	陶器	向付方形	—	—	10.4	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	長石釉	志野焼。クリ底。外底施釉、外底中央付近無釉。釉は灰白色を帯び貫入が入る。露胎部は橙色に発色。外底に窯道具の溶着痕。	美濃 16世紀末～17世紀初頭
681	Ⅰ～Ⅲ層	陶器	向付方形	—	—	11.8	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	長石釉	志野焼。クリ底。外底無釉。釉は半透明で貫入が入る。	美濃 16世紀末～17世紀初頭
682	Ⅰ～Ⅲ層	白磁	紅皿菊花形	4.8	1.3	1.4	—	外）白 断）白	外）型による菊弁	型押成形。外面下半無釉。外底にチヂレ目。	肥前産 1780～1860年代
683	Ⅰ～Ⅲ層	青花	皿	—	—	—	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白N8/	内）植物	白化粧の後透明釉を施す。	中国 漳州窯系 16世紀末～17世紀初頭
685	TP5 撹乱	磁器染付	小杯	6.2	4.3	2.5	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）文字・ヘラ彫による縦筋	高台内兜巾状。高台内無釉。	肥前産 1630～1650年代
686	撹乱	磁器染付	小皿丸形	13.5	3.2	5.6	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	内）圏線・草花文	透明釉は白濁する。畳付に砂が付着。	肥前産 1630～1650年代
687	TP5 撹乱	青花	皿	—	—	—	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白N8/	外）圏線 内）二重圏線・植物	白化粧の後透明釉を施す。	中国 漳州窯系 16世紀末～17世紀初頭
688	TP5 撹乱	青花	皿	—	—	—	—	外）白 断）白	内）不明	高台内無釉。	中国 景徳鎮窯系 16世紀末～17世紀初頭
689	TP1 Ⅰ層	青花	皿又は鉢	—	—	—	—	外）白 断）白	外）圏線・雲又は唐草 内）モンスターマスク		中国 景徳鎮窯系 16世紀末～17世紀初頭

Tab.24　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
690	TP4 撹乱	陶器	中碗 丸形	10.6	8.2	4.6	—	外）にぶい黄褐 10YR7/2 断）浅黄橙10YR8/3	灰釉・銅緑釉	卵手。高台内兜巾状。高台無釉。にぶい黄褐色を帯びる透明の釉。外面の釉は焼成不良で白濁。部分的に緑釉がかかる。内底に目痕3足。	肥前産 1610～1650年代
691	TP4 撹乱	陶器	中碗 丸形	10.0	7.9	5.0	—	外）灰白2.5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	内外面緩やかなロクロ目。高台内渦状のケズリ後ナデ。高台無釉。灰白色を帯びる透明の釉。内底に目痕3足。	尾戸窯
692	TP4 撹乱	陶器	中碗 丸形	10.0	—	—	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）浅黄橙10YR8/3	灰釉	高台無釉。灰黄色を帯びる半透明の釉。内底に目痕。	尾戸窯
693	撹乱	陶器 色絵	小碗 半球形	9.4	5.3	3.3	—	外）灰白5Y8/1 断）灰白2.5Y8/2	外）緑の上絵付による文様 灰釉	高台無釉。	京都・信楽系 18世紀中葉 高台内に墨書。
694	TP7 Ⅰ層	土師質 土器	白土器 小皿	12.0	2.0	8.0	—	灰白2.5Y8/1		外面回転ケズリ後ナデ。内面不定方向のナデ。外底ナデ。文様の有無は不明。	尾戸窯
695	Ⅰ区 Ⅰ層	土師質 土器	焼塩壺 蓋	笠部径 6.0	1.5	—	天井部径 5.7	外）灰黄褐10YR6/2 断）にぶい黄橙 10YR7/2		内外面ナデ。	
698	SK6 1層	磁器 染付	中碗 端反形	10.2	5.8	4.0	—	外）白 断）白	外）船・水 口縁内）雷文帯 見込み）圏線・松竹梅円形文	胎土断面は荒い。	肥前産又は肥前系 能茶山窯か 1820～1860年代
699	SK6 検出面	磁器 染付	中碗 端反形	11.0	6.3	3.8	—	外）白 断）白	外）植物 高台外）櫛歯文 口縁内）植物 見込み）不明	透明釉は粗い貫入が入る。胎土断面は荒い。	肥前産又は肥前系 1820～1860年代
700	SK6 4層	磁器 染付	小碗 筒丸形	7.2	—	—	—	外）白 断）白	外）唐草文か・圏線 口縁内）二重圏線		肥前産 19世紀中葉
701	SK6 1層	磁器 染付	小杯 端反形	5.0	2.9	1.9	—	外）白 断）白	外）梅花		肥前産又は肥前系
702	SK6 1層	磁器 染付	小杯 端反形	6.5	2.7	2.1	—	外）白 断）白	外）圏線・二重圏線 口縁内）圏線		肥前産又は肥前系
703	SK6 1層	磁器 染付	小杯 端反形	7.4	2.4	3.4	—	外）灰白N8/ 断）白	外）不明 見込み）不明 口錆		肥前産又は肥前系
704	SK6 2層	磁器 色絵 染付	小杯 平形	6.8	2.6	2.4	—	外）白 断）白	内）金の上絵付による文様 高台内）銘	胎土断面は透明感をもつ。	関西系 高台内に銘。
705	SK6 3層	磁器 色絵 染付	小杯 平形	6.6	2.8	2.2	—	外）白 断）白	外）圏線 高台外）圏線 内）呉須による圏線・黒・赤・黄・緑・金の上絵付による地球儀・本・文字 口縁端部金彩	胎土断面は透明感をもつ。	関西系
706	SK6 1層	磁器 色絵 染付	小杯	—	—	2.2	—	外）白 断）白	高台外）櫛歯文 高台内）銘 内）黒の上絵付による文字	薄手酒杯。	肥前産 19世紀前半～中葉
707	SK6 上層	磁器 色絵 染付	小杯	6.2	2.8	2.4	—	外）白 断）白	高台外）宝珠か 見込み）黒の上絵付による文字「有田」か 高台内）黒の上絵付による角枠内「今戸」		肥前産
708	SK6 4層	磁器 色絵	小杯 平形	7.4	3.2	2.4	—	外）白 断）白	内）金の上絵付による松 高台外）櫛歯文 高台内）角枠内銘	胎土断面は透明感をもつ。	肥前産又は関西系 高台内に銘。
709	SK6 2層	磁器 色絵	小杯 丸形	6.1	2.5	3.0	—	外）灰白N8/ 断）白	内）赤の上絵付による紅葉 口錆	外面中位に稜線。	肥前産又は肥前系
710	SK6 4層	白磁	小皿 菊花形	—	—	7.0	—	外）灰白10Y8/1 断）白	内）型による菊弁	蛇ノ目凹形高台。高台内蛇ノ目釉剥ぎ。高台施釉。	肥前産又は肥前系 外底に墨書。
711	SK6 2層	白磁	小皿 菊花形	13.3	3.9	8.0	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白N8/	内）型による菊弁 口錆	蛇ノ目凹形高台。高台内蛇ノ目釉剥ぎ。高台端部まで施釉。	
712	SK6 2層	白磁	小皿 端反形	9.2	1.8	5.6	—	外）白 断）白	内）型による陰刻文様	胎土断面は透明感をもつ。	瀬戸・美濃
713	SK6 3層	白磁	小皿 端反形	12.3	2.6	8.2	—	外）白 断）白	内）型による陰刻文様	胎土断面は透明感をもつ。	瀬戸・美濃
714	SK6 2・3層	磁器 染付	蓋か 変形形	—	—	—	—	外）灰白7.5Y8/1 断）白	外）宝文 内）花卉と唐草文		肥前産又は肥前系

Tab.25　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
715	SK6 4層	青花	小皿	—	—	5.2	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）灰白10YR8/2	外）圏線 内）圏線	見込みを円形に釉剥ぎ。呉須は灰オリーブ色に発色。	中国 漳州窯系か 16世紀末～17世紀初頭
716	SK6 1層	磁器 染付	皿又は鉢	—	—	18.2	—	外）白 断）白	外）不明 高台外）二重圏線 内）山水文・区画間に不明文様	八角形。畳付に灰白色の砂が付着。	肥前産
717	SK6 3層	磁器 染付	鉢 八角形	15.4	7.7	8.8	—	外）白 断）白	外）唐草文 高台外）不明 内）千鳥・渦・花文	蛇ノ目凹形高台。高台内蛇ノ目釉剥ぎ。	肥前産又は肥前系
718	SK6 2層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.8	2.7	—	摘み径 5.4	外）白 断）白	外）草花文 摘み外）二重圏線 内）圏線・昆虫文	広東形碗の蓋。	肥前産又は肥前系 19世紀前半～中葉
719	SK6 下層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.0	3.1	—	摘み径 3.4	外）白 断）白	外）富士 摘み外）圏線 内）雷文帯・圏線・円形文 摘み内）圏線	内面の呉須はオリーブ灰色に発色。	肥前系
720	SK6 3・4層	磁器 染付	蓋物 丸形	4.4	2.5	2.4	—	外）白 断）白	外）茄子	端部無釉。	肥前産又は肥前系
721	SK6 4層	磁器 染付	不明	5.6	2.6	5.0	—	外）灰白5Y8/1 断）白	外）水仙	外底回転ケズリ。内面施釉.外底無釉。呉須は暗青灰色に発色。透明釉は貫入が入る。胎土断面は荒い。	能茶山窯か 1820～1860年代
722	SK6 1・3層	白磁	紅皿	7.0	1.8	2.0	—	外）白 断）白	外）型による陽刻の花文	型押成形。外面に型による陽刻文様。外面チヂレ目。高台無釉。釉は白濁する。	
723	SK6 1層	磁器 染付	小瓶 辣韮形	1.5	11.3	3.6	5.2	外）灰白5GY8/1 断）不明	外）蛸唐草文・若松・梅・草		肥前産又は肥前系 19世紀前半～中葉
724	SK6 1層	磁器 染付	中碗 端反形	9.6	5.6	3.4	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	外）不明・二重圏線 高台外）圏線 口縁内）多重圏線・点 見込み）圏線・丸に略化した網代と鳥か 酸化コバルト		鹿児窯か 19世紀後葉（明治5～20年頃）
725	SK6・ SK19	磁器 染付	中碗 端反形	9.7	6.0	3.6	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	外）不明・二重圏線 高台外）圏線 口縁内）多重圏線・点 見込み）圏線・不明 酸化コバルト		鹿児窯か 19世紀後葉（明治5～20年頃）
726	SK6	磁器 染付	中碗 端反形	10.5	—	—	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白N8/	外）不明文様 口縁内）多重圏線・点 酸化コバルト		鹿児窯か 19世紀後葉（明治5～20年頃）
727	SK6 4層	磁器 染付	中碗 端反形	10.8	—	—	—	外）灰白N8/ 断）白	外）区画間に不明文様 口縁内）多重圏線・点 見込み）圏線 酸化コバルト	外面ロクロ目。	鹿児窯か 19世紀後葉（明治5～20年頃）
728	SX1・ SK6 下層	磁器 染付	中碗 端反形	10.2	—	—	—	外）白 断）白	外）縞・不明 口縁内）多重圏線 見込み）圏線 酸化コバルト		鹿児窯か 19世紀後葉（明治5～20年頃）
729	SK6 4層	磁器 染付	中碗 端反形	10.8	—	—	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白N8/	外）竹文 口縁内）多重圏線・点 見込み）圏線 酸化コバルト	胎土断面は荒い。	鹿児窯か 19世紀後葉（明治5～20年頃）
730	SK6 4層	磁器 染付	中碗 端反形	10.2	5.9	4.3	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/1	外）型紙刷りによる花・竹・圏線 高台外）圏線 口縁内）多重圏線・点 見込み）圏線・不明 酸化コバルト		鹿児窯又は肥前系 19世紀後葉
731	SK6 1層	磁器 染付	中碗 端反形	9.7	5.9	3.8	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	外）型紙刷りによる花唐草文・鳥・圏線 高台外）圏線 口縁内）多重圏線・点 見込み）圏線・略化した海浜風景文 酸化コバルト		鹿児窯又は肥前系 19世紀後葉
732	SK6 2層	磁器 染付	中碗 端反形	10.2	6.0	4.0	—	外）灰白10Y8/1 断）白	外）型紙刷りによる花・鳥・圏線 高台外）圏線 口縁内）型紙刷りによる文様 見込み）圏線・型紙刷りによる円形文 酸化コバルト	透明釉は粗い貫入が入る。胎土断面は荒い。	肥前系 19世紀後葉（明治10年代）

Tab.26　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
733	SK6 2層	磁器 染付	中碗 端反形	11.1	5.7	3.8	—	外）灰白N8/ 断）灰白N8/	外）型紙刷りによる草花文 高台外）圏線 口縁内）二重圏線 見込み）圏線 酸化コバルト	見込み蛇ノ目釉剥ぎ。	肥前系 19世紀後葉（明治10年代）
734	SK6 3層	磁器 染付	中碗 丸形	10.0	5.2	3.3	—	外）白 断）白	外）型紙刷りによる花文 高台外）二重圏線 口縁内）型紙刷りによる宝珠繋ぎ 見込み）二重圏線・型紙刷りによる松竹梅円形文 酸化コバルト		肥前系 19世紀後葉（明治10年代）
735	SK6 2・3層	磁器 染付	中碗	11.2	—	—	—	外）白 断）白	外）型紙刷りによる人物・田・蓮弁文 口縁内）帯線に型紙刷りによる田・人物 酸化コバルト		肥前系 19世紀後葉（明治10年代）
736	SK6 1層	磁器 染付	中碗 平形	10.8	4.3	3.9	—	外）白 断）白	外）花文・圏線 口縁端部に呉須 酸化コバルト		肥前系 19世紀後葉
737	SK6	磁器 染付	中碗 平形	11.9	4.2	4.3	—	外）白 断）白	外）縞 高台外）圏線 口縁端部に呉須 酸化コバルト		肥前系 19世紀後葉
738	SK6 1層	磁器 染付	中碗 平形	—	—	3.3	—	外）白 断）白	外）縞 高台外）圏線 高台内）圏線・角枠内銘 酸化コバルト		肥前系 19世紀後葉
739	SK6 2層	磁器 染付	小碗 平形	9.3	3.3	3.1	—	外）灰白N8/ 断）白	外）網目文 高台外）圏線 口縁端部に呉須 酸化コバルト		肥前産又は肥前系 19世紀後葉
740	SK6 1層	磁器 染付	小碗 筒丸形	6.0	5.7	3.2	—	外）白 断）白	外）型紙刷りによる花文・その他 高台外）圏線 口縁内）帯線・圏線 酸化コバルト		肥前産又は肥前系 19世紀後葉（明治10年代）
741	SK6 4層	磁器 染付	小杯	—	—	2.9	—	外）白 断）白	外）圏線・文字 高台外）圏線 高台内）圏線・銘 酸化コバルト		肥前産又は肥前系 19世紀後葉
742	SK6	磁器 染付	大皿 変形形	29.3	5.0	16.6	—	外）白 断）白	外）圏線・略化した唐草文 高台外）二重圏線 内）花卉・雷文帯 酸化コバルト		肥前系 19世紀後葉
743	SK6 3・4層	磁器 染付	小皿 菊花形	12.2	3.5	7.7	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白N8/	内面に型による菊弁 内）花・水車・垣 口縁端部にコバルト 酸化コバルト	蛇ノ目凹形高台。高台内蛇ノ目釉剥ぎ。高台端部まで施釉。内底に目痕5足。	肥前産又は肥前系 19世紀後葉（明治10年代）
744	SK6 4層	磁器 染付	小皿	12.2	3.7	7.2	—	外）灰白5Y8/1 断）白	外）山又は土坡 内）山水文 口縁端部に呉須 酸化コバルト	口縁部輪花形。蛇ノ目凹形高台。高台内蛇ノ目釉剥ぎ。透明釉は粗い貫入が入る。胎土断面は荒い。	鹿児窯か 19世紀後葉（明治5～20年頃）
745	SK6 4層	磁器 染付	土瓶又は急須	—	—	8.0	—	外）白 断）白	外）型による陰刻文様、唐子 酸化コバルト		肥前産又は肥前系 19世紀後葉
746	SK6 3層	磁器 染付又は陶器	中皿	23.0	—	—	—	外）白 断）白	内）花文	胎土は軟質で断面は荒い。	
747	SK6 4層	白磁	仏飯器	—	—	3.4	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白N8/		外底回転ケズリ。外底無釉。露胎部はにぶい褐色に発色。	肥前系 19世紀後葉か
748	SK6 1層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 8.8	2.8	—	摘み径 3.6	外）白 断）白	外）型紙刷りによる花・竹 摘み外）二重圏線 内）型紙刷りによる宝珠繋ぎ・手描きによる二重圏線と略化した松竹梅円形文 摘み内）圏線・銘 酸化コバルト		肥前産 19世紀後葉（明治10年代）
749	SK6 2層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 8.8	3.6	—	摘み径 3.6	外）白 断）白	外）手描きによる雲・鳥 摘み外）二重圏線 内）型紙刷りによる宝珠繋ぎ・手描きによる圏線と略化した円形文 酸化コバルト		肥前産又は肥前系 19世紀後葉（明治10年代）

Tab.27　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
750	SK6 2層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 8.4	2.2	—	摘み径 3.4	外）白 断）白	外）型紙刷りによる 花・竹 摘み外）縞 内）型紙刷りによる宝珠繋ぎ・手描きによる円形文 摘み内）圏線・銘 酸化コバルト		肥前産 19世紀後葉（明治10年代）
751	SK6 3層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 8.9	2.7	—	摘み径 3.6	外）灰白5Y8/1 断）白	外）型紙刷りによる 花文 摘み外）二重圏線 内）型紙刷りによる宝珠繋ぎ・手描きによる二重圏線と略化した円形文 摘み内）圏線・銘 酸化コバルト		肥前産 19世紀後葉（明治10年代）
752	SK6 3層	磁器 染付	碗蓋	—	—	—	—	外）白 断）白	外）型紙刷りによる 花卉・微塵唐草 摘み外）縞 内）型紙刷りによる 草花文 摘み内）圏線・銘 酸化コバルト	胎土断面は荒い。	肥前産又は肥前系 19世紀後葉（明治10年代）
753	SK6 3層	磁器 染付	蓋物 腰張形	6.4	3.5	3.2	—	外）灰白5Y8/1 断）灰白N8/	外）圏線・帯線 高台外）圏線 酸化コバルト	内面施釉。端部無釉。	肥前系 19世紀後葉
754	SK6 4層	磁器 染付	段重	11.9	4.0	10.9	—	外）白 断）白	外）四方襷・植物 酸化コバルト	内面施釉。端部無釉。	肥前産又は肥前系 19世紀後葉
755	SK6 1層	磁器 染付	燗徳利	2.9	—	—	—	外）白 断）白	口縁外）手描きによる文様 酸化コバルト	内面無釉。	肥前系 19世紀後葉
756	SK6 下層	磁器 染付	燗徳利か	—	—	5.7	—	外）白 断）白	外）圏線 酸化コバルト	内面ロクロ目。内面無釉。外底無釉。	肥前系 19世紀後葉
757	SK6 4層	陶器	中碗	9.2	—	—	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	灰白色を帯びる透明の釉。	尾戸窯
758	SK6 2層	陶器	小皿 端反形	11.2	4.7	5.0	—	外）黒7.5YR2/1 断）にぶい黄橙10YR6/3	鉄釉	見込み蛇ノ目釉剥ぎし白土を施す。外面下位無釉。黒色の釉。	能茶山窯 1820～1860年代か
759	SK6 1層	陶器	小皿	11.8	4.5	4.4	—	外）黒褐5YR2/2 断）褐灰10YR6/1	鉄釉	見込み蛇ノ目釉剥ぎの後白土を施す。外面下位無釉。黒褐色の釉。	能茶山窯 1820～1860年代か
760	SK6 2層	陶器	捏鉢又は片口	19.6	—	—	—	外）にぶい黄褐10YR5/3 断）橙2.5YR6/6	灰釉又は鉄釉	内面ロクロ目。口縁端部を釉剥ぎし白土を施す。釉は焼成不良でにぶい黄褐色に発色。	能茶山窯 1820年代～19世紀後葉
761	SK6 2層	陶器	捏鉢	—	—	10.1	—	外）黒褐7.5YR3/1 断）にぶい橙5YR6/4・灰褐7.5YR5/2	鉄釉	黒褐色の釉。内底に目痕5足。	能茶山窯 1820年代～19世紀後葉
762	SK6 4層	陶器	鍋 柳川鍋	16.0	—	—	—	外）褐灰7.5YR4/1 断）褐灰7.5YR5/1	鉄釉	把手は欠損する。内外面に鉄釉を刷毛塗り。外面下位と受部無釉。	能茶山窯 1820年代～19世紀後葉
763	SK6 2層	陶器	鍋 手付き	13.8	—	—	—	外）黒褐5YR3/1 断）褐灰10YR4/1	鉄釉	内面施釉。受部無釉。	能茶山窯 1820年代～19世紀後葉
764	SK6 2層	陶器	小杯か	—	—	3.4	—	外）灰白10Y7/1 断）灰白2.5Y8/1	灰釉・青色の釉	ロクロ成形の後、底部を六角形に面取る。外底回転糸切り。内面施釉。高台無釉。灰白色を帯びる透明の釉。部分的に青色の釉を施す。	外底に角枠内銘印。
765	SK6・ SK19	陶器	擂鉢	19.9	—	—	—	外）黒7.5YR2/1 断）褐灰10YR5/1	鉄釉	口縁部外面に2条の凹線。外面回転ナデ。内面回転ナデ後櫛目。外面下位と内面の口縁部以下無釉。黒色の釉。	能茶山窯 19世紀後葉
766	SK6	陶器	擂鉢	31.8	—	—	—	外）灰褐5YR4/2 断）褐灰7.5YR5/1	鉄釉	外面上半回転ナデ、下半回転ケズリ。内面回転ナデ後櫛目。内外面に灰褐色の釉を薄く施す。	能茶山窯 19世紀後葉
767	SK6 2層	陶器	擂鉢	36.8	—	—	—	外）暗赤褐5YR3/2 内）灰褐5YR4/2 断）褐灰10YR5/1	鉄釉	口縁部内面櫛目後回転ナデ。内外面ロクロ目。内面櫛目。内面無釉。外面に暗赤褐色の釉。	能茶山窯 19世紀後葉
768	SK6 2層	陶器	擂鉢	31.4	—	—	—	外）暗赤褐5YR3/3 内）灰褐7.5YR5/2 断）褐灰5YR5/1	鉄釉	口縁部内面回転ナデ。内面櫛目。外面施釉。暗赤褐色の釉。	能茶山窯 19世紀後葉
769	SK6 3層	陶器	擂鉢	—	—	15.4	—	外）暗赤褐5YR3/3 内）褐灰5YR4/1 断）褐灰5YR4/1	鉄釉	内面櫛目。内底に不定方向の櫛目。外底に灰白色の砂が付着。外面施釉。暗赤褐色の釉。	能茶山窯 19世紀後葉

Tab.28　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
770	SK6 4層	陶器	鍋 行平	19.6	—	—	—	外）黒褐7/5YR2/2 断）にぶい橙 7.5YR7/4	外）飛鉋 鉄釉	把手を貼付。外面上半鉄釉を刷毛塗りの後飛鉋。外面下位無釉。内面黒褐色の釉。受部無釉。	能茶山窯 1820年代～19世紀後葉
771	SK6 2層	陶器	鍋蓋	笠部径 15.0	3.8	—	摘み径 2.2	外）暗赤灰2.5YR3/1 断）にぶい橙 7.5YR6/4	外）飛鉋 鉄釉	外面飛鉋の後、鉄釉を円圏状に巡らす。内面鉄釉を刷毛塗り。摘み上部と鍔部内外面無釉。暗赤灰色の釉。	能茶山窯 19世紀後葉か
772	SK6 4層	陶器	土瓶又は急須	15.6	—	—	—	外）灰黄褐10YR6/2 断）にぶい黄橙 10YR7/2	焼締め	内外面ナデ・ユビオサエ。	
773	SK6 4層	陶器	土瓶	8.4	—	—	—	外）明赤褐5YR5/6 断）にぶい橙 5YR7/4	橙色の釉	把手の上部にキザミ。内面無釉。橙色を帯びる透明の釉。	
774	SK6 4層	陶器	土瓶	11.3	—	—	—	外）黒褐7.5YR3/1 断）灰褐7.5YR5/2	鉄釉	内面口縁部以下無釉。黒褐色の釉。端部に白土。	能茶山窯 1820年代～19世紀後葉
775	SK6 2層	陶器	土瓶蓋	笠部径 11.0	2.3	5.6	摘み径 1.9	外）黒褐5YR3/1 断）にぶい橙 7.5YR7/4	鉄釉。	外面回転ナデ、下面回転ケズリ。外面と上端部無釉。黒褐色の釉。	能茶山窯 1820年代～19世紀後葉
776	SK6 4層	陶器	土瓶蓋	笠部径 9.3	1.8	3.8	摘み径 1.8	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	手捏ねによる摘みを貼付。内外面回転ナデ。外面下部回転ケズリ。外面無釉。灰黄色を帯びる透明の釉。	
777	SK6 3層	軟質施釉陶器	土瓶蓋	笠部径 9.3	2.1	2.4	摘み径 1.9	外）明赤褐5YR5/8 断）橙5YR7/6	明赤褐色の低火度釉	手捏ねによる摘みを貼付。内外面回転ナデ。外面下部回転糸切り。外面無釉。	
778	SK6 1層	陶器	土瓶又は急須蓋	笠部径 10.2	1.8	—	—	外）灰褐7.5YR5/2 断）灰褐7.5YR6/2	焼締め	たたら作りの後、手捏ね成形。外面布目。内外面ユビオサエ。	
779	SK6 4層	陶器	土瓶又は急須蓋	笠部径 6.6	—	かえり径 4.6	—	外）灰白5Y8/2 断）灰白2.5Y8/1	灰釉	内面とかえり無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	
780	SK6 3層	陶器	蓋（水注蓋か）	笠部径 6.0	2.8	かえり径 3.8	—	外）灰白5Y8/2 断）灰白N8/	白土・透明の釉	天井部に白土を施し透明の釉。内面とかえり無釉。かえりに手捏ねによる突起を貼付。	
781	SK6 4・5層	陶器	焜炉	—	—	11.6	—	外）灰黄2.5Y7/2・灰白N8/・緑灰 10GY6/1 断）灰白10YR8/1	灰釉・緑灰色の釉・錆釉	体部前方に窓をもつ。円形の三足を貼付。底部の数箇所に円孔。外面に灰釉を施し、灰白色～緑灰色の釉を流し掛けする。外底に錆釉を刷毛塗り。	瀬戸・美濃
782	SK6 3層	陶器	植木鉢か	10.1	—	—	—	外）暗赤褐5YR3/2 断）褐灰10Y4/1	外）飛鉋 鉄釉	外面に飛鉋を巡らす。内面無釉。暗赤褐色の釉。	能茶山窯 1820年代～19世紀後葉
783	SK6 2層	陶器	灯明受皿台付き	5.6	4.5	4.0	—	外）にぶい黄 2.5Y6/3 断）にぶい橙 5YR6/4	灰釉又は鉄釉	外底回転糸切り。外底無釉。釉は焼成不良でにぶい黄色に発色する。	能茶山窯 1820年代～19世紀後葉
784	SK6 1層	陶器	ひょうそく手付瓶形	4.0	10.6	—	—	外）黒10YR2/1 断）にぶい橙 5YR7/4	鉄釉	把手を貼付。瓶の上位に円孔あり。高台施釉。黒色の釉。	能茶山窯 1820年代～19世紀後葉
785	SK6 2層	軟質施釉陶器	ミニチュア	—	—	2.4	—	外）橙7.5YR6/6 断）にぶい橙 7.5YR7/4	外）橙色の低火度釉 内）白土・透明釉	外底回転糸切り。	能茶山窯 1820年代～19世紀後葉
786	SK6 4層	陶器	火入れ	13.3	11.0	13.4	—	外）黄褐2.5Y5/4 断）淡黄2.5Y8/3	灰釉・錆釉	内面無釉。黄褐色の釉。外底に錆釉を刷毛塗り。高台内に灰白色の砂目。	瀬戸・美濃 口縁端部に敲打痕。
787	SK6 3層	土師質土器	小皿白土器	10.8	2.1	6.4	—	灰白7.5YR8/2		無文。外面回転ケズリ。内面回転ナデ。外底回転ケズリ。	尾戸窯 内面全体にタール状の焦げ。
788	SK6 4層	土師質土器	小皿	10.4	1.7	7.0	—	にぶい橙7.5YR7/4		外面ナデ。外底不定方向のナデ。内底直線方向のナデ。	尾戸窯
789	SK6 4層	土師質土器	小皿	6.6	1,2	4.6	—	外）にぶい橙 7.5YR7/4 断）褐灰7.5YR5/1		内外面回転ナデ。外底ナデ。	
790	SK6 3層	土師質土器	焜炉筒形	—	—	21.2	—	外）にぶい赤褐 2.5YR5/4 断）にぶい黄橙 10YR7/3	外）赤彩	体部前方下位に窓をもつ。体部外面ナデ、内面ユビオサエ・回転ナデ。貼付高台。高台内外面ユビオサエ後回転ナデ。外底ナデ。外面赤彩。	
791	SK6 3層	土師質土器	焜炉筒形	—	—	22.0	—	外）赤10R5/6・にぶい橙7.5YR7/4 断）にぶい黄橙 10YR7/2	外）赤彩	体部前方下位に窓をもつ。輪高台を貼付。高台内外面ユビオサエ後回転ナデ。外底に圧痕。外面赤彩。	体部前方下位に刻印。輪繋ぎ文

Tab.29　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
792	SK6 4層	瓦質土器	焜炉箱形	—	—	—	—	外）暗灰N3/・灰黄褐10YR6/2 断）にぶい褐7.5YR6/3		体部前方下位に方形の窓をもつ。外面ナデ・ミガキ。内面縦方向のハケ。接合部ユビナデ。	
793	SK6 1・3層	土師質土器	焜炉筒形	—	—	13.7	—	灰白10YR8/2	白色系の胎土	体部前方下位に窓をもつ。内部施設は剥離する。内外面回転ナデ。外底回転ケズリ。外底に六角形の三足を貼付。	京都系
794	SK6 3層	土師質土器	焜炉筒形	16.2	—	—	—	外）灰白10YR8/1 断）橙2.5YR7/6	外）飛鉋 白土	体部に径1.5cmの円孔。内外面回転ナデ。内外面に白土を施す。	
795	SK6 2層	瓦質土器	火鉢半筒形	18.2	9.3	17.2	—	外）灰N4/ 断）灰白2.5Y8/1		体部外面網状の圧痕。内面回転ナデ。外底チヂレ目。三足を貼付。	
796	SK6 2層	施釉土器	ミニチュアか	—	—	2.4	—	外）灰白10YR8/2 断）浅黄橙10YR8/3	外）白土・透明の低火度釉	体部中位に円孔。内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内面と外面下位無釉。	
797	SK6 4層	土師質土器	人形	—	—	—	—	灰白10YR8/2	不明	型押し成形貼り合わせ。外面型作り後ナデ。内面ユビオサエ。内外面にキラ粉。	
798	SK6 3層	土師質土器	人形	—	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	人物	型押し成形貼り合わせ。内面ユビオサエ。	
799	SK6 3層	土師質土器	型	—	—	—	—	外）にぶい橙5YR7/4 断）橙5YR7/6	金魚か	外面ナデ。	
800	SK6 4層	土師質土器	泥面子	—	全厚0.6	径2.3	—	橙5YR7/6	「板垣」	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ユビオサエ・ナデ。	19世紀後葉（明治15年以降）
801	SK6 2層	土師質土器	泥面子	—	全厚0.6	径2.0	—	にぶい橙7.5YR7/3	「板垣」	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ナデ。	19世紀後葉（明治15年以降）
802	SK6 1層	土師質土器	泥面子	—	全厚0.9	径3.6	—	にぶい橙7.5YR7/4	「板垣」	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面と下面ナデ。	19世紀後葉（明治15年以降）
803	SK6 1層	土師質土器	泥面子	—	全厚0.7	径2.3	—	橙5YR7/6	「相原」	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ユビオサエ・ナデ。	19世紀後葉（明治15年以降）
804	SK6 4層	土師質土器	泥面子	—	全厚0.9	径2.3	—	橙5YR7/6	「相原」	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ナデ。	19世紀後葉（明治15年以降）
805	SK6 4層	土師質土器	泥面子	—	全厚0.7	径2.3	—	にぶい橙5YR7/4	「相原」	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ナデ。	19世紀後葉（明治15年以降）
806	SK6	土師質土器	泥面子	—	全厚0.8	径2.4	—	にぶい黄橙10YR7/3	「尾上」	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面と下面ナデ。	19世紀後葉
807	SK6 3層	土師質土器	泥面子	—	全厚0.6	径2.1	—	にぶい橙5YR6/4	「民」	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ナデ。	19世紀後葉
808	SK6 4層	土師質土器	泥面子	—	全厚0.7	径2.3	—	橙5YR6/6	「い」	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ユビオサエ・ナデ。	19世紀後葉
809	SK6 4層	土師質土器	泥面子	—	全厚0.6	径2.3	—	にぶい橙7.5YR7/4	「力」	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ユビオサエ・ナデ。	19世紀後葉
810	SK6 2層	土師質土器	泥面子	—	全厚0.7	径2.2	—	にぶい橙7.5YR7/4	「大」	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ナデ。	19世紀後葉
811	SK6 4層	土師質土器	泥面子	—	全厚0.7	径2.3	—	にぶい橙7.5YR7/3	「大」	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ナデ。	19世紀後葉
812	SK6 3層	土師質土器	泥面子	—	全厚0.6	径2.2	—	にぶい黄橙10YR7/3	不明	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ユビオサエ・ナデ。	19世紀後葉
813	SK6 4層	土師質土器	泥面子	—	全厚0.7	径2.3	—	にぶい黄橙10YR7/3	渡辺星	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ナデ。	19世紀後葉
814	SK6 3層	土師質土器	泥面子	—	全厚0.8	径2.3	—	橙5YR7/6	丸に十文字	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ナデ。	19世紀後葉
815	SK6 4層	土師質土器	泥面子	—	全厚0.6	径2.2	—	にぶい橙7.5YR7/4	九枚笹	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ナデ。	19世紀後葉
816	SK6 2層	土師質土器	泥面子	—	全厚0.7	径2.3	—	にぶい黄橙10YR7/3	五七の桐	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ナデ。	19世紀後葉

Tab.30　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
817	SK6 3層	土師質土器	泥面子	—	全厚 0.6	径 2.2	—	にぶい橙7.5YR7/4	桐	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ユビオサエ・ナデ。	19世紀後葉
818	SK6 2層	土師質土器	泥面子	—	全厚 0.5	径 2.2	—	にぶい黄橙10YR6/3	不明	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ナデ・チヂレ目。	19世紀後葉
819	SK6 2層	土師質土器	泥面子	—	全厚 0.6	径 2.3	—	にぶい橙7.5YR7/4	抱き沢潟	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ユビオサエ・ナデ。	19世紀後葉
820	SK6 4層	土師質土器	泥面子	—	全厚 0.7	径 2.3	—	にぶい橙5YR7/4	梅花	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ナデ。	19世紀後葉
821	SK6 3層	土師質土器	泥面子	—	全厚 0.7	径 2.2	—	橙5YR7/6	水に菊	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ナデ。	19世紀後葉
822	SK6 2層	土師質土器	泥面子	—	全厚 0.7	径 2.2	—	にぶい黄橙10YR6/3	梅花	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ナデ。	19世紀後葉
823	SK6 3層	土師質土器	泥面子	—	全厚 0.6	径 2.4	—	にぶい橙5YR6/4	不明	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ナデ。	19世紀後葉
824	SK6 2層	土師質土器	泥面子	—	全厚 0.6	径 2.2	—	にぶい橙7.5YR7/3	瓢箪	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ナデ。	19世紀後葉
825	SK6 3層	土師質土器	泥面子	—	全厚 0.6	径 2.2	—	橙7.5YR7/6	鳥	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ナデ。	19世紀後葉
826	SK6 1層	土師質土器	泥面子	—	全厚 0.6	径 2.3	—	にぶい橙7.5YR7/4	狐の面	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ナデ。	19世紀後葉
827	SK6 1層	土師質土器	泥面子	—	全厚 0.6	径 2.3	—	にぶい橙7.5YR7/4	人物の顔	型押成形。上面に型による陽刻文様。側面にチヂレ目。下面ユビオサエ・ナデ。	19世紀後葉
860	SK19	磁器染付	中碗丸形	10.6	4.9	4.6	—	外）灰白N8/ 断）灰白N8/	外）型紙刷りによる文様・菊花・丸に蝶 高台外）二重圏線 内）型紙刷りによる宝珠繋ぎ酸化コバルト		肥前産又は肥前系 19世紀後葉（明治10年代）
861	SK19・SK20	青磁染付	中碗丸形	11.5	4.1	3.8	—	外）明オリーブ灰2.5GY7/1 断）白	外）青磁釉 口縁内）二重圏線 内）松葉か 高台内）圏線・銘		19世紀中葉
862	SK19	磁器染付	小皿菊花形	12.6	3.2	7.6	—	外）灰白N8/ 断）白	内）型紙刷りによる草花文 酸化コバルト。口縁部にコバルト	内面型打成形による菊花。蛇ノ目凹形高台。	肥前産又は肥前系 19世紀後葉（明治10年代）
863	SK19下層・SK21	磁器染付	鉢	16.2	5.5	8.5	—	外）灰白10Y8/1 断）白	外）連続唐草文・圏線 高台外）二重圏線 内）波・唐草文 見込み）手描きによる五弁花文 高台内）圏線・「太明成化年製」	口縁部輪花形。	肥前産 17世紀末～18世紀か 二次被熱により釉は変質。
864	SK19下層	陶器	五寸皿	16.0	—	—	—	外）にぶい褐7.5YR5/3 断）にぶい褐7.5YR6/3	焼締め	口縁部外面回転ナデ。外面下半回転ケズリ。内面回転ナデ。	外面に煤。
865	SK19下層	瓦質土器	焜炉筒形	14.2	—	—	—	外）暗灰N3/・黄灰2.5Y4/1 断）黄灰2.5Y4/1・にぶい黄橙10YR7/2		体部中位に円孔。口縁部外面ミガキ。体部外面粒状の圧痕。内面ユビオサエ・ヨコナデ。	
866	SK19下層	瓦質土器	焜炉筒形	—	—	16.6	—	外）黄灰2.5Y6/1 断）黄灰2.5Y5/1・にぶい黄橙10YR7/2		外面に粒状の圧痕。外底に凹凸。内面回転ナデ。三足を貼付。	
869	SK23	瓦質土器又は陶器	不明	—	—	13.1	—	外）灰N6/ 断）灰白10YR7/1・灰N6/	外面ナデ。外底に圧痕。内底ユビオサエ・ナデ。		
870	SK24	磁器染付	急須	7.6	6.8	6.7	10.5	外）白 断）白	外）雲龍文	把手は不明。内面施釉。外底無釉。呉須は淡い青色。	
871	SK21	磁器染付	大皿	39.1	5.8	20.9	—	外）灰白10YR8/1 断）白	外）唐草文・圏線 内）花唐草文・帯線に半菊文・松竹梅円形文 高台内）圏線	高台内にハリ支え痕。	肥前産 19世紀前半～中葉
872	SK21	青磁	鉢変形形	15.2	5.3	5.7	—	外）明緑灰10GY7/1 断）白	内）型による陽刻の宝文・雲 青磁釉	型作り。高台は八角形。	

Tab.31　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
873	SK21	磁器 色絵 染付	大皿 変形形	32.3	6.6	17.0	—	外）白 断）白	外）赤・金の上絵付による龍・宝珠・瓔珞文 内）呉須、赤・緑・金の上絵付による草花文・宝文・窓に花弁・雷文 口縁端部）金彩	蚫形。貼付高台。	肥前産
874	SK21	磁器 染付	中碗 端反形	10.8	—	—	—	外）白 断）白	外）区画間に縞・不明文様 口縁内）帯に略化した不明文様。 見込み）圏線 酸化コバルト		肥前系 19世紀後葉
875	SK21	磁器 染付	大皿 変形形	約29.9	5.1	16.7	—	外）白 断）白	外）菊文・圏線 高台外）二重圏線 内）草花文 高台内）圏線・「玩山」 酸化コバルト・緑釉	型打ち成形。方形。部分的に緑釉を施す。高台内にハリ支え痕。	肥前産又は肥前系 19世紀後葉
876	SK21	磁器 染付	中皿 八角形	約17.8	—	—	—	外）灰白10Y8/1 断）白	外）不明 内）宝珠繋ぎ・不明 酸化コバルト		肥前系 19世紀後葉
877	SK21	磁器 染付	鉢	20.8	7.6	12.4	—	外）白 断）白	外）区画間に雲龍文・花弁文 高台外）二重圏線 内）花文・四方襷 酸化コバルト	口縁部輪花形。蛇ノ目凹形高台。高台内蛇ノ目釉剥ぎ。畳付施釉。	肥前系 19世紀後葉
878	SK21	磁器 染付	火鉢 筒形	19.0	19.1	18.0	—	外）灰白5Y8/1 断）灰白5Y8/1	外）草花文 口縁端部）帯線 酸化コバルト	内面無釉。高台内無釉。畳付施釉。	肥前系 19世紀後葉
879	SK21	陶器	鉢	—	—	7.5	—	外）黒褐7.5YR3/2 内）黒褐7.5YR3/1 断）黄灰2.5Y6/1	鉄釉	高台無釉。黒褐色の釉。内底に目痕。	能茶山窯 1820年代～19世紀後葉
880	SK21	陶器	擂鉢	—	—	8.1	—	外）黒N2/ 内）灰黄褐10YR6/2 断）褐灰10YR5/1	外）鉄釉	内面は内底まで櫛目。内面と高台無釉。黒色の釉。	能茶山窯 19世紀後葉
881	SK21	陶器	小皿	10.4	—	—	—	内）灰白10YR8/1 断）灰白10YR8/2	灰釉	外面無釉。釉は焼成不良で白濁。	肥前産 1590～1630年代
882	SK21	陶器	擂鉢	36.8	—	—	—	外）黒褐5YR3/1 断）にぶい橙5YR6/4	外）鉄釉	外面回転ナデ。口縁部内面櫛目後回転ナデ。内面櫛目。内面無釉。黒褐色の釉。	能茶山窯 19世紀後葉
883	SK21	陶器	鍋	18.4	—	—	—	外）灰白2.5Y8/1 内）暗赤褐5YR3/2 断）褐灰10YR6/1	外）灰白色の釉 内）鉄釉	双耳を貼付。内面ロクロ目。内面施釉。受部無釉。内面暗赤褐色の釉。	能茶山窯か 19世紀後葉
884	SK21	陶器	土瓶	11.4	—	—	15.7	外）にぶい橙7.5YR6/4・灰5Y6/1 断）にぶい橙7.5YR7/4	外）鉄絵による宝文 灰釉	紐状の把手を貼付。外面に多段の凹線。受部に白土を施す。外面下位と内面無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	
885	SK21	陶器	水注類	—	—	—	—	外）灰白10Y7/1 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	桶状の把手を貼付。灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	
886	SK21	陶器	甕	26.6	—	—	—	外）暗赤褐5YR3/3 断）褐灰10YR6/1	鉄釉	内面施釉。暗赤褐色の釉。肩部に黒色の釉を流し掛け。	能茶山窯 1820年代～19世紀後葉
887	SK21	陶器	火鉢又は焜炉	—	—	23.0	—	外）灰白10YR7/1・灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	輪高台。高台に径0.4cmの円孔。内面無釉。釉は焼成不良で白濁。	
888	SK21	土師質 土器	小皿 白土器	11.6	1.9	8.6	—	灰白2.5Y8/1	内）型による高砂文	内底型による陽刻文様。口縁部外面と内面周縁回転ナデ。外面回転ケズリ。	尾戸窯
889	SK21	土師質 土器	焜炉 筒形	—	—	12.1	—	灰白2.5Y8/1	白色系の胎土	内外面回転ナデ。外底回転ケズリ。外底に型作りによる五角形の三足を貼付。	京都系
890	SK21	瓦質 土器	焜炉 筒形	15.3	—	—	—	外）褐灰10YR4/1 内）にぶい褐7.5YR6/3 断）にぶい橙7.5YR7/3	外）型による陽刻文様	内部施設をもつ。口縁部内面に手捏ねによる受けを貼付。口縁部外面ナデ・ミガキ。	
892	SK38	陶器	土瓶蓋	笠部径9.5	3.0	かえり径6.2	摘み径1.6	外）暗赤褐2.5YR3/2 内）灰赤10R4/2 断）灰N5/	鉄釉	外面回転ケズリ。内面回転ナデ。内面とかえり無釉。暗赤褐色の釉。	能茶山窯か 1820年代～19世紀後葉
893	SK38	陶器	灯明 受皿	10.5	1.8	4.5	受部径6.2	外）浅黄橙7.5YR8/4 内）にぶい橙7.5YR7/4 断）浅黄橙7.5YR8/4	灰釉	外面と外底回転ケズリ。内面回転ナデ。外面と受部端部無釉。浅黄橙色を帯びる透明の釉。	
895	SD6	陶器	大皿	40.0	—	—	—	外）緑 断）にぶい橙5YR6/3	白化粧土・緑釉	二彩手か。白化粧の後緑釉を流し掛け。	肥前産

Tab.32　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
896	SX1 上層	磁器 染付	中碗 端反形	11.4	—	—	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白5Y7/1	外）多重圏線・唐草文 口縁内）二重圏線 見込み）圏線 酸化コバルト	見込み蛇ノ目釉剥ぎ。	肥前系 19世紀後葉
897	SX1 上層	磁器 染付	鉢	16.4	—	—	—	外）白 断）白	外）蔓草 内）区画間に唐草文・菊花		肥前産
898	SX1 上層	磁器 色絵 染付	小杯 端反形	6.8	3.5	2.4	—	外）灰白N8/ 断）白	見込み）圏線・「酒」・金の上絵付による文字	透明釉は部分的に白濁。	肥前産又は肥前系
899	SX1 上層	磁器 色絵	小碗	6.7	4.8	3.5	—	外）白 断）白	口縁外）赤の上絵付による帯線 外）黒・青・その他の上絵付による松・植物 高台内）赤による「九谷」銘		高台内に「九谷」銘。
900	SX1 上層	磁器 染付	小皿 丸形	11.3	2.4	6.0	—	外）白 断）白	外）圏線・二重圏線 口縁内）圏線 高台内）圏線・角枠内銘	胎土断面は透明感をもつ。	関西系
901	SX1 上層	磁器 染付	蓋物蓋	笠部径 8.2	1.6	かえり径 6.9	—	外）白 断）白	外）花卉	天井部周縁に錆釉。内面施釉。かえり無釉。	肥前産又は肥前系
902	SX1 上層	磁器 染付	蓋物 半筒形	10.8	5.3	9.6	—	外）灰白5Y7/1 断）白	外）唐草文・略化した蓮弁文	内面施釉。口縁端部無釉。	
903	SX1 上層	白磁又は染付	鉢 丸形	20.0	8.4	12.6	—	外）白 断）白			肥前産又は肥前系
904	SX1	磁器 染付	水滴	—	—	—	—	外）白 断）白	牛	型押成形左右貼り合わせ。口の先端に円孔あり。内面ユビオサエ。内面無釉。	肥前産
905	SX1 上層	磁器 染付	中碗	—	—	5.2	—	外）灰白N8/ 断）灰白N8/	外）圏線・不明 高台外）二重圏線 見込み）圏線・略化した海浜風景文 酸化コバルト	蛇ノ目凹形高台。	肥前系又は鹿児窯 19世紀後葉
906	SX1 上層	磁器 染付	小碗 筒丸形	6.0	5.5	4.3	—	外）白 断）白	外）花卉文 高台外）二重圏線 口縁内）四方襷文		肥前産 1820～1860年代
907	SX1 下層	磁器 染付	小瓶	—	—	3.2	4.5	外）灰白5Y8/1 断）灰白N8/	外）草文か・圏線 高台外）圏線 酸化コバルト	内面ロクロ目。内面無釉。	肥前系 19世紀後葉
908	SX1 上層	磁器 染付	鉢	24.0	—	—	—	外）灰白N8/ 断）白	外）花卉 内）花文・四方襷 酸化コバルト	口縁部緩やかな輪花形。	肥前系 19世紀後葉
909	SX1	陶器	盃台か	—	—	5.3	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白10YR7/1	内）黒象嵌による花唐草文	灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
910	SX1	陶器	碗又は皿	—	—	5.5	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰白10YR8/2	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。目痕5足。	尾戸窯
911	SX1 上層	軟質施釉陶器	土瓶	8.4	—	—	—	外）明赤褐5YR5/8 断）橙5YR7/6	橙色の低火度釉	内外面回転ナデ。内面と端部無釉。	
912	SX1 下層	陶器	土瓶	11.1	12.3	11.0	15.2	外）灰褐7.5YR5/2 断）灰褐7.5YR5/2	焼締め	手捏ね成形。外面上半を手捏ねで亀甲状に成形。内外面ユビオサエ。外底布目。	外底と外面下位に煤。
913	SX1 下層	陶器	擂鉢	—	—	21.0	—	外）にぶい赤褐2.5YR4/4 断）にぶい赤褐5YR5/3	焼締め	輪高台を貼付。高台外面ヨコナデ。外底ナデ。内面櫛目。	備前 18～19世紀
914	SX1	陶器	捏鉢	22.2	—	—	—	外）暗赤褐5YR3/3 断）黄灰2.5Y4/1	鉄釉	内面ロクロ目。暗赤褐色の釉。	能茶山窯 1820年代～19世紀後葉
915	SX1 上層	陶器	水指か	15.0	—	—	18.9	外）灰白2.5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1	外）呉須と鉄絵による蝶 灰釉	内外面ロクロ目。内面無釉。灰白色を帯びる透明の釉。	尾戸窯
916	SX1 下層	陶器	蓋物蓋か	—	—	—	—	外）灰N5/ 断）灰N6/	鳥 焼締め	外面型による陽刻文様。羽は細かな線彫りで描く。内面ユビオサエ・ナデ。	
917	SX1 下層	陶器	蓋物 半筒形	10.0	5.3	7.0	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	内面ロクロ目。内面施釉。外底と口縁端部無釉。淡黄色を帯びる透明の釉。	
918	SX1 下層	陶器	灯明 受皿	9.8	—	—	受部径 6.5	外）にぶい赤褐2.5YR4/3 断）にぶい赤褐2.5YR5/3	錆釉	外面上位と内面回転ナデ。外面下位回転削り。外面に錆釉。	備前
919	SX1 上層	陶器	灯明 受皿	10.8	1.8	3.5	受部径 7.6	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y8/1	灰釉	受部に抉りあり。外面上位と内面回転ナデ。外面下位と外底回転削り。外面無釉。灰黄色を帯びる透明の釉。	京都・信楽系

Tab.33　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
920	SX1 上層	陶器	甕	27.0	—	—	32.5	外）灰白5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	外）ヘラ彫りによる縦筋 灰釉・青色の釉	内面緩やかなロクロ目。内面施釉。透明の釉。外面上位に青色の釉を流し掛け。	
921	SX1 上層	陶器	植木鉢	11.0	13.2	7.2	—	外）暗赤褐2.5YR3/2 断）にぶい赤褐2.5YR5/4	外）ヘラ彫りによる圏線と波状文 鉄釉	高台の3箇所にアーチ状の抉り。底部に径1.3cmの円孔。外面に鉄釉を刷毛塗りの後圏線と波状文を巡らす。内面無釉。	能茶山窯か 1820年代～19世紀後葉
922	SX1 下層	土師質土器	杯又は皿	13.2	3.4	6.5	—	にぶい黄橙10YR7/3		内外面ナデ。外底ナデと直線方向の圧痕。	
923	SX1 下層	土師質土器	小皿	10.1	3.0	5.5	—	にぶい黄橙10YR7/3		外面ナデ。内面ユビオサエ・ナデ。外底ナデと直線方向の圧痕。	
924	SX1 上層	土師質土器	焙烙	32.4	—	—	—	外）にぶい橙7.5YR6/4 断）橙5YR6/6	胎土中に金雲母を含む。	口縁部内外面回転ナデ。外底に凹凸。内底回転ナデ。	関西産
933	SX13	陶器	土管	—	厚さ1.2	—	—	外）赤褐10R4/3 断）赤10R5/6	外）鉄釉	外面ナデ。内面に圧痕。内面に砂が付着。外面に赤褐色の釉。	能茶山窯か 1820年代～19世紀後葉

Tab.34　遺物観察表（石製品・金属製品・ガラス製品・古銭）

図版番号	出土地点	種類	器種	法量（cm）			重量（g）	色調	特徴・使用痕他
				全長	全厚	全幅			
141	SK3 床	石製品	石臼	—	7.6	径約28.0	［2900.0］	灰白2.5Y7/1	砂岩製。上臼。側面に方形の孔あり。
238	SK5 下層	銅製品	煙管吸口	6.4	—	吸口径0.5	4.2	—	ラウ接合部は変形する。
239	SK5 下層	ガラス製品	簪か	［9.0］	—	径0.4	［6.0］	灰白10Y7/2	断面四角形。先端は尖らせる。灰白色を帯びる半透明。
299	SK7 上層	銅製品	簪	［4.3］	—	—	［1.7］	—	
300	SK7 2層	銅製品	板状製品	［5.6］	0.1	0.9	［1.8］	—	
301	SK7 上層	石製品	不明	2.8	0.5	0.5	0.9	黄灰2.5Y6/1	滑石製。用途不明の棒状製品。欠損の後転用か。両先端を尖らせる。
364	SE1	石製品	砥石	［7.3］	2.8	4.5	［154.1］	黄灰2.5Y5/1	砂岩製。4面に砥石としての使用痕あり。
495	SD3 中層	銅製品	煙管吸口	6.9	ラウ接合部径1.1	吸口径0.5	4.0	—	
496	SD3 上層	銅製品	釣針	5.8	0.5	0.5	6.4	—	断面円形。
497	SD3 上層	鉄製品	蓋	径15.9	0.5	摘み径1.8	［352.0］	—	紐状の摘みをもつ。
684	Ⅰ～Ⅲ層	古銭	寛永通宝	銭径2.2	厚さ0.1	孔径0.6	1.7	—	
828	SK6 4層	銅製品	煙管雁首	［4.4］	ラウ接合部径0.9	—	［5.7］	—	火皿は欠損する。
829	SK6 2層	銅製品	煙管吸口	5.7	ラウ接合部径0.8	吸口径0.6	5.2	—	側面に宝珠他の陰刻文様。ラウが残存する。
830	SK6 4層	銅製品	匙	8.4	0.4	0.4	5.2	—	断面四角形。
831	SK6 3層	銅製品	匙	8.5	0.4	0.4	5.0	—	断面四角形。
832	SK6	銅製品	簪か	7.0	0.3	0.4	4.9	—	球状の頭部をもつ。断面円形。
833	SK6 2層	銅製品	雁首銭	径1.8	厚さ0.2	—	1.4	—	煙管火皿を転用。
834	SK6 3層	石製品	棒状製品	［2.6］	0.6	0.6	［1.8］	灰白5Y7/1	先端部を尖らせる。
835	SK6 1層	石製品	板状製品	［14.0］	0.4	—	［92.1］	灰N4/	粘板岩製。片面の周縁に面取りを施す。
836	SK6 上層	石製品	硯	［11.1］	3.5	6.9	［341.0］	灰白10YR8/2	凝灰岩製。陸部は使用により窪む。背面に砥石としての使用痕あり。
859	SK18	銅製品	板状製品	91.8	0.2	30.7	3300.0	—	径0.5㎜の円孔を2箇所穿ち，銅製の紐を通す。紐の先端は把手状にする。
894	SK38	石製品	簪か	［8.9］	0.9	1.0	［16.3］	浅黄2.5Y7/3	断面楕円形。先端を面取り尖らせる。
925	SX1 上層	石製品	碁石	径2.2	厚さ0.4	—	3.0	暗灰N6/	粘板岩製。
926	SX1 上層	ガラス製品	瓶	［1.9］	—	—	［64.9］	オリーブ灰10Y5/2	オリーブ灰色を帯びる透明のガラス。

※法量・重量とも［　］は残存分。金属製品で錆がみられるものも［　］表記した。

Tab.35　遺物観察表（木製品）

図版番号	出土地点	種類・器種・部位	法量（cm）				特徴・使用痕他
			全長 口径	全厚 器高	全幅 底径		
337	SK37	漆器 櫛	［5.7］	1.2	4.1	—	外面に黒漆。背は湾曲する。
498	SD3	漆器 椀	12.8	8.9	7.0	—	内外面に黒漆。外面に赤蒔絵による文様。
499	SD3 下層	漆器 椀	14.1	—	—	—	内外面に黒漆。無文。
500	SD3 上層	漆器 椀	歪みあり	10.0	6.2	—	内外面に黒漆。高台外面に回転ケズリ痕が残る。高台内に「大」の彫り。体部歪みあり。
501	SD3 上層	漆器 椀	—	—	—	—	外面に黒漆。内面に赤漆。外面の三方に赤蒔絵による蕪・俵。
502	SD3 上層	漆器 椀	—	—	6.4	—	内外面に黒漆。高台内外面に回転ケズリ痕が残る。
503	SD3 上層	漆器 椀	—	7.6	6.0	—	内外面に黒漆。外面に赤蒔絵による草花文。
504	SD3 中層	漆器 椀	12.3	6.1	6.0	—	内外面に黒漆。外面の三方に赤蒔絵による文様。
505	SD3	漆器 椀	—	—	—	—	内外面に黒漆。外面に赤蒔絵による文様。
506	SD3 上層	漆器 椀	—	—	6.2	—	外面に黒漆。内面に赤漆。外面の三方に赤蒔絵による文様。
507	SD3 上層	漆器 椀	14.8	—	—	—	外面に黒漆。内面に赤漆。外面に赤蒔絵による鶴。
508	SD3 上層	漆器 椀	—	—	5.9	—	外面に黒漆。内面に赤漆。外面に赤蒔絵による丸文か。
509	SD3 中層	漆器 椀	13.0	—	—	—	外面に黒漆。内面に赤漆。外面下位に回転ケズリ痕が残る。体部は歪む。
510	SD3 上層	漆器 椀	—	—	—	—	外面に黒漆。内面に赤漆。無文。体部歪みあり。
511	SD3 上層	漆器 椀蓋	—	—	—	—	外面に黒漆。内面の漆は剥離する。
512	SD3 上層	漆器 椀蓋	—	—	—	—	内外面に黒漆。外面に赤蒔絵による俵。
513	SD3 上層	漆器 椀蓋	—	—	—	—	外面に黒漆。内面に赤漆。外面に赤蒔絵による俵。
514	SD3 上層	漆器 椀蓋	笠部径 12.2	—	—	—	内外面に黒漆。
515	SD3 上層	漆器 蓋物	—	—	—	—	蓋物の身。端部に段をもつ。内外面に黒漆。文様の有無は不明。
516	SD3	漆器 蓋物蓋	9.8	1.0	6.8	—	楕円形。削り出しにより内面を窪ませる。外面に黒漆。内面の漆は剥離する。
517	SD3 最下層	漆器 不明	20.0	0.6	4.7	—	外面に黒漆。内面の漆は剥離する。両端に切り込みと釘穴。片側面に山状の抉りと釘穴。木釘が残存する。
518	SD3 上層	漆器 不明	—	0.7	—	—	内外面に黒漆。曲線的に抉り込みを入れる。
519	SD3 上層	漆器 曲物か	径 約 23.8	0.6	—	—	内面に黒漆。曲物の底板か。3 枚の板を組み合わせる。
520	SD3 上層	漆器 不明	22.7	6.3	5.4	—	調度具の脚部か。外面に黒漆。上部と片側面に方形の差し込み穴をもつ。
521	SD3 中層	盤か	29.3	0.6	［8.9］	底部厚 0.6	隅丸方形。上面の周縁に側板を貼り、木の皮紐で固定させる。周縁の数箇所に棒状の差し込み穴。外底に擦痕あり。
522	SD3 中層	不明 底板	［20.4］	0.7	［8.0］	—	周縁に木釘が残存する。
523	SD3	篦状製品	27.9	0.5	［4.3］	—	先端付近を薄く削り出す。
524	SD3	篦状製品	16.8	0.3	2.3	—	先端付近を薄く削り出す。
525	SD3 上層	篦状製品	15.9	0.4	3.5	—	先端付近を薄く削り出す。
526	SD3 中層	篦状製品	［15.7］	0.4	2.0	—	先端部分を薄く削り出す。柄の先端を尖らせる。
527	SD3 上層	篦状製品	7.8	0.2	1.8	—	先端を尖らせ薄く削り出す。
528	SD3 上層	篦状製品	［11.2］	0.3	2.3	—	先端部分を薄く削り出す。
529	SD3 上層	篦状製品	33.5	0.3	4.5	—	
530	SD3 上層	篦状製品	［31.0］	0.3	4.5	—	
531	SD3 上層	篦状製品	［15.5］	0.4	4.5	—	先端付近を薄く削り出す。先端付近に円孔あり。柄は欠損する。
532	SD3 上層	篦状製品	［17.3］	0.5	2.2	—	先端部分を薄く削り出す。
533	SD3 上層	篦状製品	16.7	0.5	1.7	—	先端を細く削り出す。
534	SD3 下層	箸	［25.5］	1.0	1.1	—	断面四角形。側面に面取りを施す。
535	SD3 上層	箸	［17.3］	1.0	1.2	—	断面不整形。側面に面取りを施す。
536	SD3 上層	箸	28.7	0.7	0.9	—	断面円形。側面に面取りを施し、先端は細く削り出す。
537	SD3 上層	箸	39.4	0.6	0.7	—	断面四角形。側面に面取りを施し、両先端は細く削り出す。
538	SD3 上層	箸	26.2	0.6	0.6	—	断面不整形。側面に面取りを施し、先端は細く削り出す。
539	SD3 中層	箸	25.7	0.5	0.6	—	断面多角形。側面に面取りを施し、両先端は細く削り出す。
540	SD3 下層	箸	25.4	0.6	0.8	—	断面不整形。側面に面取りを施し、先端は細く削り出す。
541	SD3 上層	箸	26.7	0.5	0.7	—	断面不整形。側面に面取りを施し、両先端は細く削り出す。
542	SD3 下層	箸	26.2	0.7	0.8	—	断面多角形。側面に面取りを施し、両先端を斜めに削り出す。
543	SD3 上層	箸	25.7	0.7	0.8	—	断面不整形。側面に面取りを施し、両先端は細く削り出す。
544	SD3 上層	箸	27.0	0.7	0.9	—	断面不整形。側面に面取りを施し、両先端は細く削り出す。
545	SD3 上層	箸	26.9	0.7	0.7	—	断面不整形。側面に面取りを施し、両先端は細く削り出す。
546	SD3 中層	箸	25.4	0.6	0.7	—	断面不整形。側面に面取りを施し、先端は細く削り出す。
547	SD3 下層	箸	28.2	0.4	0.8	—	断面扁平な多角形。側面に面取りを施し、先端は細く削り出す。
548	SD3 中層	箸	29.3	0.8	1.0	—	断面不整形。側面に面取りを施し、先端は細く削り出す。
549	SD3 中層	箸	27.5	0.6	0.7	—	断面不整形。側面に面取りを施す。
550	SD3 中層	箸	27.1	0.7	0.8	—	断面不整形。側面に面取りを施し、両先端は細く削り出す。
551	SD3 上層	箸	27.7	0.8	0.9	—	断面不整形。側面に面取りを施し、先端はやや細く削り出す。

Tab.36　遺物観察表（木製品）

図版番号	出土地点	種類・器種・部位	法量（cm）				特徴・使用痕他
			全長 口径	全厚 器高	全幅 底径		
552	SD3 下層	箸	27.6	0.7	0.8	—	断面不整形。側面に面取りを施し、先端は細く削り出す。
553	SD3 中層	箸	26.9	0.4	0.7	—	断面不整形。側面に面取りを施し、両先端は細く削り出す。
554	SD3 上層	箸	30.2	0.9	1.0	—	断面多角形。側面に面取りを施し、先端は細く削り出す。
555	SD3 上層	箸	29.8	0.7	0.8	—	断面不整形。側面に面取りを施し、両先端は細く削り出す。
556	SD3 中層	不明 底板	28.4	0.4	[6.7]	—	数枚貼り合わせの底板の一部。周縁の2箇所に棒状の穴を穿ち、木皮の紐を通す。
557	SD3 中層	板状製品	28.9	0.5	[10.2]	—	用途不明の板状製品。
558	SD3 上層	不明 底板	[27.5]	0.7	[9.8]	—	数枚貼り合わせの底板の一部。隅丸方形の底の周縁に木の皮紐が残る。
559	SD3	不明 底板	30.7	0.5	[8.4]	—	数枚貼り合わせの底板の一部。
560	SD3 上層	曲物 底板	径 11.9	0.6	—	—	曲物の底板。一枚板を円形に削り出す。
561	SD3 上層	曲物 底板又は蓋	復元径 12.0	0.6	—	—	
562	SD3 上層	曲物 底板又は蓋	径 8.8	0.6	—	—	円形。
563	SD3 上層	不明 底板又は蓋	径 10.6	0.6	—	—	
564	SD3	曲物	—	0.2	4.2	—	曲物の側板。下部に釘穴。側面に紐孔。
565	SD3 中層	桶か	[12.5]	1.1	[6.4]	—	手桶の側板の柄か。径1.5cmの円孔あり。被熱する。
566	SD3 上層	桶 底板	復元径 36.0	2.0	—	—	複数の板を組み合わせる。板の接合部の2箇所に釘穴あり。
567	SD3 下層	桶 底板	径 31.8	1.1	—	—	複数の板を組み合わせる。板の接合部の2箇所に、板状の木釘の差し込み穴とみられる棒状の穴あり。
568	SD3 上層	栓か	14.3	1.7	1.9	—	上部断面隅丸方形。下部断面円形。
569	SD3 上層	栓か	3.9	1.4	1.9	—	円錐形。
570	SD3 上層	桶 側板	17.5	1.3	9.4	—	外面の上位と下位にタガ痕が残る。内面下位に底板の圧痕。両側面の上位に木釘穴とみられる細い長方形の穴あり。
571	SD3 上層	桶 側板	21.5	0.8	4.7	—	桶の側板。内面の上端と下端に面取り。内面の下位に底板をはめ込んだとみられる切り込みあり。底板との接合部に釘穴。
572	SD3 中層	不明 側板か	[11.1]	0.4	3.4	—	製品の側板か。上部を薄く削り出す。内面下部に深さ2mmの切り込みあり。上部と下部の数箇所に貫通する細い棒状の穴を穿ち、一部に幅3mmの木皮の紐が残る。
573	SD3 中層	桶 側板	11.5	0.8	3.6	—	桶の側板。外面の上下にタガの圧痕。内面の下位に底板の圧痕。
574	SD3 中層	桶 側板	27.6	1.0	3.0	—	桶の側板。
575	SD3 上層	桶 側板	27.7	1.1	2.5	—	内面下端に底板の圧痕。
576	SD3 下層	桶 側板	27.2	1.0	2.5	—	桶の側板。外面の下位にタガの圧痕。
577	SD3	羽子板か	[23.5]	1.3	10.0	—	柄を欠損する。
578	SD3 上層	木刀	[21.0]	1.1	2.4	—	鍔を組み合わせる。刃部を薄く削り出す。
579-ab	SD3 上層	櫛	[8.1]	1.2	3.4	—	背は湾曲する。歯は断面三角形。
580	SD3 上層	不明	[9.8]	0.8	2.0	—	両面に面取りを施し、先端を尖らせる。柄は欠損する。
581	SD3 上層	木刀 鍔	4.1	0.6	4.3	—	八角形。
582	SD3 下層	独楽	最大径 4.6	[7.1]	—	—	丸木を削り出して先端部を尖らせる。先端に鉄製の心棒が残る。上部は欠損する。
583	SD3 上層	独楽	最大径 4.7	[5.6]	—	—	丸木を削り出して先端部を尖らせる。鉄製の心棒が残存する。
584	SD3 上層	独楽	最大径 2.9	[4.6]	—	—	丸木を削り出して先端部を尖らせる。先端に鉄製の心棒が残存する。上部は欠損する。
585	SD3 中層	独楽	最大径 3.8	[3.8]	—	—	丸木を削り出して先端部を尖らせる。心棒は欠損する。
586	SD3 上層	不明	径 4.4	0.9	—	—	円盤状製品。中央に径0.6cmの円孔を穿つ。
587	SD3 上層	受け台		4.5	10.6	—	灯明受皿の受け台。アーチ状に削り出した2枚の板を十文字に組み合わせる。
588	SD3 上層	不明	28.7	1.3	—	—	調度具の部品か。周縁に面取りを施す。円孔17個。接合部に釘が残存する。
589	SD3 上層	不明	20.3	1.3	2.6	—	中央に径1.5cmの円孔あり。両先端を双方から面取り径2mmの円孔を穿つ。
590	SD3	板状製品	12.1	0.6	2.9	—	径2.5×2.2cmの円孔あり。
591	SD3	板状製品	14.7	1.3	5.1	—	3箇所に釘穴。木釘が残存する。
592	SD3 中層	板状製品	14.3	1.3	[10.4]	—	径1.2cmの円孔あり。
593	SD3 中層	不明	[5.8]	0.7	16.0	—	周縁と下部を曲線的に削り出す。釘穴あり。
594	SD3 中層	不明	[16.5]	2.0	15.9	—	用途不明木製品の台部か。上部の2箇所に釘穴あり。鉄釘が残存する。外面下端に面取りを施す。
595	SD3 中層	板状製品	40.6	1.1	2.8	—	下位の2箇所に釘穴。
596	SD3 下層	板状製品	21.2	0.7	1.6	—	両端に切り込みと釘穴。

Tab.37　遺物観察表（木製品）

図版番号	出土地点	種類・器種・部位	法量（cm）				特徴・使用痕他
			全長 口径	全厚 器高	全幅 底径		
597	SD3 上層	板状製品	［11.5］	0.8	1.4	—	先端に抉りあり。数箇所に釘穴。
598	SD3 中層	板状製品	10.1	0.5	1.1	—	7 箇所に釘穴とみられる径 2㎜の円孔。
599	SD3	板状製品	［16.3］	0.4	［2.9］	—	両端を曲線的に削り出す。
600	SD3 上層	板状製品	12.0	0.4	1.6	—	先端部を尖らせる。
601	SD3	不明	17.1	3.0	4.3	—	箱状の板材を斜めに削り出す。
602	SD3 中層	棒状製品	25.8	1.2	1.8	—	断面四角形。両先端に釘穴が穿たれ鉄釘が残存する。
603	SD3 中層	縄紐	［24.5］	—	—	—	棕櫚縄。
604	SD3 最下層	棒状製品	［46.9］	5.4	6.4	—	断面四角形。一側面に鋸引き痕とみられる斜方向の加工痕が残る。
605	SD3 中層	杭	［30.0］	—	径 3.0	—	丸木を使用する。尖端部を四方から面取り尖らせる。
606	SD3	杭	［29.2］	—	径 3.3	—	丸木を使用する。尖端部を四方から面取り尖らせる。
607	SD3	下駄	14.0	4.3	6.0	台部厚 1.0	子供用の下駄。連歯下駄。丸形。台部の断面は板状。歯は削り出しにより、前後の厚み約 2.5cm、接地面の幅 6.6cm。鼻緒の穴は径 5㎜。
608	SD3 上層	下駄	［13.3］	—	5.7	台部厚 0.9	子供用の下駄。連歯下駄。丸形。台部の断面は板状。歯は摩耗する。鼻緒の穴は径 1cm。
609	SD3 上層	下駄	17.2	2.5	7.5	台部厚 1.4	連歯下駄。丸形。台部の断面は板状。歯は削り出しにより、前後の厚み 2.6cm、接地面の幅 7.7cm。鼻緒の穴は径 7㎜。歯の接地面は使用により摩耗する。台部上面に釘彫り。
610	SD3 中層	下駄	20.9	3.8	8.8	台部厚 1.0	連歯下駄。丸形。台部の断面は板状。歯は削り出しにより、前後の厚み 3.1cm、接地面の幅 9.7cm。鼻緒の穴は径 7㎜。歯の接地面は使用により摩耗する。台部上面に釘彫り。
611	SD3 上層	下駄	20.9	3.5	8.8	台部厚 1.0	連歯下駄。丸形。台部の断面は板状。歯は削り出しにより、前後の厚み 3.0cm、接地面の幅 9.0cm。鼻緒の穴は径 7㎜。歯の接地面は使用により摩耗する。台部上面に釘彫り。
612	SD3 上層	下駄	［12.4］	—	9.0	台部厚 1.2	連歯下駄。丸形。台部の断面は板状。歯は削り出しにより、前後の厚み 3.2cm、接地面の幅 8.5cm。鼻緒の穴は径 7㎜。台部断面に補強痕とみられる鉄釘が残る。歯の接地面は使用により摩耗する。
613	SD3 上層	下駄	20.9	1.7	8.9	台部厚 1.2	連歯下駄。丸形。台部の断面は板状。歯は削り出しによる。鼻緒の穴は径 8㎜。歯の接地面は使用により著しく摩耗する。
614	SD3 上層	下駄	21.3	—	8.4	台部厚 1.7	連歯下駄。丸形。台部の断面は板状。歯は削り出しにより、欠損。鼻緒の穴は径 1cm。
615	SD3 上層	下駄	20.6	—	9.6	台部厚 1.5	連歯下駄。丸形。台部の断面は板状。歯は削り出しによる。鼻緒の穴は径 1～1.4cm。歯は欠損し、台部に補強したとみられる釘が残る。
616	SD3 上層	下駄	20.8	3.0	［6.2］	台部厚 1.3	連歯下駄。丸形。台部の断面は板状。歯は削り出しにより、前後の厚み 3.4cm。鼻緒の穴は径 8㎜。歯の接地面は使用により摩耗する。
617	SD3 上層	下駄	21.7	6.0	10.0	台部厚 1.2	連歯下駄。角形。台部の断面は板状。歯は削り出しにより、前後の厚み 2.5cm、接地面の幅 9.8cm。鼻緒の穴は径 8㎜。
618	SD3	下駄	22.0	5.9	10.4	台部厚 1.5	連歯下駄。角形。台部の断面は板状。歯は削り出しにより、前後の厚み 2.8cm、接地面の幅 10.1cm。鼻緒の穴は径 8㎜。前方の歯は欠損し、台部に鉄釘による補強痕が残る。
619	SD3	下駄	［14.5］	7.4	8.0	台部厚 2.4	陰卯下駄。角形。台部の断面は逆台形。歯は差し込みにより、前後の厚み 1.7cm、接地面の幅 9.4cm。歯の差し込みは使用により欠損し、鉄釘で補強する。
620	SD3 上層	下駄 歯	—	—	—	—	陰卯下駄の歯。歯は差し込みにより、前後の厚み 2.0cm。歯の接地面は使用により摩耗する。
621	SD3 下層	下駄	［9.0］	［3.2］	6.7	台部厚 0.8	刳り下駄。角形。台部の断面は板状。鼻緒の穴は 1.9×1.1㎜。歯の接地面は欠損する。
622	SD3 中層	下駄	19.7	2.7	8.7	台部厚 1.3	刳り下駄。角形。台部の断面は板状。鼻緒の穴は径6㎜。歯の片側は欠損する。
623	SD3	木札	［19.9］	0.2	3.3	—	上部に抉りあり。先端部は欠損する。片面に墨書。
624	SD3 上層	木札	18.5	0.5	2.8	—	上部に抉りあり。両面に墨書。
625	SD3	木札	［16.3］	0.4	3.8	—	上部に抉りあり。先端部を欠損する。両面に墨書。

※［　］は残存分。

Tab.38　遺物観察表（瓦）

図版番号	出土地点	種類	法量（cm）			色調	特徴	備考（生産地・銘）
			瓦当高 瓦当径	文様区高 文様区径	平瓦厚			
129	SK1	軒桟瓦又は軒平瓦	4.7	2.5	1.7	外）灰 N4/ 断）灰白 2.5Y7/1	中心飾りは花文。両側に均整唐草文。	高知県安芸市 平瓦部の上面に「アキ」銘印あり。
130	SK1	軒桟瓦 丸瓦部	軒丸部径 8.4	文様区径 6.5	—	外）灰 N4/ 断）灰 N4/	連珠三巴文。珠数 9 個。	
158	SK4	軒丸瓦	15.1	11.6	1.5	外）灰 N5/ 断）灰白 2.5Y7/1	連珠三巴文。珠数 12 個。瓦当にキラ粉。	
159	SK4	軒桟瓦 丸瓦部	軒丸部径 8.2	文様区径 6.2	—	外）灰 N5/ 断）灰 N5/	連珠三巴文。珠数 12 個か。瓦当にキラ粉。	
160	SK4	桟瓦又は平瓦	—	—	1.5	外）灰 N5/ 断）灰 N6/	外面にキラ粉。	銘印あり。「山南」か。
161	SK4	軒平瓦又は軒桟瓦	4.4	3.0	1.6	外）灰 N5/ 断）灰白 2.5Y7/1	中心飾りは丁字文。外側に葉。外面にキラ粉。	「アカ」銘印あり。
302	SK7	軒丸瓦	15.2	11.5	—	外）灰 N4/ 断）灰 N4/・灰白 N7/	連珠三巴文。珠数 12 個。	
303	SK7	軒丸瓦	12.5	8.9	2.0	外）灰 N4/ 断）灰白 10YR7/1	梅鉢文。	
304	SK7	軒平瓦	4.2	2.6	1.7	外）暗灰 N3/ 断）灰 N6/・灰白 2.5Y7/1	中心飾りは三巴文。両側に均整唐草文。	高知県安芸市 「御瓦師」銘印あり。
305	SK7	軒桟瓦又は軒平瓦	4.5	3.2	1.5	外）暗灰 N3/ 断）灰 N6/・灰白 2.5Y7/1	中心飾りは三巴文。両側に均整唐草文。	
306	SK7	軒桟瓦又は軒平瓦	—	—	1.5	外）灰 N4/ 断）灰 N5/・灰白 2.5Y7/1	中心飾りは三巴文。外側に均整唐草文。	「アキ卯平」銘印あり。
307	SK7	軒桟瓦	約 4.2	2.7	1.6	外）暗灰 N3/ 断）灰 N5/・灰白 2.5Y7/1	中心飾りは双葉か。外側に均整唐草文。	高知県安芸市 「御瓦師」銘印あり。
308	SK7	軒桟瓦又は軒平瓦	—	—	—	外）灰 N4/ 断）灰白 2.5Y7/1		高知県香美市土佐山田町片地か 銘印あり。「片兼」か。
309	SK7	軒桟瓦又は軒平瓦	—	—	—	外）灰 N4/ 断）灰 N5/	中心飾りは蔦文。外側に均整唐草文。	
310	SK7	軒桟瓦又は軒平瓦	—	—	—	外）灰 N4/ 断）灰 N5/	中心飾りは不明。外側に均整唐草文。	高知県香美市土佐山田町片地 角枠内「片兼」銘印あり。 310～312・846 同范。
311	SK7	軒桟瓦又は軒平瓦	—	—	—	外）灰 N4/ 断）灰 N5/	中心飾りは丁字文。外側に均整唐草文。外面にキラ粉。	310～312・846 同范。
312	SK7	軒桟瓦又は軒平瓦	—	—	—	外）灰 N4/ 断）灰 N5/	中心飾りは丁字文。外側に均整唐草文。	310～312・846 同范。
313	SK7	丸瓦	—	—	厚さ 1.8	外）灰 N4/ 断）灰白 2.5Y7/1	外面イタナデ・ミガキ。内面布目。	角枠内「三□□」銘印あり。
328	SK14 下層	軒丸瓦	—	—	—	外）灰 N4/ 断）灰白 2.5Y7/1	連珠三巴文。珠数は不明。瓦当表面は粗い。	
333	SK16	軒平瓦か	—	—	—	外）褐灰 10YR5/1 断）灰白 10YR6/1	唐草文。瓦当に粗砂。外面ナデ。	
334	SK16 下層	軒丸瓦	—	—	—	外）にぶい黄橙 10YR7/2 断）灰白 10YR7/1・黄灰 2.5Y4/1	連珠三巴文。珠数は不明。瓦当面は荒い。	
365	SE1	軒桟瓦 丸瓦部	丸瓦部径 8.0	文様区径 6.0	—	外）灰 N4/ 断）灰 N6/	連珠三巴文。珠数 12 個。外面にキラ粉。	
366	SE1	軒桟瓦又は軒平瓦	—	—	—	外）灰 N4/ 断）灰 N5/	中心飾りは蔦文又は桐文。両側に均整唐草文。	
367	SE1	桟瓦 左桟瓦	—	—	1.4	外）黄灰 2.5Y5/1 断）黄灰 2.5Y6/1	銘印あり。	
368	SE1	桟瓦又は平瓦	—	—	1.6	外）灰 N4/ 断）黄灰 2.5Y5/1	銘印あり。	
626	SD3 上層	軒丸瓦	15.8	—	—	外）暗灰 N3/ 断）灰白 5Y7/1	連珠三巴文。珠数は不明。瓦当面は荒く粗砂を含む。	
627	SD3	軒丸瓦	16.0	12.0	2.5	外）暗灰 N3/ 断）灰白 2.5Y7/1	連珠三巴文。宝珠 18 個。瓦当面は荒く粗砂を含む。	
628	SD3 上層・ 中層	軒丸瓦	16.2	12.0	2.5	外）暗灰 N3/ 断）灰白 N7/	連珠三巴文。宝珠 18 個。瓦当面は荒く粗砂を含む。丸瓦部の外面ナデ、内面圧痕。上部に径 1.1cmの円孔あり。	
629	SD3 上層	丸瓦	全長 34.4	幅 16.3	2.2	外）暗灰 N3/ 断）灰白 N7/	外面ナデ。内面布目・紐の圧痕。	
630	SD3 上層	丸瓦	全長 26.4	幅 13.3	2.0	外）灰黄褐 10YR6/2 断）黄灰 2.5Y6/1	外面ナデ。内面布圧痕。	
637	SX5	軒桟瓦又は軒平瓦	5.4	3.7	1.7	外）黄灰 2.5Y5/1 断）灰白 2.5Y7/1	中心飾りは三巴文。両側に均整唐草文。外面にキラ粉。	
638	SX5	軒桟瓦 左桟瓦	—	—	—	外）灰 N4/ 断）灰 N6/	中心飾りは三巴文。外側に均整唐草文。	
639	SX5	軒桟瓦 右桟瓦	4.7	2.9	1.5	外）暗灰 N3/ 断）灰 N6/	中心飾りは蔦文。両側に均整唐草文。	銘印あり。
640	SX5	軒桟瓦又は軒平瓦	4.7	3.2	1.7	外）暗灰 N3/ 断）黄灰 2.5Y7/1	中心飾りは丁字文。両側に葉。	「□□カ」銘印あり。
641	SX5	桟瓦又は平瓦	—	—	1.6	外）灰 N5/ 断）灰 N6/		角枠内「□□」銘印あり。
642	SX5	桟瓦又は平瓦	—	—	1.5	外）灰 N4/ 断）灰 N5/		高知県香南市香我美町徳王子 「王子」銘印あり。
643	SX5	桟瓦又は平瓦	—	—	1.5	外）灰 N4/ 断）灰 N6/		高知県香南市香我美町徳王子 「王子」銘印あり。
644	SX5	桟瓦又は平瓦	—	—	1.5	外）灰 N/4 断）灰白 2.5Y7/1	外面にキラ粉。	銘印あり。「山南」か。
696	Ⅰ層	軒桟瓦 左桟瓦	—	—	1.5	外）黄灰 2.5Y5/1 断）灰 N6/	中心飾りは不明。外側に均整唐草文。	高知県佐川町 「佐川□」銘印あり。
697	Ⅰ層	桟瓦又は平瓦	—	—	1.3	外）灰 N5/ 断）灰 N6/	外面にキラ粉。	高知県佐川町 「佐川□」銘印あり。

Tab.39　遺物観察表（瓦）

図版番号	出土地点	種類	法量（cm）			色調	特徴	備考（生産地・銘）
			瓦当高 瓦当径	文様区高 文様区径	平瓦厚			
837	SK6 1層	軒桟瓦 丸瓦部	7.9	6.3	—	外）灰 N4/ 断）灰 N4/	連珠三巴文。珠数 12 個。	
838	SK6	軒桟瓦	4.4	2.8	1.6	外）灰 N4/ 断）灰白 N7/	中心飾りは三巴文。外側に均整唐草文。	高知県香南市野市町中山田か 角枠内「□笑」銘印あり。
839	SK6	軒桟瓦	—	—	—	外）灰 N4/ 断）灰 N6/・灰白 2.5Y7/1	中心飾りは三巴文。外側に均整唐草文。	高知県香南市野市町中山田か 銘印あり。「山南」か。
840	SK6	軒桟瓦又は軒平瓦	4.8	3.1	2.0	外）灰 N4/ 断）灰 N6/・灰白 N7/	中心飾りは花文又は丁字文。外側に均整唐草文。	
841	SK6	軒桟瓦 右桟瓦	—	—	1.5	外）灰 N5/・灰白 2.5Y7/1 断）灰白 N7/	中心飾りは不明。外側に均整唐草文。	銘印あり。
842	SK6	軒桟瓦又は軒平瓦	—	—	1.7	外）灰 N4/ 断）灰白 N7/・灰白 2.5Y7/1	中心飾りは花文。外側に均整唐草文。	
843	SK6 1層	軒桟瓦又は軒平瓦	4.5	2.8	2.0	外）灰 N4/・灰 5Y6/1 断）灰 N6/	中心飾りは花文。外側に均整唐草文。	
844	SK6	軒桟瓦又は軒平瓦	—	—	1.6	外）灰 N5/ 断）灰白 N7/	中心飾りは丁字文。外側は均整唐草文か。	
845	SK6	軒桟瓦 左桟瓦	—	—	—	外）灰 N4/ 断）灰白 2.5Y7/1	中心飾りは不明。外側に葉。	
846	SK6	軒桟瓦又は軒平瓦	—	—	—	外）灰 N4/ 断）灰 N5/	中心飾りは丁字文。外側は均整唐草文か。	310～312・846 同范。
847	SK6	軒平瓦か	4.9	2.8	2.0	外）暗灰 N3/ 断）灰 N6/	中心飾りは橘文。両側に均整唐草文。	
848	SK6	桟瓦又は平瓦	—	—	1.4	外）灰 N5/ 断）灰 N6/・灰白 2.5Y8/1		高知県安芸市 「アキ」銘印あり。
849	SK6	桟瓦又は平瓦	—	—	2.0	外）暗灰 N3/ 断）灰 N4/・灰白 2.5Y7/1		高知県安芸市 「安喜」銘印あり。
850	SK6	桟瓦又は平瓦	—	—	1.6	外）灰 N4/ 断）灰白 N8/	外面にキラ粉。	高知県佐川町 角枠内「佐川□」銘印あり。
851	SK6	桟瓦又は平瓦	—	—	1.5	外）灰 N4/ 断）灰白 N7/		高知県香南市香我美町徳王子 角枠内「トク右…」銘印あり。
852	SK6	桟瓦又は平瓦	—	—	1.6	外）灰 N5/ 断）灰白 N8/		高知県香美市土佐山田町片地 角枠内銘印あり。「片兼」か。
853	SK6	平瓦 （隅瓦）	—	—	1.4	外）暗灰 N3/ 断）灰 N5/		「トミ」銘印あり。
854	SK6	桟瓦又は平瓦	—	—	1.5	外）灰 N5/ 断）灰白 N7/		高知県香南市野市町中山田 小判枠内「中□…」銘印あり。
855	SK6	桟瓦又は平瓦	—	—	1.5	外）灰 N4/ 断）灰白 2.5Y8/1		高知県香南市野市町中山田か 角枠内「中笑」銘印あり。
856	SK6	桟瓦	—	—	1.6	外）灰 N4/ 断）灰白 N7/		角枠内「…□タ」銘印あり。
857	SK6	桟瓦又は平瓦	—	—	1.5	外）灰 N4/ 断）灰白 2.5Y8/1		角枠内銘印あり。
858	SK6	桟瓦又は平瓦	—	—	1.5	外）灰 N4/ 断）灰白 N8/		高知県香南市野市町中山田か 角枠内「中笑」銘印あり。
867	SK19	軒桟瓦 丸瓦部	軒丸部径 7.2	文様区径 5.6	—	外）灰 N4/ 断）灰白 2.5Y7/1	連珠三巴文。珠数 20 個。	
868	SK19	桟瓦又は平瓦	—	—	2.0	外）灰 N5/ 断）灰白 N7/		高知県安芸市 「安喜」銘印あり。
891	SK21	軒桟瓦又は軒平瓦	4.8	2.7	1.7	外）灰 N4/ 断）灰白 2.5Y7/1	中心飾りは花文。両側に均整唐草文。	高知県安芸市 平瓦部の上面に「アキ」銘印あり。
927	SX1 上層	瓦か	瓦当高 6.2	文様区高 3.7	2.0	外）にぶい黄橙 10YR6/3・黄灰 2.5Y5/1 断）にぶい黄橙 10YR6/3	瓦当に陰刻文様。	
928	SX1	軒桟瓦	5.6	—	1.5	外）灰 N4/ 断）灰白 2.5Y7/1	中心飾りは梅鉢文。両側に均整唐草文。	
929	SX1	軒平瓦又は軒桟瓦	4.6	3.0	1.9	外）黄灰 2.5Y5/1 断）灰白 2.5Y8/1	中心飾りは橘文。外側に均整唐草文。瓦当に砂が付着。胎土中に金雲母を含む。	関西産
930	SX1	軒平瓦又は軒桟瓦	—	—	1.8	外）黄灰 2.5Y5/1 断）灰白 N8/	中心飾りは橘文。外側に均整唐草文。	
931	SX1	桟瓦 左桟瓦	—	—	1.5	外）灰 N4/ 断）灰 N6/	外面にキラ粉。	高知県安芸市か 銘印あり。「安喜」か。
932	SX1	桟瓦 左桟瓦	—	—	1.4	外）灰 N5/ 断）灰 N6/	外面にキラ粉。	高知県安芸市 「アキ□」銘印あり。
934	SX13	軒桟瓦又は軒平瓦	4.5	2.8	1.5	外）暗灰 N3/ 断）灰白 N7/	中心飾りは花文。外側に均整唐草文。外面にキラ粉。	
935	SD2 混入	軒桟瓦	5.1	3.7	1.7	外）灰 N5/ 断）灰 N6/・灰白 2.5Y8/1	丸瓦部と中心飾りは三巴文。両側に均整唐草文。外面にキラ粉。	

［遺物観察表凡例］

1）法量・重量：［　］は残存分。
2）色調：「外」は外面、「内」は内面、「断」は断面を表している。内外面とも同色調の場合は外面のみを表記した。色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版　標準土色帳」による。
3）釉調：釉薬の貫入の有無は、染付の透明釉のみ明記し、陶器は省略した。尾戸窯製品の釉は基本的に細かい貫入が入るが、貫入が粗いもののみを明記した。
4）胎土：胎土中の砂粒は特徴的なもののみを明記した。能茶山窯の磁器製品は胎土の断面が荒いものが多いため特に明記した。
5）生産地：磁器のうち肥前系としたものには在地の能茶山窯や鹿児窯の製品の可能性をもつもので、特定できないものも含まれる。

第Ⅴ章　考　　察

第１節　絵図・文献にみる近世の帯屋町筋と帯屋町遺跡

はじめに

高知市の中心商店街である帯屋町は近世からの町筋で、町名はここに居住した大商人帯屋勘助に由来すると伝えられている。近世の郭中に所在したこの町筋は、筋の両側に侍屋敷が並び、広大な家老屋敷も設けられた。また、町屋や会所も設けられ、様々な様相をみせていた。

本調査区は、帯屋町筋のうちでも高知城南門の正面付近にあり、家老などの大きな屋敷が並ぶ一画に位置している。調査では溝や、建物跡、井戸、土坑など、近世前期から後期、近代までの遺構と遺物が検出され、侍屋敷の変遷を知る貴重な資料が得られている。また、これに遡る中世の遺構と遺物も検出され、近世以前の様相も垣間見えている。

これらの検出遺構や遺物の背景を知る手掛かりとして、本節では関連の絵図や文献史料から得られる情報を読み解きながら、居住者の性格や屋敷地の展開上の画期を明らかにしたい。また、周辺の景観や居住者の動きをたどり、この地域が歴史的にどのような変遷を遂げてきたのかについてもみていきたい。

１．帯屋町遺跡の性格と変遷

近世の帯屋町筋

近世初頭、山内氏による城下町の造営にともなって、城下には東西の筋と南北の通りが貫かれ、町並みが形成された。城下町を東西に貫く主要な道のうち、本町筋（現在の電車通り）は経済上の幹線道路としての機能を果たし、高知城の正門にあたる大門（後の大手門・追手門）から東の廿代筋までの間を東西に延びる大門筋（後の大手筋・追手筋）は藩の儀礼上の表通りとなっていた。帯屋町筋は、本町筋と大門筋の中間の位置にある東西の筋で、城の南門や内堀に面していた。

町筋の名称は、近世前期の町並みを記した『侍町小割帳』(註1) に「御屋敷筋」と記されており、近世前期の「寛文己酉高知絵図」にも「御屋敷筋」とみえている。しかし、元禄年間（1688～1704）の状況を記したと推定される「建依別高知城郭之図」には「會所筋」、元禄11年（1698）の記事「御侍屋敷焼失之覚」(註2) には「帯屋町筋」と表れ、以降の絵図にも「帯屋町」とみえている。

近世前期の景観と町屋

近世初期の帯屋町筋（御屋敷筋）周辺の様子は、寛永４年（1627）の絵図「かうち之城」(註3) から窺うことができる。同図では、町筋の東部に「町や」、また西の堀詰付近でも堀の西岸に沿って「町や」が描かれており、この頃には、郭中東端の堀詰付近に町人町があったことが分かる。しかし、正保元年（1644）の「正保土佐国城絵図」(註4) では、全て「侍屋敷」となっており、この頃には東部の「町屋」は堀の東側へ移っている。

東部の状況以外では、寛永元年（1624）から万治２年（1659）間の作成と推察されている『侍町小割帳』に、間口81間６尺の「帯屋町」とする区画が記載されている。前後の絵図との比較から、

この一画は現在の大橋通りと中の橋通りの間の区間が該当するとみられるが、他の侍屋敷の様に個別の居住者名が示されておらず、町人町と考えられる。

この頃の町屋の状況を示す資料には、『皆山集』に収められた「間隙雑記云帯屋町町人住居屋敷之覚」(註5)があるため、これを引用したい。同史料は正保２年（1645）に「帯屋町年寄 左兵衛 仁兵衛」が「吉田宇右衛門」「稲田九兵衛」に差し出した帯屋町を含む町人町の住居の間口と奥行を記した覚え書きであり、「西ノ横町南のはし片町 但六尺五寸杖ニて」として、34軒の住居が示され、末尾に「〆間数百四拾四間三寸家数三十四軒」と記している。ここに記された34軒の中には、年寄の「左兵衛」と「仁兵衛」の他、「勘助」「伊勢屋」「大徳院」「古庵」などがあるが、住居の多くは間口１間半～４間、奥行き８間～16間程であり、間口の小さい短冊状の敷地であったことが分かる。また、このうちでも間口が大きく６間を超える住居では、「左兵衛」と「仁兵衛」、「八兵衛」「少蔵」「勘助」「半兵衛」「弥右衛門」「儀右衛門」がみえている。

ここにみられる「勘助」が、町名の由来になったと伝えられる帯屋勘助と同一人物かは不明であるが、帯屋勘助については、『皆山集』(註6)に、「此町末ニも今の本町の如く町人住居して帯屋の勘助と云る者大きなる町人ニて有りし故にや其此より帯屋町と云来りたると也」、「帯屋勘助ハ早見勘助と申者ニてハ無之や此者ハ弘岡村ニ牢人いたし居候事相見申候」とある。

また、「古庵」は医師、桑名古庵の住居とみられる。『皆山集』には「桑名瀬兵衛ハ今程医者仕名ヲ古庵と申候土佐國高知御城下帯屋町ニ罷有由ニ候事」とあり(註7)、帯屋町で開業している。古庵は耶蘇宗門のため寛永20年（1643）に禁獄となっており、正保２年（1645）に江戸に送られ改宗するが、土佐帰国後も永く牢中に置かれ元禄２年（1689）に牢中にて没している。

会所の出現

しかしこの町屋の一画は、寛文９年（1669）頃の「寛文己酉高知絵図」以降の絵図では、会所と侍屋敷に変っており、町人の居住区が存在したのは、17世紀前半～中葉頃までと推定される。

同絵図では、先の「帯屋町」とされたエリア内に、２棟の侍屋敷とその間に「会所」が描かれている。この会所は、元禄年間（1688 ～ 1704）の「建依別高知城郭之図」や元禄11年（1698）以前の「元禄十一年以前図」まで、同地点に記されている。また、通りを挟んで西側にも「建依別高知城郭之図」に「會所ヤシキ」、「元禄十一年以前図」に「西會所」が記されている。

その後、元禄11年（1698）の焼失記事(註2)には、「銀會所 御蔵残」「中會所 帳蔵焼　免會所 帳蔵残」の記載がみられ、通り西側に「銀會所」、東側に「中會所」「免會所」と称される藩の施設があり被害を受けていたことが分かる。この火災以降、東の元「帯屋町」エリアの会所は無くなり、延享３年（1746）の写図「高知城郭図絵」では侍屋敷へと変っている。一方、通り西側の会所は残り、以後も「會所」「南御會所」「南会所」と名称を変えながら、幕末頃まで絵図に表れている。

近世前期の居住者と性格

城の内堀を除く、帯屋町筋（御屋敷筋）の南北には、大小の侍屋敷が並んでいた。寛永元年（1624）から万治２年（1659）間の作成と推察されている『侍町小割帳』(註1)には、「御屋敷筋」の南面に20棟、北面に19棟の屋敷名が記載され、各屋敷の間口の規模も記されている。同史料（史料１）によると、「御屋敷筋」の西部には、南面に沿って西から「佐不利九右衛門」「郷野七郎左衛

門」「萩野久左衛門」「山内長門」「深尾主水」「後藤市左衛門」「五藤外記」「早崎小傅次」「前野弥左衛門」「毛利主馬」の屋敷が記載され、間口は、「山内長門」が65間５尺、「深尾主水」が46間半、「前野弥左衛門」が31間、「毛利主馬」が40間、その他が16～24間前後で、間口の大きい屋敷が多い。一方、ここより東は「帯屋町」、その東側は「柴田覚右衛門」以下８軒の侍屋敷と堀端の「野中主計 下やしき」となっており、「帯屋町」の東から堀詰までの区間には間口８～27間前後の屋敷地が配置されている。

続いて寛文９年（1669）頃の「寛文己酉高知絵図」（Fig.2・107-図2）では、西部には、南面西から「安倍」「同七郎左衛門」「萩野孫兵衛」「山内織部」、城南門正面の通りを挟んで、「深尾帯刀」「森尾市左衛門」「五藤内蔵介」「早崎小平」「前野孫太夫」「森主馬」の屋敷がみえる。さらに通りを挟んでこれより東は、「岡田嘉左衛門」「会所」「安田弥一右衛門」、通りを挟んで堀詰まで「柴田左京」以下７軒の侍屋敷となっており、先の「帯屋町」エリアは、ここでは会所や侍屋敷へと変っている。

さて、「寛文己酉高知絵図」で「御屋敷筋」に屋敷を構えた居住者の知行の石高や役職についてみてみると、寛文２年（1662）の『寛文二年卯正月　日　御家中侍衆分限帳』(註8) に記載を確認できるものでは、「五千石 深尾帯刀」「三百石 森尾市左衛門」「千百石 五藤内蔵佐」がある。城南門前の通り東側に屋敷を構えた「深尾帯刀」は筆頭家老深尾家の一門で、家老。「森尾市左衛門」は五藤家の一門。「五藤内蔵介」は家老にあたる。また、城南門前の通り西側に屋敷を構えた「山内織部」は山内の称号を賜った家老酒井家の人物で、明暦元年（1655）に山内織部の名を名乗っている。

この様に、17世紀には、西部には山内姓を称した家老や、城持ちの家老とその一門の広大な屋敷が並び、東部には御馬廻など知行150石以上を給された上級武士の屋敷が配置されていた。

近世中期～後期の居住者と変遷

続いて、城南門前通りの両側に配置された屋敷地を中心に、以降の居住者の動きや屋敷区画の変化を見ていきたい。（Tab.40）

まず元禄年間（1688～1704）の状況を表したとされる「建依別高知城郭之図」(註9)（Fig.107-図３）では、通り西側が家老の「山内元之介」屋敷。東の屋敷は深尾家とみられるが記載名無しとなっている。また、帯屋町側の深尾家屋敷の北側には、本町筋に面した「深尾」屋敷がある。本町筋側の深尾屋敷は『侍町小割帳』や「寛文己酉高知絵図」でも認められ、佐川の本家深尾家の屋敷である。続いて、『皆山集』に収められた「元禄十一年以前図」（Fig.108-図４）には、西側の屋敷地が家老「山内監物」屋敷。東側の屋敷地が「深尾数馬」とある。また、「深尾数馬」屋敷の南側に本家の「深尾若狭」屋敷がある。これら元禄年間の絵図では17世紀の絵図で確認できた「山内」と「深尾」の屋敷が引き続いて認められ、２棟の深尾屋敷が南北に並ぶ様子も同様である。

しかし、延享３年（1746）の写図である「高知城郭図絵」(註10)（Fig.108-図5）をみると、西側の屋敷区画は空白。東側は「深尾左京」とあるが、それまでの南北２区画の敷地が１区画にまとめられ、本家深尾家の屋敷になっている。続いて、延享３年（1746）～寛延年間（1748～1751）の状況を表したと推定される「高知廓中図」(註11)（Fig.108-図６）では、西側の区画は「御馬屋」、東側は佐川深尾家の「深尾左京」となっている。また、天明４年（1784）の『御家中御侍屋敷附』(註12) でも、西側の区画は「御馬屋」、東側は佐川深尾家の「深尾因幡」となっている。

この後、享和元年（1801）の「高知御家中等麁図」[註13]（Fig.109-図７）では、西側の区画が「西御屋敷」「東御屋敷」となっており藩主の一族の屋敷に変っている。一方、東側の屋敷は佐川深尾家の「深尾左京」であり、延享～寛延年間までの状況を引き継いでいる。そして以降、慶応年間（1865～1868）の「慶応初年廓中高知街図」[註14]（Fig.110-図10）まで同様の内容であり、幕末頃までこの一帯の屋敷配置には殆ど変化がない。なお、元禄11年以前の帯屋町側の屋敷は、筋に面した北側を表門としたと考えられるが、屋敷が統合された後の「高知廓中図」では屋敷地北側に「裏門」の文字が記されている。また、幕末の「慶応初年廓中高知街図」には、深尾屋敷の南側、本町筋に面した箇所に「御櫓」が記されている。

災害と復興

この様に、帯屋町筋の屋敷は17世紀末から18世紀前葉の間に居住者や屋敷配置が大きく変り、以降、東側の深尾家は幕末頃までほぼ変化がなかった。また、元禄年間（1688～1704）の「建依別高知城郭之図」（Fig.107-図3）や「元禄十一年以前図」（Fig.108-図4）以前とそれ以降では、会所の位置が変り、城南門前の西側の一画に「御馬屋」が一時置かれるなど、藩の施設にも動きがみられている。屋敷替えや藩の施設の移動が広い範囲で生じた背景としては、この時期、城下に甚大な被害をもたらした火災の影響が考えられる。そのため以下では、元禄11年と享保12年の大火について関連の記事を取り上げ、帯屋町筋周辺の状況を確認しておきたい。

まず、城内の下屋敷と太鼓丸が焼失した元禄11年（1698）の大火について、『南路志』に収められた記事「十月六日出火、御侍屋敷焼失之覚」[註2]には、焼失した北奉公人町筋、内堤、帯屋町筋、大門町、本町筋、中島町、与力町、南片町の侍屋敷が列挙されている。ここには焼失した帯屋町筋の屋敷について、西から「帯屋町筋　御下屋敷　新馬場御亭　同御厩　太□丸　山内勘兵衛　桑山貞右衛門　篠原小左衛門　橋本又次郎　今枝六郎左衛門　郷久八　仙石伊太夫　山内監物　深尾数馬　瀬戸玄朝　仙石源次郎　前野藤右衛門　銀會所 御蔵残　松下長兵衛　中會所 帳蔵焼　免會所 帳蔵残　柴田左門　柴田善右衛門　山田喜助…（中略）…野々村七兵衛」など42棟の焼失記録があり、帯屋町筋の西端から東端辺りまで焼失したことが分かる。そして、本調査地点が該当すると考えられる「元禄十一年以前図」（Fig.108-図4）での「深尾数馬」の屋敷も元禄11年に焼失していることが分かる。

次に享保12年（1727）の大火については、『南路志』に収められた「城下大火、御城本丸まで焼失　附公義御差出」[註15]の記事に、城内の殆どが焼失した他、郭中の侍屋敷387軒と、廿代町、細工町、種崎町、蓮池町、農人町、新町、新市町、北奉公人町、堺町、唐人町、浦戸町、掛川町、朝倉町の町屋が焼失したとあり、郭中の被害の様子が記されている。同記事によると、城内では「御城本丸　二丸　三丸　鉄門　良櫓上下　乾櫓　二丸内櫓二ヶ所　本丸納戸蔵　二丸茶蔵　杉之段長崎蔵　紙役所　新庭亭　射場亭并射手己屋　北ノ口作事木屋并左官方　同萬方　掃除方役所共焼失」とあり、城内の建物の多くが被害を受けたことが窺える。

同史料の中では、郭中の侍屋敷で焼け残ったものについて「郭内残家　帯屋町北側山田多門屋敷ゟ下堀端火之見迄拾六軒。同南側高屋又兵衛宅ゟ今田清左衛門迄拾壹軒。本町乾又五郎、大黒甚左衛門、野中六左衛門迄三軒。西大門北藪際、佐藤五郎左衛門壹軒。金子橋藪之内北小笠原又右衛門

外輪ゟ南鷹匠町堺迄、東ハ大塚藤右衛門、金子傅十郎ゟ合而八軒。鷹匠町南側西ゟ八軒。同北側後藤甚五右衛門一軒。外江ノ口分鷲見市丞壹軒。合四拾九軒残。」と記されており、深尾家の屋敷がこの時も被害を受けた可能性が高い。

2. 追手筋遺跡の居住者と性格

居住者の推定

最後に、今次調査区の位置と居住者について検討しておきたい。

藩撰図と推定されその製図法の巧緻さが評価されている寛文９年の「寛文己酉高知絵図」には、通りごとに屋敷地の間口と居住した侍名が列記されている。これをもとに現在の市街地図（Fig.111-図11）と比較し、今回の調査区の位置を絵図上に推定復元したものがFig.111-図12になる。[註16] これによると、今次調査区は「深尾」屋敷の北東隅に該当し、東端が「森尾市左衛門」屋敷との境界近くに当たると推定される。

これ以降の絵図では現況位置との照合は困難であるが、屋敷割りから、対応関係を推定することができ（Tab.40）、以下、深尾家屋敷は元禄年間の「建依別高知城郭之図」の空白、「元禄十一年以前図」の「深尾数馬」、南北の深尾家屋敷が統合されて屋敷地が拡大している延享３年「高知城郭図絵」では「深尾左京」、以降「慶応初年廓中高知街図」まで深尾家の屋敷地を該当させることができる。そこで以下では、深尾氏について、史料に表れる各人物の跡目相続の期間や役職などを検討し、本遺跡の性格を知る手がかりとしたい。

深尾氏について

深尾氏は近江に起り、美濃の一城主となって、永禄初め頃から織田信長に仕える。和泉重良は、天正13年に江州長浜で山内一豊に仕え、一豊の姉女を娶って山内氏と親姻となった。慶長６年に山内氏に従って土佐に入り、土佐入国後は、主席家老となり佐川一万石を領した。

この和泉重良を初代とする土佐の本家深尾氏は、十一代重愛の明治２年（1869）まで佐川を支配した。二代の出羽重昌は、山内二代藩主忠義の弟にあたり、慶長14年に深尾家の養子となっている。

初代～三代の重良・重昌・重照からは一門が分かれ、高知在住の家老となった。高知在住の深尾家は追手筋に面する屋敷地の位置から、後に南家・北家・東家・西家と呼ばれている。これらのうち東家と西家は賜姓によって山内姓を称しており、東家からは山内家八代藩主（豊敷）を出している。他に、深尾家の一族には中老、御馬廻の５家があった。

佐川深尾氏（本家）

『深尾家系圖』[註17] に収められた家系のうち、深尾和泉重良以下の佐川深尾家の、初代から十二代までの跡目相続の期間と没年は次の通りである。

初代　深尾和泉重良　佐川一万石　元和７年（1621）職を養子重昌に譲る　寛永９年（1632）卒

二代　出羽重昌（山内二代忠義弟）慶長14年（1609）深尾家養子　元和５年（1619）襲禄
　　寛文12年（1672）卒

三代　因幡重照　寛文２年（1662）襲封　元禄２年（1689）卒

四代　若狭重方　元禄２年（1689）襲職　宝永３年（1706）蟄居　享保16年（1731）卒

五代　　左京繁峰　宝永３年（1706）襲職　宝暦２年（1752）卒
六代　　湯右衛門茂澄 左近 因幡　（山内隼人茂信嫡子、繁峰養子）　宝暦３年（1753）家督相続
　　寛政11年（1799）隠居　文化２年（1805）卒
七代　　因幡繁寛　寛政11年（1799）襲職　文化６年（1809）卒
八代　　左京重世　文化６年（1809）襲職　文化９年（1812）卒
九代　　相模重教　嘉永６年（1853）卒　（左京重世弟）
十代　　鼎重先　　嘉永６年（1853）襲職　明治23年（1890）卒
十一代　刑部重愛　明治５年（1872）高知邸にて卒
十二代　益岐重孝　明治５年（1872）高知にて生
（以下、本家深尾男爵家）十三代　隆太郎

さて、『侍町小割帳』で本町側にある南屋敷「深尾出羽」は二代、「寛文己酉高知絵図」の南屋敷「深尾因幡」は三代、「元禄十一年以前図」と元禄11年火災での屋敷の焼失記事に表れる「深尾若狭」は四代にあたる。先述の様に、これ以降の絵図では南北の屋敷地は統合され、本家深尾家の屋敷となる。「高知城郭図絵」と「高知廓中図」に表れる「深尾左京」は五代、「高知御家中等麁図」に表れる「深尾左京」は絵図年代と襲職年が符合しないが、八代とみられる。また、「天保元年高知之圖」と「弘化年間舊郭中絵図」の「深尾相模」は九代、「慶応初年廓中高知街図」の「深尾鼎」は十代にあたる。

明治以降の状況は、絵図等からつかむことが出来ないが、『深尾家系圖』に十一代刑部重愛が明治５年に高知邸にて27歳で没したとあり、明治５年までは屋敷が同地点に所在していたことが把握できる。また、十代の鼎重先は明治23年（1890）に没しているが、『深尾家系圖』には明治23年に享年64歳で没し、東京にて火葬とあることから、深尾本家は明治23年より以前に、帯屋町の屋敷から移転していた可能性が高い。

高知深尾氏（南家）

南家、初代の深尾主水重忠はもと美濃にあり、山内一豊に仕えた。小田原の役、関ヶ原の役で功を成し、深尾和泉重良の養子となって、娘を娶った。慶長６年、山内一豊に従って土佐に入り、父重良は主席家老、佐川一万石を受け、重忠は二千石を給された。

一豊の没後、藩の命によって、二代山内忠義の弟である重昌を重良の養子として、佐川深尾家の家督を継がせたため、重良は憤って一時泉州堺に移った。これにより藩は重忠に別家深尾をたてさせ、五千石を給して家老とした。重忠を初代とする高知深尾家は後に追手筋に屋敷が移り、南家と呼ばれる。

『深尾家系圖』に収められた初代から九代までの名は次の通りである。[註18]
初代　深尾主水重忠　2000石、その後家老 5000石　万治元年（1658）卒
二代　帯刀重行　貞享５年（1688）卒
三代　主水重勝　貞享４年（1687）卒
四代　数馬重将　宝永６年（1709）卒
五代　帯刀滋武　享保18年（1733）卒

六代　長門苞實
七代　實主水蕃盈
八代　近江蕃濟　4500石
九代　弘人蕃顯　奉行職　明治20年（1887）卒

『侍町小割帳』にある「深尾主水」は初代、「寛文己酉高知絵図」の「深尾帯刀」は二代、「元禄十一年以前図」と元禄11年火災での屋敷の焼失記事に表れる「深尾数馬」は四代にあたる。これ以降、この家系は追手筋の南面に屋敷が移り、「高知城郭図絵」と「高知廓中図」に六代の「深尾長門」、「高知御家中等麁図」に八代の「深尾近江」、「天保元年高知之圖」から「慶応初年廓中高知街図」まで九代の「深尾弘人」がみえている。

九代の弘人蕃顯は天保の改革で奉行職を務め、追手筋南の屋敷は俗に弘人屋敷と呼ばれる。深尾南家は同地点で慶応年間の絵図まで所在が確認できるが、九代深尾弘人の晩年は九反田に居住したとある。

おわりに

さて、ここまで帯屋町筋の変遷を眺め、当遺跡の立地環境や性格をみてきた。家老深尾家の屋敷地の北東隅にあたる当調査区は、17世紀末まで高知深尾家（南家）の屋敷にあたり、その後は、拡張された本家深尾家の屋敷の範囲に含まれていた。また本家については、明治２年に佐川の屋敷を離れて高知に移住したとの記事があり[註19]、この頃、居住者の構成や生活形態に変化があったとみられる。また、『深尾家系圖』等から明治23年までには東京に移転しているとみられ、史料上からは明治23年までの間に本家の再移転と屋敷の解体が行われていたと推定される。

こうした背景から、当遺跡における画期は、本地点に近世の屋敷が展開し始める17世紀初頭、居住者の入れ替えと屋敷区画の拡張が行われる17世紀末、居住者が再移転し屋敷が解体される明治23年以前に置くことができる。各期の大きな変化が今次調査の検出遺構や遺物とどのように関わるのかについては、後節にて検討することとしたい。

［註］

1)『侍町小割帳』は高知城下の侍町の住居者名簿とでもいうべき史料であり、通りごとに屋敷地の間口と居住者の氏名が列記されている。史料の成立年代は不詳であるが、寛政３年（1791）の写しが文政９年（1826）に再写され、その伝来資料を明治29年（1896）松野尾章行氏が再転写したものが『皆山集』に収められている。寛政期に書写した人物が史料末尾に付記した内容では、寛永元年から万治２年の間に成立したものと推定されている。さらに、松野尾章行氏はその上限を永国寺創建の寛永５年（1628）下限を万治２年（1659）としている。『土佐国史料集成　土佐國群書類従　第八巻』高知県立図書館2006年、大脇保彦「侍屋敷調査帳と廓中図」『描かれた高知市-高知市史絵図地図編』高知市史編さん委員会絵図地図部会・高知市2012年

2)「御侍屋敷焼失之覚」『南路志 巻七十』豊昌公御代七付録『土佐国史料集成　南路志』第６巻P424 高知県立図書館

3)「かうち之城」高知市立市民図書館所蔵『描かれた高知市』P32より引用

4)「正保土佐国城絵図」国立公文書館所蔵『描かれた高知市』P33より引用

5)「高知市街誌稿」『土佐之国史料類纂 皆山集』巻九巻

6)「高知市街誌稿」『土佐之国史料類纂 皆山集』巻九巻P172 ～ 174

7)「高知市街誌稿」『土佐之国史料類纂 皆山集』巻九巻P173より引用「丸亀町野田源兵衛申上次第書伝」

8)『寛文二年卯正月　日　御家中侍衆分限帳』『土佐之国史料類纂 皆山集 第七巻』高知県立図書館 昭和52年

9)「建依別高知城郭之図」高知市立市民図書館所蔵 「建依別高知城郭之図」は松野尾章行氏による写図で原図は不明。大脇保彦「元禄期の城下町絵図」『描かれた高知市』P42より引用

10)「高知城郭図絵」高知県立図書館所蔵「高知城郭図絵」は延享３年（1746）年９月の写図であり、原図はそれ以前、町会所の位置などから元文５年（1740）以降の状況を示した図であったことが分かる。加筆・訂正も見え、実用にされていた痕跡も示している。大脇保彦「延享の大火前後の城下町絵図写図」『描かれた高知市』P44より引用

11)「高知廓中図」個人蔵「高知廓中図」は図題がなく仮題で、原図も写した年次も不明である。しかし図中の内容から延享の大火以降、寛延年間までの状況とされている。大脇保彦「延享の大火前後の城下町絵図写図」『描かれた高知市』P45より引用

12)「御家中御侍屋敷附」高知市立自由民権記念館寄託　徳弘家資料「御家中御侍屋敷附」は徳弘家五代目惣助の代に作られたもの。今井章博「侍屋敷調査帳と廓中図」『描かれた高知市』P53より引用

13)「高知御家中等麁図」安芸市立歴史民俗資料館所蔵「高知御家中等麁図」は土佐藩家老五藤家に伝わる高知城下町絵図で、享和元年（1801）の原図を、文化８年（1811）に写したもの。『描かれた高知市』P48より引用

14)「慶応初年廓中高知街図」高知市立市民図書館所蔵「慶応初年廓中高知街図」は日根野弘宣氏が慶応年間の高知城下の侍屋敷の配置と居住状況を調査し復元したもの。作成は大正４年（1915）。岩河忠信「幕末の廓中絵図」『描かれた高知市』P59より引用

15)「城下大火、御城本丸まで焼失　附公義御差出」『南路志』巻七十五 豊敷公御代一『土佐国史料集成　南路志』第７巻P169高知県立図書館

16) 高知城の内堀が埋められ、追手筋の道幅が南側へ拡張されている他は、帯屋町筋の東西の道、南北の道などが近世の絵図と一致しており、現況の街路区画が近世の町割りをほぼ踏襲していることが見て取れるため、近世当時の状況を比較的良好にとどめている街路区画を同倍率で重ね合わせ、推定復元した。

17)『深尾家系圖』は深尾叶（憲憲）氏が大正４年（1915）に編纂したもの。高知県立図書館所蔵の写しより引用。

18)『深尾家系圖』には高知深尾氏六代以下の卒年が記されていないため、一部墓石等から補足した。

19)『梅之薫』武藤厚馬 明治37年

［参考文献］

寺石正路『土佐名家系譜』歴史図書社 昭和51年

山本泰三『土佐の墓』土佐史談会 昭和62年

秋澤繁「近世」『佐川町史』佐川町役場 昭和57年

『土佐之国史料類纂 皆山集』高知県立図書館 昭和48年

『土佐国史料集成 南路志』高知県立図書館 平成６年

『土佐国史料集成 土佐國群書類従』高知県立図書館 2006年

『深尾家系圖』深尾叶氏編纂　高知県立図書館所蔵の写し

『改訂版 高知城下町読本』土佐史談会・高知市 2004年

『描かれた高知市 高知市史 絵図地図編』高知市史編さん委員会絵図地図部会・高知市 2012年

［絵図出典］

No.1)「かうち之城」高知市立市民図書館所蔵

No.2)「正保土佐国城絵図」国立公文書館所蔵

No.3)「慶安五年高知廓中絵図」高知市立市民図書館所蔵

No.4)「寛文七年図」高知県立図書館所蔵

No.5)「寛文己酉高知絵図」高知市立市民図書館平尾文庫所蔵

No.6)「建依別高知城郭之図」高知市立市民図書館所蔵

No.7)「元禄十一年以前図」高知県立図書館所蔵

No.8)「高知城郭図絵」高知県立図書館所蔵

No.9)「高知廓中図」個人蔵

No.10)「御家中御侍屋敷附」徳弘家資料 高知市立自由民権記念館寄託

No.11)「高知御家中等麁図」安芸市立歴史民俗資料館所蔵

No.12)「天保元年高知之圖」個人蔵

No.13)「弘化年間舊郭中絵図」高知市立市民図書館所蔵

No.14)「慶応初年廓中高知街図」高知市立市民図書館所蔵

※１～14は『描かれた高知市 高知市史 絵図地図編』より転載・引用

史料1　『侍町小割帳』（抜粋）

御屋敷筋西ノはし南川立町

一拾六間弐尺　西横町四間弐尺　森次兵衛（前脱カ）　佐不利九右衛門
一拾六間弐尺　末松弥七郎　郷野七郎左衛門
一弐拾壱間　山田順蔵　萩野又左衛門
一六拾六間五尺　横町拾四間半　御庶　山内長門
一四拾六間半　深尾湯左衛門　深尾主水
一弐拾四間　森尾　後藤市左衛門
　五藤主計
一弐拾間　後藤外記
一弐拾四間半　大黒竹八　早嵜小傳次
一三拾壱間　野本順助　前野弥左衛門
一四拾間　南曽所　毛利主馬
一八拾壱間六尺　横町四間四尺　横町四間五尺　松下長兵衛　高屋九兵衛　帯屋町
　大崎熊次　渡辺忠左衛門
一弐拾七間　中屋勇平　柴田覚右衛門
一拾九間　朝比奈順平　水野市右衛門
一弐拾弐間　山田助之丞　孫右衛門
一拾八間弐尺　山田猪兵衛　亨右衛門
一拾壱間　長尾尚圭　多川又四朗
一八間　馬詰恵助　池田半右衛門
一拾間五尺　南柳軒　北村藤右衛門
一拾弐間　磯野次郎太郎
一拾弐間　今多内蔵太　野中主計　下やしき　東向弐拾八間

〆五百五拾七間弐寸五分

史料2　『皆山集』

○間隙雑記云帯屋町町人住居屋敷之覚

西ノ横町南のはし片町但六尺五寸杖ニて

一屋敷表口七間裏へ十五間　役なし　八兵衛
一　同　同三間弐尺裏へ八間五尺　モ俄
一　同　同弐間裏へ八間五尺　七兵衛
一　同　同弐間裏へ八間五尺　四郎右衛門
一　同　同弐間裏へ八間五尺　平右衛門
一　同　同弐間裏へ八間五尺　左兵衛
一　同　同七間五尺裏へ六間一尺　役なし　少蔵
一　同　同四間裏へ拾一間半　西のはし　九左衛門
一　同　同七間一尺裏へ十七間三尺　片町年寄　左兵衛
一屋敷表口三間裏へ十四間五尺　三郎兵衛
一　同　同五間五尺裏へ十六間六尺　拾兵衛
一　同　同五間一尺裏へ十六間六尺　右兵衛
一　同　同六間一尺裏へ十六間六尺　年寄　仁兵衛
一　同　同六間六尺裏へ十六間六尺　勘助
一　同　同七間裏へ十六間六尺　半兵衛
一　同　同七間三尺八寸裏へ八間四尺　弥右衛門
一　同　同三間裏へ七間二尺　東ノ横町北ノはし片町　清兵衛
一　同　同五間一尺裏へ十一間一尺　市郎兵衛

正保貳年霜月廿七日

吉田宇右衛門殿
稲葉九兵衛殿

外ニ裏屋敷西東十五間二尺北南十二間五尺　同人
一　同　同三間二尺裏へ十五間五尺　太郎兵衛
一　同　同一間五尺裏へ十五間四尺　役なし　市右衛門
一　同　同二間尺裏へ十五間四尺　藤蔵
一　同　同四間五寸裏へ十五間半　九右衛門
一　同　同三間裏へ四間五尺　勘右衛門
一　同　同三間裏へ四間五尺　藤左衛門
一　同　同三間六尺裏へ十四間五尺　甚兵衛
一　同　同三間半裏へ十四間五尺　松兵衛
一　同　同八間裏へ十六間半　儀右衛門
一　同　同一間裏へ五間　裏　東ノはし片町　長三郎
一　同　同四間二尺裏へ八間五尺　役なし　武兵衛
一　同　同四間四尺五寸裏へ八間五尺　長兵衛
一　同　同壱間三尺裏へ八間五尺　清三郎
一　同　同弐間弐尺裏へ八間五尺　役なし　伊勢屋
一　同　同三間裏へ八間五尺　大徳院
一　同　同五間半裏へ八間五尺　古庵

〆間数百四拾四間三寸家数三十四軒

帯屋町年寄　左兵衛
　　仁兵衛

Tab.40　絵図・史料にみる帯屋町筋居住者の変遷

No.	挿図番号	年代	資料名	西端～東へ3・4棟め	南門前通り西角		現在の県庁前の通り	南門前通り東角 ※調査区	東へ2棟め	3棟め	現在の公園通り	4棟め	5棟め	6棟め	現在の大橋通り	現在の帯屋町の区間				現在の中ノ橋通り	堀詰までの区間	筋の名称	追手筋深尾南家位置	追手筋深尾北家位置
1	Fig.107-図1	寛永4年（1627）	「かうち之城」					記載なし																
2		正保年間（1644～1648）	「正保土佐国城絵図」					記載なし																
3		慶安5年（1652）	「慶安五年高知廓中絵図」					記載なし																
4		寛文7年（1667）	「寛文七年図」					侍屋敷																
		推定寛永元年～万治2年（1624～1659）	『侍町小割帳』	佐不利九右衛門 郷野七郎左衛門 萩野久左衛門	山内長門			深尾主水（北） 深尾出羽（南）	後藤市左衛門	五藤外記		早崎□□□	□□□□	毛利主馬		帯屋町					侍屋敷8棟と掘詰の野中主計下屋敷	御屋敷筋	山内市正	村田白庵 并川主税
5	Fig.107-図2	寛文9年（1669）	「寛文己酉高知絵図」	安倍 同七郎左衛門 萩野孫兵衛 （又は空白）	山内織部			深尾帯刀（北） 深尾因幡（南）	森尾市左衛門	五藤内蔵介	通り無し	早崎小平	前野孫太夫	森主馬		岡田嘉左衛門	会所	安田弥一右衛門			侍屋敷7棟と掘詰の小区画		山内蒋監	村田康庵 並川主税
6	Fig.107-図3	元禄年間（1688～1704）	「建依別高知城郭之図」	□□□□□ □□□□ 萩野孫兵衛	山内元之介			空白（北） 深尾右□（南）	空白	空白		仙石源次郎	前野□右衛門	會所ヤシキ		□□□屋敷 不破甚右衛門	會所	□□□ヤシキ 間彦六			侍屋敷7棟と掘詰の□□ヤ	會所筋	山内彦作	村田康庵 深尾内匠
7	Fig.108-図4	元禄11年（1698）以前	「元禄十一年以前図」	橋本又次郎 郷久八 仙石伊太夫	山内監物			深尾数馬（北） 深尾若狭（南）	瀬戸玄朝か			仙石源次郎	前野藤右衛門	西會所		空白	會所	空白			侍屋敷7棟と掘詰の□□ヤシキ		山内彦作	村田康庵 深尾内匠
8	Fig.108-図5	延享3年（1746）	「高知城郭図絵」	□□□□ 末松久右衛門 山内□□	空白			深尾左京	五藤外記			□□□□	□□□□	會所		□□□□	□□□□	□□□□	□□□□		8棟の侍屋敷		深尾長門	深尾□□
9	Fig.108-図6	推定1746～1750	「高知廓中図」	□□□□ 山内八郎 山内八郎	御馬屋			深尾左京 裏門（北）	五藤外記			大黒文通	野本□馬	會所		松下□衛門	高屋□□□	□□	□□□□		8棟の侍屋敷	帯や町	深尾長門	深尾□□
10		天明4年（1784）	『御家中御侍屋敷附』	森次郎兵衛 末松弥七郎 山内順蔵	御馬屋			深尾因幡	五藤主計			大黒元右衛門	野本順介	南御會所		松下長兵衛	高屋九兵衛					帯屋町	深尾主水	深尾内匠
11	Fig.109-図7	享和元年（1801）	「高知御家中等亀図」	□□□□ 末松権三郎 山内右内	西御屋敷	東御屋敷		深尾左京	五藤内蔵介			大黒□八	野本九助	南御會所		松下長兵衛	高屋九兵衛	大崎新十郎	渡辺忠エ門		8棟の侍屋敷	帯屋町	深尾近江	深尾丹波
12	Fig.109-図8	天保元年（1830）	「天保元年高知之圖」	森源七 松下□義 末松久右衛門 山内右近	西御屋敷 大□様豊敬公	東御屋敷 山内大□豊道公		深尾相模	五藤主計			大黒	野本	南会所		松下一学	高屋□□□	大嶋粂次	渡辺右忠次		8棟の侍屋敷	帯屋町	深尾弘人	深尾丹波
13	Fig.109-図9	弘化年間（1844～1848）	「弘化年間舊郭中絵図」	小林源七 末松久右衛門 山内右近	西御屋敷	東御屋敷		深尾相模	五藤主計			大黒	野本	南会所		松下一学	高屋□左衛門	大崎㐂久吾	渡辺□□二		8棟の侍屋敷	帯屋町	深尾弘人	深尾内匠
14	Fig.110-図10	慶応年間（1865～1868）	「慶応初年廓中高知街図」	□□□□ 末松武六 山内右近	西御屋敷	東御屋敷		深尾鼎 御櫓（南）	五藤内蔵介			大黒元右エ門	野本喜久馬	南會所		中老松下登	高屋□馬	大崎武之進	渡辺左□□		8棟の侍屋敷		深尾弘人	深尾丹波

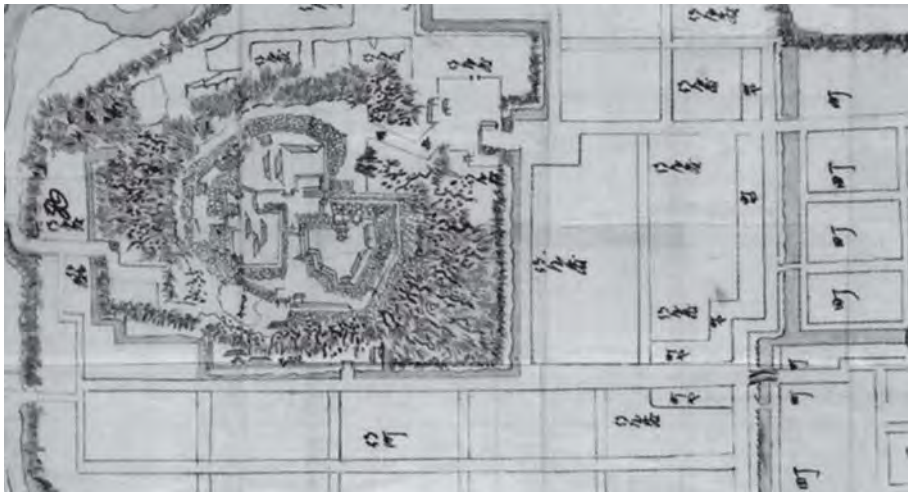


図１　「かうち之城」寛永４年（1627）（高知市立市民図書館所蔵）

図２　「寛文己酉高知絵図」寛文９年（1669）（高知市立市民図書館所蔵）

図３　「建依別高知城郭之図」元禄年間（1688～1704）（高知市立市民図書館所蔵）

Fig.107　絵図にみる帯屋町遺跡の変遷（1）

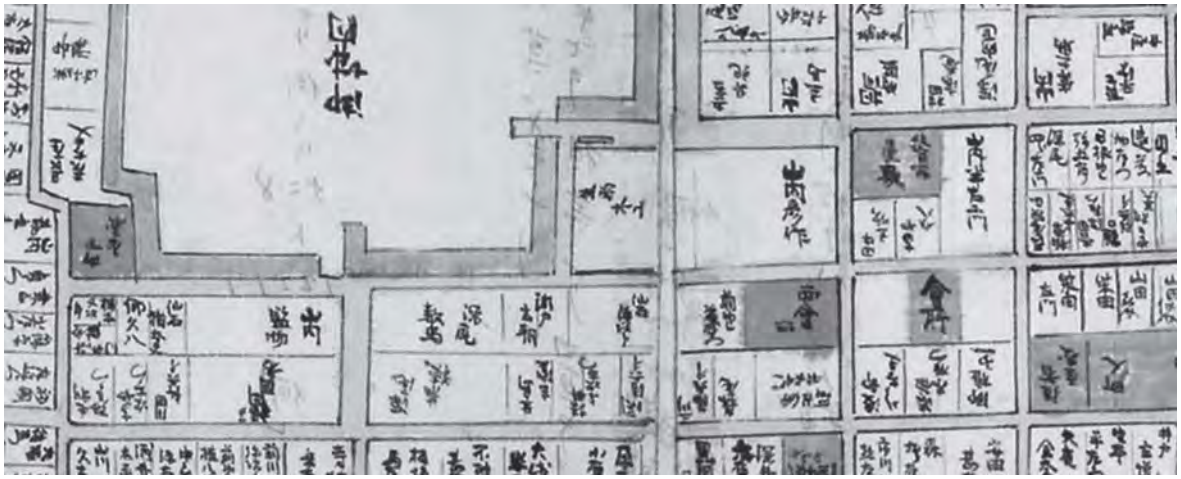


図 4　［元禄十一年以前図］元禄 11 年（1698）（高知県立図書館所蔵）

図 5　「高知城郭図絵」延亨 3 年（1746）　写図（高知県立図書館所蔵）

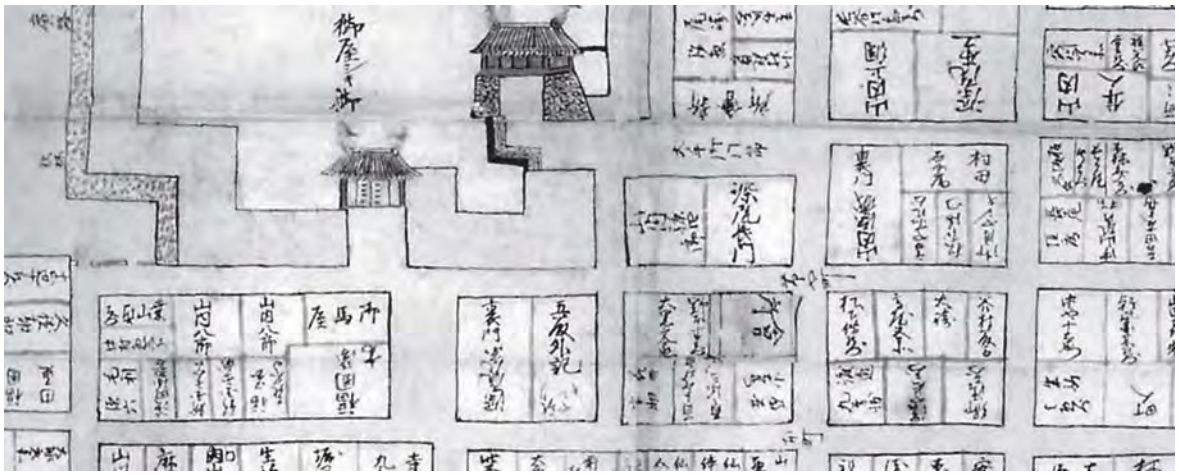


図 6　「高知廓中図」延亨 3 年～寛延年間（1746～1751）（個人蔵）

Fig.108　絵図にみる帯屋町遺跡の変遷（2）

図７　「高知御家中等麁図」亨和元年（1801）（安芸市立歴史民俗資料館所蔵）

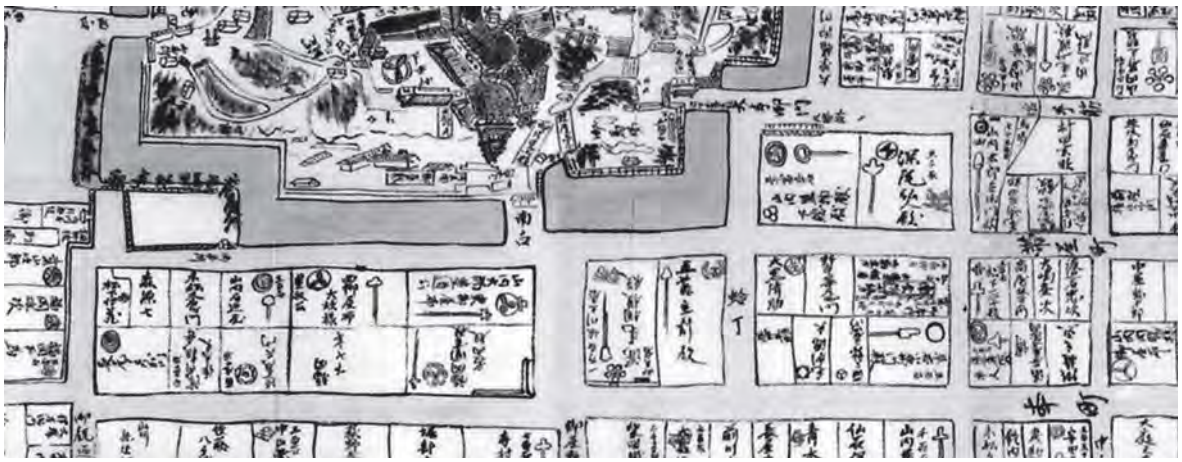


図８　「天保元年高知之圖」天保元年（1830）（個人蔵）

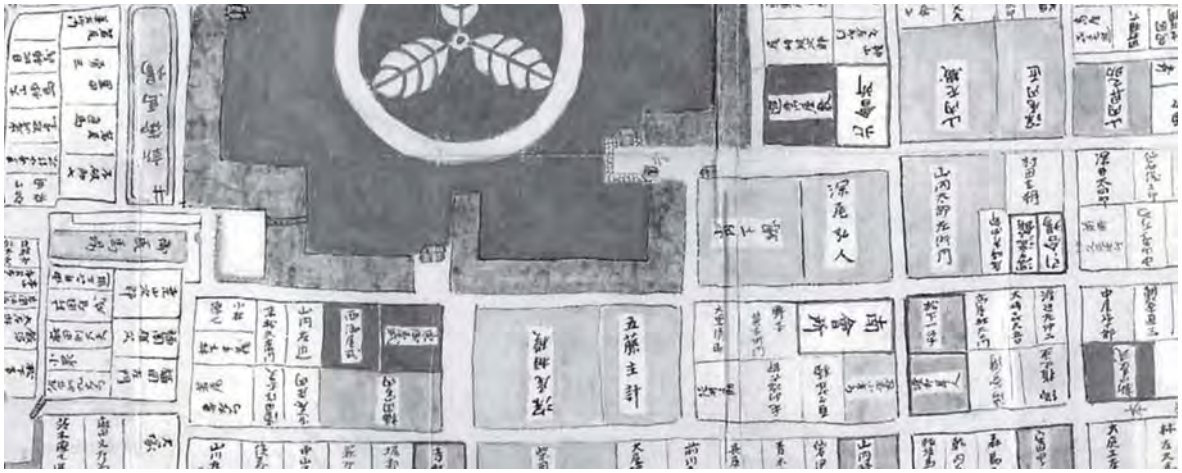


図９　「弘化年間舊郭中絵図」弘化年間（1844～1848）（高知市立市民図書館所蔵）

Fig.109　絵図にみる帯屋町遺跡の変遷（3）

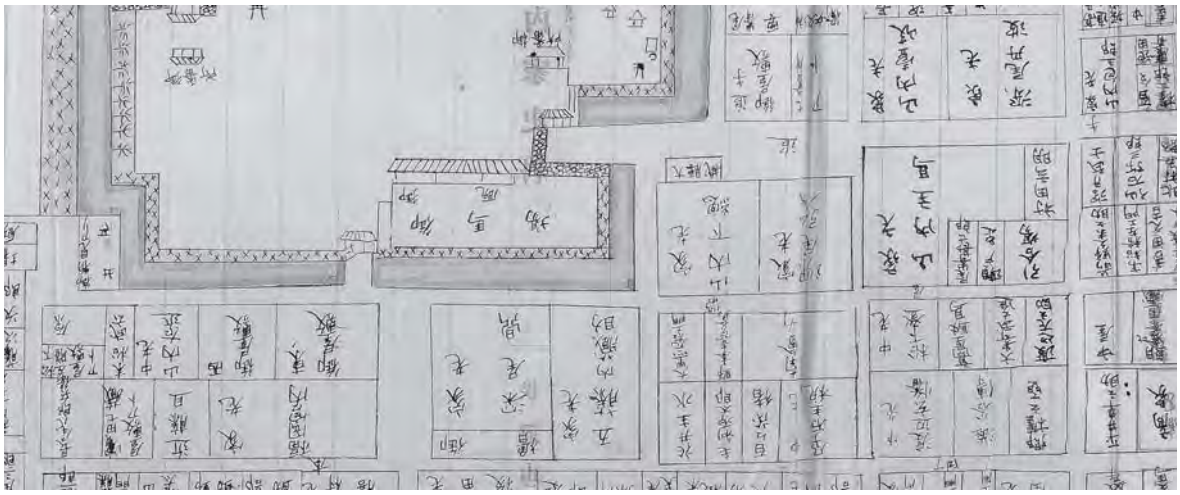


図 10 「慶応初年廓中高知街図」慶応年間（1865～1868）（高知市立市民図書館所蔵）

Fig.110　絵図にみる帯屋町遺跡の変遷（4）

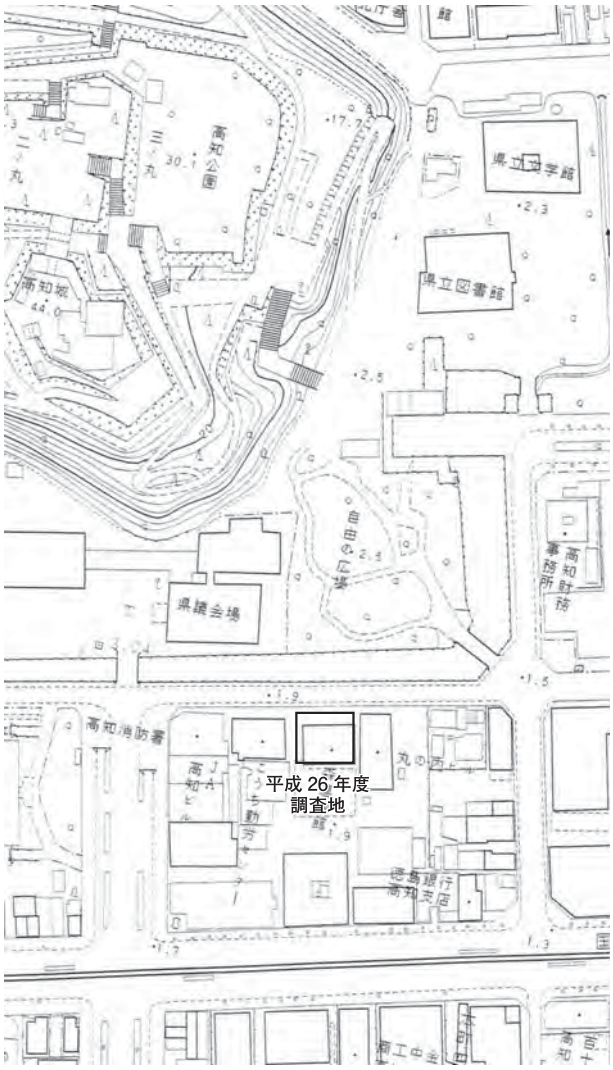


図 11　平成 13 年地図（平成 13 年修正の「高知広域都市圏 38」に加算）

図 12 「寛文己酉高知絵図」（高知市立市民図書館所蔵の絵図をもとに加算）

0　100m
（S=1/3,500）

Fig.111　帯屋町遺跡調査区の推定位置

第２節　帯屋町遺跡検出遺構の性格と変遷

調査区内からは、古代～近代の遺物が出土し、中世～近代の遺構を検出した。本節ではこれらの遺構の構造や特徴からその性格について検討し、各時期の様相を明らかにしたい。検出遺構の段階設定については、まず中世期と近世期とで区分し、さらに近世については、絵図・文献資料から、元禄の火災後、調査地が高知深尾家から佐川深尾家の屋敷地となる近世中期（18世紀）を境として３段階に設定した。なお、前章で中世又は近世とした遺構及び、時期不明とした遺構については、出土遺物や同時期頃とみられる他の遺構の埋土の特徴などから総合的に判断し、推定時期区分としてより可能性の高い時期で再整理を行った。

① 中世期（14 ～ 16世紀）（Fig.112）

中世の遺構には井戸、土坑、ピット、溝、性格不明遺構がある。中世の堆積層は調査地全域に分布するが、北東部の微高地では砂質シルト（Ⅳ-3層）、中央部では基盤層が一度落ち込み、その上部に堆積したシルト（Ⅳ-2-1層）を主体とし、これらの堆積下で遺構が構築されている。Ⅳ-2 ～ 3層には、最も新しいもので15世紀後半～ 16世紀の時期幅を持つ遺物を含む。遺構の時期は多くが15世紀に属するが、14世紀に遡る可能性をもつものや16世紀に下る可能性のあるものもある。北東部の微高地上には土坑や井戸が築かれ、中央部では溝や水路とみられる遺構が構築されている。調査地南端部においても再度基盤層の高まりがみられるが、それより上部については、南東部は近現代の削平を受け不明であるが、南西部は水成層とみられるⅣ-1-3層で厚く覆われており、一帯では中世の遺構は確認できていない。井戸などが構築された時期の居住地は、基盤層の微地形が一度落ち込む調査地中央部付近が調査地内における南限であるとみられる。

北東部のSK29、SE2は出土遺物からその廃絶年代が15世紀とみられる。SE3からは14世紀～ 15世紀前半の時期幅を持つ遺物が出土しており、14世紀まで遡る可能性がある。SE2・3は近接しており、規模、形態、井戸底の深さ共に類似していることから、一方が新たに掘り直された可能性がある。出土遺物からSE3の方が先行する可能性が高い。さらに、中世の包含層内及び遺構内からは13世紀末～ 14世紀の遺物も一定出土しており、当該時期にはすでに居住地となっていた可能性がある。試掘調査においては、多くの試掘坑において、Ⅳ-3層やⅤ層上面まで調査をしていないことや、近代の大型遺構が密に分布する地点があることから、調査地中央部では、この他にも当該時期の遺構が分布していた可能性がある。調査地北東部のピット群は、近世のピットとの分別が判然としないものもあるが、その多くが井戸の前後に構築された14 ～ 15世紀の一群とみられる。

また、調査区北壁の堆積層には、14 ～ 15世紀の遺構が構築されたⅣ-3層の上部に、水田土壌の可能性のある耕作土とみられる層を確認している。出土遺物が少なく明確な時期は不明であるが、検出層位から、井戸などの遺構の廃絶時期以後の、15 ～ 16世紀の間のある時期に、居住地から耕作地へと土地利用が変化した可能性がある。近隣の追手筋遺跡では14 ～ 15世紀の水田土壌とみられる層が確認されている[註1]ことも当該時期の水田耕作地としての利用の可能性を示唆する。

調査地中央部では、近世の遺構分布の希薄な地点において、土坑や溝など（SK14・15、SD4、

SX10）が確認されているが、これらは検出層位や埋土の特徴から、井戸など北東部の遺構群よりも新しい時期の一群の遺構であるとみられる。これらの遺構の時期は、最も新しいもので、SK14において、16世紀とみられる遺物が出土していることから、15 ～ 16世紀の時期幅の中に収まるものとみられる。また、これらの遺構の主軸方位は近似する。溝及び溝状遺構（SD4・SX10）は一定の軸方向を示し、区画に関係する遺構とみられる。近隣の弘人屋敷跡では15 ～ 16世紀の区画溝が現在の街区の起源となっている可能性を指摘して[註2]おり、当調査地においても、これらの遺構の軸方向は現存地割の軸方向に並行することから、その可能性が窺える。

② 近世前期（17世紀）（Fig.113）

近世前期には、第１節の絵図との照合により、北側の現在の道路との境界が当時の道との境界付近にあたり、調査地内は高知深尾家の屋敷地表側の北東隅に位置する。

屋敷地内では廃棄土坑などとともに４条の溝を確認している。これらの溝は、中世の溝の軸方向を踏襲しており、現在の道路ともほぼ並行する。現存地割が近世の町割に基づくことから、屋敷地内においても、当時の町筋を意識した溝が構築されていることが窺える。

SD1とSD2は並走する南北方向の溝で、軸方向をほぼ同じくする。断面形は、東側のSD1には東側にテラス状の段、SD2には西側にテラス状の段をもつ逆台形状を呈する点で共通する。出土遺物の様相から、２つの溝は同時併存していた可能性が高い。これらの溝の間には溝と同じ時期の遺構は構築されておらず、空閑地となっていることから、溝の存続時期には、屋敷地内の通路であった可能性がある。溝間の幅は約4.0mであり、２間程度の幅を有する。

SD3は、SD2の検出位置より東には延びず、その配置からSD2とSD3はＬ字状に連結していた可能性が高い。絵図との照合ではこれらの溝は、深尾家の屋敷地内に全て収まることから、屋敷地全体を区画する溝ではなく、屋敷地北東部において、建物などが配置される居住空間を区画する溝とみられる。SD3の北側は、溝が機能していたとみられる時期の遺構はなく、庭などの空間であった可能性がある。確認された近世前期の遺構の多くが、区画溝が開削される以前のものであり、廃棄土坑の性格を有する。屋敷地の北東部に不用なものを廃棄し、整地した後、屋敷地内の改修に伴って区画をしたものと思われる。区画溝が開削されて以後、機能していた時期の遺構は、近世中期以降の遺構の分布範囲と重なる地点も多く、削平された可能性が考えられるが、主要な建物など大型の遺構はさらに南西部に位置していたと推定される。

溝の規模はSD1とSD2が同規模程度で、SD3がそれらより大きい。溝の床面の標高はSD2よりSD1の方が20 ～ 30cm程低い。SD3の底は３条の溝の中で最も低く、SD2と比較すると、30cm程低い。L字状に連結し、水が流れた場合には、SD2からSD3へと流れる。これらの溝の下層には滞水状態で堆積したとみられる層があり、SD1 ～ 3は区画溝としての機能と排水路としての機能を兼ね備えていたとみられる。屋敷地内から生活排水などが流れ出た場合には、SD2からSD3を経て、西側へ流れる仕組みになっていたと思われる。3条の溝の埋土中では多数の木杭を検出しており、SD3では南肩部、SD2では西肩部と屋敷地内部側に多くが打ち込まれていた。SD3ではほぼ同じ軸線上に並んで確認されている。SD3でこれらの木杭が検出された位置の向かいにあたる北肩部では、テラス状の段の上に石が配列されているが、同様の木杭は確認されていない。このことから、木杭は石

を支えるためのものではなく、屋敷地内部側の側壁の土が崩落しないように板材を設置するための支柱杭であった可能性がある。SD3は北側の表に近い側が石組、南の屋敷地内部側が板枠の排水施設であったとみられる。東半部については、西半部と同様テラス状の段があることから、ある段階で石が抜き取られた可能性も考えられるが、現状では不明である。残存する木杭の本数は少ないが、同様にSD2においても、屋敷地内部側に板枠が設置されていた可能性がある。SD1においてもこれらと同様の用途が考えられるが、SD3に比べると軸は規則的に並ばず、判然としない。

また、これらの溝の埋土からは、水流を推定できるような堆積は確認できず、常時水を湛えた水路とは考え難い。生活排水などが流れ出る度に滞水状態で溝底が埋積した可能性がある。また、溝の埋土中位では側壁からの土砂などによっても溝が埋没したとみられる堆積も確認され、その埋没の仕方は一様ではない。近隣の追手筋遺跡では、当該時期の屋敷境の溝の例ではあるが、空堀の溝で、生活排水が流れ込む様な状況であったことが埋土の珪藻分析から推定されている[註1]が、SD1～3についても同様であった可能性がある。

SD3は最終的には屋敷地内からの生活ごみや瓦礫の廃棄と共に廃絶するが、その時期は出土遺物からSD1やSD2と同じか、若干遅れて廃絶する。しかしながら、いずれも17世紀末までには廃絶したようであり、17世期後半に屋敷地内で区画整理を伴う大きな変化があったとみられる。また、これら17世紀の遺構の多くからは一定の瓦が出土することから、当該時期にはすでに屋敷地内に瓦葺の建物が存在していたことが推定される。溝の廃絶直後の状況はというと、SD3の東半部北肩部においては、基礎杭とみられる木杭と共に、胴木の可能性のある木板を検出していることから、塀など何らかの区画施設が構築された可能性があるが、上部の構造は残存せず、また、西半部では同様のものを確認できていないため不明である。SD1とSD2の上部では18世紀以降とみられる遺構は確認できたものの、廃絶直後の状況は同じく不明である。

③ 近世中期～後期・近代（18～19世紀）（Fig.113）

18世紀は佐川深尾家の屋敷地の範囲が北に拡張され、当調査地がその中に収まる時期である。18世紀中葉の絵図には、佐川深尾家の「深尾左京」の屋敷地であったことが示されている。また、この時期以降、当調査地は屋敷地の裏手空間にあたり、帯屋町筋は屋敷地の裏門に面した通りとなる。

18世紀～19世紀前半の遺構には、主なものに井戸と掘立柱建物、柱列、土坑がある。建物や柱列の主軸方位は17世紀の溝とほぼ同じ軸が踏襲されている。SB1とSB2は重複しており、SB2の方が時期が下る。またこれら建物の周囲には、他にも柱穴が見られ、近接した位置に別の建物、あるいは一部重複して異なる時期の建物があった可能性がある。井戸の廃絶は19世紀中葉であり、SB2と同時併存していた可能性が高い。遺構配置から井戸とその周辺に小型の掘立柱建物を配した、台所周りなどの屋敷地奥の空間であったとみられる。調査地東部ではSD1の跡地でも、根石などを伴うピットが数基掘削されており、建物が存在した可能性がある。SD2の跡地には一面に19世紀後半の堆積が広がり、それ以前の遺構は明らかでない。SD3の跡地は近現代の造成の影響を受け、多くが削平されている。しかし、この頃にはSD3の北側まで瓦を廃棄したピットなどが確認されており、近世後期の屋敷地の裏手側は、敷地の境界付近まで廃棄エリアなどの空間として利用されていたとみられる。近世中期から後期にかけて、屋敷地の裏手空間では、その構造が大きく変化するような

遺構の展開は見られないが、屋敷地の表側であった前期の空間構造と比較すると、一変した様子が窺える。

屋敷地内で確認された幕末～明治時代の遺構には、廃棄土坑などがあり、それ以前の時期の遺構に比べ、多量の遺物が出土している。それらの多くが瓦を始めとした建物の解体などに伴う瓦礫や生活用具である。特に多量の遺物が出土したSK6など明治時代の大型廃棄土坑は調査地南部一帯に分布し、遺構間で接合関係もみられた。同時期に大量の瓦礫や生活用具が屋敷地内に一括廃棄されたとみられ、文献資料から明治23年までに行われたと推定される、居住者の移転や屋敷の解体時に掘削された遺構が確認できた可能性がある。

④ まとめ

以上のように、帯屋町遺跡の検出遺構を時期ごとに概観し、機能や性格について検討した。当地では遅くとも15世紀には居住地となり、中世の集落の一部と区画溝が遺跡の微地形と対応するように確認できた。また近世には、絵図・文献資料との照合から家老深尾家の高知邸に関連する遺構を確認した。17世紀には屋敷地表側において、居住空間を整然と区画する様子や、当時の排水施設の構造を確認することができた。また、18世紀には居住者及び屋敷地の区画変化に伴い、それまでの屋敷地表空間から裏手空間へと変化したことで、屋敷地内の空間構造が変化する様子を確認することができた。さらに該当時期の家老屋敷地の空間構成の一部が明らかとなった。

〔註〕1)（公財）高知県埋蔵文化財センター　2015『追手筋遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第145集
2)（公財）高知県埋蔵文化財センター　2014『弘人屋敷跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第140集

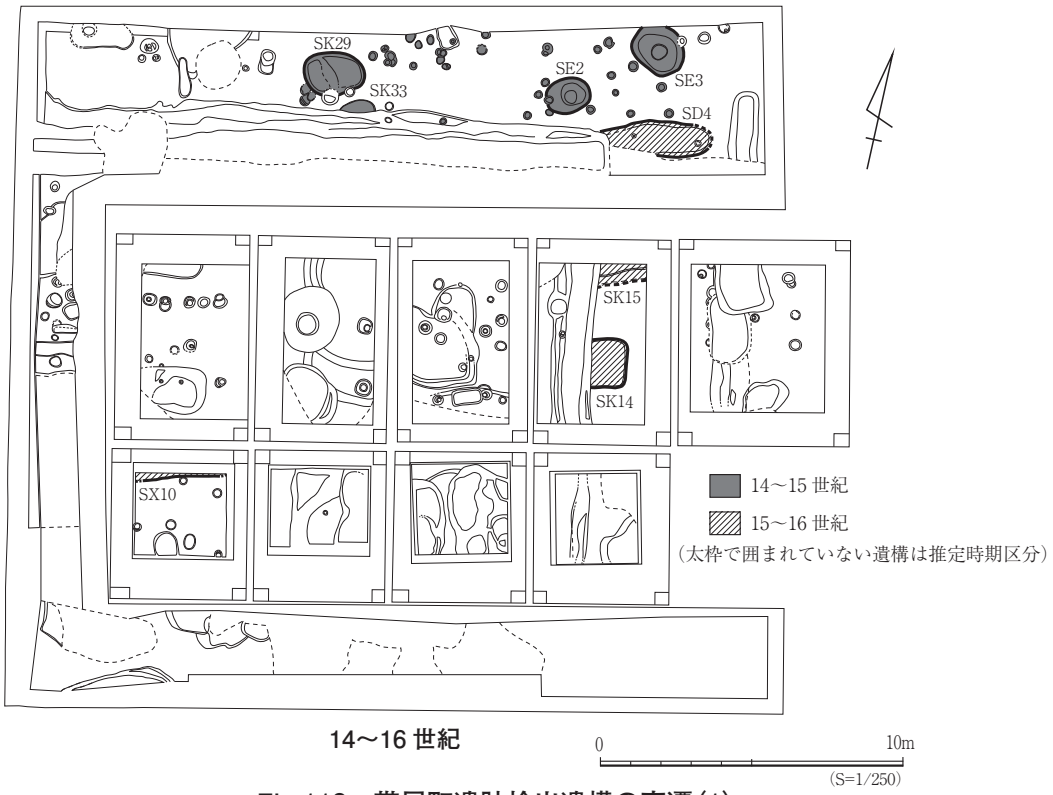
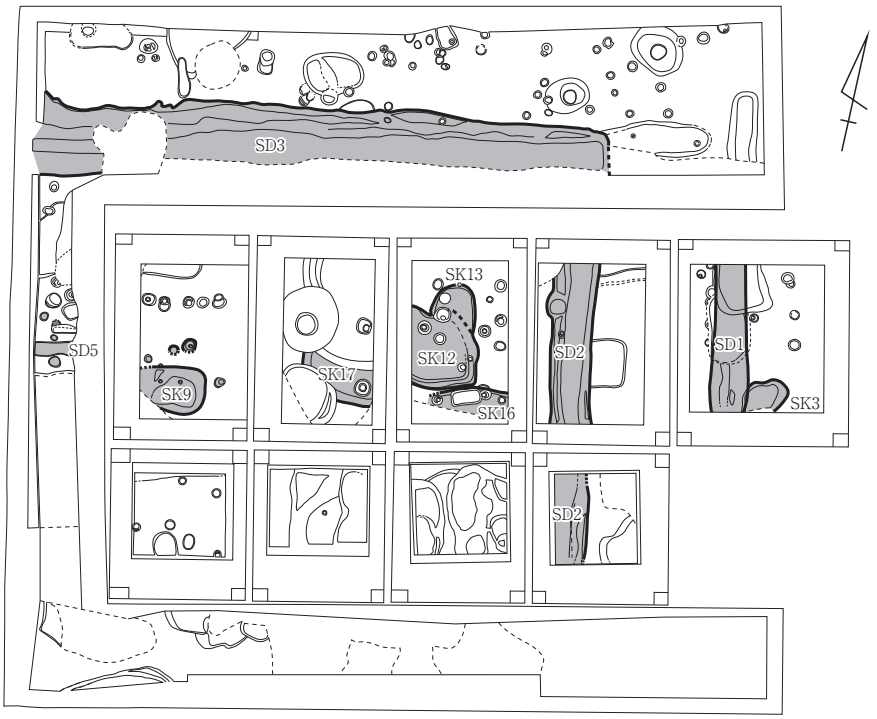
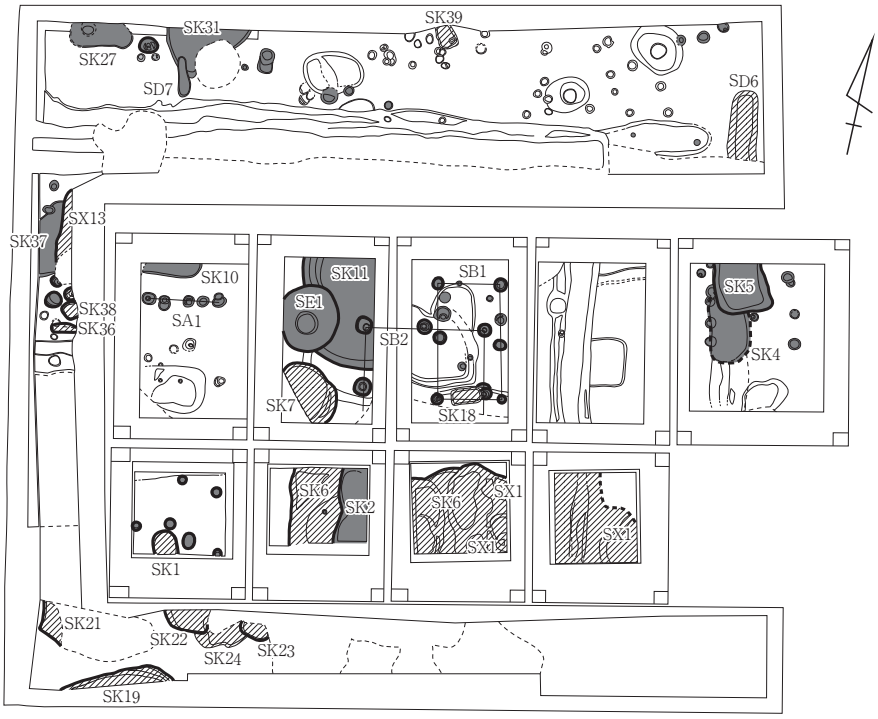


Fig.112　帯屋町遺跡検出遺構の変遷（1）



17 世紀

17 世紀
18～19 世紀前半
19 世紀後半
（太枠で囲まれていない遺構は推定時期区分）



18～19 世紀

0　10m
（S=1/250）

Fig.113　帯屋町遺跡検出遺構の変遷（2）

第３節　帯屋町遺跡出土遺物の様相

はじめに

今回の調査では、中世の集落跡に関わる遺構と遺物、近世の家老屋敷が展開した17世紀初頭から19世紀中葉と近代までの遺構・遺物が検出されている。後者には陶磁器、土器、石製品、金属製品、木製品等からなる様々な遺物が含まれ、家老屋敷に暮らす人々の暮らしを伝えている。またこの中には、17世紀の廃絶遺構から出土した遺物や、屋敷地の解体に伴って廃棄された明治前半期の遺物など、良好な一括資料が含まれている。本節では、これらの出土資料に含まれる陶磁器・土器・瓦の様相を検討し、居住者の生活形態や経済力、各時期の屋敷地の性格を知る手掛かりとしたい。

１．陶磁器・土器

前節で触れたように、本調査区は17世紀初頭から家老屋敷となっており、17世紀前半～末には高知深尾氏（南家）、18世紀前半～ 19世紀後葉には佐川深尾氏（本家）の屋敷の一角にあたっていたと推定される。17世紀に居住した高知深尾氏は知行5000石の家老、18世紀以降の佐川深尾氏は佐川10000石を領する城持ちの筆頭家老であった。各遺構出土資料は廃絶年代によって居住者との対応関係が分からないものも含まれるが、以下では17世紀、18世紀～ 19世紀中葉、19世紀後葉の３期に分け、各期の出土資料の特徴をみていくこととしたい。

(1) 17世紀

この時期の遺構出土資料には、SK3・9・12・13・16・17・SD1 ～ 3出土資料等がある。多くの遺物が出土したSD3 (註1) を除くと、遺構内からの出土量は全体に少なく、内容も17世紀前半～中葉頃までのものが主体をなしている。

陶磁器・土器の器種組成と各生産地製品の需要

磁器は小皿・中碗、中国産青花・青磁・白磁は碗・小杯・大皿・皿又は鉢、陶器は中碗・小皿・中皿・大皿・鉢・向付・擂鉢・壺・甕・瓶・水注類、土師質土器は杯・小皿・焼塩壺・土錘などの器種が出土している。用途別には、磁器は供膳具、陶器は供膳具・調理具・貯蔵具などの製品が含まれている。また土器は、土師質土器の杯、皿などに用途不明のものがあるが、灯明受皿としての使用痕跡をもつ小皿が含まれ、供膳具、貯蔵具、灯明具が認められる。

生産地別にみると、磁器は肥前と中国の製品で占められる。陶器は肥前の製品が最も多く、他に瀬戸、尾戸窯又は京都（430）、備前の製品が認められている。各地の製品の内容をみると、肥前産陶器は唐津系灰釉陶器中碗（421 ～ 424）、唐津系鉄釉碗（425）、唐津系灰釉陶器小皿（136・329・371 ～ 374・431 ～ 444）・大皿（446 ～ 449）、絵唐津小皿（321）、白化粧土刷毛目碗（428）、刷毛目二彩手中皿、高台施釉灰釉丸碗（420）などがあり、これらの肥前産陶器が日用の食器として需要されていたことが分かる。他の生産地製品では、尾戸窯又は京都の五寸皿（430）志野焼の鉢や向付（325・445・450）、瀬戸の天目形碗（426）、京都又は関西系の軟質施釉陶器の皿（429）、備前の擂鉢（451 ～ 453）・壺又は甕（457）が認められる。

出土資料の特徴と居住者の生活形態

今回の出土資料には、1650 ～ 1670年代に生産された染付中碗（409・410）、1630 ～ 1650年代に生産された染付小皿（411・412）など17世紀前半～中葉頃までに生産された初期の肥前産磁器が含まれている。また、1650 ～ 1670年代に東南アジア輸出向けに生産された雲竜荒磯文碗の体部片もあり、国内流通が少ない製品の所有も認められた。

国内製品の他にも、中国景徳鎮窯系の青花中碗（385・413・414）・小杯（386）・中皿（415）・小皿（416）・鉢又は皿（369）、中国漳州窯系の大皿（370）、中国龍泉窯系の青磁碗（418）などの中国製品が認められた。青花は、1620 ～ 1640年代にかけて生産された中国景徳鎮窯系の古染付が当時、茶の湯の道具として珍重されているが、当遺跡においても豊富な中国製品の所持がみえ、本屋敷地の居住者がこうした製品を所有できる高い経済力を持っていたことを物語っている。

また、茶の湯に用いたとみられる天目形碗（426・427）や、志野焼の鉢（445・450）、京都又は関西系の軟質施釉陶器の皿（429）も認められている。

陶磁器・土器以外では、櫛（579）、独楽（582 ～ 585）、小型の木刀（578）、羽子板（577）、子供用の下駄（607・608）などの木製品が出土しており、女性や子供を含めた家族の暮らしを伝えている。

(2) 18世紀～ 19世紀中葉

この時期の遺構廃棄資料には、SK1・5・7・SE1出土資料等がある。

器種組成と各生産地製品の需要

磁器は中碗・小碗・小杯・中皿・五寸皿・小皿・鉢・猪口・蓋物・瓶・紅皿・水滴・段重・仏飯器・ミニチュア、陶器は中碗・小碗・小杯・小皿・鉢・捏鉢・片口・擂鉢・鍋・土瓶・急須・燗徳利・水注・甕・瓶・灯明受皿・火入れ・火鉢・火鉢又は水鉢・ミニチュア、土器は土師質土器の杯・小皿・中皿・釜・火鉢・焜炉・竈・人形、施釉土器のひょうそく・ミニチュア・人形などの器種が出土しており、この時期には多様な用途の製品が認められている。

陶磁器の生産地についてみると、肥前に加えて、備前、瀬戸・美濃、京都・丹羽・信楽、堺・明石、関西系、在地の尾戸窯と能茶山窯など、各地の製品が需要されている。これらのうち在地の尾戸窯製品では、灰釉中碗（195 ～ 206・348 ～ 354）・皿（265・266）・碗蓋（213）、土師質土器中皿（230 ～ 232）・小皿（233 ～ 235）、白土器小皿（295）などが認められている。さらに19世紀以降は、1820年代以降生産を開始した在地の能茶山窯製品が加わり、一定の比率を占めるようになる。能茶山窯産と能茶山窯製品の可能性をもつものでは、磁器は中碗（338）、鉢（252）、蓋物（258）、大碗又は蓋物（259）などの器種で構成されており、供膳具、特に日用の食器が主体をなしている。また陶器は小皿（263・264）、捏鉢（270）、片口（269）、鍋蓋（274）、土瓶蓋（279）、水注（283）、瓶（282）、甕（127）、灯明受皿（288・289）があり、ここでも供膳具、調理具、貯蔵具、灯明具などの日用の生活用具で占められている。

この時期についてみると、日用の道具が主体を成し、上級ランクの陶磁器や嗜好性の高い器種は認め難かった。こうした特徴については、本拠を佐川に持つ城持ち家老の屋敷であったという背景や、この期間転居に際した大規模な一括廃棄が行われていなかったことも考慮しなければならない。

(3) 19世紀後葉

この時期の遺構廃棄資料にはSK6・19～22・SX1出土資料があり、遺物出土量が最も多い。廃棄土坑とみられるSK6・19・20・21間では出土遺物片の接合関係があり、同時期に複数の土坑内への廃棄が行われていたことが分かる。第１節で触れたように、この時期には居住者の移転が行われ、大量の瓦の出土などから、それに伴った建物の取り壊しが行われていたことも推察される。転居の時期については、前節までの検討では明治23年以前とされたが、今次出土資料の内容からは、岐阜事件[註2]をモチーフにした板垣・相原の泥面子が出土することから明治15年以降、下限は、近代の磁器が明治10年代に流行する酸化コバルトの型紙刷りの製品で占められ、明治19～25年の間に使用が始まる銅板転写の製品が認められないことから、明治25年以前に捉えることができる。

組成特徴と在地製品の需要

これらの廃棄遺構群には多量の瓦片とともに陶磁器・土器などの生活用具が廃棄されている。また、SK6出土の染付製品には近世が74％、近代が26％の割合で含まれており、近世以来の屋敷の道具が多く含まれていることが分かる。近世後期の資料に引き続いて、この時期の資料でも多様な生活用具が含まれ、軟質施釉陶器のミニチュア（785）、土師質土器の泥面子（800～827）、型（799）などの玩具や人形（797・798）など子供や家族の祈りに関わる道具も認められている。

この時期の資料には、19世紀に引き続いて在地の能茶山窯産陶器が日用品において多く認められ、近代以降も能茶山窯製品が広く需要されていたことが窺える。その他、今回の資料中では、民間の磁器窯である鹿児窯[註3]の製品とみられる染付碗（724～729）・小皿（744）が確認できており、明治５年～20年頃まで操業したと伝えられる近代の民間窯の製品も流通していたことが窺える。

２．瓦について

当調査区からはコンテナ箱にして約60箱分の瓦片が出土している。その多くは19世紀後葉の一括廃棄に伴うものであったが、近世前期の遺構内からも少量の瓦片が出土している。ここでは各期出土の瓦について、その特徴をまとめておきたい。

① 17世紀

17世紀の遺構では、SK9・12・16・17・SD2・3から近世の瓦片が出土している。

出土資料には、軒丸瓦（SK16-334・SD3-626～628）、軒平瓦とみられるもの（SK16-333）、丸瓦（SD3-629・630）等がある。これらの軒丸瓦・軒平瓦は何れも瓦当表面が荒く、瓦当に粗砂を含むものが多い。また中世または近世に比定されるSK14から出土した軒丸瓦（SK14-379）も同様の特徴をもつものであった。また平瓦は２㎝以上の厚みのあるものが多い。

防火対策の一つとして、享保５年（1720）に江戸の町屋の瓦屋根が解禁[註4]されて以降、瓦葺き建物は城下町に急速に普及していくが、これらの瓦片の出土から、家老屋敷では早い段階から瓦葺きの建物が存在したことが推定される。銘印をもつ瓦片は確認できなかったが、土佐での瓦生産が開始されるのは18世紀初頭以降からであり、この時期には大坂などの国外製品によって賄われていたと考えられる。

② 18世紀～ 19世紀後葉

この時期では特に、居住者の移転と重なる19世紀後葉の廃棄土坑群からの出土量が多い。また、これに遡る19世紀前半～中葉の遺構でも多くの瓦片の廃棄が認められたため、江戸時代後期にかけて数度の建物の取り壊しがあったことが推察できる。以下、軒丸瓦、軒平瓦、軒桟瓦と、銘印をもつものを中心に、各期に廃棄された瓦片の特徴をみていきたい。

17世紀後半～ 18世紀前半廃棄資料（SK4-158 ～ 161）

19世紀前半～中葉廃棄資料（SE1-365 ～ 368）

19世紀中葉廃棄資料（SK1-129・130、SK7-302 ～ 313、SX5-637 ～ 644）

19世紀後葉廃棄資料（SK6-837 ～ 858、SK19-867・868、SK21-891、SX1-927 ～ 932）

これらの遺構内に廃棄された瓦片は何れも18世紀以降の製品とみられるものである。また19世紀中葉と後葉の廃棄資料間では、同范瓦（310 ～ 312・846）や同銘のものもあり、近代に廃棄された瓦片の多くが近世の屋敷に伴うものであったと考えられる。17世紀までの瓦当面の粗砂は認められず、外面にキラ粉を認めるものが多くある。

銘についてみると、19世紀前半～中葉の廃絶遺構SK4と19世紀中葉の廃絶遺構SK1・7・SX5からは、「御瓦師」「アキ」「アキ卯平」（安芸）、「片兼」（片地）、「王子」（徳王子）、「山□」（中山田か）、「三□□」、「□□カ」、「アカ」などの銘印をもつ瓦片が出土している。また、19世紀後葉の廃絶遺構SK6・19・21・SX1からは、「アキ」「アキ□」「安喜」（安芸）、「中笑」「□笑」「山□」「中□…」（中山田か）、「片兼」（片地）、「トク右…」（徳王子）、「佐川□」（佐川）、「トミ」「…□タ」などの銘印をもつ瓦片が出土しており、各地の瓦製品が流通していたことが窺える。

今回銘印瓦が認められた安芸（安芸市）、片地（香美市土佐山田町片地）、徳王子（香南市香我美町徳王子）、中山田（香南市野市町中山田）は、高知県東部の瓦生産地である。これらのうち安芸の瓦生産は元禄13年（1700）以降開始されたと伝えられ、[註5] 土佐での瓦生　産は18世紀以降本格化されて、自国製品の流通が進められたとみられる。上述の県東部諸窯の製品は、高知城跡の他、高知城伝下屋敷跡、西弘小路遺跡、金子橋遺跡、追手筋遺跡でも出土が確認されており、近世後期には、県東部地域の瓦製品が高知城内や郭中の侍屋敷に需要され、広く流通したことが推察される。

その他、SK7から深尾家の家紋瓦である梅鉢文軒丸瓦（303）、SX1から梅鉢文軒桟瓦（928）が出土しており、深尾家の屋敷地には家紋瓦に飾られた建物が存在していたことが推察される。

また今回、SK6から「佐川□」銘印をもつ桟瓦又は平瓦（850）、近代の整地層から同じ銘印をもつ軒桟瓦（696）と桟瓦又は平瓦（697）が出土しており、これらの佐川産瓦については、近世後期から近代にかけて、佐川深尾家との関連で当地にもたらされたものと考えられる。

［註］

1）屋敷境の溝SD3出土資料の口縁部・底部点数からカウントした組成比は、国産磁器が0.8％、中国産磁器が2.8％、国産陶器が23.9％、土器が72.5％という内容であった。

2）明治15年に岐阜で、自由党党首板垣退助が暴漢の相原尚褧（あいはらなおぶみ）に襲われた事件。

3）鹿児窯は明治５年に開窯し明治20年頃まで操業したとされる。生産地の特定にあたっては、昭和54年の発掘調査出土資料と比較の上共通する文様特徴をもつものを取り上げた。碗724 ～ 729は外面文様が類似する他、口縁部内面に多重の圏線と宝文の略化とみられる点を描いており、窯跡出土資料に共通する。『鹿児窯跡』高知市教育委員会1981年

4）八代将軍吉宗の享保５年に「町中普請の儀、土蔵造りあるいは塗家ならびに瓦屋根に仕り候事、只今までは遠慮いたし候様相聞候。向後、右の類の普請を仕度存候者は勝手次第たるべく候」との解禁令が出されている。『徳川禁令考』

5）『皆山集』には「…元禄十三年庚辰 御用の瓦を作らん為に豫州野間郡菊間濱村半兵衛といふ瓦工を招き寄せられ安喜浦にて工みし事あり その宿せし清右衛門といふもの翌十四年辛巳濱村の瓦工茂兵衛同人子五郎兵衛を雇入れ製す 是安喜瓦のはじめにて両人とも居留り御用をも勤めたり…」と見え、伊予からの技術導入によって、安芸瓦の生産が元禄13年（1700）以降開始されたことが分かる。

調査区遠景（南より）

Ⅰ区完掘状況（南より）

PL. 2

Ⅲ区完掘状況（南西より）

TP5 ～ 9 完掘状況（南西より）

Ⅱ区南壁（北西より）

Ⅲ区西壁（北東より）

SD1 セクション（南より）

SD1 完掘状況（南より）

SD2 セクション（南より）

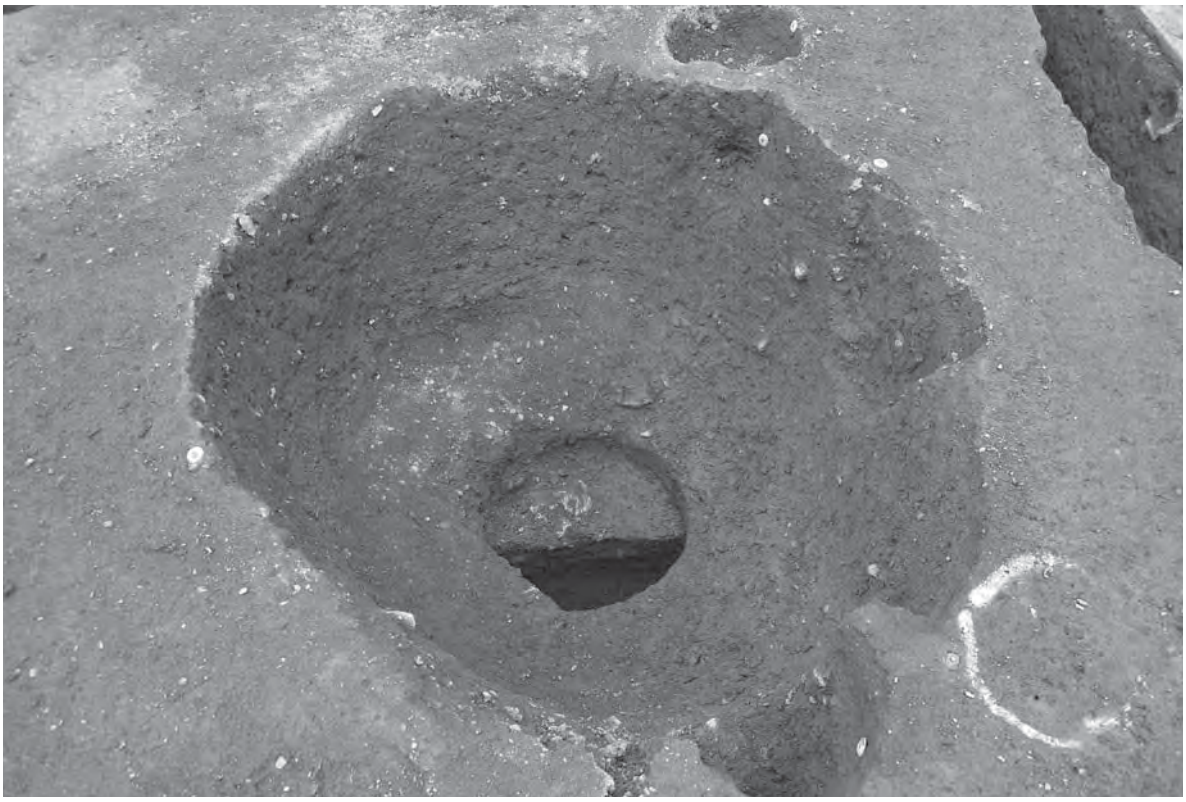
SD3（南西より）

PL. 6

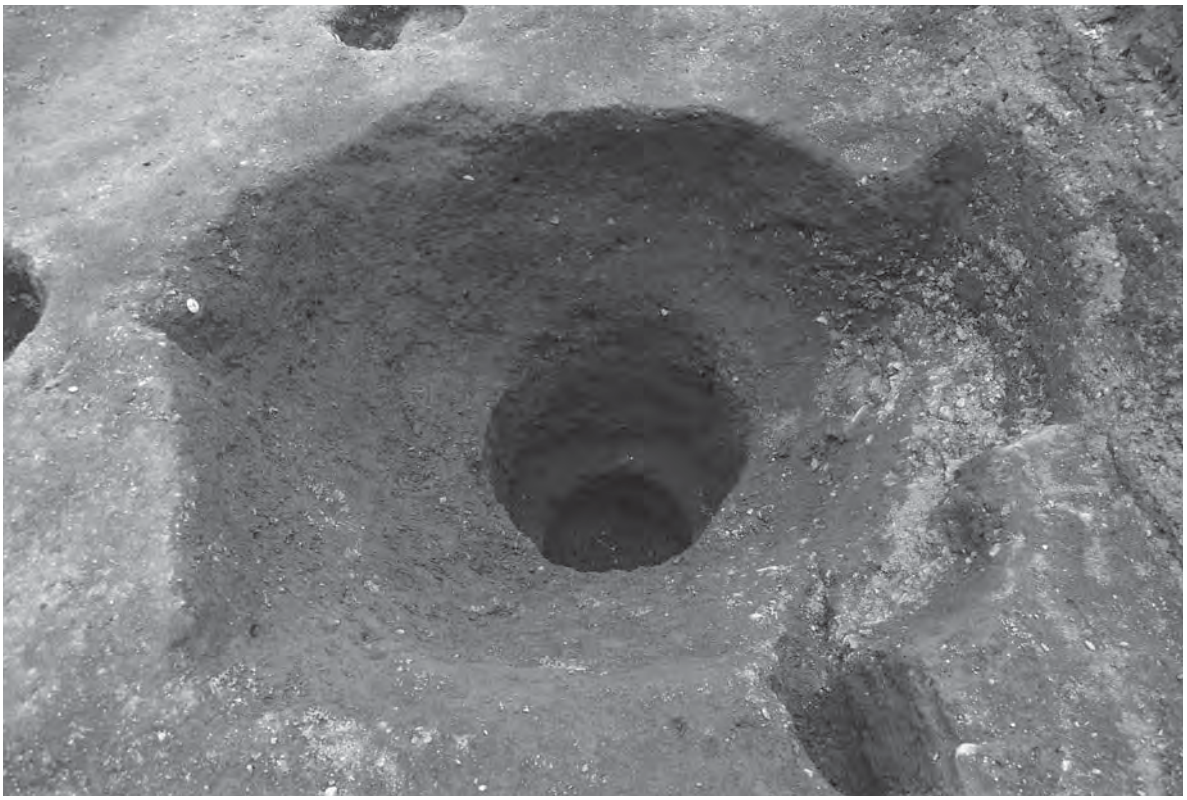
SD3 セクション（東より）

SD3 石列墨書（南東より）

SE1 礫出土状況



SE2 井筒半截状況（北西より）



SE3 完掘状況（南東より）

SK6 セクション（南より）

SK12 セクション（南より）

SK12・13 完掘状況（南より）

SK18 木炭出土状況

SK29 セクション（南東より）

SA1 完掘状況（南東より）

Ⅰ区ピット群（南西より）

調査前風景（北東より）

TP4 西壁セクション（東より）

SK3 セクション（南より）

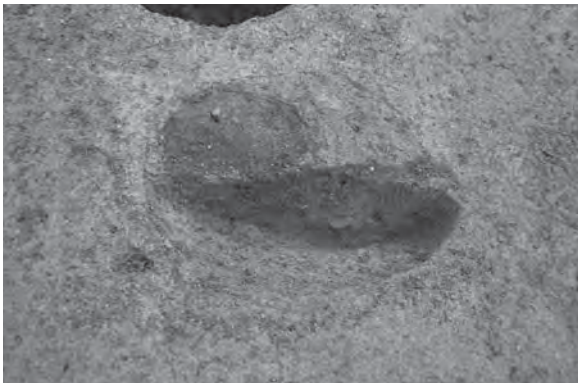
SK6・SX1 完掘状況（南より）

SK13 セクション（東より）

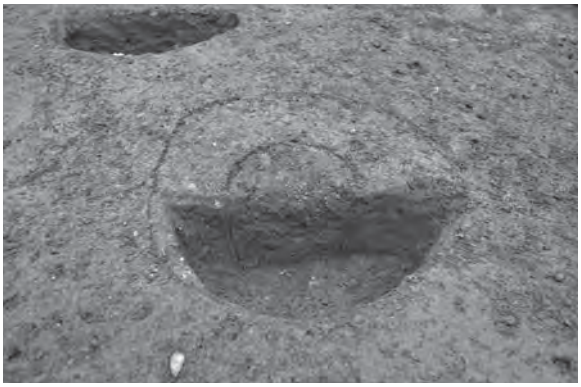
SK14 セクション（北より）

SD3 石列（南より）

SD3 石列（北東より）



SA1-P3 柱痕セクション



P31 柱痕セクション

P90 柱根出土状況（東より）

SK2 遺物出土状況（135）

SK9 遺物出土状況（314）

SK18 木炭・銅板出土状況（南より）

SK18 銅板出土状況（北西より）

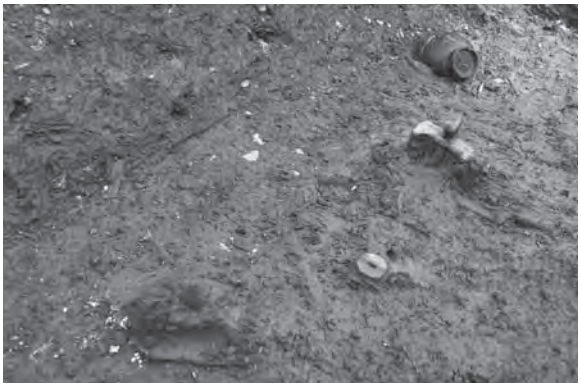
SK27 遺物出土状況（1・14・15）

SD3 遺物出土状況（424・442・447・488・491・492・521・616）

SD3 遺物出土状況（424・488）

SD3 遺物出土状況（442）

SD3 遺物出土状況（454・507）



SD3 遺物出土状況（500・581・584・587）

SD3 遺物出土状況（520）

SD3 遺物出土状況（624）

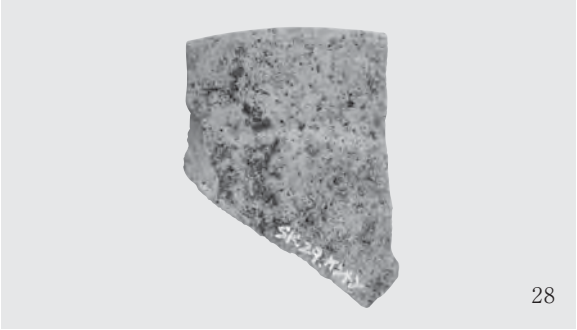
SD3 遺物出土状況

1

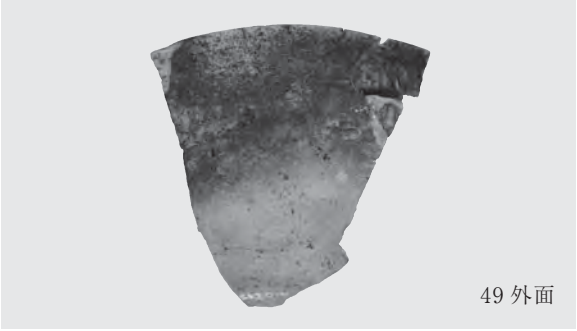
14

15

17


28

42


49 外面

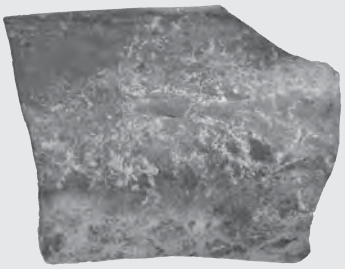
49 内面

51

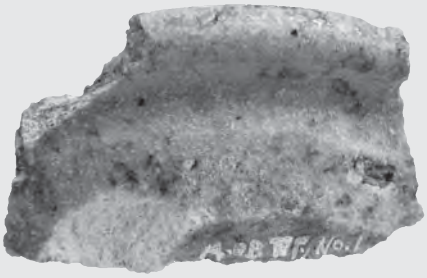
54

SK27・29・SE2・3・SX10 出土遺物

PL. 16

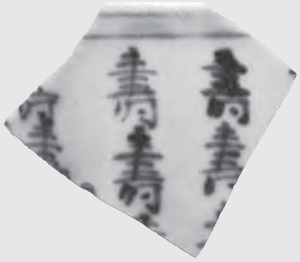

55

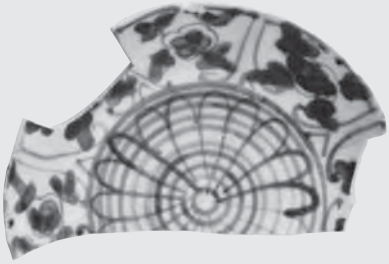
62

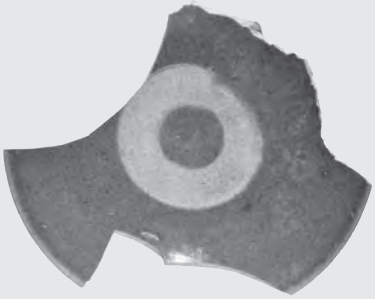

71

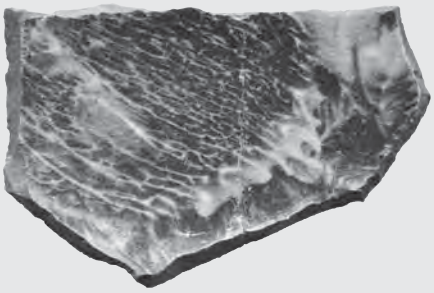
104

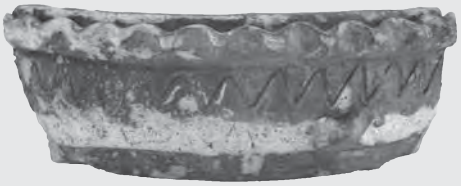
142


143


145

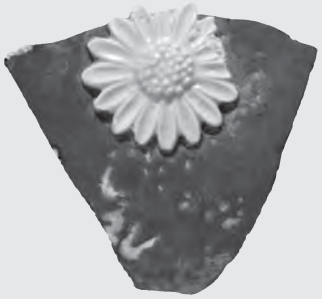

150


151


157

SX10・Ⅲ層・Ⅳ層・Ⅳ層遺物集中・SK4 出土遺物

171


188

189

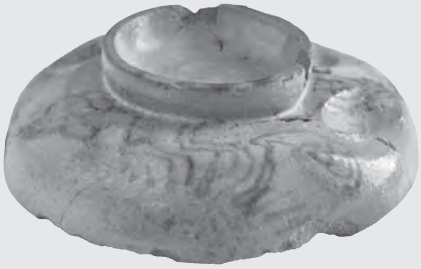
194

195

197

199

210


213

220

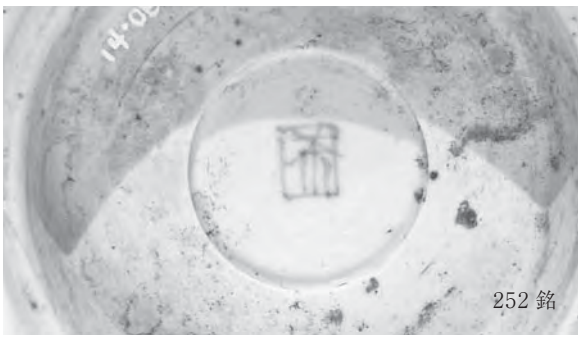
SK5 出土遺物

PL. 18

229

240

252


252 銘

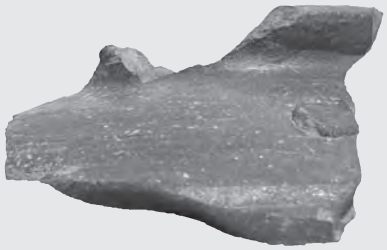
266

266 外底

256

287

303


320

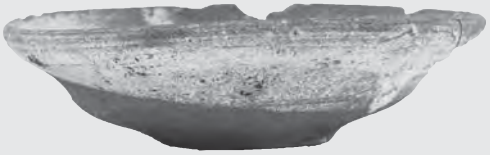
SK5・7・11 出土遺物

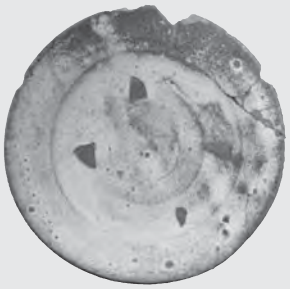
321

339

347

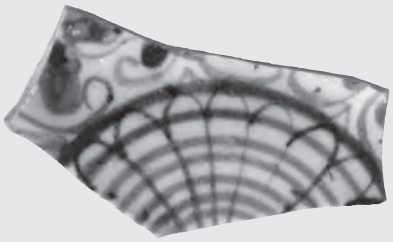
363

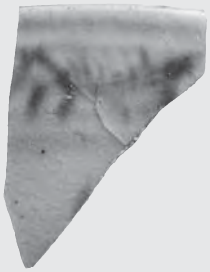

391


391

370

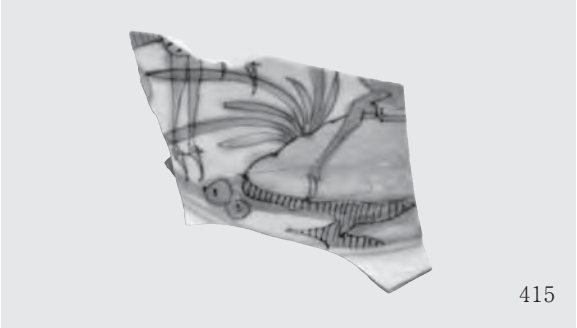
403


412


413

SK12・SE1・SD1 ～ 3 出土遺物

PL. 20


415

422

423

424

432

432

440

440

442

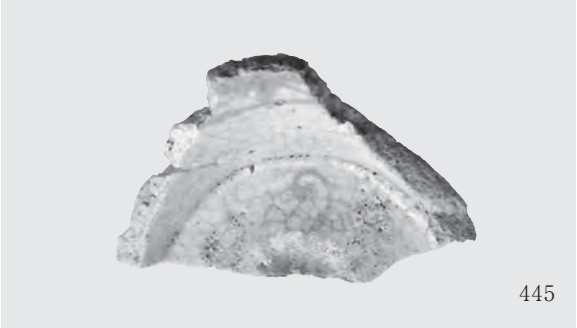
446

SD3 出土遺物

444

444

445


445

447

447

450

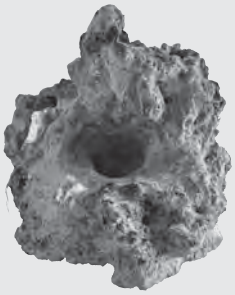
453

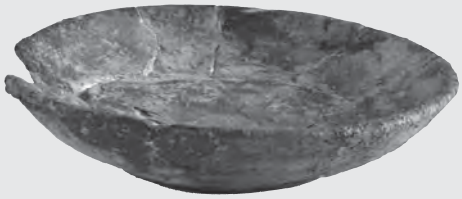
455

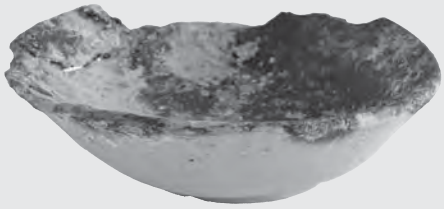
460

SD3 出土遺物

PL. 22


463

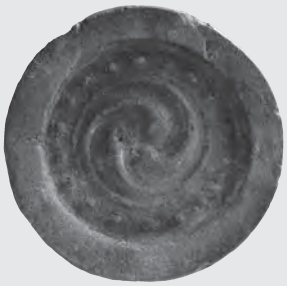

465


467

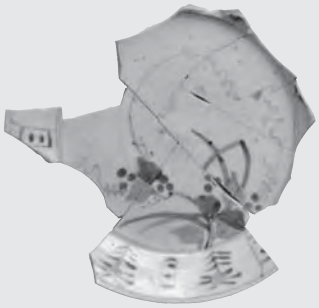
488

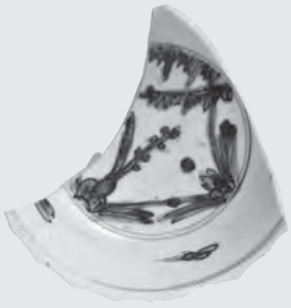
495

496

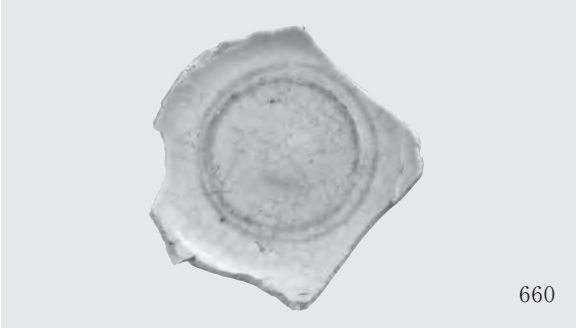

627

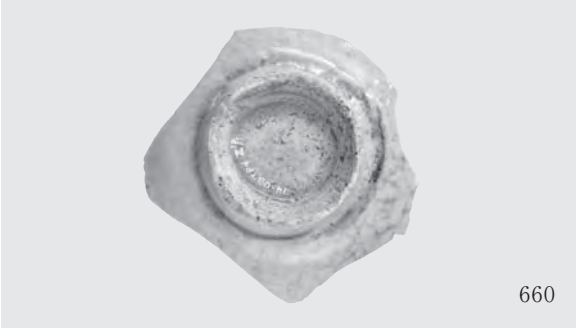
636


651


679

SD3・SX5・Ⅱ～Ⅲ層出土遺物

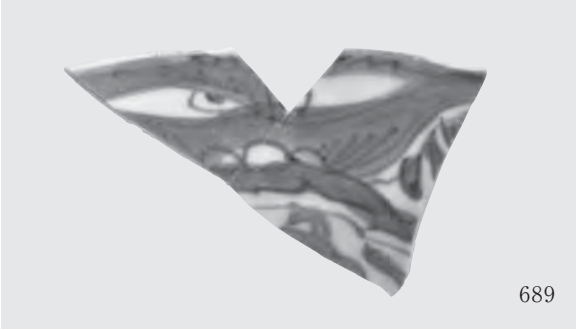

660


660

680

682

685


689

717

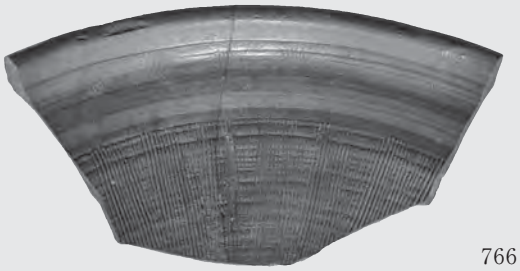
717

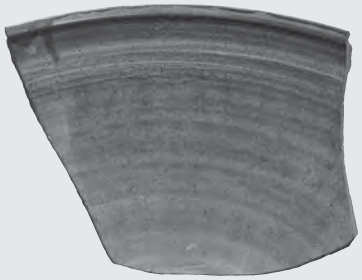
721

723

Ⅲ′層・Ⅰ～Ⅲ層・Ⅰ層・撹乱層・SK6 出土遺物

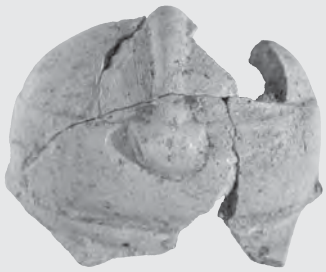
PL. 24

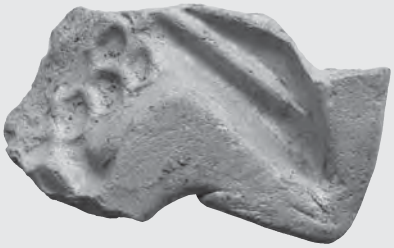

766


767

783

784


797


799

802 800 805

807 811 808

813 814 820

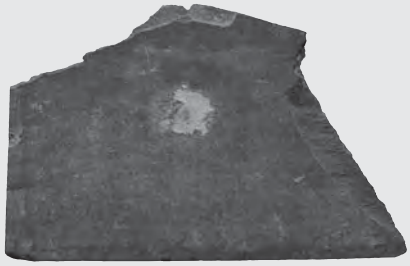
816 815 822

SK6 出土遺物

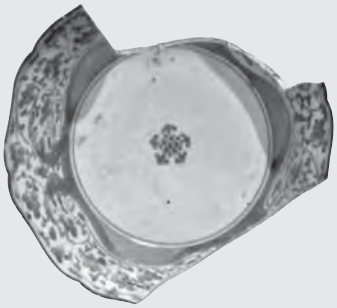
824　826　812

827　825　819

831



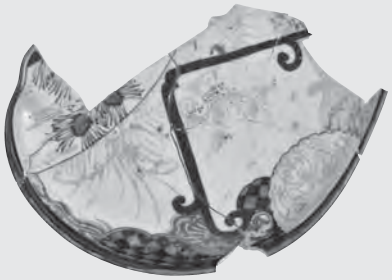
835



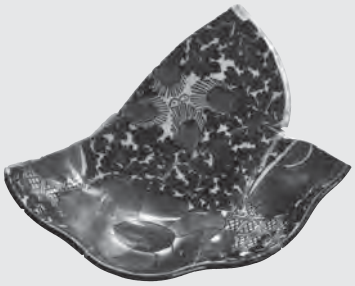
863

863

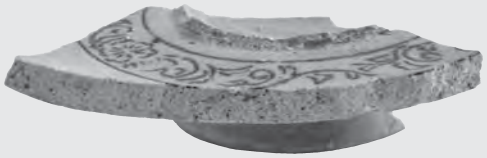
873



873



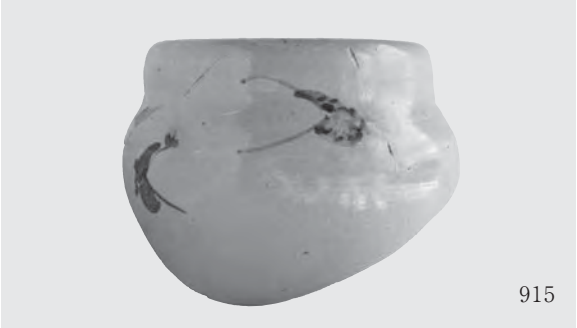
877

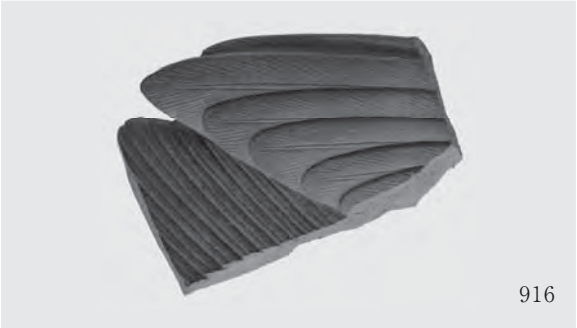


909

SK6・19・21・SX1 出土遺物

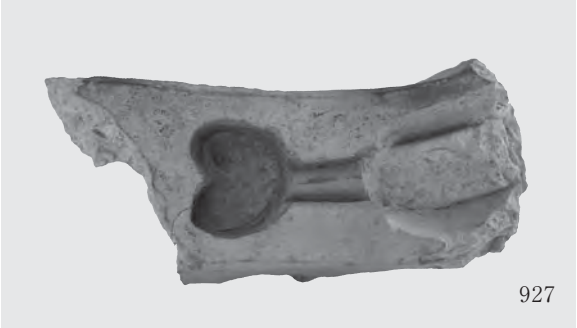
PL. 26


915

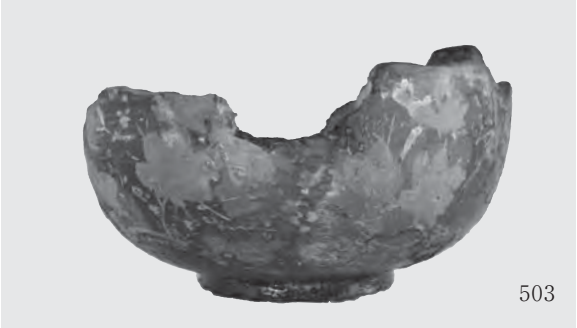

916

922

923


927

928


503

504

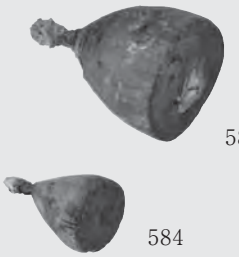
506

507

SX1・SD3 出土遺物

513

578・581


582
584

607

609

610

611

619

624

625

SD3 出土遺物

作業風景（東より）

現地説明会風景（南西より）

報　告　書　抄　録

ふりがな	おびやまちいせき
書名	帯屋町遺跡
副書名	高知県自治会館新庁舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高知市文化財調査報告書
シリーズ番号	第41集
編著者名	浜田恵子・永田由香
編集機関	高知市教育委員会
所在地	〒780-8571　高知県高知市鷹匠町２丁目１番43号　TEL.088-832-7277
発行年月日	西暦2017年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
帯屋町遺跡（おびやまちいせき）	高知県高知市（こうちけんこうちし）本町（ほんまち）4丁目1番35号	39201	10086	33度 33分 33秒	133度 31分 58秒	2014年 10月1日 ～ 10月31日 2015年 3月4日 ～ 3月28日	132.39㎡ 326.03㎡	高知県自治会館新庁舎建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
帯屋町遺跡	屋敷跡	中世 近世 近代	掘立柱建物跡 土坑 井戸 溝 ピット 性格不明遺構	陶磁器･土器･瓦器 貿易陶磁器 石製品 金属製品 ガラス製品 古銭 木製品 瓦	中世の集落に伴う土坑・井戸・ピット、近世の家老屋敷に伴う建物跡・土坑・井戸・溝等を検出。近世～近代の屋敷に伴う廃棄土坑を検出。

高知市文化財調査報告書　第41集

帯 屋 町 遺 跡

高知県自治会館新庁舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2017年３月

発行　高知市教育委員会
〒780-8571　高知県高知市鷹匠町２丁目１番43号
民権・文化財課
電話088-832-7277
印刷　有限会社 西村謄写堂